

女學界定期増刊

女重寶記

第六巻第二號



恭賀新年
東京日本橋駿河町
三越呉服店
みつこしごふくてん
電話本局
五二五番
一二一七番
一八五六番
一八六〇番
二二二二番

女學世界定期增刊 第六卷 第貳號

女重寶記目次

人生觀……二

醜婦安心の礎……閑月庵主
女訓小言……千朶山樵
家庭錦囊……書齋の人

重寶記……一七

年中行事手控草……考古博士
西洋十二ヶ月……雪子
宮中御膳所の聞書……昭代の一民
婦女旅行節用……翠香女史
新案勝利占ひ……天眼堂主人
熟語和訓集……書齋の人
新撰大和言葉……
いろは格言……

家政門……七九

家道繁栄法……松の門
庶物整理法……桂香女史
家具の保存法……
衣服の調製……藏玉女史
世俗金言百五十種……
下婢禁制三十三ヶ條……
化粧の心得……

庖厨門……一〇五

臺所重寶記……梅の舍
四季總菜一覽……
勝手道具の調製……
料理肉品々……
食物貯藏の心得……
拭掃除心得草……
飯米の選み方……
改良竈とコークス……
砂糖のアク引き法……
魚類の鑑別法……

清涼飲料の拵え方……、
野菜の効用……
四季の献立……
重詰品々……
洋食の作法……ひさ子

花鳥門……一二八

百鳥譜……
百花譜……
四季の鳥類……
草花十二ヶ月……鶯塘生
庭園の趣味……甑石翁

衞生門……一六一

我家の衞生……ＴＫ生
朝夕の心得……
夏の衞生……
冬の衣食住……
日常の食物……
日本の夜具……
學生と腦病……

輕便素人療治……家庭醫者
新奇肺病治療法……S.K.M.
女房十二時……螢園主人

敎訓門……一八八

行儀作法昔の面影……紫のゆかり
元祿敎え草……麻軒生
新案紋づくし……
四季風景圖案……丸山曉霞

口繪

初音……上村松園女史
三國一……大下藤次郎
重寶器……一條成美
お年玉……一條成美

寫眞版

▲摘み草▲米國大統領の食堂▲英國大使マグドナルド夫人▲泰西美人▲二百年前の女學世界▲淑女の小集▲婦人の演武▲女子英學舍生徒▲百五十年前の女學世界▲歴史風俗人形▲米國公使夫人▲母のあつまり

初音

上村松園女史筆

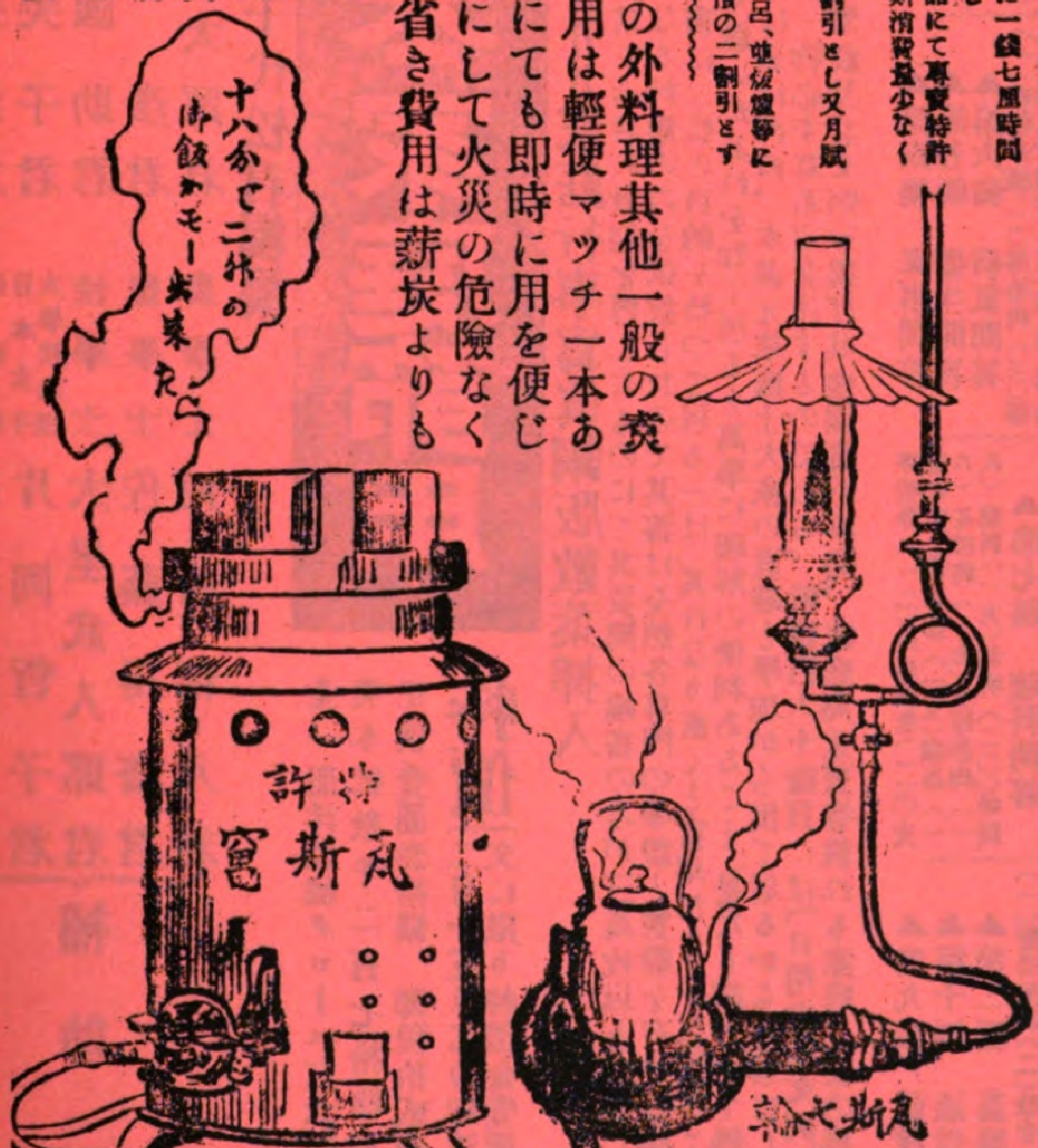


瓦斯の煮焼

○三升の米は瓦斯代僅に一銭七厘時間十八分にて炊くを得べし
○瓦斯竈は本社の發明品にて専賣特許を得たるものにして瓦斯消費量少なく徳用且便利なり
○工事費は前金拂は一割引とし又月賦拂にて約定す
○臺所竈、七輪、湯沸、風呂、煖爐等に専用の瓦斯代は特に定價の二割引とす

瓦斯は燈火用の外料理其他一般の煮焼用として使用は輕便マッチ一本あれば晝夜何時にても即時に用を便じ火力加減自在にして火災の危險なく且大に人手を省き費用は薪炭よりも低廉なり

尚各種瓦斯器具は當社構内陳列所又は銀座等へ陳列縱覽に供し居候御立寄御一覽被下度候



東京神田錦町
東京瓦斯株式會社
(電話本局一二三番、五四八番、二二〇三番)

(甲の二)



女（甲の三）

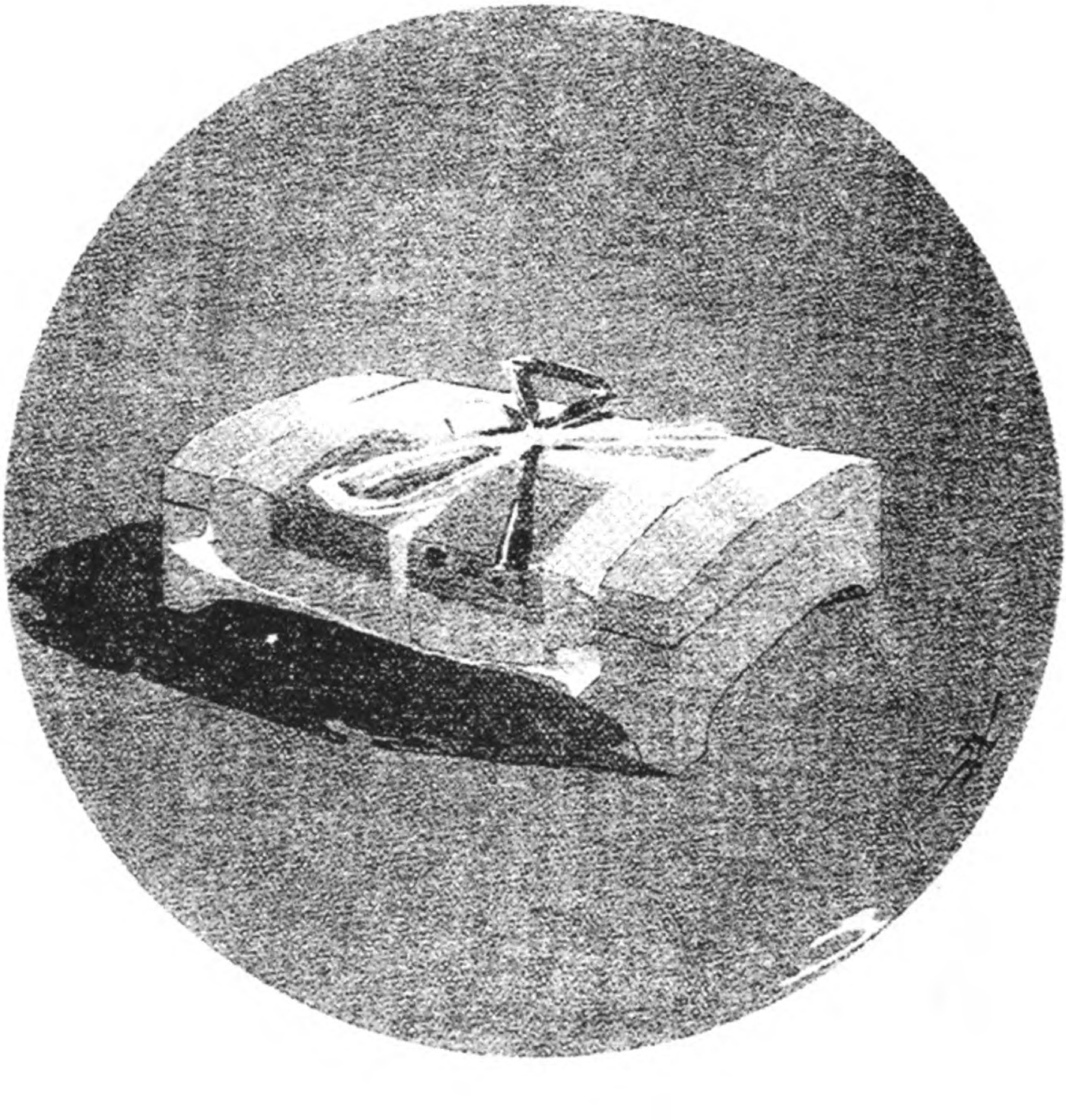
三圖一



大下藤次郎筆

御年玉

一條成美筆



重寶器

一條成美筆




美術
造花材料
各女學校御用
附屬品並ニ造花器械類
一式
營業目錄御入用ナレバ往復端書
ニテ御申越被下度候
東京市日本橋區横山町壹丁目拾六番地
天野卯兵衛
電話（特）浪花一六四三番

(乙の一)

博愛赤十字石鹸

は紳士貴婦人の良友なり其製法は最新式にして體裁優美高尚也「ヴヰオレット」及「ムスク」の二種あり「ヴヰオレット」の芳香は清酒たる佳人の如く「ムスク」の馥郁たるは高尚なる美人の如し博愛赤十字石鹸は原料を精選し製造に注意し多々勞力を費したるを以て代價低廉ならずと雖も其使用上に於て五倍の利德あり皮膚の粗なる人又は皮膚病ある人は我が博愛赤十字石鹸を措て他に用ゆべき石鹸なし



東京柳嶋

井村盤興社

電話下谷五十二番

見本は往復はがきにて進呈す

登録商標

佛國天然葡萄酒古「メドック」

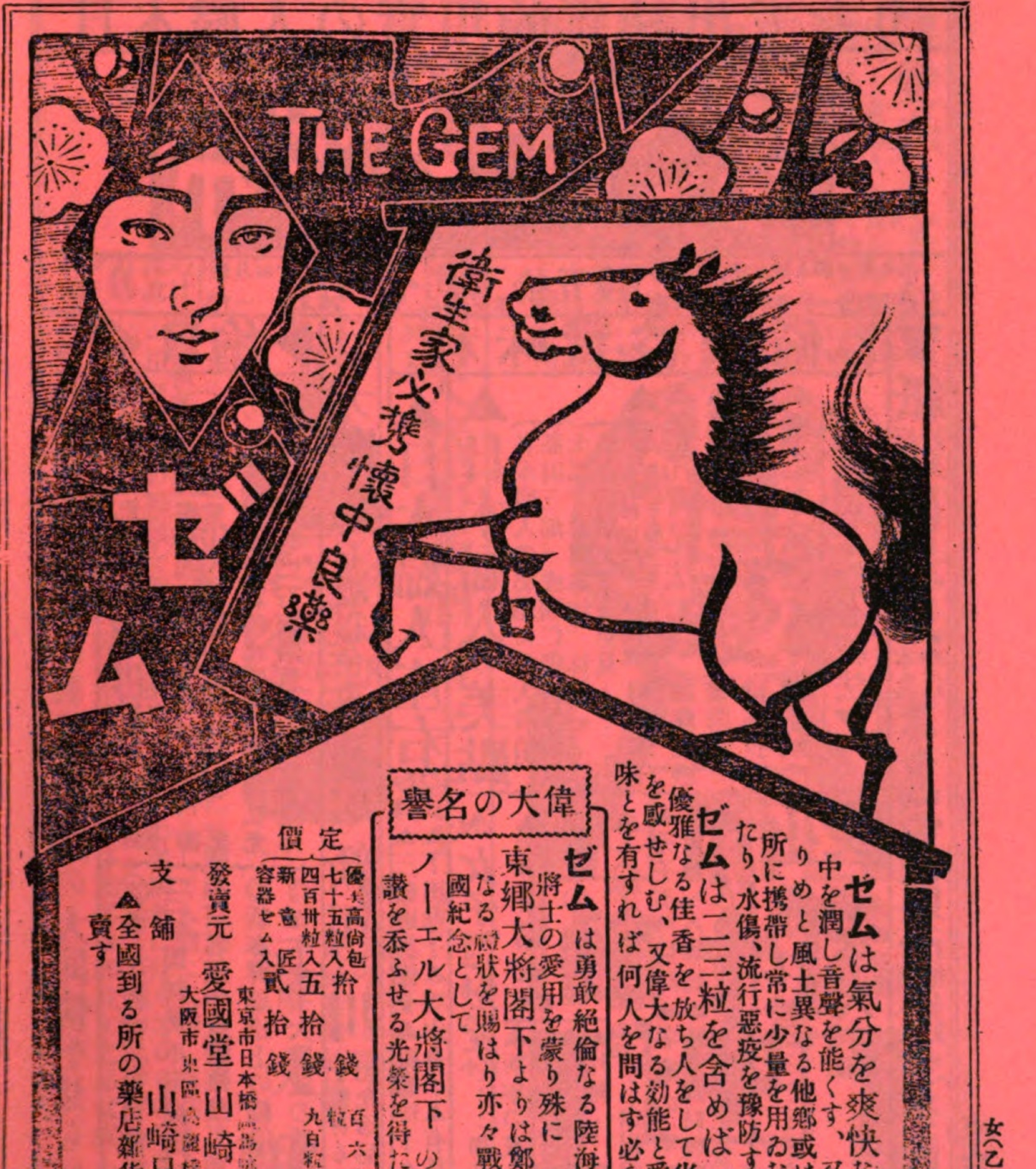


海外直輸出入
和洋酒食料品商

東京新橋竹川町
三組屋 大塚琢造
電話新橋七三六番

此「古メドック」は佛國產純料の天然葡萄酒にて弊店に於て十有年來一手直輸入專賣するものに御座候此葡萄酒は藥用としても常用飲料としても慥に人體に有益あるものとして諸大醫及常用者諸彥の稱讚を辱ふし古「メドック」の名稱世に知らざるものなきに至りしは誠に仕合に奉存候然るに世間往々同一の名稱の葡萄酒を賣捌くもの有之候に付弊店の「古メドック」には印の商標を印し有之候間御注意御買求被下度候◎御注文之品は直ちに御届可致候◎代價表は御申越次第進呈す

女(乙の二)


THE GEM
衛生家必携懷中良藥
ゼム
偉大の名譽
ゼムは氣分を爽快ならしめ口中を潤し音聲を能くす、又氣候の變りめと風土異なる他郷或は惡臭の場所に携帶し常に少量を用ゐなば時候あたり、水傷、流行惡疫を豫防する良劑也。
ゼムは二三粒を含めば口中より優雅なる佳香を放ち人をして坐ろに爽快を感せしむ、又偉大なる効能と愛すべき美味とを有すれば何人を問はず必らず談話喫煙飲酒の際および食前食後に賞用すべき貴重の要劑なり。
ゼムは勇敢絶倫なる陸海軍將士の愛用を蒙り殊に東郷大將閣下よりは鄭重なる感狀を賜はり亦々戰勝國紀念としてノーエル大將閣下の賞讃を添ふせる光榮を得たり
定價
優美高尚包
七十五粒入拾錢 百六十粒入貳拾錢
四百卅粒入五拾錢 九百粒入壹圓
新意匠容器ゼム入貳拾錢
發賣元 東京市日本橋區蠣殼町二丁目 愛國堂山崎榮三郎
支舖 大阪市東區高麗橋二丁目 山崎兄弟商會
全國到る所の藥店雜貨店にて販賣す

女(乙四四)



摘艸

（川崎蘭香筆）

米國大統領の食堂



艷麗





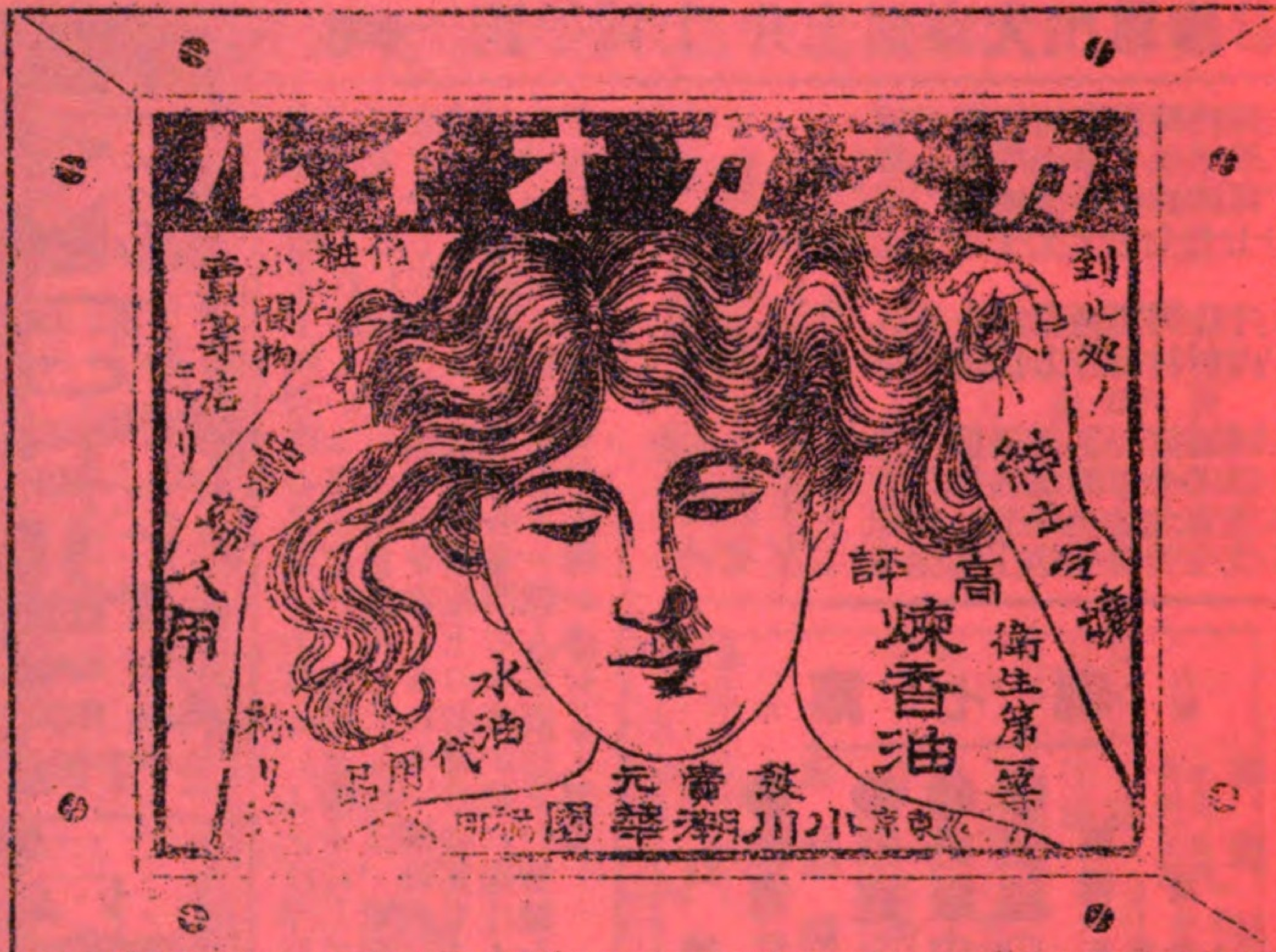
（泰西美姬）

英國大使マクドナルド氏夫人



女(丙の一)

女（附の二）



平野新八郎君製圖

營口市街之圖

賣價拾五錢　郵稅貳錢

全一枚銅刻舶來上等紙石版二度刷

精密圖（縱一尺八寸 横二尺六寸）

平野新八郎君製圖

大連市街之圖

賣價拾五錢　郵稅貳錢

全一枚銅刻舶來上等紙石版二度刷

精密圖（縱一尺五寸五分 横二尺一寸）

發行所　東京日本橋堀留町　東亞公司

發賣元　東京日本橋本町三丁目　博文館

醫科大學藥學專攻　藥學得業士金澤巖著

肺病

東京市下谷區上根岸町

患者の福音●●著者肺病全快の經驗と最近の學說に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也●郵劵二錢封入申込者に無代施本

衛生書院

女(丙の三)

家庭衛生叢書

醫學博士 井上通泰先生監修◎

家庭に衛生上の智識の必要であるといふことは今更いふ迄もないが、此衛生の智識は實に一日でも應用せられぬといふ事はない、住居を撰ぶにしても、衣服を製るにしても、食物を調理するにしても。之に衛生上の智識を應用したならば、家庭がどの位幸福になるか、殆んど測り知ることが出來ないと思ふ。其他子供を育てるにも、傳染病の流行時にも、病人の出來た時にも、婦人の姙娠時にも凡て吾々の家庭に衛生上の智識の必要であるといふを證據立てる機會は日常甚だ多いのである。家庭衛生叢書は各專門の大家が特に衛生上注意すべき事項に就て、講話せられたる所を成るべく平易に寫し出して一般人が衛生上の智識を開發するといふを目的として發行せられたものであつて讀者は必ず得る所が多いことと思ふ

▲全部拾貳冊洋裝大判（七冊迄既成）
隔月一回發行

正價 ●壹冊貳拾錢●參冊五拾七錢●六冊一圓拾錢●拾貳冊貳圓拾錢▲郵稅一冊六錢宛

◎本誌發行の趣意を賛し講話を承諾せられたる諸先生左の如し

醫學博士 入澤達吉先生
醫學博士 石原久先生
醫學博士 土肥慶藏先生
醫學博士 遠山椿吉先生
醫學博士 緒方正規先生
醫學博士 緒方正清先生
醫學博士 岡田和一郎先生
醫學博士 岡村龍彥先生
醫學博士 金杉英五郎先生
醫學博士 片山國嘉先生

第七編

口繪 遠山醫學博士 筒井醫學士（肖像）

●黴毒に關する家庭の注意 醫學士 筒井八百珠先生

●家庭と黴菌 醫學博士 遠山椿吉先生

●姙娠中の攝生 醫學博士 緒方正清先生

●便秘の話 醫學博士 井上善次郎先生

雜錄＝花柳病の害—花柳病豫防會—日本花柳病豫防會…色慾と結婚と—花柳病患者の數—花柳病と法律—花柳病の三種—黴毒—淋病—吾邦の現行法律と花柳病—酒と花柳病—コレラと酒…酒とマラリヤ…妓樓の酒…花柳病の統計…娼妓—遊客—密賣淫

新刊發賣

發兌元 東京日本橋區

女（丙の四）

第壹編

口繪 北里、長與、金杉、土肥、の四博士（肖像）

傳染病の話……北里博士
胃の攝生法……長與博士
眼科衛生談（其一）……井上博士
口腔疾患と咽喉との關係……金杉博士
淋病と家庭……土肥博士
患者を生じたる時の注意……十餘件

第貳編

口繪 木下博士、宮本學士（肖像）

腸窒扶斯に就て……宮本學士
婦人の衛生一般……木下博士
婦人及小兒の眼の衛生……桐淵博士
眼科衛生談（其二）……井上博士
衛生雜話……七件

第參編

口繪 緒方博士、富士川博士、三輪博士、井上博士、（肖像）

日本の室内空氣に就て……緒方博士
轉地療養の話（其三）……富士川ドクトル
小兒の病氣に就て二三の注意……三輪博士
小兒の衛生に就て……弘田博士
遺尿症に就て……朝倉博士
眼科衛生談……井上博士
衛生雜話……六件

第四編

口繪 朝倉博士、井上博士（肖像）

腸胃の話……井上博士
耳の攝生……岡田博士
乳兒の衛生に就て……緒方博士
狐憑とヒステリーとの關係……吳博士
眼鏡の話……井上博士
衛生雜話……六件

第五編

口繪 三輪博士、岡村博士（肖像）

創傷の話……三輪博士
神經の攝生に就て（其一）……吳博士
「ヂフテリア」の話……宮本學士
皮膚の衛生……岡村博士
雜錄……十三件

第六編

口繪 大澤博士、三島博士（肖像）

ペストの話……宮本學士
身心の養生……大澤博士
家庭に於て注意すべき二三の學校衛生……三島博士
産時の創傷傳染……木下博士
雜錄……十五件

日露戰史

四六判二倍（太陽同形）每卷本文二百餘頁寫眞版二十頁每月二回發行

正價一冊參拾錢●八冊貳圓貳拾錢●十六冊四圓廿錢▲郵稅一冊貳錢五厘

本書は實に明治昭代の絕好紀念たり
以て祖先に捧げ以て子孫に貽すべし

干戈已に戢まり、戰氛茲に銷す、戰勝の將士は陸續として凱旋し來り、我が日露戰爭實記は客臘を以て、秩序整然として完了す。筆硯復た新たに、文獻頗る徵すべし。日露戰史を完成して、功勳を傳へ、警醒に資する者、今を措いて其れ何の時をか俟たんや。本書卷を頒つこと十數、一卷每に一大戰局を詳叙して全編を通ずれば、首尾貫徹脈絡紊れざること實縷の如し。而して每戰或は從軍して、實相を目擊したる人の筆に成り、或は最も精確なる材料に因りて之れを記述し、猶且陸海軍當事者の校閲を經たれば、洵に唯一無二の好戰史たることを疑はず。第一卷成るに及び、一言を辯じて以て此書の出づる所以を諗ぐと云ふ

◎第壹卷　一月一日發行

本文二百二十四頁
寫眞版口繪廿四頁

●附錄
●日露戰局全圖（縱一尺八寸橫一尺三寸）
●開戰當時日露軍艦一覽圖（寸法同前）

▲日露の危局と戰役初期の海戰

第壹編　總說
第一章　日露戰役の特色
第二章　日露戰役の啓示

第貳編　日露の危局
第壹章　滿洲問題
第貳章　日露交涉
第參章　交涉遷延と帝國機宜の行動
第四章　日露外交の斷絕

第參編　戰役初期の海戰
第壹章　海上權掌握の方略
第貳章　聯合艦隊の戰場進發
第參章　仁川の海戰
第四章　第一次旅順口攻擊
第五章　日露宣戰の布告
第六章　第一次旅順口閉塞
第七章　第二艦隊の浦港砲擊
第八章　三月十日の旅順激戰
第九章　第二次旅順口閉塞
第十章　旅順口港外の海戰
第十一章　陸兵掩護の行動
第十二章　浦港艦隊と第二次浦港砲擊
第十三章　第三次旅順口閉塞
第十四章　第二軍上陸の掩護
第十五章　掃海事業の險難
第十六章　敵港の封鎖
第十七章　金州の陸戰援助
第十八章　遼東南半島封鎖の宣言

第壹卷に限り郵稅三錢五厘

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

女（丙の六）

日露戰史

◉第二卷　一月廿日發行

▲第一軍初期の活動（梅田又次郎君編）

第壹編　上陸及前進
第一章　第二十三旅團の出發上陸及前進
第二章　平壤の占領
第三章　安州の占領（附敵の襲擊）
第四章　定州の戰鬪及占領
第五章　各師團の前進及配備
第貳編　鴨綠江の戰鬪
第一編　架橋工事の困難
第二章　河川偵察の困難
第三章　九里島の［illegible］占領
第四章　鴨綠江の砲擊戰
第五章　九連城占領
第六章　近衛師團戰鬪の經過
第七章　蛤蟆塘の激戰
第八章　山砲隊の殊勳
第九章　衛生隊の勤勞及任務
第十章　鳳凰城の占領
補紀
黒木大將の略傳
附、長谷川、西、井上三師團長
第一軍武功錄
戰死者下士卒の叙勳戰功美譚
戰鬪逸話及雜記

◉第三卷以下の出版豫定

第三卷　第二軍の前進

奥軍の内地出發、敵前上陸の大苦心より金州南山の激戰、大連の占領、得利寺、大石橋の大戰より、營口海城の占領に至る。

博文館從軍記者　田山花袋君

第四卷　第四軍の前進

大孤山上陸軍の出發、敵前上陸より岫巖、分水嶺の激戰、第四軍の編製、析木城の大勝に至る。

東京朝日新聞從軍記者　熊谷直亮君

第五卷　第一軍の前進（下編）

摩天嶺の逆襲を擊破し、終に橋頭、樹林子、様子嶺、各方面の戰鬪に至る。[sic: begins 岬河、連山關、賽馬集等の占領より]

國民新聞從軍記者　梅田又次郎君

第六卷　海軍第一期作戰の成功

八月十日の黄海と同十四日蔚山沖との兩海戰の大勝より旅順口の敵艦全滅、旅順開城、海軍第一期の凱旋に至る。

日露戰爭實記々者　平田骨仙君

第七卷　旅順要塞戰（上編）

乃木大將の第三軍が、要塞攻擊の準備等より、第一回の總攻擊以來、幾多の大惡戰、大苦戰の現况を詳叙す。

東京朝日新聞從軍記者　半井桃水君

第八卷　遼陽包圍攻擊

滿洲軍總司令部新たに組織せられて、遼陽總攻擊の作戰定まり、黒木、奥、野津の三軍呼應して各方面の激戰より、終に遼陽の占領に至る。

國民新聞從軍記者　梅田又次郎君

第九卷　沙河の會戰

遼陽敗戰後、殊勝にも逆襲し來りし大軍と沙河附近に會戰し、當初我軍の苦戰より、最後に全軍の大勝に至る。

東京日々新聞從軍記者　黒田甲子郎君

第拾卷　旅順要塞戰（下編）

數回連續せる旅順の總攻擊に、血河を流し屍山築き、終に二〇三高地占領より、局面一轉、松樹山、二龍山、等の占、領敵將開城降服に至る

東京朝日新聞從軍記者　半井桃水君

第拾壹卷　黒溝台附近の會戰

敵將ミスチエンコの中立地を浸して奇襲を試み來りしを擊退してより、更に黒溝臺の敵襲に接し一時大苦戰の後立見將軍の神算能く敵を擊退し、尋で奉天大會戰の前半に叙し及ばんとす。

東京日々新聞從軍記者　黒田甲子郎君

第拾貳卷　奉天の大會戰

沙河々畔半歳の對陣、我が滿洲軍全部活動の部署定まり、大擧して攻勢に轉じ、拾日に亘る激戰五十萬の敵を粉碎し、更に追擊して鐵嶺開原を占領し、終に最後の休戰條約に至る

東京日々新聞從軍記者　黒田甲子郎君

第拾參卷以下、樺太東北韓軍の偉勳日本海の大海戰に有史以來未曾有の大勝を奏し、延て米國ポーツマッスの媾和談判より、對韓對淸の處分に至るまで、編を追ふて發刊せんとす。

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

女（丙の七）

二百年前の女學世界



元祿五年出版女重寶記の內容

女子英學舍生徒



前列中央の外國婦人は舍長ロッス孃

歴史風俗人形



明治時代の振袖着用

（帝室博物館ゟ陳列）

母のあつまり



（明治母の會大會）

文藝倶樂部春期増刊第貳號

藝人出世譚

一月十五日發行
正價金貳拾五錢
郵稅金貳錢五厘

題して藝人出世譚と云ふ。藝界の名人が成功談、苦心談、逸話等を出來得る限り網羅し、新春劈頭の雜誌中最も興味ある讀物たらしむると同時に、一面に於て藝術研鑽の人をして、其名人の徑路を辿り、他日の成功を期せんとするの資に供せんとす。其如何に趣味深く、また如何に多方面なるかは、左に列記する人名に徵して知るを得べし即ち、

常陸山△梅ヶ谷△國見山△荒岩△八百藏△芝翫△羽左衛門△猿之助△高麗藏△市藏△團藏△松助△莚升△小團次△時藏△△菊五郎△梅幸△吉右衛門△訥子△壽美藏△女寅△源之助△九女八△錦糸△米花△右團次△我當△鴈次郎△幅助△山口△高田△河合△藤澤△伊井△角藤△川上△貞奴△喜多村△福井△△相生太夫△朝太夫△生駒太夫△語介△松太郎△攝津大掾△越路△伊達△組廣△素行△小清△東玉△三生△綾之助△延壽△梅吉△家內太夫△藤吉△虎丸△駒子△團九郎△伊三郎△山瀨檢校△山本檢校△西△橘△古童△竹翁

の外あらゆる現時我が國藝界の名手約二百名に及ぶ珍談奇話の滾々として汲めども盡きざるは、之を發刊の曉に知り給へと云爾。

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

女(丁の一)

石橋思案君校　星野麥人君編　新刊發行

紅葉書翰抄

全一册横綴美本紙數三百餘頁
正價五拾錢　郵稅拾錢

明治の文豪尾崎紅葉山人が、自ら文章報國の四字を標榜して、其の一生を斯文の爲めに盡くせし功績の偉大なるは、茲に贅辯を皷するの要なし。宜なり、其の中道として玉碎するや、其の名ますます高く、今や其の斷翰零墨と雖も、世を擧げて珍襲せざるものなし。此の書は諸家に秘藏する山人が生前、其の親朋故舊に送れる書翰文約貳百通を輯め、尚狹むに山人自筆の葉書數十を其の儘寫眞版に附せしを以てす。凡そ其の人の眞相を窺はんとせば、其の書翰文を見るに如かず。噫山人が眞相の流露する筆の跡を偲ばんとするもの、此の書を熟讀すべきは素より、世の書翰文を學ばんとするものに絶好の指針を與ふる稀代の珍籍なり。江湖博雅の君子は、山人が小說以外に、其の書翰文の如何に章句の妙を極め、又如何に情誼に敦かりしかを、庶幾くは此の書に依つて知れ

發兌元　東京本町　博文館

宮中顧問官佐藤少將題字　文學博士井上哲次郎君序文　秋山梧庵君編（新刊發賣）

現代大家 武士道叢論

全一册洋裝大判
正價五拾錢
郵稅十二錢

○日本魂黑川文學博士　○武士道を論ず井上文學博士　○武士道は物部大伴二氏に興る重野文學博士○武士道細川文學博士　○勅語と武士道松本文學博士　○武士道論三好退藏君　○武家時代の法律に現はれたる道德主義と武士道の話渡邊子爵○武士道と今後の教育戸水寛人法學博士○大に士氣を振作せよ佐藤陸軍少將　○時局と歷史教育三上文學博士　○大學講師等現代知名の七家の講話三十八項集めて此の中にあり

產科婦人科專門醫　稻生鑑次郎君纂著（新刊發賣）

實習產婆學

全二册　上卷　通常產

上卷　洋裝大判美本紙數三百餘頁
正價金七拾錢　郵稅拾錢

本書は斯道の專門醫にして、多年產婆養成の經驗ある著者が、其平素講述の稿本を基礎とし、之に佛國ペナール、アプラン兩氏の著書を始め、多くの佛獨兩國の學者の著述を參考として記述したるものにして、其說從來我國に行はるゝ產婆書に比して異彩を放てるもの多く、挿圖甚だ多くして、文章將た初學者をして了解し易からしめんことを務めたれば、產婆生徒の講習用としても、開業產婆の參考用としても、實に間然する所なき良書なり。

發兌元博文館

中

女(丁の二)

幼年畫報

洋裝菊判頗美畫（每月一回五日發行）正價拾錢 郵税五厘

第壹卷第壹號に限り 一月一日發行

（極彩色石版密畫）

●表紙……武内桂舟君書
●お正月嬉いな（うた）……渡部審也君書
●キツ子とニハトリ（お伽噺）……尾竹國觀君書
●人形のお正月（家庭話）……尾竹國觀君書
●日吉丸（歴史）……武内桂舟君書
●おめでとー（單語）……名和永年君書
●カラス（理科）……名和永年君書
●乘物づくし（理科）……名和永年君書
●陸海軍の凱旋（軍事）……木村光太郎君書
●ポンチ竹馬太郎（いましめ）……山中古洞君書

△お伽噺馬か鹿か（サヽナミ）△雪ダルマ △水禽 △日の出 △ミカンと、タドン △皇孫殿下の御學友 △皇孫殿下御産所眞景 △凱旋門と大山大將 △おもしろい遊戲等何れも活版二色刷の美麗なるもの挿畫は桂舟、古蜓、竹舟の諸氏各得意の筆を振へり

▲附錄　皇孫殿下御肖像（アートペイパー精巧寫眞版）

年刊十二冊…石版極彩色刷十六頁寫眞入活版二度刷十六頁

正價 壹冊金拾錢 郵税五厘 前金

●三冊金貳拾九錢 ●六冊金五拾六錢 ●十二冊壹圓拾錢 郵税外要

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

大日本女學會

●本會が十年來女學の通信教授に盡せる事畏くも　皇后宮の懿聞に達し特に御歌下賜の恩命を蒙りたり●本會は伏見若宮妃殿下を名譽總裁に奉戴し鍋島侯爵夫人會長として會務を監督す●今度新學期を開き會員を募集す會則希望者は葉書又は電話にて請求あれ

●高等科（學期二個年）　月謝四拾錢　束脩四拾錢

○倫理（下田次郎）○禮法（佐方鎮子）○教育（安井哲子）○國文（坂正臣）○文法（岡田正美）○作文（今泉定介）○作歌（大口鯛二）○美辭學（島村抱月）○漢文（菊池晩香）○日本歴史（大森金五郎）○萬國歴史（喜田貞吉）○名媛傳（下田歌子）○日本地理（喜田貞吉）○萬國地理（同上）○地文（脇水鐵五郎）○數學（藤野了祐）○植物（松村博士）○動物（石川博士）○鑛物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衞生（三宅博士）○家事衞生（同上）○小兒衞生（三島博士）○家事經濟（三輪田眞佐子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖畫（武村千佐子）○美學（島村抱月）○音樂（東儀季治）○挿花（戸川正得）○點茶（松浦伯爵）○園藝（池田伴親）○法制經濟（岡戸諭介）○附錄機關雜誌「なでしこ」

●簡易科（學期二個年）　月謝貳拾錢　束脩貳拾錢

○修身（後閑菊野子）○禮法（佐方鎮子）○國文（同上）○作文（今泉定介）○漢文（菊池晩香）○歴史（大森金五郎）○地理（喜田貞吉）○數學（藤野了祐）○博物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衞生（三宅博士）○家事綱要（後閑菊野子）○家庭教育（三輪田眞佐子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖畫（武村千佐子）○史傳（下田歌子）○お伽譚○詞藻○質問應答○雜錄○雜報

目下貳卷迄發行　入會の好時機

東京市麹町區下二番町三七　**大日本女學會**　電話番町一三三〇

（丁の四）

百五十年前の女學世界



寶暦年間開板の女大學の内容

婦人の演武

中央なるは山邊春正とて女子に適せるやう柔術を工風せし人なり。



(十劍大神流女子武道奬勵會演習大會)

淑女の小集



（岩倉子爵邸觀楓會の折）



米國公使館一等書記官夫人



前米國公使グリスカム夫人

發兌元 新刊發賣書 博文館

松永聽劍君編

●樺太及勘察加

菊判 三百六十六頁
正價 五拾錢
郵稅 八錢

前編に樺太を述ぶ地理歷史沿革風土產業より延て將來の施設に及ぶ勘察加亦綿密の調査より成れり

報知新聞記者 高橋迎月君編

●名家實談 銃獵秘訣

三六判上製三百三十八頁
正價 參拾錢
郵稅 四錢

著者獵界に於ける名家を歷訪し多年研磨の銃獵談を得て起稿されたるもの斯界の好參考書たり

工學士 中澤重雄君著

●工業叢書 電氣磁氣計算法

中判上製 三百餘頁
正價 八拾錢
郵稅 八錢

單位、直流、交流、電氣的エネルギー、磁氣及磁氣、磁場の計算、發電機及電動機の計算、同設計、チョーキングコイル及變壓器の設計の十章に分ち逐次詳述せる書なり

文學士 石倉小三郎君著

●西洋音樂史

菊判 三百十六頁
上製正價 五拾五錢 郵稅拾錢
並製正價 四拾錢 郵稅八錢

本書は著者が嘗て唱道せし樂史研究の方則に基き、文明史の背景に據り或は哲學に考へ或は對例な文字に取り、他の諸史と相待つて世界思想の解明に資す、實に邦語西歐樂史の嚆矢たり。

醫學得業士 橘公行君著

●八丈島保養案內

三六判 百九拾八頁
正價 貳拾五錢
郵稅 四錢

八丈島の養痾の適切地にして殊に肺療地として好地たるを紹介せるものなり

陸軍步兵大尉 小山永行君著

●陸軍入隊案內

小判美本三百三十頁
正價 參拾錢
郵稅 四錢

才學の名高き小山大尉が通俗平易に入隊者の手引を爲せるもの父兄や未來の軍人又一讀を怠る勿れ

女（戊の二）

發兌元　新刊發賣書　博文館

八木奘三郎君編
●普通人類學
菊判 三百六十二頁　上製 正價五拾五錢 郵税拾錢　並製 正價四拾錢 郵税八錢

今や日本に於ける人類學の先驅として此書出づ世の渇望を充たして斯學普及の基を開く好き手引なり

文學士 小川銀次郎君編
●近世美術史
菊判 三百二十六頁　上製 正價五拾五錢 郵税拾錢　並製 正價四拾錢 郵税八錢

十七世紀より現時に至る迄の美術變遷史にして曩に出版せし世界美術史の續編とも云ふべきもの

文學士 林森太郎君著
●日本文學史
菊判 三百五十二頁　上製 正價五拾五錢 郵税拾錢　並製 正價四拾錢 郵税八錢

中等敎科書の目的を以て簡明要を得たるもの也吾國文學變遷の要は本書に依りて明瞭するを得べし

巖谷小波君編
●伯林土産 戀の畵葉書
中判上製 四百七拾頁　正價壹圓貳拾錢　郵税拾貳錢

著者洋行中彼地にて實地見聞せる彼地の狀態を例の妙想麗筆を以てものせる書内容外貌共に最新の好冊子

同
●地獄巡り（世界お伽噺第七拾八編）
菊判 七拾四頁　正價八錢　郵税貳錢

西洋のオペラにある有名の話です△附錄には飛行器と云ふ敎訓的のお話があります

同
●九番人形（同第七十九編）
菊判 七十頁　正價八錢　郵税貳錢

名高きアラビヤンナイトの中の「アラスナム王子と魔法王」と謂ふのを飜譯したものです

▲右の外本誌他頁廣告欄に於て、比較的詳密の内容を掲載せしものは本頁にては省略せり、觀客其心して併覽を賜へ・

女（戊の三）



女學世界定期増刊
第六巻第二號

女重寶記

女子の家庭に於ける任務は極て重大にして其爲す所は頗る多端に亘らざるべからず、是を以て家政を完全に處理せんと欲せば其應用を萬般の智識に須たざるべからず、女重寶記は眇たる一小册子に過ぎずして元より大方讀者の榮に供するに足らずと雖も聊か婦人齊家の用意に資せんと欲する編者の微意を納れ給はんことを

人生觀

醜婦安心の礎

閑月庵主

此の人間世界は一種不可思議なる魔界である、常識を以て測るべからず、常情を以て判定すべからず、秩序あるがごとくにして秩序なく、趨向あるがごとくにして趨向なし、雜然、紛然、何が何やら分からない所が人間社會である。茫漠として捉まへ所なく、曠汎として思議すべからざる所が即ち此の人間界である。此の茫漠として廣大なる人間社會の有様に對して吾々人間たるものゝ智識の力や思慮の分量の小なる事は實に憐れむべきほどである。吾々が人間社會に對して不斷利口らしく考へた事柄や、有理らしく悟つた事は一つとして利口らしくもなければ又有理らしくもない、然らば世の中は唯馬鹿らしく、只無分別でよいかといふのに、又決してそうではない、矢張り常識で考へ、人情で測り、智慧を働らかせ、心意を練つて事に處せねばならぬ、さらばといつて、智慧の通りに行くものでなければ、又常情通りに成功するものでない。つまり紛然、雜然として無秩序、無傾向なものである。

まづこの情態を事實に示せば、智識のある者ばかりが人の上に立たない、德のある者ばかりが幸福の地位に居らない、これが第一の證據である、然らば怠惰者が成功をして、辛抱人が失敗に終るかといふに、否決してそうではない。

斯に於てか世の中には一種の魔物が存在して居て何事も其の意に任せて人間の運命を制して居る様に見受けられる。幸運な者は魔に愛されたものであらう。不幸な者は魔に憎まれたものであらう。運不運、幸、不幸は決して人間一個の力や働らきではなくて寧ろ惡魔の寵辱に依るものであらう。嗚呼恐ろしいかな惡魔の力、これや實に人間以上、人智以上、人力以上の物である。故に人世は一種の不思議世界であると。

我輩は決して以上の如き人世不可思議說に悉く首肯する者ではないが、乍併人事の幾部分には矢張り不可思議物の存在して居る事を認むる者である。殊に婦人の運命に就ては常に不思議なるものである事を屢々觀じ屢々實驗するのである。

婦人の運命に就て我輩の屢々意外とするのは美人が好き配偶を得ない事である。元來美人なるものは、其の天稟の容貌を以て自から標するところ高く、其れが爲めに往々意外の結果を來たすのは免かるべからざる勢であるが、中には自から標する事の低い者が又往々にして不幸なる運命に陷る事がある。我々は今此の美人薄命觀即ち醜婦安心觀に就て聊か穿鑿して見やうと思ふ、即ち此の點に就て備さに世態人情の傾向を察するに。其相手たる男子の希望する所は何であるかを見るにまづ。

(第一)女子にして愛嬌なくば妻とするに足らず――といふ事がある。愛嬌とは抑も何であるか愛嬌は必ずしも美人の占領物ではない、所謂醜婦の中にも又大いに愛嬌を持つたものがある、世間の所謂美人中には愛嬌に乏しい物が甚だ多い。彼の小野小町は愛嬌に乏しかつた一美人と思はれる。愛嬌は單に顏ばかりではない、又姿ばかりでもない、言語、態度、音聲、其他いろ〳〵無形の上にも十分存在して居るものである。

(第二)女子にして貞節なくば妻とするに足らず――貞節とは何であるか他人に心を移さないばかりが、女の貞節ではない世間一般の男子は希望して曰く、「物やわらかにして又きつい所もありたし、抑も吾が妻たるも

のは我が戸外に於てする事を助くるに及ばじ只我が外界に於て敵と戰ひ、苦心をなし、同情もなく愛もなき此の冷酷なる生存競爭の間に疲れ果てたる其の精神を御身の爲めに慰められん事を望むのみ」とある。即ち男子は婦人に對して專ら同情慰藉を要求するものである。此の點に於て、彼れいづくんぞ美人と醜婦とを撰ぶの遑あらんや。

即ち男女の間は決して美醜の問題から決するものではなくて、專ら愛情の方から決するものである。然らば愛情に就て醜美の影響する所はどうであるかといふに。

まづ一般の定則とする所は大要左の如きものである。

第一形體的(生理的)の投合。第二心意的の投合。抑も形體的若しくは生理的といふは、一口に言へば女子の嫁入時の事である。鬼も十八といふ諺がある通り。女子が此時に至れば最も完全に發育して脊も足り、形も整ひ、顔に艶を生じ、聲は鶯の如く、皮膚は淡紅色を呈し、心は洋々たる春の野に雲雀の揚るごとく、嬉々として悦び萬物に對して愛深く、而かも又いふべからざる勇氣が胸に滿ちて如何なる事をも成すべく生れて以來未だ知らぬ嬉しみが心ろに充ち滿たる時をいふのである。若し男子が斯る人を一見したならば、其人の醜美に拘らず忽ちにして百年不滅の戀情を起す者である、即ち男子が此の境にある女子を見ては最早醜美を論ずる遑がないのである。即ち人間本來の價値が醜美以上に超絶して居るのである、女子の尤も心すべきは即ち此の時である、此の時が女子の運命の潮時である若し此時を空過したならば、百年潮を待つも運命は來らないものと言つてよからう。今是れを年齢にしていへば十八九歳より二十五六までの間であらう。それから先は所謂作り女、作り女は形體美の賊である。

次に心意上の投合といふ事に就ては詳しく說明すれば千萬言を費やしても言ひ切れるものではないが、まづ

一と口にいへば、「心の合ふた人」といふのに過ぎない。戀の通則に
男子が婦人に對して要求する所は其の愛情深くして而かも貞節なるにあり
女子が男子に對して要求する所は其の力量多くして而かも深切なるにあり
けれども社會の實際は必らずしも此の如くならぬ。駿馬痴漢を乘せて走り。美人庸夫に伴ふとある。我々は常に醜き痴鈍なる且つ御粗末千萬なる男子が反つて妍麗妖艶にして然かも愛嬌ある婦人から好まるゝのを見る事がある、これと同じく又風采堂々才智あり、力量ある美丈夫が正月元旦に御目に懸つては御氣の毒千萬なる程なアンチ美人と婚して而かも得々たるのを往々見る事がある。畢竟是れ男女の間は情の結合で、智慧や、美醜の關係は第二であるからである。

次に美貌と愛情、若しくは結婚に就て言はん。

完全にして規律の整へる美貌は人の感情を惹くの力甚だ乏しきものなりといふ事である。世に三十二相揃ふた美人が袖を牽かれないで、却て何處にか缺けた所のある婦人が大いに重寶がられる試しは多い。これは何であるかといふに何事にも足るといふ事は即ち人の飽き易い所ろである。缺けた所にいふべからざる趣きのあるもので、容貌も矢張其の通り、美人は多く人に飽かるゝものなる事は世間の情態である。是れに反して同情は戀と密接したものである。西哲の言に他人の苦痛に同情するものは人たるべく、他人の快樂に同情するものは天使なりといふ事がある。人の苦痛には同情を表する者はあるけれども、人の快樂に同情を表するものはない、然るに相思の間にあつては直ちに他の快樂を我が快樂とするものである。

人の運命を支配する所の戀は極めて盲目なものである。而して其戀は只一個所の美貌、否な美點が人を捕にして、其人をして其他の容貌には全く夢の如くならしむるものである。

故に世の中は美人と秀男子とが戀をするのでなくて或る人體に附屬する一個所と一個所とが戀をして人一世の運命を定むるのである。此の點に於ては美人何物ぞ、美貌又何物ぞといふべきである。

世に所謂完全なる美人と稱する者がある。彼女は多くの賞讚者から圍繞せられ、多くの批評者から讃美せられて居る、而かも彼の女は斯くの如く美なるに拘らず何人よりも、結婚を申込まれた事はなく、又何人よりも嫉妬されたる事はない、多くの男子は彼の女を見て即座に其の美貌を認識せり、而かも敢て彼女を娶らんと欲する者は一人もない。是れ甚だ不思議な事ではないか。然しよく〳〵研究して見ると彼の女の美は唯皮一重である皮膚の下に潜んで居る靈光がない、活力がない。機警の働きがない、玆に於てか容貌に變化がない、活動がない、故に男子は一見して其美に撲たるゝも、之れを熟視するに至つて、呆然として失望し、再三視するに至つて遂に倦厭の情を催ふし來るのである。

天人にも五衰といふ事がある、美人は衰へる者である、世に美人の衰ろへたほど氣の毒なものはない。美人は元來無能なものである、蓋し其の容貌に恃む所があるからである、それが爲めに彼女は屢々幸運の機を逸する事がある、之れに反して醜婦は多能である、敏警である、手腕に富んで居る、故に彼女は運命の機を摑むの術に巧みである。

美人の無能は概略右の如し吾人は是より通稱醜婦の八德といふ事に就て解說を試むべし。

第一　醜婦は愛深く人情に厚し、是れ通常男子の尤も喜ぶ所なり

第二　醜婦は智慧多く意志堅固なり是れ世間に多き質實なる男子の尤も希望する所なり

第三　醜婦は忍耐にして家事に長ず、是れ一般心ある男子をして深く依賴せしむ

第四　醜婦は多く產して多く働く、是れ尤も家庭的にして又家道繁榮の基なり

第五　醜婦は多能多藝なり是れ一部の男子をして倚依せしむ
第六　醜婦は無病にして健康なり、是れ尤も今の世に希望すべき資格なり
第七　醜婦は汚れたる美人よりも天然的愛嬌に富むもの多し是れ一般男子の希望する所なり。
第八　醜婦は縁遠し是れ富あり、地位あり、力ある老青年の求むる配偶者として第一の好資格なり。
　安堵せよ醜婦、廣き世界は薄弱なる美人よりも寧ろ强健なる御身等に向つて幸福を與へんと待ち構へつゝあるなり。

女訓小言

千朶山樵

◎婦德の第一

婦人の德千百にして竭すべからずと雖も貞操を以て第一とす、是れ千古に亘つて磨すべからず、千載の後までも渝るべからざる不朽の理なり。抑も貞操は婦德の根元にして又婦人の魂なり。たとへ身は萬藝に通じ、百技に達し容貌花の如く、智慧鏡の如くならんもこの德に缺くる處ろあらんか、瓦礫と撰ぶ所なきなり。女子の學問の要は婦德を第一とす、婦德修まつて後學問智識百般の應用に及ぶべし。

◎處世と容儀

婦人の世に處するは表裏形心の整ひを正しくすべし、表面は形にして、裏面は心なり。婦人にして若し容儀整はざれば裡に何程の美德を裹むも俗世界は一見して其人を棄つべし。是に於てか婦人に容儀の必要あり。是に

於て行儀作法を正しくせざるべからず。擧止優美にして閑雅なるべく、言語温籍にして婉曲なるべし。顔容整正にして艶美ならしめざるべからず是れ處世の第一方便なり。

容儀既に整はゞ次に品性に及ぶべし。容儀は形なり、品性は心なり、人の品性は常に正しくあるべし。高尚にあるべし。勇氣あるべし。自信あるべし。操持あるべし。妄りに動かず、妄りに恐れず、人を嫉むべからず、人を侮るべからず、況んや財寶、地位、美服、美食等に其本來の心を奪はるゝが如きは品性ある婦人といふべからず、常に其の心を高くし深くして外物の誘惑に陷らざる樣するは勿論、常に自から婦德の範となりて感化を他に及ぼすの美性を發揚すべきなり。

◎家政と活眼

婦人活動の範圍は專ら家政にあり。大小廣狹は其の人の地位境遇によりて相違ありと雖も、務むる所は家の政に外ならず、是に於てか婦人に家政學活用の手腕なかるべからず。

抑も婦女百般の學術、是を活用するは家政にあり。婦人家に在りて其の家の修まらざるは恥辱の第一なり、百般の學問千篇の智識も之を家事に應用する事能はざれば無用の長物のみ。故に婦人の務は家政學の活用を以て始めとなす。

それ學問智識は元と死物なり。是れを活かして働かすは精神の力なり、精神は活眼なり、眼を活かさざれば物を動かす事能はず、物には急所あり、この急所を捉へて按排せざれば功を奏する事難し、

縱へば猶戰爭のごとし、戰爭に勝つは敵を破るにあり、敵を破るは、其の主腦を碎くに若かじ、一度び主腦に向つて打撃を加へんか、他は自から潰ん。是れ物の急所を捉へたるものなり、若し然らずして徒らに枝葉に走りて事を爲さんか勞のみ多くして功を奏する事少し、婦人が日常の家務を取る又これに異ならず。家の經濟

の仕方にもこの急所あり、世間の交際にもこの急所あり、物品の購求より、器物の保存、雇人の使用、料理、裁縫、其他日常百般の家事皆この急所あり、是の急所を摑むと摑まざるとによりて、利害、得失の差、非常にして一人一身より引いて一家一國に及ぼす影響の大なる實に驚ろくべきものあり。是れ必竟貧富貴賤の岐るる處ろにして婦人が家を務むるに於て一日も忽がせにすべからざるものは此の事物に對するの活眼なり、活眼は婦人齊家の第一條件と知るべし。

◎節儉の極意

節儉は家を修むる良法なり、苟くも家を修むる者として此の心掛なかるべからず、又節儉は單に一身一家の得となるのみならず。天下國家の費を省くものなれば、塵紙一枚の儉約、マッチ一本の儉約も直ちに世上の益となるものなれば之を爲すは人の美德として稱讃すべき事なり、さりながら人は只節儉のみを爲したりとて經濟の要を得たりといふべからず、其の節儉したるものを形ちの上に貯へて大を成し、始めて經濟の要領を得たるものといふべし。即ち節儉は消極の經濟なれども、貯蓄は積極の經濟といふがごとし、節儉と貯蓄と双方相待ちて始めて經濟の目的を達したるものといふべし。タトへば今日繻珍の帯を購はんと欲してそれを購はざるは節儉なり、然れども唯買はざりしのみにて經濟の能事畢れりとせず、必らずや其購はざりし反償としてそれに値する丈けの實價を貯蓄し行くを以て始めて節儉の活用となり始めて實事經濟の能事を全ふしたるものといふべし。

◎忍耐の德

忍耐は女性の美德なり、抑も婦人一度び嫁すれば其家は即ち我が生涯の安息處なり、我が血統を遺すべき神聖の靈城なり、されば人一度び嫁すれば千百の艱難に打勝ち、幾多の障害を排除して、苦痛を忍び、不足を我

慢し、苦狀に耐へて其家を守らざるべからず、婦人又一たび緣ありて人の妻となりたる以上はその良人は卽ち我が生涯の伴侶にして天地に懸替なき一人の君なれば、如何なる場合に臨みても其の良人に背き、其の良人を棄つべからざるものなり。よしや其男に多少の缺點多少の不足又多少の煩累ありとも決して其の良人に飽くべからず、世に常住の圓滿なきが如く、人に完全無缺の人はなし不完全不足を我慢して行くが婦人の忍耐にして又一大美德なりといふべし。

◎大なる母　（人格の養成）

世に小兒の心ほど尊くして大なるものはあらじ、小兒の心は荒涼なり、大膽なり、雄壯なり活潑なり、天眞爛漫なり、故に物を見る自から雄大壯偉なり、此の如く壯大雄烈、破天荒なる心胸を備へたる天然物をして次第に小く、次第に狹隘に、次第に卑怯に陷らしむるは何故ぞ、是れ主として人間社會の多年の習慣、時代の脅迫が交々相重りて其心を拘束するが故なり、天然的に勇大なる小兒は世の習慣と脅迫によつて、次第にその心胸を狹隘にし、天眞爛漫なるものは年齡を重ねるに隨ひて次第に喪失して虛僞となり卑陋となり、淺薄となり小細工となりて終る、誠に歎かわしき次第なれども、人間社會の約束としてこの範圍を脫する事能はざるは又如何ともすべからざるなり、されど苟くも世の母親たるものは、この理をよく玩味してよろしく小兒の心の雄大なる點に心づき、その破天荒の心胸を備へたるものなる事を認識してその天造の偉品を損なはしめざるやう注意して育つべきものなり。彼等小兒の發明心、荒涼なる英雄的態度、大膽、無遠慮にして飾らざる胸膽、物を見るに雄大なる眼光、その曠々として宇宙を呑むの心、その磊々として天地を動かすの意氣、その正直にして眞實なる神の如き心は迚も我々大人が眞似んと欲して眞似る事能はざるものなれば、人間世に生れて凡そ此の小兒の時ほど大切なる心を持つ時期はあるざるなり、されば世の母親たるものは、この百歲一時の好時機を看

敬し、これに向つてよき指導を與へ、よく教訓を施こし、其の天真の美を傷はざる樣注意すべきものなるべし

家庭錦囊

書齋の人

△金銀と羽

金錢はすべて羽翼を有す、其の飛翔する速力は殆んど測るべからざるほどに迅速なり故に小なる銀貨と雖も少しく油斷せば、ポケットに留まらざるべし。

△儲と蓄

人を富ますと富まさゝるとの別は金錢を儲くると儲けざるとに因りて生せず、只これを貯蓄するとせざるとに因りて生ずべし

△小なる節儉

正しくして小なる儉約は必ず大なる果を結ぶものなり、佛蘭西が世界の大國たる所以は必竟其の國民が正しく節儉するの力に在り

△全精神

苟くも人一事を爲さんと欲せばそれに向つて全精神を集中せざるべからず、而してそこには忍耐と克己と、熟慮と勞作との要素を必要とするなり

△一と針の穴

其時に必要なる一と針の修繕は他日の九針の勞に相當す、一本の釘、一本の螺旋と雖も時を過たず之を用ふれば能く門戸、障壁、大なる建築物、器械の破壞を防ぐことを得べし。

△時と金

時間は生命の一部分なり、一度之を失へは恰も弦を離れし矢のごとし、再び回復の望みなきものなり、世人は奢侈を非難するもの多けれど、時間の浪費は奢侈よりも其弊大なり

△時と家事

時間を嚴正に守る事は家庭の大なる美德なり、此美德の存在する家庭に於ては早起、早眠の善習慣行はれ一日の家事すべて緒につきて、一家春光熙々の觀あるべし。

△時間と職務

時間を輕んじて其の職務を怠たる人は一般に他人の平安を攪亂するものなり、時間を重んせざる者と協同して事をなすは恰も一種の熱病に襲はれたるがごとし。

△正直の德

如何なる時と如何なる場合とを問はず、正しき人は必らず榮ゆべし、タトヱ其の外觀は貧苦らしく見ゆるとも心安らかにして尤も幸福なる生活を營むことを得べし

△多言と實行

他人に向つて多く爲すべき事を告げんよりはまづ自から爲さんと欲する事の實例を示すべし。言を先にするよりはまづ實行を先にすべし

△行爲の遺傳

惡しき行爲と言語はタトヱ他人に知られざればとて決して其儘消滅するものにあらず、人の精神は永遠に活くるものにて三千年前の精神は今日も我等の間に逍遙しつゝある事を知らざるべからず。

△親の品性と兒童

兩親の品性は直ちに其の兒童に反映するものなり、兒童の心は恰も白き糸のごとし、黑き品性は黑く染まり赤き品性は赤く染まり、奢侈、放縱、浪費、逸樂、克己、忍耐、節儉、勞働、すべて親の品性は長く兒童の心底に宿りて忘却することあらざるべし。

△職分と家庭

職分の觀念はまづ家庭に於て練習することを得べし、服從、耐忍、規律、正直、勞作の美德は悉く皆兩親の感化によりて生ずるものなり。

△勇氣の德

勇氣は人生百般の事業を發生せしむる原動力なり、勇氣ありてこそ人の職分を守るの念生ず、世間如何なる紛糾難事といへども一たび勇氣を振ふて之れに臨まば、直ちに開解するものなり

△人と樹木

人は恰も樹木のごとし、室に育てらるゝ木は成長して大木になる事能はじ、雨に遭ひ風に遭ひ、霜雪、日光様々の刺激によりて其根を堅くし、其枝を廣げ遂に亭々、森々たる大木を成す、人も又困難、窮厄、逆境、失敗、冷酷、慈愛等樣々の刺激によりて始めて大人となるべし。

△子供と遺產

子供に多くの遺産を與へんが爲めに必要の衣食をも減ずるものあるは愚なり、青年に莫大なる金錢を與へたるのみにて社會を歩ましめんとずるは恰も游泳を知らざる者に向つて浮嚢を與ふるがごとし、彼等はこれが爲めに沈溺するに至るべし

秩序と整理

物を彼方此方と散亂して取片付ざるは甚だ惡しき習慣なり、一たびこの惡習慣を受くるときは一事が萬事となり、日常凡てに通じて、順序、方法、整頓を失ひ、何を爲しても成就することなかるべし、元來物を散亂せしむるの風は、氣の落付かざるより起るものなればなり、最初にぞんざい、無精など稱して戸障子の開閉、下駄の脱ぎ方、坐り樣などのしとやかならざる又は足の裏の汚き、書籍の汚れ損じなどより漸く、一轉して机上、机邊に筆墨等を散亂し、簞笥、箱類の中を亂脈になし座右は恰も大掃除の最中の如き體裁を爲すに至り、一寸入用の品ありとも急には見當らずして、それが爲めに少からざる時間を費し業務の妨げを爲すのみならず、爲めに品物を破損する事あるものなり。

人は幼時より務めて秩序、整理の觀念を養はざるべからず、子供をして此の風を矯めしむるは元より父母の任務たるべし、されど、父母が配慮するも猶成長の後までも改むることをせずんば本人はよくよく心して之を改めざるべからず、此の如き人は他人より忌み嫌はるゝのみならず、之を捨置かば、いつか心の內部に傳染して精神も亦諸事に散亂して常に纏りの附かざることのみを爲すべく、遂には終生一事を爲し遂げずして畢るに至るものなり。

春のころ

(丸山晩霞筆)

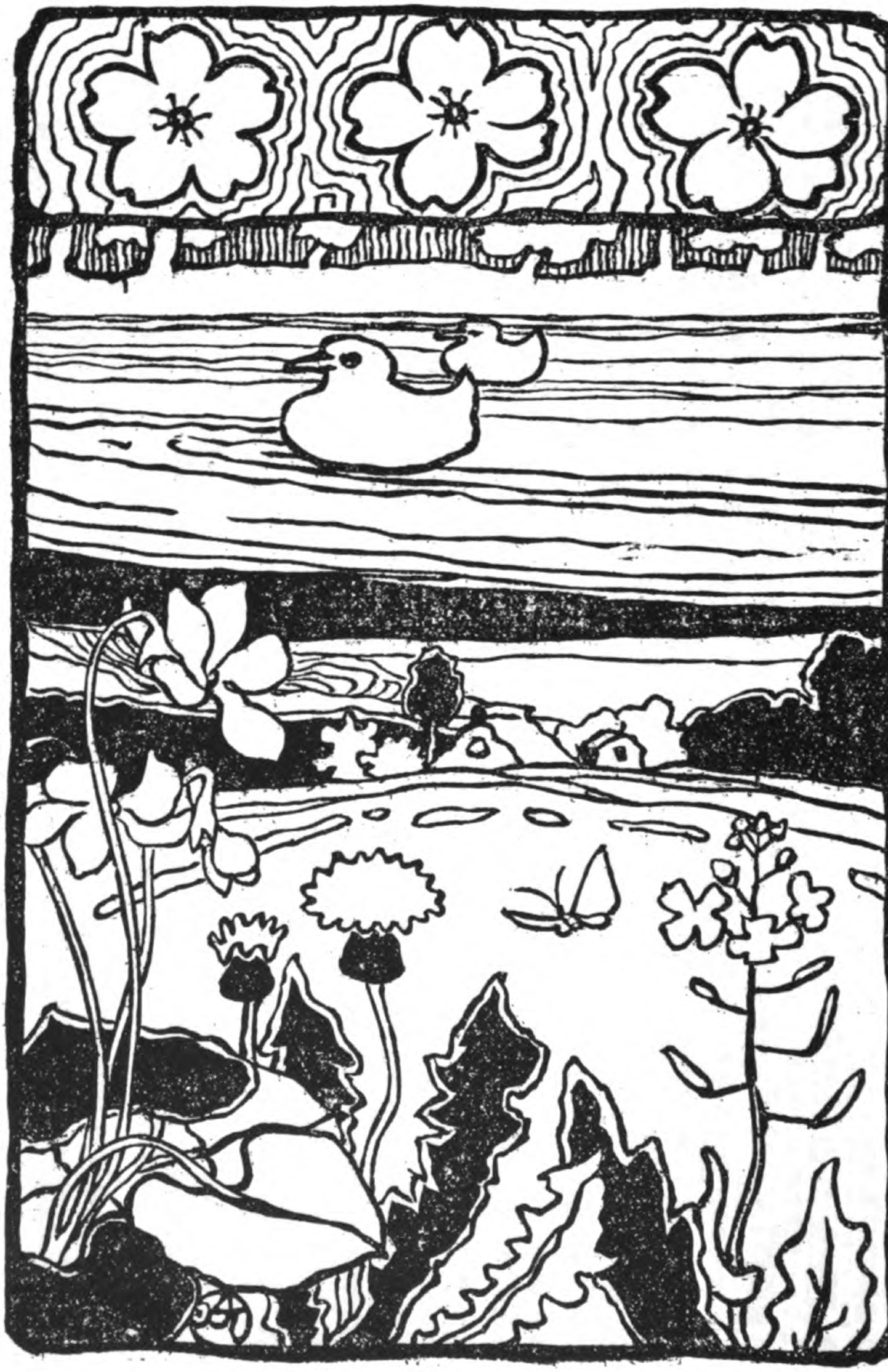
さくら

みやこどり

すみれ

たんぽゝ

菜の花



婚姻の儀式

抑も婚姻は人間大倫の存する所、又百年禍福の分るゝものなれば、須く鄭重を加ふべし。男女互に其性質氣風を撰ぶべき事は勿論、家計の如何をも大に考へ糺ずべきなり。

まづその順序を云へば、結婚には媒酌ありて双方の家系親類を糺し、且つ品行の正否教育の程度をも篤と考へ、其後男女及び其兩親共一面の識を遂ぐべし、是を見合といふ、兩家既に納得せし上は聟となるべきものゝ家より、酒肴、衣服、帶の類を以て嫁の方に贈り、嫁の方よりも是に對する品種を贈るなり是を結納の取交といふ。

結納には貴賤それ〲其身分に應じて増減あるべきも、大抵はまづ五種(昆布、鯣、鯛、鮑、鰹節、)五荷(酒)或は五種三荷又一種一荷もあるべし、又小袖ひと重れ、(其ひとへは表裏共白絹なるべくひとつは表紅、裏は何色にても見計ひにてよろし)略式は一定せざれども結納の禮には帶一筋は必ず缺くべからざるものとす。

さて吉日良辰を撰び、婚禮の時日を定め、媒酌其間にありて双方承知の上當日輿迎ひとして、重立たる親戚の内より嫁の方へ赴き、是を受取り來る、此時聟より迎ひ小袖とて酒肴を添へて小袖を嫁に贈るを正式とす、さて此日嫁の衣裳は白小袖に色あるを付け、輿に入るを禮とす、聟は紋付の小袖、羽織袴を着くること勿論なり、而して聟の家に入る時は、待女郎出迎ひ先づ控の間、屛風を立列れたる所に通し、宜しく休息せしむべし、かくて愈々時刻になれば、禮席を改め聟を上座に嫁は下座にすわるなり、此時待女郎は聟の方の座につき、又介添の女房は嫁の傍に在りて盃、其他の取扱をなすべし、熨斗を盛りたる三寳出る時、嫁は手を添へて上座に直しおく、是を手掛熨斗といふ、次に引渡を出す(これは土器三枚重れし三寳の向へ据ゑ昆布、打栗、熨斗、鮑等を別に小さき臺に盛りたるもの)酌を取るものゝ兩人是に添ふて出で、長柄の銚子を持ちながら其まゝ引渡しの方へ進み、引渡の臺を取除け、聟の方に向ひて立廻りて嫁の前に据ゑおくなり、此時介添の女房盃を取り酒を受けて嫁に渡せば、嫁は之れを受けて飲み又一献を加へ飲むなり、時に酌人は左の方へ立て下座に就き、長柄を置きて是に加へ、更に嫁の方へ行き三度目を注ぐ、嫁是を加へ飲て盃を臺に置く、其時酌人其盃を聟の方へ据ゑ、聟は盃をとり上げ飲むことすべて前の如し、此折羽盛とて鴫を羽のまゝ臺に据ゑ、其中に料理したる肉を出す、又聟は二枚目の盃にて右の如く二度かへ飲て、是を嫁にさし、嫁も前の如く飲む、此時船盛とて海老を形のまゝ臺に据ゑ、其肉を内へ盛り、根まきに海苔昆布の類をそへ、又鯣干海鼠取合せたるを出す、此折嫁は三枚目の盃にて前の如く飲て聟へさす、聟飲みて盃を納むるものとす是を三々九度の盃といふ、さて聟盃を飲納めし時、雜煮を出す、待女郎等何れも盃を取替すなり、此事終りて鮒の羹物を出し、尋で引替の膳をも出し、打解けたる酒盛りあるべし、此膳を終り嫁は舅姑より出したる小袖を着代ふ、是を色直しといふ、聟も又嫁の方より贈れる小袖を被替るなり、此時舅姑を始め一家親類出で盃事あるべし、又婚禮席飾の時、床には三幅對、芽出たき畫柄を撰み掛くべし、又立花二瓶是もめで度ものを活くべし、床の前に瓶子一對、二重折一對、置鳥、置鮒、手掛熨斗を備ふ。

重寶記

年中行事 手びかへ草

考古博士述
桐のや女史記

正月

▲若水――東天紅と鳴く一番鷄の聲、正月元旦、望多き年のはじめの、曙の光未だ微けき時、何かにつけて改まる年中行事の第一番、若水のことを調べて見ましたら、之れは昔朝廷の公事で、舊年十二月の土用以前に、主水司と云ふ役人が、惠方に當る井戸の蓋を致して置き、翌年正月立春の日、朝早く土瓶に汲みあげて天子に奉りましたもので、立春の日若水を飲むと、一年中の邪氣を除くと支那の故事にございます。今は立春の日でなくて、之れを元日の朝と致しますけれど、それは僻事です。さて次に、

▲屠蘇――を祝ふ事。これは御存じの通り、白朮、桔梗、山椒、防風、肉桂、大黄の六種を以て製したもので、此の名の起源は四時纂要と申す書物に「屠蘇は思邈が庵の名、鬼氣を屠絶し、人魂を蘇醒す。」とあるので、即ち邪氣を屠殺して人の魂を蘇生せしむるといふ意から出て、屠蘇酒を飲めば一家に病なく、一家これを飲めば一里に病無しと申ます。

▲餅――を食べますのは、齡をかたむる爲めで、「はがため」と申し、齒を以て命と致す故、齒の文字を「よはひ」と讀みます。鏡餅は序ですからお話し致しますが、これは格別意味があつてのことでは御座いませぬ。鏡の如く圓くすると言ふところから起りましたので。

▲門飾りの松――松は常盤木で、變らぬ色のめでたきを採りましたので御座います。

▲竹――松は千年を契り、竹は萬代を契る。年の始めの祝事には最も適して居ります。竹は仙境のもので、仙人が之れを愛し、中空虚で色は不變、直にして然も節あるは有道の心に叶へりと申して、兎も角もおめで

たい植物でございます。松竹と共に吉祥あるものとして、春の飾りに用ひられてゐる植物は、

▲齒朶――齒は前に申した通り、『よはひ』と讀み、朶は『えだ』でございます。『えだ』は長くのびるもの故、『よはひ長くのぶる』と云ふことになり、且つ深山にありて霜雪にも凋ばぬ植物ですから、次の藪柑子やゆづり葉と共に、注連繩にかざります。

▲藪柑子――その名に似げなく、寶石のやうな眞紅の小さな實を結び、冬でも萋々たる綠の葉の色、これも目出度き例に引かれてあります。

▲ゆづり葉――新葉出でゝ古葉落つ、父子相續の意を祝ひますもので、齒朶は又の名『もろむき』と云ふ名にて夫婦の相生を祝ひこれは、

▲橙――と共に、だい〳〵ゆづり葉と並べて用ひますのでございます。

▲神馬艸――これは神功皇后の三韓御征伐の時、海中の藻を取つて、軍馬の秣と致しましたので、神馬艸と申すので。又穗俵とも書きます。穗の俵も目出度いものですから用ひられたので。

▲えび――海老と書きます。老の字にあやかりまして飾るのでございます。さて、

▲注連繩――天照大神が天の岩戸にお隱れなすつてから、天地晦瞑となり、諸神さま〳〵にして、やう〳〵大神をお出し申したが、再びお隱れになるのを防がん爲め、注連をひいたのがそも〳〵の始まりなさうで、左繩に撚りまして、端をそろえぬものです。これは左は淸淨なるものと致してあり、端をそろへないのは直と云ふ意味をとつたのです。

▲羽根つく事――羽子あそび、この遊戲は元とは禁厭からおこつたのでございます。何のお禁厭かと申しますのに、小兒が蚊に喰はれぬお禁厭で、形を蜻蛉にとつて造りましたもので、御存じの通り蜻蛉は蚊を食ふものですから、欒華子などをとんぼ頭に致し、羽をつけて板でつき上げるので、成る程さう言へば何うやら蜻蛉らしくも見えます。さて斯んなお禁厭をしてゐた人の蚊に對する智識は誠に單純なもので、蚊は蚊母と

云ふ鳥が吐くので、その鳥の鳴聲は恰度人が嘔吐をするが如く、一度吐く毎に蚊が一二升飛び出すなどゝいふ說を信じてゐたのでございます。思ふのに其鳥は今の時鳥だらうと存ます。

▲手毬――羽子あそびと共に手毬の遊戯も愛らしいものですが、この手毬の故事は少々恐ろしいお話で、むかし〳〵支那のことで御座いますが、黄帝と申す帝王の臣下に、蚩尤と云ふ者が居りました。至極の惡人で、兄弟八十一人、皆心がねじけて、身體は獸の形をして銅鐵の額、砂をぼり〳〵喰つたといふ、言葉ばかりは人間で、惡逆無道の怪物が、黄帝の命を背て、人民を害したのを、黄帝怒つて之れを征し、遂に蚩尤を殺して、その頭を毬いたと申します。毛毬は蚩尤の首を形どりましたので、惡を制する意ださうでして、即ち年のはじめにこれをつき遊び、年中の災難を除けるのでございます。



▲萬歳樂――松の緑に鶴の丸、烏帽子素袍の扮裝で、「

いろ〳〵の祝言を歌ひて舞ひ來る萬歳樂。さつとひらいて松の蔭。春の景物としては格好な者です。これはもと内裏の踏歌を眞似たものでせう。禁中の踏歌と申しますのは、正月十五六日の頃、京中の男女の聲よき者を召し集へて、年の初めの祝詞を作つて舞をまはせ給ひましたのです。

▲寶船――初春の夢を初夢と申し、寶船を褥の下に布いて眠りますのは、世俗の利欲を思ふ人が、船八寶を積んで我が家に入り來ることを願ひ、せめて夢になりともその時の嬉しさを見度いと、甚だ以て虫のよい考から出ましたものです。

▲七種菜――七日の七種菜粥。そも七種の菜と申しますのは、種々說を異に致してをりますから、左に記して見ませう。

(一)芹　薺　五形　蘩蔞　佛座　菘　須々之呂
(二)芹　薺　五形　田平子　佛度　菁　蒠
(三)芹　薺　五形　田平子　佛座　あしな　みゝなし
(四)芹　五形　薺　はこべら　佛座　すゞな　みゝなし

何故にこの七種の粥を食するかと申しますのに、人には三魂七魄といふ神がありまして、天には七曜の星と現じ、地には七草となると申してあります。昔の人は奇妙なことを言つたものではございませぬか。即ち七草の粥を食しまするると、春の氣病、夏の疫病、秋の痢病、冬の黄病に罹らず、我が魂魄の氣力を增し、命を延ぶるといふ實藥的な功能がございますとやら。

▲宿居――やどをり。俗にやぶいりと申すのは誤りでございます。これは最う說明致しませんでもお分りになつてゐますから、支那のことをお話し致しませう。唐の世の執金吾と申す官は、宮中の夜を警むる官名でございまして、宮中は夜行を禁じてございます。されど正月十五日は勅してこの禁を解かるゝので、心任せに歩くことが出來ます。これを放夜と申しました。我が國の藪入はこれから出たのでございます。

二月

▲節分――又々こゝで怪力亂神を語らねばなりませ

ぬ。節分に煎豆を撒いて『鬼は外福は内』と唱へますのは、内裏にて行はるゝ追儺から出たもので、昔支那の或處に三人の子が生れて、直ぐ死んで了つたのですが、死んだ三兒は疫鬼となりまして、二兒は水中に居りまして人に瘧を病ましめ、一兒は人家の隅に潜んで小兒を愕かせますので、こゝに十二月儺して疫鬼を驅り出すことが起りましたとやら。我が朝では、文武天皇慶雲三年十二月、此年諸國に疫癘おこり百姓が多く死にましたので、初めて追儺を行はせられましたさうです。

豆を撒くのは、昔追儺の夜、殿上人など御殿の方に立つて、桃の弓蓬の矢を以て射拂つたのを型つたのでございませう。

▲初午――稲荷祭の太鼓の音、蒼海の波濤か雲間の霹靂か、遠く近く響く二月第一の午の日。この稲荷祭は古くより行はれたものと見えまして、夫木集、枕の草子などにも見當ります。元明の御宇、山城紀伊郡の稲荷神社の影向の日が、偶二月初午の日に當りましたので、今も此日を用ひるのでございます。

▲紀元節――神武天皇の御即位の日。

▲涅槃會――釋迦如來御歳七十九、二月十五日に入滅されました。その時八根の沙羅樹が、自然と合して二株となり、如來の別れを惜み悲しみ、其色變じて眞白となつたさうで、その白きこと鶴の毛に似たりといふので鶴林とも申しました。この樹の枝葉が如來の五體を垂れ覆ひ、入滅あるや、十方震動して大海湧きかへり、川の流れも涸れて、日月暗憺、黒風吹き荒び、草木摧け折れ、諸天は哀しみ號びて天の香華を雨ふらし、天の音樂を奏しましたと申します。

三月

▲桃の節句――詩經に、桃之夭夭其葉蓁蓁之子于歸宜其家人而後可以敎國人。とございます。桃の節句と云ふ縁で、此詩の意をとり、雛人形を飾りまして、夫婦和合の體となし、家財道具の品々を揃へ、家内繁昌の祝といたします。これも一説でございますが、

女童の雛遊びすることは、その昔、紙にて人形を作り、雛と名づけ、又母子とも云ひ、母と子の身體を撫で、身體にある罪をこれに負はせて、河に流したのから雛祭りが起つたのであらうと申します。其の證據には、昔から紙雛を以て奉る本式のお雛樣だと申す者が御座いますので。

▲彼岸――彼岸は春秋の二季にございます。即ち春分秋分の初日から數へて、三日に當る日を彼岸の入りとし、これより七日間、佛事作善



を致します。そして第四日目を中日と稱し、又時正とも申します。これは晝夜長短なき故名づけたのでございます。

彼岸は日本の風俗で、支那にはないさうです。我が朝の佛者が、いつの頃からか取り行なつた事故、印度にもないのでございます。佛說に、娑婆生死は此岸なり、極樂涅槃は彼岸なり、煩惱は中流なり。とあります。この煩惱の中流を渡つて、彼岸に到るのを到彼岸としてあります。

彼岸の佛道修行は、元來修行といふのは容易に出

來るものでなく、折から春秋は暑寒の中間で暑くなく寒くなく、しかも晝夜又等しい故、この時日を以て法を修行すれば、身心もよく調つて、修行し易く、斯う時日を定めれば、衆生有縁の機を發起せしむる方便ともなるといふので、佛者が彼岸會を行ふのださうです。

▲草餅――たゞ今は草餅の草は艾を用ひますけれど、鼠麹草にて製すべきものです。鼠麹草は和名母子草で、此草を餅につくッて、三月三日に食し、母子の健全を希ひ、邪氣を拂ふのだと申します。

四月

▲汐干――舊の三月三日頃は、海潮特に乾くので、和泉の堺浦、攝津住吉の浦、東國では品川沖、芝濱、洲崎等の各所、小魚貝類を採取する者が多くございます。萬葉集に、

難波がたしほひにいでゝ玉藻かる
海人少女ども汝が名のらさね。

▲灌佛――八日は釋迦降誕の日で、各寺院で灌佛會を修します。

釋迦の母君は摩耶夫人と申し、藍毘尼園と云ふ處の無憂樹の下で釋尊は降誕せられたので、そのとき樹下に忽ち蓮花を生じ、大さ車輪の如く、母夫人の右の脇から生れて蓮花の上に墜ち、自ら七歩行き、右の手を高く擧げて天を指し、左の手を以て地を指し、天上天下唯我獨尊と。時に九龍空中に現じて清淨の水を吐きましたが、一は温く一は冷かで、太子の身にそゝいだと申します。かの諸品の花を以て小堂を飾り、小さな像を安置して、甘草等の香水を灌ぐのは、これから起因してゐるので御座います。

五月

▲端午――五月五日を端午と申しますが、午の音は五で、端は最初の意ですから、毎月五日を端午と云ひ得るのでございます。然し斯んな理屈はさて措いて、この五月五日に、菖蒲刀とて太刀長刀をつくりて、軍の樣をなして遊ぶことがございます。これは山城の藤

森の祭を眞似ました事で、藤森の社は、人皇十九代光仁天皇の第二の御子早良親王を祭りましたもので、光仁天皇の天應元年に、異國の賊徒攻め來り、我が國を脅かさんと致した時、親王一軍の將となり給ひ、藤森の神に御祈願なされて、五月五日に出征せられた處、神感驗あつて、俄かに大風吹きおこり、異國の船は大海波に、もまれ碎かれ、一戰に及ばずして亡びたといふので、彼の菖蒲刀の遊戲は早良親王の凶賊退治にかたどつたのです。



この日、我が國では菖蒲湯に浴しますが、支那では蘭の湯に浴します。又、

▲菖蒲を軒にかけること——は、日本の流例です。その他、艾にて人の形を作つて戸にかけ、或は虎の形に作りて頭に頂けば邪を避けると申します。楝も之れと同じく用ひます。

▲かぶと人形——張拔の人形に甲させ、弓矢を持たせて戸外に立たせるものです。

▲旂——幟の濫觴で紙又は絹に繪を書て、竿につけて高く掲げ、毒氣を拂つたのだと申します。

▲粽――米を菰の葉に包んで蒸したもので、この起源に就いては種々說がございます。その一說に彼有名な楚の忠臣屈原は五月五日に汨羅に身を投げて死にました。その死を憐んで楚國の人が毎年竹の筒に米を入れ水中に投げて屈原を祭つたのが後世に遺つて粽となつたのであります

▲柏餅――柏は淸淨のもので、神道に用ひます。されば柏の淸淨をとつて餅を包み、編笠の如き形と致して用ひるので、又膳部を『かしはで』と申すもこの意をとつたのでございます。

▲地久節――皇后陛下御降誕日。

六月

▲六月祓――六月晦日に祓するを六月祓とも名越祓とも申します。名越は夏越の略で、天武天皇の御代から初まりましたので。支那の五行說では蓋し夏は火で秋は金としてあります。火と金とは相尅します故、夏の名を越えて相尅の災をはらふところから名越の祓と云ふのであると申します。この祓に茅の輪を越え又菅の輪を脱ることがございますが、是れは昔牛頭天皇が蘇民將來といふものに助けられた返禮として、疫病がはやる時茅輪をかけ菅の輪を脱けて、此災を拂へと敎へたのが元ださうです。

七月

▲七夕――七月七日は七夕とも星夕とも申します。牽牛織女の二星が、年に一度の會ふ夜でありまして、織女は天帝の女、頗る美しい姫で、常に機をおつて雲霧綃紗の衣を織りなして、容を作る暇もない程、一心不亂に勞役して居りました。天帝、その獨居を憐んで、牽牛といふ星を婿にとつて彼の女に婚せましたところ織女はそれより唯だ〳〵樂に耽つてばかり居まして、少しも職を勵まず、遂に天帝の怒りに觸れ、下界なれば離緣といふのですけれど、天上の星の世界の事でございますから、生木を裂いて悲劇の材料を作るやうなことは致しませんで、たゞ織女を天の河の東に呼びか

へし、一年一度二星相見る事を許しました。笹に短冊をかけるのは、五色の糸を竿につけて星に手向くる願の糸からのことで、又詩歌は芋の葉の露を硯にすつて梶の葉に書いて手向くるので、今宵の祭を乞巧奠と申し、壽福を祈り、才能を願ひ、子を祈り、女子は縫針の道の巧みならんことを祈るのでございます。

▲盂蘭盆――盂蘭とは天竺語で、支那語に譯すと倒懸と申します。餓鬼道の飢渇の苦痛は逆さにつるされたやうだといふ所から倒懸と申しますので、盆



は鉢と同じくその盆に百味五果を盛つて、佛及び僧を供養致して倒懸の餓鬼の苦しみを救のでございます。古へは七月に限らず、十二月晦日などにも精靈を祭りました。なほ其他亡者の來り去る日を記して見ませう。二月十五日寅の刻に來り次の日午の刻に去る。五月十五日卯の時に來り翌十六日の巳の時に去る。七月には十四日の卯の時に來り十六日の午の時に去る。八月は十五日の辰の時に來り次の日の申の時まで。九月は十六日未の時から次の日の申の時まで。十二月は晦日午の時に來て年

を越して正月元日の卯の時に歸るのでございます。けれど盂蘭盆の目連尊者の事に依つて、七月に專ら靈祭を致すやうになつたのでございます。

目連の母は罪障重く、死して餓鬼道に生まれて飢渴の苦しみを受けました。孝心深い目連は母の苦痛を見るに堪へず、一椀の飯を母に進めました處、母がそれを食べやうとしたら、未だ口に入れない前に、忽ち化して火炎となる。これを見た目連は、あまりの悲しさに大に叫んで、佛のところへ馳せかへつて、母の苦難を訴へて慟哭しましたら、佛の言はるゝのに、汝の母の罪障は大層深いから汝一人の力では奈何することも出來ない故、十方の衆僧の威神を借り、百味五果を盆に盛いて、七月十五日に至つて七代の父母、現在の父母の厄難の中にある者の爲めに供養せよと命じ、更に衆僧にも、皆施主の爲めに咒願し、目連の母の苦を救へと勅しました、目連即ち佛の言葉に從ひ、やう〳〵母を餓鬼道の苦から救ひ出すことが出來たと申します。

▲燈籠――八十五代後堀河院のころより始まりましたもので、十五日の夜、民家で長い竿の尖端に燈籠を擧げたものでございます。之れが年々盛んになつて、遂に今日に至つたので御座います。

▲索麪――を食べますのは、瘧を病まない爲めでございまして、二月節分の行に記して置きました疫鬼の話と趣を同じくし、昔高辛氏の少子七月七日に死し、足なき疫鬼となり、人に瘧を煩せました。その生前常に麥餅を好んだといふので、索餅を以て靈を祭つたのが始まりです。

八月

▲花火――花火は夏の河涼に用ひて遊びましたので、元は狼煙から出たものでございます。然し近來は夏ばかりではなく、種々の祝賀にも用ひらるゝやうになりました。この月川開が御座いますのでこゝに記して置きます。

▲土用干――之れは格別註には及びませぬ。

▲十五夜――米くるゝ友を今宵の月の客。八月の十五

日に月を賞すること、支那では漢の時代からありましたやうで、唐の時代になつて、ます／＼盛になりました。日本でも隨分昔から今宵の月を賞しましたもので、續古今集に、

月ごとに見る月なれどこの月の
今宵の月に似る月ぞなき。

とございます。事玄要玄の月の歌について、月者水之精秋者金之氣、金水性相生云々とございます。又兼好法師は、八月十五日、九月十三日は婁宿にあたる、此宿は清明なる故に月を弄ぶに良夜とす。と申されました。

九月

▲重陽の節句――九月九日を重陽と申しますが、これは月も日も九陽にある故でございまして、此の日菊酒を飲むと長命をすると申します。その製法は、花の開いた菊の葉も莖も共に黍に混せて酒を作り置き、翌年九月九日に取出して飮むのでございます。この故事は、昔支那の南陽の酈縣と申す所の北の方八里ばかりに或谷がございまして、其水は山に咲きみだるゝ菊花を洗つて落ちますので、味甘く香り高く、里の人々これを飮んで皆長命致しました。そも／＼この酈縣の菊水は、その昔周の穆王が天竺に遊び、釋尊より國を治むるの法とて、八句の偈を授かり、歸つてから後も之れを秘して、何人にも見せませず、又教へも致しませでしたが、王の侍童に慈童と申す少年がございまして、或時王の枕を跨ぎました。群臣大に驚き、罪科淺からずとして、かの酈縣の深山に流しました。その時穆王は憐れに思召して、釋尊から傳へられた八句の偈の中の二句を授け、毎朝十方を禮拜してこの句を唱へよと申されました。侍童酈縣に流されてから、王の授け給ひし二句の偈を毎朝唱へて居りましたが、萬一忘れた時の用意にと、傍の菊の下葉に書きつけましたら、その菊の葉の露が谷川に落ちて天香を生じ、慈童これを飮んで、遂に羽化して仙人となり、八百歳の壽を得て、なほ少年の如く、魏の文帝の時に至つて、彭祖と名をか

へまして、文帝に此術を傳へ、文帝は萬歳の壽を保ちましたと申します。この故事から菊の宴は出たのでございます。

▲十三夜――易に月望に近しといひ、天道滿つるを闕くといふ義から、今宵月を賞するのでございませう。兼好の説は十五夜の行に述べて置きました。

十月

▲亥子餅――この起源は能く分りませんが、源氏物語にも記してありますから、餘程古くからありましたものと見えます。この餅は、大豆、小豆、大角豆、胡麻、栗、柿、糖の七種を以てつくるので、十月は亥の月故、この月の亥の日に之れを食して病を卻くるのだと申します。又豕は多く子を生みますもの故、婦人之れを羨んで、亥の月の亥の日に豕餅を食して嬰兒の生まれるのを神に祈るのだとも申します。



▲べつたら市――東京日本橋區、大傳馬町一二丁目、通旅籠町の往來に、毎年十月十九日の夜、蛭子講に用ひる諸品及び朝漬の澤庵を商ふ市が立ちます。これは何年頃から始まりましたのか、詳でありませんが、麹漬の澤庵を買ひ、人込の中を若い

者などがベッタラ〳〵と叫んで振廻しながら婦女子に惡戯を致しましたものでございます。

▲夷講――推古天皇九年、聖德太子始めて市を設けて、商賣を敎へ給ひ、蛭子神を祭られて商業の鎭守とせられてから、此月廿日（家例によりて他の日を用ひる向もあります）商賣の祝賀の酒宴を開くやうになッたのでございます。

十一月

▲天長節――今上天皇御降誕日。

▲酉の町――昔日本武尊が、熊襲を御征討あらせられたる砌、大鷲日尊に祈願あり、その凱旋せらるゝや、篤く祭典を行はせられました。その日宛も十一月の酉の日でございました故、後世十一月の酉の日を以て、兩尊を祭るのでございますとか。

▲熊手――これは昔は專ら實用のものばかりで、唯今の如く美しく飾つてはございませんでした。賣る者も買ふ者も、餘り多くは無かつたのを、緣喜物であるといふ所から、だん〳〵今のやうになつたので、慾の深い連中が益々殖えましてから、霜月の大路小路を、千兩箱つけたおかめの笑顔が込み合ふの隆盛となつたのでございます。

十二月

▲煤掃――家財道具を久しく動さないと、疫鬼が取りつくと言ふので、十五日以後家々でトン〳〵パタ〳〵とはじめるので、疫鬼が取つくから煤掃をする、バチルスが生ずるから清潔法を施行する。昔も今も言葉が異ふばかり攝生の一法でございます。さて煤掃も濟みますれば後は、

▲歲暮の贈答――支那にもあり。

▲忘年會――一年の恙なかりしを祝ふ宴。

年中行事も最なるものは玆に盡きまして、又來る春の祝ひ事。かゝる行事の幾めぐり、年々歲々花相似たり、年々歲々人同じからず、年中行事も變化致しませうが、手びかへ事のかず〳〵の中に、折にふれ、時にとり、一

皆様方の御参考にもなることがございましたら、長々しい贅文をゆるし給はれとこそ。

西洋十二ヶ月

雪子

一年を十二ヶ月に分けますのは太陰月（新月より次の新月に至る期間）に遡源つて居るやうに思はれます而して其の名稱の奇妙なのは其源を羅馬の古代に取つて居りますので之には隨分面白い神話が這入つて居ります、今之を簡單に縮めて申ますれば

▲正月●●は羅馬では「ジャヌアリウス」と申し「ジャヌス」と云ふ神の名より出たものであります、此神は二面を具へて居りまして一面は舊年に向ひ、一面は新年に向つて居りましたから、正月の神様としては最も適當でありました。

▲二月●●は「フエブルアリウス」と申して、此月に「フエブルアリア」と云ふ罪障消滅の爲の祭が執行せられましたから、此祭の名から出て参つたと云ふことであります、西洋では此月に限つて何せ二十八日しかないかと云ふことにつき面白い話がありますが長くなりますから申上ませんけれども、畢竟かけごとをして失敗しましたので正月などに、日數を奪ひ取られたと云ふことであります。

▲三月●●は「マルス」と申し是れは羅馬の創立者を聯想せしむるので此人は自分の臣等に一年を三百〇四日に分けた粗笨の暦を與へたと云ふことであります、此月は「マルス」と云ふ軍神に獻げられてあります、羅馬の創立者ロムルスと云ふ人は此のマルスと云ふ神様の子孫であると自稱しました。

▲四月●●は「アペクリス」と申し是れは羅甸語の「アペリン」と云ふ動詞から出たと云ひます「アペリン」を譯して申ますれば「開く」と云ふ意味であります、何せ開くと云ふ意味のものを此月に當嵌めたかと云ひますと、此月には地が開けて草木を青々と生へさせるからと云ふことでありますが牽强の說のやうに思はれ

ます。

▲五月●は「マイムス」と申し、是れも神話から出た話でありまして此月は『メルクル』と云ふ神の母神「マイア」と云ふものゝ月でありましたから斯く稱するさうであります、「メルクル」は藝術の神、雄辯の神、旅人の神、商法の神、盗人の神として祀られて居る神樣であります、何せ盗人の神樣であるかと云ふにたゞの一擧で「子プツヌス」の三叉槍「ウエヌス」の帶「マルス」の劍「ジエピテル」の政柄「ウルケン」の金槌を巧に盗みました爲と云はれて居ります。

▲六月●は「ジユニウス」と申し、是れは「ジユノン」と云ふ神樣の名より轉化したものなさうであります、此の「ジユノン」と云ふは希臘の神「ジユピテル」の妹で又其の兼妻なさうであります、此の女神は非常に悋氣深く「ジユピテル」が後宮三千の佳麗を愛して居りましたのを始終悋氣して夫婦喧嘩ばかりして居りましたので或日良人の神のいかりに觸れ、砧を髮の毛に附けて逆さまに天から釣されたと云ふことでありますが諸の神樣達の仲裁でやつと許されたと云ふのであります、「ジユピテル」に就てはモウ一つ面白い話があります、或時前に申しました「マルス」と云ふ軍神が未だ子供の時分に之を膝の上に抱いて乳を飲ませて居りましたところが、流石は軍の神ともなるべき「マルス」でありましたから「ジユノン」の乳房をいたく喰切りましたので「ジユノン」はお前は何をするのですと之を押しのけましたところ、乳房の切口より「ジユノン」の乳が空中に迸射ましてそれが今見る天の河になつたと云ふことであります、故に希臘では銀河を一名ジユノンの乳と申します。

▲七月●は「ジユリウス」と申し、是は「ジユリウスセザール」と云ふ皇帝が舊き暦を改正しました人ですから、當時の執政マルクス、アントニウスが直に其名を取つて七月に附け、永く改正者の名を記臆せしめるやうにしたと云ふことであります。

▲八月●は「オグスツス」と申し、是れは「オグスツス」と云ふ皇帝の名でありまして、此の皇帝が「ジユ

ラウス」の改正暦を執行する際、僧侶等が種々の間違を混入しましたのを矯正したと云ふので皇帝の名を此月に附けましたのであります。

▲九月、十月、十一月、十二月は「セプテンベール」「オクトーベール」「ノウェンベール」「デセンベール」と申し之を譯しますれば「七番目」「八番目」「九番目」「十番目」となるので、別に珍らしき神話はありません、然し今日何せ「七番目」を「九月」に「八番目」を十月等に當嵌めて其名を使用して居るかと云ふに、羅馬の昔の暦は十ヶ月に分られてあつたからで、其時の「十月」は實際「十月」ではなく、今日の「十二月」に當つて居りましたからであります。

老夫婦の初婚

去年八月の事なりき瑞西國コンスタンス市に一の感ず可き結婚式擧げられたり其の花婿は名をヘルツヘルトと呼び當年取つて六十六歳、花嫁はスタインデルトと呼び芳紀正に六十五歳、而も此の老翁老媼は共に初婚なりと聞きては其の間何かの仔細なくては叶はずと能く〳〵探索すれば成る程結婚の晩たるも道理、初め此の兩人は尚ほ二十歳に滿たざる以前互に相戀ひ相慕ひて末は必ず夫婦ぞと約束したるも奈何せん當時ヘルツヘルトは無一文の素寒貧なりしかば孰れ相當の資産を作りたる上結婚の式を擧げんと彼はスタイン、デルトに向ひ予は二萬磅の財産を作りたる上改めて御身を迎ふ可きに就き其れまで是非辛棒せられたしと言ひ遺し置き奮然米國に渡航して力のあらん限り奮闘したる結果四十五年を經て豫定通の資産も出來たるが此の間相思の兩人は手紙三千通寫眞四十八枚を取り遣りし手紙一通にも思ひのたけを細々と書き記るし逢ふ瀬を何時かと樂み居たりとなん、然るに天は空しく此の貞操なる兩人を殺さず待つ甲斐ありて兩人は愈々去年八月を以て結婚する事となりヘルツヘルトは滿身に愛情を湛え遙る〳〵瑞國ましで歸り行きコンスタンス寺院に於て目出度合卺の式を擧げたる後ち此の老いたる花婿花嫁は手を携えて再び米國に渡り來れてヘルタヘルト氏が大なる商店を開始し居れるシカゴに居を定め偕老同穴死なば相共と目下鴛鴦夢暖かに暮らし居れりとなり。

宮中御膳所の聞書

昭代の一民

申すもいと畏こき事にはあれど我が天皇陛下の玉體の御盛健に渡らせ玉ふ事は臣民の均しく感佩し奉る所なり、是れ實に我が皇室の御祝福のみならず、萬民一統の幸福とする所なり、乍去この御盛健も天縱の御德とは申しながら一には御不斷御攝生を重んじ給ふの大御心の深きに由るものと侍臣等の密かに恐懼し奉る所なり。

陛下が御盛健に渡らせ給ふ事は、日々内外の萬機を覽そなはせ給ひ、當局大臣の奏上、侍臣の進言を一々聞し召され、又内外臣僚の參内拜謁は申し奉るに及ばず、外賓への賜謁、御儀式禮等に供はらせ給ふ數々の御國典に玉體を勞し給ふことは中々に臣民等の恐察し奉る限りにあらぬ事ながら、其御都度常に御餘裕あらせ給ひ、御繁用の御暇にも御好みの國歌は絶へず御製あらせ給ふと洩れ承はるだに、御精勵のほど只恐懼し奉るの外はなし。

聖上の御精勵あらせ給ふ御事に就ては、一昨年來の大戰爭に就ての御日課、又二十七八年役、大本營御進轉中の御日課など洩れ承はるに就て普ねく臣民の感仰し奉る所なるが、先年紀泉大演習の砌、大軍を親しく

御統監あらせ給ひし時、折からの風雨甚しかりしかば、侍臣は切に請ひ奉りて御馬車に召し玉はん事再三に及び奉りしも、陛下には、御許しなく山上に立御ましましたる僅三時の長き更らに御厭ひの御氣色だになかりしと承はるこそ勿體なき心地さる。

△申すも畏き事ながら　兩陛下平日の御三食に上つるべき、くさ／＼の魚類、樣々の野菜、獸鳥肉、山海の土宜は、如何にして御上に上り、如何にして御料理し奉つるかを承るに、先づ前日膳部長より、明日の御獻立を記して侍醫局に廻せば、侍醫の人々は更らに侍從職に奉仕する官人と商議し、再び膳部長の手に戻り

御用となるべき品々は膳部長の檢印を得て後始めて物品買上係の手に渡り、物品、買上係よりそれぞれ御用商人へ御註文あり、御用商人より納むる品には物品買上係の外、膳部長若しくは膳部副長及び庖丁方立合の上一々其良否を鑑別し、精良の品々を撰みあげ是に始めて御俎に上すの由洩れ承はりぬ。



（春）早蕨を手ごとに折てかへるかなわれこそかれて野へは焼しか　歴夢

△御料理の品がいよ〳〵御前に供へ奉つる事となるや膳部副長まづ御料理の場所にて御鹽梅を試み上げまゐらせたる上、配膳役之を運びて御奥の口に至る此所にて膳部長一人の侍從職、及び侍醫一名立會の上再び御鹽梅を見あげまゐらせ、それより御奥女官の手に渡り、御膳部の係なる女官に於て更に御鹽梅を見それより兩陛下へ差しあげ奉つる順序なり、さて御鹽梅を見上げ奉るは如何なる方法にてするかといふに、それは其都度々々御料理の

總てについて其少量づゝを一々御小皿に取り分け試食しまゐらすなり、即ち下樣にて言ひならはす御毒見の事なり、年中御三度の度每右の如く順序にて鄭重に御試食まゐらすなり。

△又右御料理品を調のへまつる庖人、即ち御料理方は御調理所と申す所に居て日々の御料理を調へまつる事なるが、其人數は日本料理に常務八人、西洋料理に三人、いづれも此の道の達人にて四條流、大草流の秘傳を心得たる人なるが、御儀式の時、又は御陪食などの際には右の外臨時に御雇ひ上げとなるなり、而して御料理人はいづれも每朝潔齋、沐浴して身を淸め、西洋風の白の官服を着て割烹の事に取りかゝるなりと。

△兩陛下の聞召さるゝ平常の御三食と申し奉るは季節によりて、又其の日によりて一樣ならず、正月三ケ日、又は御儀式の節は種々なる盛饌を奉つる事なれど、御不斷は御質素の方にて、二の膳三の膳と申す事なき代り、御好みの品を食召さるゝ由にて御朝餐後には必らず御湯の下と珈琲とを御嗜好遊ばされ、又后の宮には築地精養軒より每日納め奉る生バタと麵包を食し召さるゝ由、麵包の大さは一寸に一寸五分、厚五分位にきりしものにて二枚乃至三枚を御常食あり、バタの外には杏のジャムを御嗜みありてそれより御湯の下一碗位を召し上がる由承はる。

△御膳に上る御魚は、大概一々骨と肉とを手際よく庖丁致し、料理人の手にて取離し、後再び原形の如くして御皿に盛るものにて、御皿の中より其儘食し召される樣になり居る由、尤も魚の種類によつて 、そうは致さず、御皿に上すものもありと、まづ不斷御好みの魚は香魚にて、附燒、煮浸、兩方差上ぐる由なるが、大抵御箸のつくは二頭位なりと承はる。

△又御膾に用ひ奉る三杯酢は、煮詰めた最上の味醂に最上の酢と醬油とを程よく加減をして交せたるものにて、又御香の物は、季節によりていろ〳〵相違はあれど、まづ澤庵、新漬大根、白瓜の奈良漬、守口大根などゝ洩れ承はりぬ。

△日本食を食召さるゝ御時の御茶は玉露（是れは宇治

別製の品、又稀に洋食をきこしめさるゝ時は季節によりて相違はあれど概ねパイナップル、林檎、桃、蜜柑蕃實、苺、葡萄、などを御用ひになると承りぬ、其の中聖上陛下が格別に御嗜好遊さるゝ御品は蜜柑、葡萄の二種なりと洩はる。

△こゝに御常食の米飯の事につき概略申しあぐべし。一天萬乘の位にまします、君上とても下々にて用ふる上米と格別の相違はなし、只其の異なるは精選に少し御手數かゝるだけの事なり。まづ御買上になりし玄米を拜み搗となし、一粒撰に致した上、炊き上ぐるなり御一食の量は大抵八十匁位を御例と遊ばさるゝ由に承はる、尤もこれは御さがりの御膳を一々侍醫局へ廻し、侍醫局にて御餘りものに就て精密に分量を秤り奉る事になり居れり、又御假床（御不例の御時）になりし時には御禁食遊ばす事もありて其折の御獻立は侍醫局より大膳職へ廻り、然る後御調進し奉るなり。



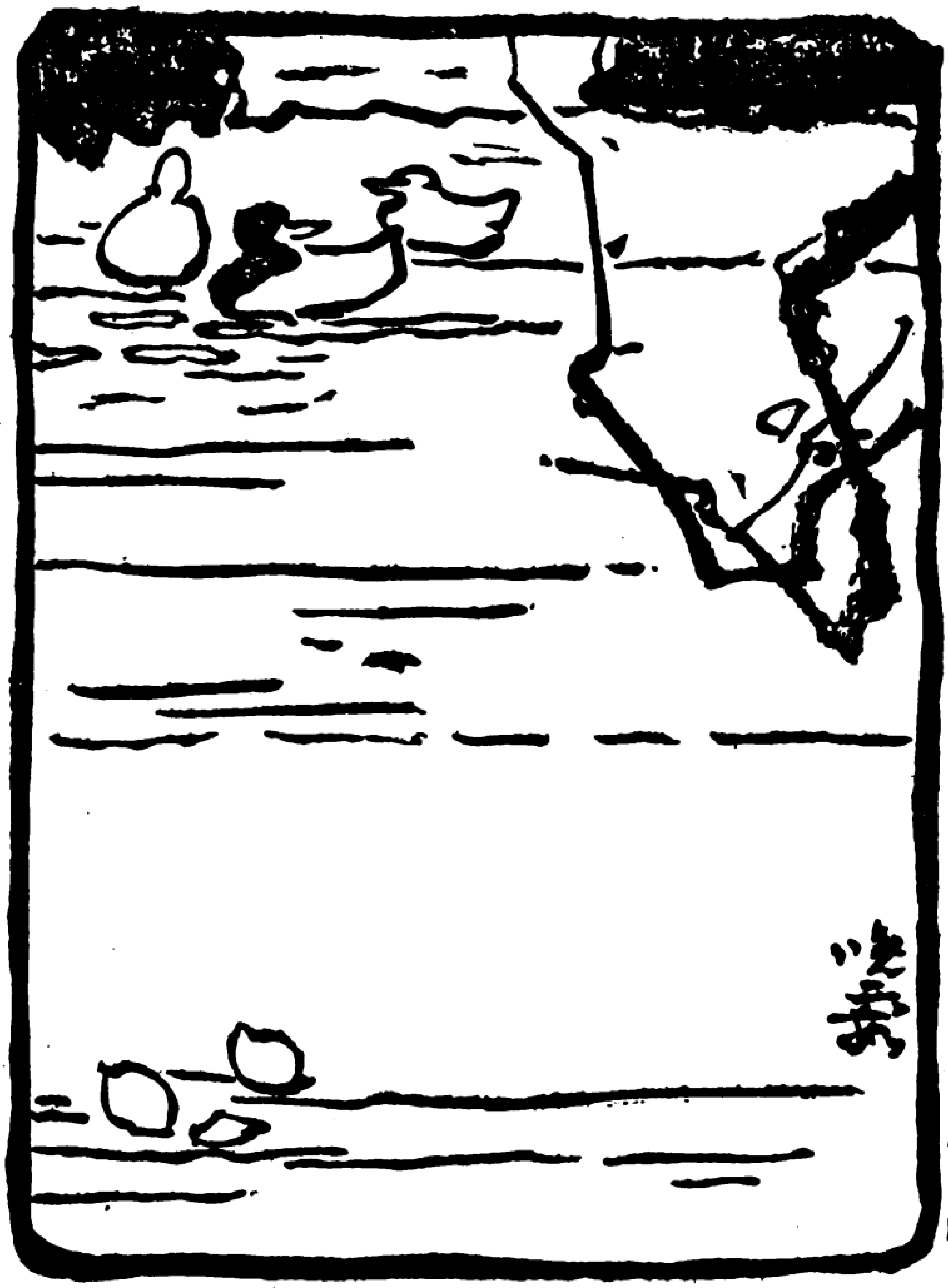
（春）　三千年になるてふ桃のことしより花咲く春に逢にけるかな　　躬恒

△陛下は常々、御攝生を重んじ給ふの餘り、御間食を食召さるゝ事は稀にはあれど、時として食召す御間食は午後三時より四時の間に、果物など召上る事あり、聖上は殊に西瓜を御嗜好遊ばす由にて、年中御苑に培養して

何時にても御用を缺さぬ様なり居れど、夏季の外は決して御用ひ遊ばせし事はなしと承はる。

△又陛下は御酒量は御盛に聞召さる由にて以前は日本酒を差上げしも當今は葡萄酒のみにて、葡萄酒はシャトウロウズと聞こへたる最上等の品なりと承はる。

△両陛下共總じて常は日本料理なれど、時として御晝餐と御晩餐とに洋食を召上る事あり、さる砌にはスープの外二種、三種の御洋食を添へまゐらせ、御晝餐に獸肉のスープを食召さるれば御晩餐には鳥肉のスープを上つるなど見計らひありと。又御好みの品と申すは両陛下より直かに御仰あることなきにあらねど、其はいと稀なる例にて大抵は御箸のつきし多少により御食膳に近く侍り奉つる女官より御嗜の品として大膳職へ申し傳ふる由洩れ承はる。



（春）ちる花の水にし消ゆるものならば我身もともにおもひはてまし　成親

△陛下日常御食事の節御用ひ遊ばさるゝ御箸は、純銀製の角の御箸なれど、御便利上御用ひ遊ばさるるは柳の木地の御丸箸なり、これは一本摑みになせるものにて、聖上の御用ひ遊ばす方は長さ一尺、太さ直徑一分位のいと細

きもの、又た后の宮の御もちひ遊ばす方は尙は一層纖き直徑六七厘位のものなりと洩れ承はりぬ。こは甚はだ細きものにて折るゝ事もやなど危やぶみ申す節なきにあらねど元より御膳に上る魚類の如きは大抵骨と肉とを取り離し、復び原形となせしものなれば決して下樣にて察し上げまゐらすほどの憂なきこと勿論なり。又右の御箸は御食事の都度々々新たに差しあぐる最も清淨なるものにて、一度御用ひになりし品は御食膳の傍に侍べる女官に於て二つに折りそれより大膳職の手に渡り清淨なる火にて燒きまゐらするを常とすれど、時には未だ折參らさぬ前、竊かに女官より頂戴するもありと。

△御食器は下樣にて用ゐる漆塗のものを御用ひ遊ばす事はなく、御汁椀のごとき、御羹のごときは凡て昔は御土器なりしも、今は瀬戸に代へられし趣にて特に御用製造の陶器師に仰せて製らしめ給ふよし。

△元旦御祝の卓上に上り、又參內の臣僚に下し賜はる雉子酒と申すは御獵地にて御手に入りし雉子の抱身即ち羽の下に當る精良の肉を味醂醤油又は鹽漬となし刺身のごとく薄くそぎたるを五六片位御茶碗に入れ結構なる生一本の日本酒を熱く沸してこれに注ぎ込みしものなりと、洩れ承りて斯くは記しぬ。

露國寺院の經濟

露國の市府には輪奐の美を極めたる寺院多く其收入も亦莫大なり、先づ露都有名のアレキサンドロ、ネーウスキー寺の經常收入は毎年約二十萬留に達し此外信徒より種々なる名目もて同寺に納付するもの毎年七十五萬留に達し又同寺附屬不動產よりの收入毎年五十萬留に超過し即ち合計百五十萬留の收入を得、此內より院主は毎年千八百留の俸給を受くるの外、六萬五千留を使用し、會計主任は二萬留の給料を受く、同寺には七十人の僧官あり、各同寺に入る時、寺の基本金として五百留を納むるの制度にして、此七十人の衆僧が前記收入中より毎年分配を受くる高二十五萬留にして殘餘の金は悉皆同寺の基本金に繰入れらるゝを以て目下此基本金額は公債株劵等に振換へたるものを除き金貨三百萬留に達せりと云ふ又莫斯科市外有名のノヴォデヴィーチ寺の收入額も前記アレキサンドロ、ネウスキー寺と同じくキエフのキエオペチエル寺の基本金は更に多くして十五億留に上れり、されど露國にて最も富める寺院は莫斯科のトトイツコ、セルギエフ寺にして基本金三十億留に達し收入莫大なりと云ふ。

婦人旅行節用

翠香女史

旅を憂き物とせし昔は、歌にも片敷袖、艸枕、浮寐の夢など只願に侘しき方にのみいへりしぞ、明治の大御代と成て、關は廢され、女人禁制はとかれ、獨行も宿るを得、鐵道は年毎に延長し、山間避地も開修せられて、道路は砥の如く馬車人車で通ふべく、苟も金さへ有れば十町とは歩行れぬ身も、何國如何なる名所をも思ひの儘に見物すべく、至る處に大厦高樓の旅館ありて、老幼病者も意を安んじて、眠らるゝぞや、況や若き人々、婦女なりとて家にのみ蝸籠して、此有難き大御代の利便を用ゐぬ事やはある、所帶盛の兒持なりとも、平日よりの心掛一ッにて、年に一度位は出られぬ事はなき筈なり、或は暑中休を利用して、夫婦愛兒を連て、温泉海水浴等に出掛るも樂しかるべし、隱居ならば時を擇はず花に紅葉に浮れ出て、信心參りを衆るも妙也、人間僅か五十年とは、五十歳の事に非ず、物心を知るより手足の自由に活らく間の概算のみ、七十八十に及びても壯健ならば此仲間也、殊に日本も世界の强國となりし今日、外國人は老人にてもなか〳〵の元氣あり、妙齢の女子にして世界漫遊爲るさへあるに、我國の婦女は其土地外を踏まぬが多く、たま〳〵船に乘ればはしけからして醉ふ人有り、四方海なる日本國民として餘りに云甲斐なく、外人に對して恥かしき限り也、然れば幼少より船に乘習ひ泳ぎもすべし、又折々遠足して健脚の修行も爲べし、それには旅するにしくはなし。

旅行の支度

(一)何方にても行かむと思はゞ、先づ第一着に其地方の地圖をしらべ、又有名の所には必ず其處の案内を記し繪圖を加へたる小册子有ものなれば、書林を渉獵り又は其地へ行きたる人などに就て求め出して見みれば、大畧の方角及ひ順路名所は何々旅館は何の何某なる事を知り得べき也。

次に最近の旅行案内を買て、汽車汽船の發着時間を調べ、又其巡り見むと思ふ所々は、何れの驛より至るといふ事をしらべ、道遠ければ一泊せざるべからず、又は逗留する塲合も有べし、それらの日數を凡一日幾許の費用を要す可歟（所により相違あれど中等に積りて一泊一圓中飯五十錢茶代何程小遣ひ何程と積る）此費用人に依て大相違有り、たとへば健脚にて山坂をも苦にせぬ人は、俥はいらず、歩行困難なれば、俥代も分外に高くても、是非なきが如し、とにかく我身相應の處にて相塲を立つべし、之に往復の汽車賃をかけて、たとへば卅圓と積れば四五拾圓、五十圓内外とならば百圓を要すと思はざるべからず、是不時臨時の出來事なきを保し難ければ也、其金の持出らるゝや否を確めたる上ならでは、ウカと旅へは出られず、既に出て後金の足らぬ程心細く困る事はなし、多く持て成べくかしこく廻りて費用を省き、



（春）櫻花道みえぬまで散にけりいかゞはすべき志賀の山こえ　成元

餘して歸るを旅の巧者とす。

名所の案内 中宿 泊料 及び馬車 人力代等皆出てはあれど必ずしもあてにならず其本の出來たる時と今とは何によらず上るとも下る事なし 唯 其月發行の冊子ならば違はずと知るべし三四年も前とは倍に成たるも有せ

(二)旅支度の事　扨地理を明らめ旅費の都合も出來たればいよ／＼支度に取かゝるべし、旅は成べく荷を多くすべからず、必用の外は一品にても尠きを可とす、されど又行先に依て存外不自由する事もあれば、一概には申難し大畧は都會及び繁昌の地は何事も整頓しあれば、何も持に不及、唯金さへ充分なれば決して不自由を感せず、僻地に至てはたとへ金を出して買はむとするも、なき物多し、故に然樣の地方へ行には克思ひ巡らして、不自由せぬやうに、必要物を取揃へて持つべき也、必要も人に依て違へど、通常にいはゞ

一蝙蝠傘　骨痛みてなきか少しにても破かけてはなきかよく吟味すべし成るべくは新しきもの可也

一履物　是又克しらべて損ぜざるを用ゆべし

一足袋　三つ四つ、中一は新き物他はわらぢ足袋名所郷に汚す事あり谷川等を渡らざるべからず故に其まゝ捨て惜からぬ物但し遠足には裏返してはくべし鞋目に痛む事あれば也

一跡掛紐　何にても一尺四五寸あればよし草鞋ははきなれぬ人足を喰はるゝ事有り草頭履に紐かけすれば患ひなし故に用意すべし和らかなるつよききれを細くけるよし急製は半ケチを一寸斗に二筋引さくにあり

一手拭　二つ三つ、一つは腰に提ろを佩とす一は風塵の立つ時冠るべく必ず止針をさしおくを忘るべからず

一化粧具　成べく小なるを撰ぶ年增は櫛斗にて澤山也鏡は大抵の家に有なれば持に及ばず嵩張らずば持てもよし

一遣ひ紙　入用の多寡は其人による

一半紙　是も同斷

一筆墨　文筆を以て遊歷する人は必要也常人には不用手帖の木筆にて用便し又宿の硯箱を借べければ

一名刺

一扇

一磁石

一手帖　ゴム付木筆

一がま口　小遣ひの小出し

以上だけ身に添へて持べし時計は停車場及び旅館、何方にも必ずあるなれば、持ずとも不自由なし、却て持てばスリの恐ありて煩はし、然して指輪簪の類、人目を惹く物は持べからず、至る先にて晴の事あらば荷物中にしまひ込おくべし。

毛拔鋏は何方にも有る物ながら、とか／＼くはぬ毛拔、

切れぬ鋏多ければ、借ても役に立ず、小にしてよきを撰び持べし。

一小刀錐　留針　二つ三つ用意すべし大に重寶也

一油　紙　大小、大は衣類の上を包み小は袋中に入おく土産物等買たる際大に間に合ふ事あり

一糸　針　ざる
を撰ぶ縫を縛ふ爲必用也指ぬき忘るべからず糸は絹ともめんと少しづゝ

一ハガキ　封筒　巻紙　郵便切手　萬年粘
是等は何方にも有れども急ぐ時もち居れば重寶也かさばる物ならねば持つを可とす

一藥　寶丹即功紙

一ゴム引裏の袋
是は濡たる物を入るゝ爲にて夏季殊に重寶也度々顔手足を拭たる手拭を入ろゝによし但し旅宿に着たらば直返して干す事を忘るべからず干さゞれば損じる事なし手拭と共に眼に付べし手巾は楊枝齒磨粉等を入てもつによし

一耐風マッチ　煙草呑まぬ人は袋中へ入ておくべし



（春）入日さす夕くれなゐの色はえて山下てらす岩つゝじかな　三河

一袱包
物を包みたる外別に二つ斗用意すべし臨時に入用あるもの也

一紐　類
二つ三つ長きも短きもあるがよし是又不時の用意なり

如斯書き立つれば多き様なれど、何れも嵩張らぬ物斗りなれば、悉く信玄袋に入る可し但し入れるに混交にす可らず、各々其の類を分ち、紛れざる爲に色分す、たとへば端書封筒郵券は白紙に一包として半紙の間に挾み、小刀、錐、毛拔等は木綿の

小裂に包み、鋏は櫛と同居させ、藥は藥袋紙に、其他何々は赤き紙に、何々は青に、又何は反古にと樣に色分し置ば、一袋に有ても薄暗くても、一見直に取出さるゝ也、世に易き事を袋の物を探るが如しとはいへど、包み分ずして何も角も混交に打込み置けば、いざ入用の際生憎其物急に出ず掻探せば探す程、小なる物の間に挾まり等して、終には袋を逆に反して、悉皆さらけ出さゝれば知れぬ事あり、稠人の中然る事も爲難くて、折角持乍不自由する事、汽車中などには不始末なる人のよく爲るをみる笑止千萬也。

(三)旅行案内の事　旅行案内は持とも之を其際一々繰返しみるは甚だ煩はしければ、兼て其行道筋第一着にしらべたる事、幷びに汽車發着等を半紙を横長に折たるに書拔おき、是を帶の間に挾み居れば、大に便利也、豫定の道順を造りて、例ば東海道ならば何日前六時發(何方迄/實發許)大船乘替(鎌倉迄)鎌倉見物し江島に至り中食何樓、夫より藤澤に出乘車(何時/何分)靜岡大東館一泊。翌何日は久能山、龍華寺、三保松原、清水港見物午後何時乘車と樣に其日〱の豫定を記し置、斯しても臨時の出來事、又雨天等にて、豫定通ゆかぬ事必ずあれど、其時は又臨機應變にて兼てより此に遲れたらば、次は何時なる事書拔てあれば、迷ふ事なし、又別の紙に其道中筋の驛名を順に書拔其間にある山川高名の處を記す、たとへば(島田/金谷)大井川、或は關ヶ原(左方高山/伊吹山)等記しおけば、汽車中に居ながら誰に問はずして名所を知るべし(此山川を知るには滊日本陸/日本又旅行案内をみるべし)

(四)旅衣服の事　は俺末にても新きを可とす、美服にても古きは思はざるに破損する事有り旅中は何にても損ずるは困るなれば表は絹にても裾廻しは木綿を可とす、身分に依て一概には云はれねど、貴族は別として我等中等の者は秩父縞、節米の類、木綿裏の新きを最上とす、羽織之に准し、寒がりは成だけ着込て衛を尠くし、暑がりは成可薄着して身の動きよき方よし。又京阪地方へ行には着替の上等服を用意せざるべからず、是京阪(特に大阪)は美服を競ふ風俗なるが故に、譬へ

ば旅宿より知己を訪ひ又名所芝居等を見物する時美服に非ざれば車夫に迄侮られて口惜き事あり、すべて五畿内は京阪を學ぶなれば、大和廻り、高野、和歌浦、攝河泉の名所、丹後の天橋立播州の須磨、明石、舞子邊に至る迄、大阪京都の豪商輩の足繁き處は、旅宿にても休み茶店にても、客の衣服をみて應接を上下する事甚しければ、心得て餘り麁服にて行は損也、特に婦女の美服を尊ぶ事甚敷、東京なんどの比にあらず、大阪の婦人には美服を着て芝居を觀るより外に、欲なきが如し（京の婦女は觀劇よりも衣服なり）東北の日光、伊香保、鹽原等の山地は夏にても綿入羽織を用意すべし、存外の冷氣に逢たる時、浴衣上に引掛るに便也、羽織は便なる物なればいかなる所にても四季共に持べし、綿入をもつより綿入羽織の方よし。

奥羽地方は人氣質朴にて、浮薄ならず、故に美服を要せず、木の芽着の儘にて事足るべし、唯北へ進む程時候寒冷となれば其用意すべし、但し仙臺迄は格別替らず、盛岡となれ



（夏）たれまきし木の下麥の穂にいでゝ風に秋ある山はたのいほ　隆房

ば餘程冷氣に、青森は今一段進み、海を航て函館に至れば、八月頃の盛夏と雖暑きは日中、暫時にて朝夕は單一つにては冷つく事多し、況や小樽札幌をや、此吾が實地の經驗なり。

中國より九州は是に反してすべて暖氣なれば秋より冬かけて行によし、宮島の紅葉は特に有名なり、總じて時候の定まらぬ頃には、眞綿の大袋なるをちいさく丸めて紙に包み、紐にて括りて腰に着るか、袂に入て持、冷つく時は夫を袖口より入、脊に延し、肩より前へ越て胸を包めば、衣服よりも暖か也、然して暑く成たらば取去て元の如く片付おく至極手輕にて便利也。

(四)名所古蹟の事　旅に出たらば名所舊跡社寺瀧、其他何にても名ある所は行かるゝ限り、旅費の許す限り、少々無理をしても見巡るべし、又重ねて等云ひては決して重ねて來らるゝ物に非ず、中には有名程にもなき所有り態々尋ねて損したる心地する事もあれど見る程の價なからむと思ひ捨たる處に存外よきも有り、とかく實地を踏まざれば知れず、知れねばいつ迄も殘念也、其地方の名所は下りて可き停車場に札立て里數も記しあれば、見落さぬ樣にすべし、但し一の注意あり、始め東京にて、譬へば京都迄の通し切符を買へば、道中に手數なくて宜き替りに、其下りて差支なき所々定有り、名所必ずしも其處にあらねば、立札をして下車せんとするも其定外なれば、其切符はもはや無功と成て損爲ざるを得ず、然れば前に申如く、始に克しらべて爰彼所みむと思はゞ、此次下車すべき驛迄の切符を買て下り、又乘る時其次に下る迄を買ふべき也、隨分煩はしければ、前に價を克しらべおけば大に便也、下りたり乘たり爲るには如斯爲ざるべからず。（日本鐵道海岸線は時に途々幾度下るも隨意の廣告あり又賃錢非割引あれば注意してよくみるべし）

汽車に乘る心得

人の込合たる時は爲方なけれど、成べく線路に沿たる窓際に乘るを可とす、茶辨當を買にも、暑きに開、寒きに閉、不用物を投下し、唾を吐に至る迄都合よし、又可成指て行く方に向ひたる席を可とす、背向に增る事大也。

行李カバン一切成可く預くるを可とす、傘一本にて乗れば赤帽も雇に不及、但し信玄袋は預けむと云ひても預らぬ事あり、傘と共に網棚へ上げて身邊何一つなきを可とす、不馴の田舍人等此預けるを賃錢をとらるゝかと思ひて大なる包を抱へて、自己も苦勞、他の迷惑となるを思はず、網棚へ上よとをしへても、夫すら不安心なるにや、後生大事と抱へ居る、下等にても大ていの物は預らるゝを知らす、いひ聞しても承知せず、人困らせ也。着到地に至り、預けし荷物を受取らむとするに、三都などは押合へし合て、容易に渡されず、からうじて受取たる上、俥に乗れば、荷物付の價を增、夫よりは割符を其掛りの處へ出して、届先の町所名等を慥に書留させて、十錢計の代を拂ひ、自己は身一つにて疾く俥にても、電車にても飛乗てゆく方遙に得策也、遠方にても三時間程の後には必ず配達し來るべし、我家に歸る時は猶更是をよしとす、夜なれば明朝届く



（夏）はつせ山夕日はさせど菅原やふしみの里はゆふ立の空　家隆

（六）汽車、汽船、駕乘物の心得　乘物も眩暈する事あり、殊に婦人の船に酔はぬは稀也男子にても胃弱の人は眩暈す、此のゑふと云ふ事一は海荒く、船の動搖

甚敷なれば、恐ろしくて苦慮するにもあれど、日和の時にても常に聞なれぬ蒸汽機械の悩々たる音響、頭に徹へ特に下等は一種云べからざる臭氣鼻に附て、夫等の爲に惡心嘔氣を發す、一度吐逆すれば頻々と胸を突て容易に治まらず、苦しむなれど、船暈は限ある物にて、もし其海路一晝夜位なれば、上陸せぬ限りは止まぬとも、日を重ねて航海すれば、始一晝夜は苦しめども、二日めよりは三日めと次第に馴れて、後には何ともなく成物也、若も上陸せぬ限り治らぬと定れる物ならば、爭か一ヶ月以上にも渡る航海に耐らるゝ者有らむや、此事外國に渡りし人は皆然いへり、記者先年横濱より函館に直航爲たる時、上等室に在しかば臭氣もせず、景色も佳し頗る元氣にて一絃琴を取出して得意の曲を彈唄ひて、乘合の人々に怡ばれ、種々の饗應に逢たる迄は宜かりしも、其中にフト虫に障る物有りて、忽ちに嘔氣を催たれば、夫より醉て船室に呻吟したりしが、翌日に至り尻矢崎燈臺の見ゆる程より、いつしか嘔氣も治りて、甲板に遊歩し得るやうに成ぬ、歸には懲りて何一ッ食せず、船室に打臥て、只水斗り折々呑て居たりしかば、終に醉はざりけり、大船は中上等の船室に居れば、然のみゑふものに非ねど、東京より伊豆安房等へ航する汽船、

西國、瀬戸内海、及び近江琵琶湖、常陸霞ヶ浦等の汽船は、其の船室箱の如きに大勢の乘合、鮨詰と成り僅かに小窓を明たるのみ、夫すら波の爲めに閉る時は、空氣腐敗して厭ふべき臭氣を發し、窒息の爲に嘔氣を發す、然れば船に弱き者は成べく甲板へ出て居ればゑはぬ也

川船又は海にても頭上の支へぬ小舟は却て醉はざるも此理也汽車にても夏季は隧道の外は窓を明放つ故に醉ふ者尠きを、冬は寒風をいとふ爲に、諸人明たる窓をも皆閉る故に胃弱者は醉ふ事あり、駕も又山駕は吹貫なる故にゑはねど、雨の日桐油紙に包まるれば醉ふ事あり、乘物に眩たるは死ぬ氣遣ひこそなけれ甚苦しき物にて、藥を呑も何の益なし、駕は止て下るべく、汽車も餘苦しくば下りもせめ、船は爲方なし、只心得

べきは嘔氣付たらば、速に吐べき盒を乞汽車ならば窓側の人に頼みて居替る可く、然も為難くば疾く茶の土瓶を空て之に吐くべし、ゆめ／＼咽を突迄𢌞へ居て、思はず近傍の人に吐かくる等の失敬為べからず。

扨別に茶にても水にても一瓶を買て、吐たる跡毎に吞べし、然らざれば始の間こそあれ、後には吐可物竭て猶嘔吐止まず、食物を消化する大切の胃汁なる苦き膽汁を吐也、之を吐事多き程疲勞甚しく、身體暈旋て到着しても歩行に苦むに至るなれば、茶にても水にても吞て吐べき物を製造し居れば、嘔氣は同じくても幾分か樂に吐かれ、膽汁の出る事も尠くなる湯水を吞では小便近くなると思ふ勿れ、此際なか／＼小水に迄巡る餘裕なく、吞たる限りは吐反もの也。

（夏）夏の夜は更ゆくほどやなかるらん暮るればやがて明くる東雲　紫宗



宿をとる心得　汽車汽船の着く處には必ず宿あり、成可く停車場、港に近き所に宿るを得策とす、近ければ車夫を雇ふに不及、手荷物は自ら提ても行かれ、又宿の番頭如才なく其時刻には門に出て看張をり、我方へ足を向る客あれば忽ち走り來つて荷物を引請るなれば、ホンノ停車場を出る間持てばよき也、出立の際も又遠ければ人力車を要するも近ければ宿の男荷を持て送り來り、又汽車の出るも今のは何方行といふ事宿が能知り居れば程よき時刻を見計らひて客に報ず、たとひ有名な旅館にても遠きは氣の揉める物也、少し二ノ町にても近きにしかず、但し有名の旅館は、本宅もし遠ければ必ず停車場附近湊に出店あり、とにかく始によくしらべて書抜おけば迷はずして其宿へ着かるゝ也然る事もせず始ての土地へ汽車汽船より下たる人は、そこらに居る車夫、我勝に客をとらむと言巧みにいひ立て、不案内の客とみればよき宿に案内せんと口車に乘せて曳出せば、客車上よりして此家然るべしと思ひ、爰へ附よといふとも聽ものに非ず、何の彼のといひいひ自己の思ふ家迄曳ゆく也、宿引又同じ、先客の荷物を奪ひてさつさと先に立行是其土地にても下等なるか、又は故有て其宿はやらず、さびれたるが故に、停車所の車夫を手なづけて客一人に付幾許の手數料を拂ふ約定あるもの也、然れば其宿決して宜からず、既に其家へ引込て門口より大聲に御客樣と呼はれば、家内の人々飛で出、一番に荷を奪ひ、若小見逃たるは先見な人質にとる客が何と云ても耳にも掛けず、サッサと奥へ持ゆけば客たる者爲方なく、澁々に車より下れば口先計りチヤホヤ囃し立てゝ座敷に案内せられてみれば、席は汚なく、食物、夜具も之に準じ一夜を不愉快に送らざるべからず、此事旅馴ぬ人の能掛らるゝもの也、始ての土地にても何の何某へ附よと確乎に其名を指ていへば車夫も從はざるを得ず。

茶代廢止

茶代はばづむならば着て茶を持來りたる時、又少しにてすまさんとならば出發の際すべし、畢に茶代廢止といふ事流行して諸國の旅館爭ふて廣告爲たりしが一寸聞けば宜しき事の樣なるも決して然らず、克思へ年

來營業としたる事を奈何世上の流行なればとて、俄に廢して算當の立つ物ならんや、流行に遲れては家の名に拘はるを思ひて廣告はすれど、扨何か其塡充なかるべからず、於是か從來旅館としては無かりし席料菓子料等の名目を附て其替りとす、或宿にて五拾錢の茶代を遣たるに盆に乘て恭敷捧げ來り、手前方は茶代廢止なればと返上したるはよかりしも、附をとるに及びて、はたどの外に席料五拾錢、菓子料廿錢と有り今更ねぎる譯にもゆかず、詰り餘計にとられたりし事あり、茶代に三圓五圓をも遣ふ豪族は廢止もよからめ、我輩平民的には寧茶代として客の志次第なるこそよけれと思ふは我のみならぬにや、自然と茶代廢止の宿を忌むの傾を生じて、近頃の旅館廣告には何となく茶代廢止が又廢止せられたるもをかし。



（冬）山賤のほださし焚べて埋む火のありともなくて世をもふるかな　俊成

宿へ着きし時

（八）宿へ着ては成べく手廻しをよくする事髮を結直すは翌朝といはず、宵の內にし、入湯も伴あらば申合せて手拭を一つより濡さぬ事、翌朝の手水には手にて貌を洗て手拭を濆さぬ事、（糠袋はもつともぬらさぬ方便利）宵の內に其日の小遣を書記し、翌日の入用を小出し爲おく事、小出しの外金の在所を人に見すまじき事、我れ先年奥

地漫遊しての歸路、海岸線を土浦に下り、霞浦を鹿島に渡りて一泊せし夜、何心なくフト見れば裾の方の蚊帳に貌を押あてゝ窺ふ者あり、薄闇くて男女を分たねど、此白髪婆に怪かる振舞する者有筈なければ、必定枕探の類ならむと、寝たる貌して猶克みれば、何やらむキラと光る物を持たる如し、扨は持凶器強盗かと恐ろしく、逃出さむにも一方口也、奈何せん唯いふ儘に與へむのみと覺悟しつゝ在に、彼容易に入らず、幾度も身を退け、去かと思へば又窺ふ、其ころに自然と女なる事を確乎たるが、扨は宵に拂ひせし時内嚢より金を出しゝを見て、情夫等の殊に金欲き折柄の慾欲ならむ、度胸の据りたる強盗ならずば、何程の事のあらむ、欺くに不如と思ひて、彼が身を退たる際に、手早く内嚢の金を拔出して、ガマ口と共に股間に狹み、鼻紙を替りに入て腹にも結ばず、態と懐より出しかけて佯眠等爲て、彼の爲ん樣をみるとも知らず、彼奴は幾度か猶豫しつゝ、徐々と入り來り火を吹消して蚊帳の下より手を差入れつ、先枕元を掻探れど、何も無ければ、横に返りて胸のあたりを探り、手に當る内嚢を奪得て爲課たりとや思ふらむ、狐鼠々々と階段を下り去りぬ、我も又起て雨戸を開けば、夏の夜は早白みて和たる海の朝景色心地よく、又可笑く、内嚢一つに厄を攘て損を爲ざれば、愁なる事いひ出て騒合と成て手間取ては面倒也と思へば、何もいはず、倣不知して立出たり、是金入を見せたる誤ちなり。

（九）宵に主人又は番頭を呼て翌日行方の案内を精細きゝて、俥、山駕等雇ふべきは其時慥に誂へ置べき事。

旅なれぬ都會の人、俥等は何時にても有物と思ひて出發の際に成ていへば、宵に仰なければと謝絶られて、困る事あり、

日光、伊香保、鹽原等皆然り

爰に限らず惣じて温泉場等には其處々々の定規有、俥、山駕の人足取締なる者ありて、猥りに客と直應對を許さず、日々停車所又は其土地の入口に出張し居て、客の雇はむと爲るあれば、車夫より取締に屆けて何方行、誰と帳面に記入し貰ひて後行く旅宿よりも、此取

締方へ明日は俥何臺、山駕何丁等誂へやれば、夫に應じて人足を割付、客多くて人足不足なれば、近村へ人を走して駈集む、客尠き日はあふれ居るも、無には限らねど、ソハ稀にて地方は都會の如く俥多からねば、日々出拂ふが常也、故に宵に誂へざるべからず、人足もし此規約を守らず、拔蒐すれば其晩點呼する際忽ち知られて、其土地を追拂はれ業を失ふが故に背く者なし、吾此事を不知して伊香保にて榛名見物に雇ひたる駕人足好漢なりしかば、明日も又雇はむと云ふに有難しと受たれば、是にて約定の積にて翌朝疾より支度して俟てども〳〵來らず、他の客は次第々々に駕俥にて出たつに、我獨り取殘されて焦燥つゝ宿の男に、昨日約定せしに有難しと受ながら、何故來らざると云へば、答へて曰く然る事ならば奈何昨夜我輩に仰られざる爰には云々の規約有て御客様と相對は許されず、彼男も定めて我家より沙汰のあるを、今か〳〵と俟てや在けむ、今と成ては最早取締より指れたる他の御用を勤め居るべしと、所謂を聽ては發憤もならず、一日を空しく逗留したり、又磐城國なる原釜



（冬）山里の垣根は雪にうつもれて野へとひとつになりにけるかな

にても吾には非ねど隣席の客が之に類する事有りて、紛議の發れるを褒越に氣の毒と恐懼し事ありし、畢竟するに所の事情を知らざるに發る間違也、郷に入ては郷に從はざるを得ず、先其所のおきてを問はざるべからず。

（十）溫泉場の相客、又は汽車中隣席の人、我が未行き見ざる名所等を語るを聽に心得有、人各々好惡する所同じからず、雅人は幽栖閑靜なる所を好み、學者は歷史に富める地を悅び、考古家は舊社寺の寶物の缺損じたるをみて悅び、地質鑛山に志す人は深山幽谷に分入、片石寸草にも眼を止め、俗人は只繁華に賑はしきに非ざれば面白からず、名所舊跡を見ても何でもない所などいふ者多し、然れば正しく其地を踏たる話も其人々の感ずる所異なれば、口を極めて譽るも貶なすも共に信ぜずして、先其人の奈何により觀察を下すべし、唯我と趣味の似たる人の言ならば大體は違はざるべし

家庭の規律

家庭の平和は主人始め召使に至るまで些の不平なきに在り、是には先づ家人の用事に對する日毎の分擔を定め置くこと最も必要なり、殊に下女下男の如きは朝眼覺むるより夜床に就くまで用事に纏綿し居るが如きは宜しからず、大抵時間を定めて休息の餘裕を與ふるのみならず、主人の爲すべき事、例へば床上の物を取るなどゝいふが如きことまでにも雇人の手を勞するは固く之を戒めざるべからず。

普通の拭掃除は毎日之を怠るべからざるは言ふまでもなければ、毎日爲すの要なくして時々大掃除を實行せざるべからざるが如きものあり、例へば戸棚の中を掃除するとか、流場を掃除するとか、床の下を掃除するなどは毎日行ふの要なくして時々實行するの必要あるものなり。是等は時々といふが如きことにては兎角等閑に附し去らるゝが常なれば、豫め何の掃除は何の日に誰れが遣るといふ風に定日を定め置くは規律を保つ秘訣なりと知るべし。

新案 勝利占ひ

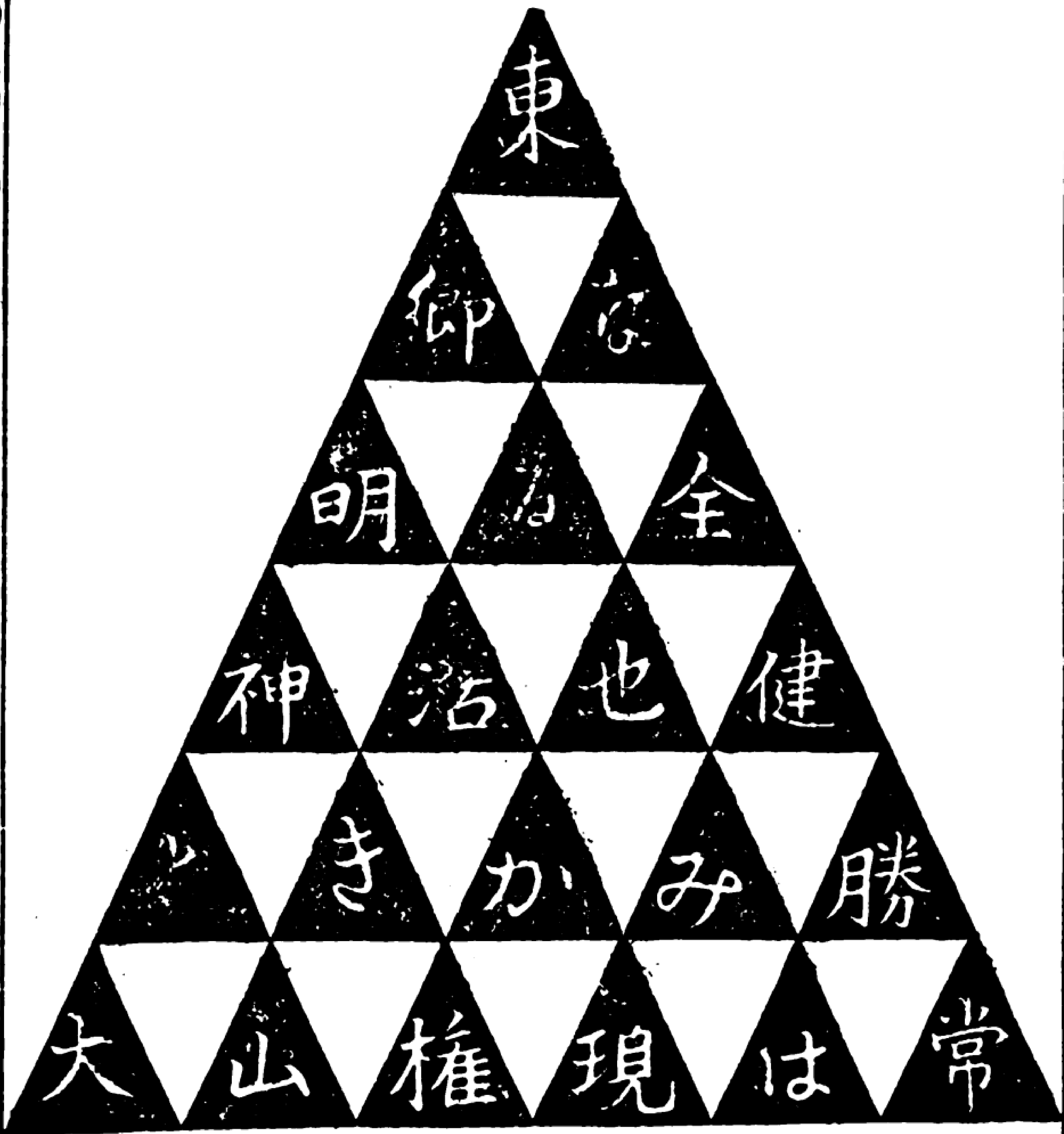
天眼堂主人

世間で當るも八卦當らぬも八卦とて占ひを慰み半分に思へるは僻事です、その當らないなどゝ云へるはその人の眞面目でやらないから自然とその感應が薄いのであります、今一つは判る人が愚劣短才で折角の占示を判明ることが出來ない譯であります、元來卜筮は神聖なるものゆゑ孔子様さへ物を開き務めを成すと仰せられて一生の間易の研究をなされましたが、その韋編三たび斷れたと申すことですから如何に熱心であつたかと云ふことが知れませう。

さて勝利占ひとは讀で字の如く、この占ひの教ゆる所に從はゞ、禍は轉じて福となり、凶去て吉來り、人事百般何事によらず成功せずと云ふことはありません例へば病者は健康に復し、損耗は利益と化し、佳人は才子を得、破鍋は綴蓋と偶ひ、鬼の女房に鬼神と云ふ案配にそれ〴〵相應の配偶を得て、世にまた破鏡の歎きもなければ鰥寡の哀しみもありません、天下泰平家内安全富貴延命疑ひなしです。

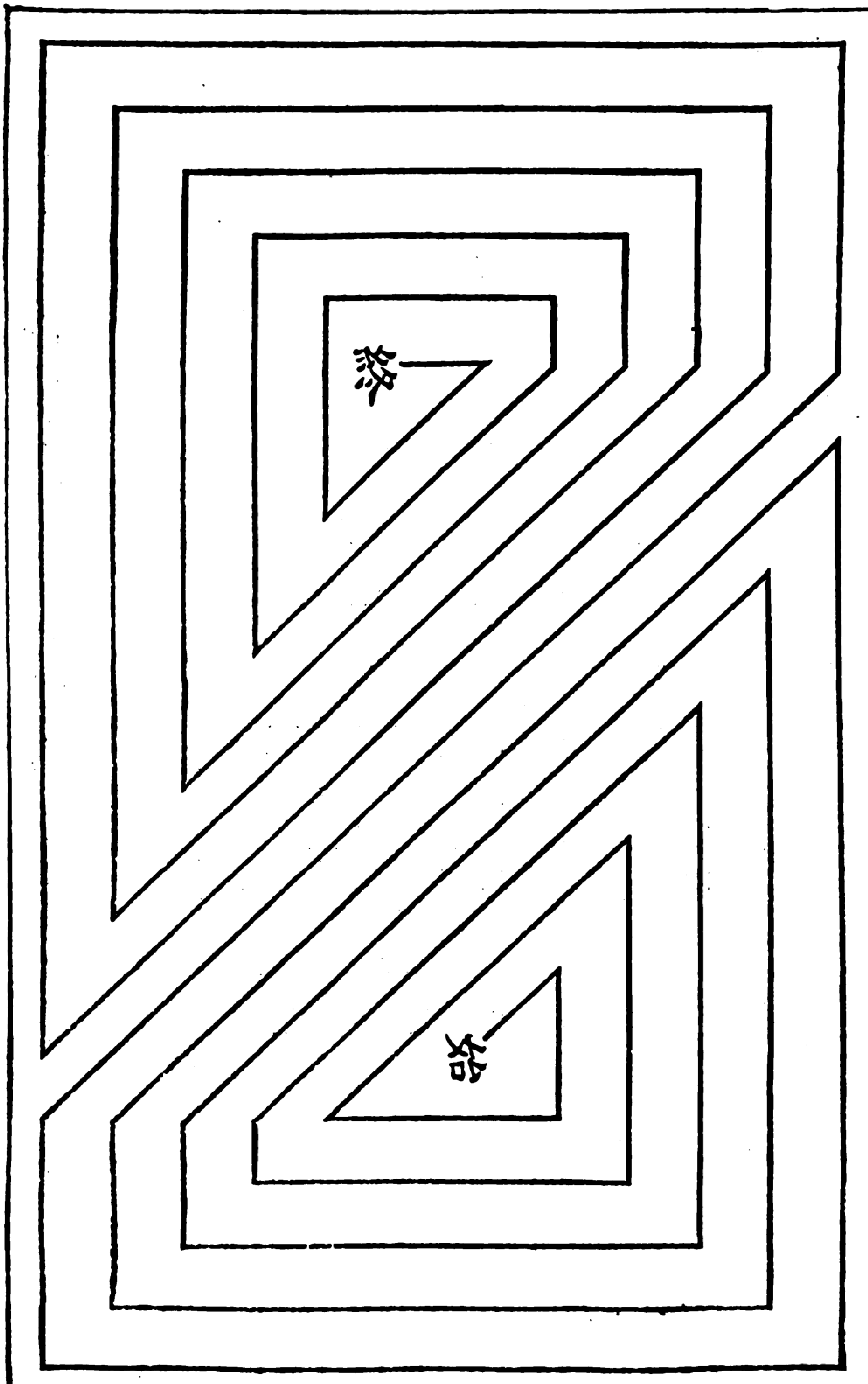
●●占ひ法　先づ勝利塔を正しく坐前におき眼を閉ぢ心を沈めて、勝利塔を組立てゝある黒の三角を指尖にて突くのです、其時若し「大」の字の三角に當つたとすれば、別表の「大」の下にて用件が「希望」ならば第十一段目の數字を見、又「戀愛」ならば第二段目の數字を見て更に占示の部に就いて同じ數字を見合して判ずるのであります、これから大發展をしようと云戰勝國民には優柔不斷ぐず〳〵して居ることは大禁物でありますから「東鄉明神と大山權現は常勝健全なる活神也」この兩軍神成功にあやかりて、何でもハキ〳〵やるに限ります。

天祿は宏大なるもので、眞面目で誠意をこめて占へば前に述べたやうに人生百般の指針となることは勿論ですが、又慰み半分に弄びても又それ相應に面白い答が得られますから中々興味があつて重寶です。



新案勝利占勝利塔

勝利占現示番號循環想像圖



△	運氣	希望	職業	成功	吉凶	勝敗	旅行	居住	苦樂	待人	戀愛	婚姻
東	一〇〇	一〇一	一〇二	一〇三	一〇四	一〇五	一〇六	一〇七	一〇八	一〇九	一一〇	一一一
郷	九九	六四	六五	六六	六七	六八	六九	七〇	七一	七二	七三	一一二
明	九八	六三	三六	三七	三八	三九	四〇	四一	四二	四三	七四	一一三
神	九七	六二	三五	一六	一七	一八	一九	二〇	二	四四	七五	一一四
と	九六	六一	三四	一五	四	五	六	七	三	四五	七六	一一五
大	九五	六〇	三三	一四	三	一	八	二三	四六	七七	一二六	一五七
山	九四	五九	三二	一三	二	九	二四	四七	七八	一二七	一五八	一五六
權	九三	五八	三一	一二	一〇	二五	四八	七九	一二八	一五九	一九二	一五五
現	九二	五七	三〇	一一	二六	四九	八〇	一一九	一六〇	一九三	一九一	一五四
は	九一	五六	二九	二七	五〇	八一	一三〇	一六一	一九四	二二九	一九〇	一五三
幣	九〇	五五	二八	五一	八二	一三一	一六二	一九五	二三〇	二二八	一八九	一五二
勝	八九	五四	五二	八三	一三三	一六三	一九六	二三二	二三八	二二七	一八八	一五一
健	八八	五三	八四	一二三	一六四	一九七	二三二	二三九	二三七	二二六	一八七	一五〇
全	八七	八五	二一四	一六五	一九八	二三三	二四〇	二四九	二三六	二二五	一八六	一四九
な	八六	一三五	一六六	一九九	二三四	二四一	二五〇	二四八	二三五	二二四	一八五	一四八
る	一二六	一六七	二〇〇	二二五	二四二	二五一	二五二	二四七	二三四	二二三	一八四	一四七
活	一二七	一六八	二〇一	二二六	二四三	二四四	二四五	二四六	二三三	二二二	一八三	一四六
き	一二八	一六九	二〇二	二二七	二二八	二二九	二三〇	二三一	二三二	二二一	一八二	一四五
か	一二九	一七〇	二〇三	二〇四	二〇五	二〇六	二〇七	二〇八	二〇九	二一〇	一八一	一四四
み	一三〇	一七一	一七二	一七三	一七四	一七五	一七六	一七七	一七八	一七九	一八〇	一四三
也	一三一	一三二	一三三	一三四	一三五	一三六	一三七	一三八	一三九	一四〇	一四一	一四二

勝利占現示

（一）必ず勝ちます、御祝ひなさい、
（二）今に宜い事があります、樂んで待て居らつしやい、
（三）マー相變らずです、
（四）凶です、あなたの情人が失敗します、
（五）負くると受合ひ、
（六）自分はいやでも逃て行かればならんやうになります、
（七）轉宅はおよしなさい、借家は何處へ住つても同じやうなもので
す、
（八）御一所はいけません、
（九）あなたに勝負とは無理です、
（一〇）あの人を思ひ切られば、何時までも浮ぶ瀨がありません、
（一一）一人ではあぶない、共同なればよろしい、
（一二）眞面目に順序を追ふてやれば成功を保證します、
（一三）今一歩の處で失敗するかも知れない、用心なさい、
（一四）あなたの思ひ切り一つで隨分成功します、
（一五）お心一つでどうにでもなります、
（一六）身體が健康なら成功疑ひなしです、
（一七）吉とは行きませんが、先づ無事でおさまりませう、
（一八）六づかしいが先づ勝でせう、
（一九）何か用事の都合で行けなくなりませう、
（二〇）今の中に早く手を入れて置くが宜しい、決行なさい、
（二一）隨分苦勞だが自業自得だ、おあきらめなさい、
（二二）苦もあれば樂もある矢張浮世ですからクヨ〳〵思ふにあたら
ないと、
（二三）家内のおさまるは老人にさからはぬが一番です、
（二四）早くお出でかけなさるがよろしい、
（二五）五分々々です、角力ならば引別けと云ふところです、
（二六）家内の不和から一騷動が持上るが後は却てよろしい、
（二七）案じるより產むが安い、心配せずと元氣を出すのです、
（二八）軍人がよろしい、就中陸軍に限ります、
（二九）農業か園藝かが一番適して居ります、
（三〇）山に縁のある事業がよろしい、鑛山、林業ですな、
（三一）醫者、看護婦のやうに直接人の身體にさわる職業にお附きな
され、
（三二）成るべく遠方と取引する商賣がよろしい、
（三三）公共の事業に頭を出せば可なり出世が早い、
（三四）官吏に限ります、殊に裁判官が一番適當です、
（三五）なまじ高尙な事を考へるより、これと云ふ職人になるが一番
です、
（三六）學問で身をお立てなさい、
（三七）ドーしても遊びたいたちだから、成功しても先づ六分ですな、
（三八）年まわりが惡い凶です、
（三九）氣の毒ですが、あなたは一生勝つと云ふ事を知らない方です、
（四〇）近縣ならよろしいが、遠方はいけません、
（四一）仲裁は駄目、自分の家庭は自分で整理するに限ります、

(四二) 苦樂ともに氣の持ち様次第です、
(四三) 來るなんて口ばかりですよ、きびしくいぢめておやりなさい、
(四四) 今はモー來る途中です、差支ないやうに用意なされてよろしい、
(四五) 用事が出來て當分こられません、
(四六) 當分辯なほうですが、其辯が苦の種です、慰勞金を貰つて解雇された老朽員のやうですネー、
(四七) あなたのりんきが何時も不和の種です、
(四八) 皆さん御承知の上ならばよろしい、
(四九) 勝てますとも、落膽せずにおやりなさい、
(五〇) 盗難にかゝるから外に泊るとは一切およしなさい、
(五一) 意外のとから失敗を招きます、
(五二) 金に縁のあるものが最も適當です、
(五三) 平生の心掛がいゝから希望は十二分に達せられます、勇氣をお出しな、
(五四) 經驗の爲めです、出來ても出來なくてもおやりなさい、
(五五) ソンナ勝手な望は叶ひませんよ、
(五六) 先づソロ／＼には行くでせう、
(五七) 八分通りは達せられませう、ドウも十分は六づかしい、
(五八) あの方を思ひ切らぬ中は出來ません、
(五九) 餘程の困難に勝つ覺悟がなければ先づ覺束ない、
(六〇) モ少し考へた上がよろしい、
(六一) 親しい人の力をかられば出來ません、
(六二) 身分不相應な希望ですから、今では六ヶ敷です、
(六三) 働きやう一つです、
(六四) 用意さへ出來れば、直ぐ遂げられます、
(六五) 月給取が安全です、但し新聞記者はいけません、
(六六) モー此所までやれば大丈夫です、
(六七) 上々吉これから見返へすやうになります、
(六八) 今日は勝てますが、明日からは六づかしいです、
(六九) 目的なしの旅行はやめるがよろしい、
(七〇) 少し手狹ぐらゐは辛抱なさい、今に世帶の節減をせねばならぬとが出來ます、
(七一) 苦勞はたへません、併しすいたどうしの苦勞ですから宜いでせう、
(七二) うまくだまされましたネー、係りません、
(七三) いろ目位では追つきませんとサー、
(七四) 「上べには情ゆると見えしうづみ火の底にこがるゝ我が思ひかな」ですと、
(七五) あの人の夢に見るのは外の人です、
(七六) 惚れられたと思ふといやきがさすものです、
(七七) 何か急用で明日になるのでせう、
(七八) ナニ苦勞も今年一パイでしやう、第三年兵のお正月と云ふ所です、
(七九) 新築結構です、なるべく東をあけて南面になさい、
(八〇) 早くお斷りなさるが宜い、
(八一) あせると負けます、こゝ自重一番と云ふところです、
(八二) 小吉……借金でかれしち、
(八三) 一か八かやつて見るがよろしい、たいした失敗はありません、
(八四) 人氣商賣の中で何か適當なものを選みなされ、必ず當ります、

(八五) お金さへおいとひなくば叶ひます、
(八六) 極よろしい、
(八七) 年とる程よくなります、
(八八) 折角の運をなかば逃がして居る、奮發してとつつかまへなさい、
(八九) これからですから、ミッシリと勉强なさい、
(九〇) あまりよ過ぐると、氣をつければ魔がさしますよ、
(九一) 運はあるが根氣がないから駄目です、
(九二) 金運は良くない方ですが、働きやうで向ひて來ます、
(九三) 運は向ひて來て居るが、あなたはとかく逃がそう／＼として居るのです、
(九四) 此所二三年の間はドウもよくありません、
(九五) 今年から運が開けます、
(九六) 運は元氣につれます、何でも元氣をお出しなさい、
(九七) 棚の牡丹餅もひとりでは口へはいりません、運も矢張り自分で開くのです、
(九八) 運氣はよいが、怠るからいかんのです、
(九九) 運は天にあり自ら力めば開く方へ向ひて來ます、
(一〇〇) 運を開く手さへ强ければ占らなはなくてよろしい、
(一〇一) 目的がたしかでないから、占つても駄目です、
(一〇二) 海軍軍人、船員、漁業、水産物商、運漕業など、水に縁あるものが宜しい、
(一〇三) この事は面白くない、考へなほしなさい、
(一〇四) 凶と云ふても借金に困る位のとでせう、
(一〇五) 始めの時はくそ勝ちで、後から負けます、

(一〇六) 二三日お見合なさい、
(一〇七) あなたのお遊びがやまれば、家庭は平和です、
(一〇八) 苦勞も大いだけ樂みも深いです、
(一〇九) 晩くも今夜中には見えます、おたのしみ、
(一一〇) あなたのアレルので向うでもイヤな人だ位は思ふて居るでせう、
(一一一) お間合がかんじんです、いくら本人が氣に入つても、
(一一二) あなたには氣に入りますまいが、向ふでは惚れた義理で坐りこむと云つて居ります、
(一一三) 親まかせが一番よろしい、
(一一四) いゝ加減に好みをして置かぬと、終にカスをつかみますよ、
(一一五) 今二三年早過ぎます、
(一一六) あなたにはほれて居るつもりでも、そうは問屋で卸ろしませんとサー、
(一一七) うわさをすれば影とやらですから、御安心なさい、
(一一八) 人のうわさも七十五日、今少しの苦勞です、
(一一九) 赤さんがお出來なされば丸く治ります、いま一ときの辛抱です、
(一二〇) 是非誰かと一所でなくては、
(一二一) 勝て冑の緒をしめよとは、あなたの今日です、
(一二二) 金はたまりますが、其代りに人から惡くまれます、吉凶は自身に判斷なさい、
(一二三) 短氣は損氣です、氣長くやれば成功します、
(一二四) 器用ですから手先の仕事が向きます、
(一二五) 手取り早くやるが、よろしい、

（一二六）運は寝床へはいつて來る、

（一二七）運は向きました、併しあなたはよく汽車に乘りおくれる人だよ、

（一二八）金は出來なくはありませんが、身體はどうだか、

（一二九）順風に帆を上ぐる所だが、船頭は覺束なさゝうだよ、

（一三〇）熟練な職工、それから役員になつて、しまひには工場の持主、

（一三一）あまり果報すぎて、運氣に食傷して居るやうです、

（一三二）我慢なさるがよろしくない、それが間違ひです、

（一三三）人には尊卑の別はありますが、職業には貴賤の別はありません、

（一三四）落第、不合格、も一ツ失敗、

（一三五）大風呂敷のやつは御用心なさい、

（一三六）向ふはかたきうちをするのです、

（一三七）この春は新婚旅行、しかも自由結婚ときて居ますからお易すくないのネー、

（一三八）理想の家庭が試驗されます、おたのしみですと、

（一三九）芝居見て、おさつを喰べて、湯に入つて、はゞかりしたやうな宜い氣持、

（一四〇）待人來らず、押かけていかればあへません、

（一四一）あの人に惚れて居る間は不幸です、

（一四二）是非おきめなされ宜い御夫婦です、

（一四三）宜い縁でいけません、貧乏神と結婚するやうなものです、

（一四四）今結婚しても後日別れるやうな事になるかも知れません、

（一四五）御夫婦とも申ひです、晩結婚から運が開けませう、

（一四六）いけません今結婚したら家内不和のもとです、

（一四七）少しつりあはぬので話が面倒でせう、媒介者次第です、

（一四八）媒介者におまかせなさい。悪しくはありません、

（一四九）およしなさい、ひどい目にあはせられますよ、

（一五〇）あせらぬ方がお爲めです、天が宜いのを與へますまでお待ちなさい、

（一五一）御本人さへ氣に入らば大概まとまります、

（一五二）あなたは結婚して氣がかはりやすいから風波がたへません

（一五三）あなたの親ごたちが反對します、

（一五四）御氣の毒さま、向ふは外へ行きます、

（一五五）あなたに惚れてるうちで、一番醜な人、

（一五六）先きは格別いそいでは居りません、

（一五七）あまり信用のできる人からのはなしでありませんれ、

（一五八）あなたが浮氣をやめれば、此戀は成立します、

（一五九）先きでも來たいは山々ですけれど、何分來客の爲に手が離けないのです、

（一六〇）あなたの性分では苦勞の方が逃げだします、

（一六一）あなたのおうちの雇人は尻が落ちつかないとネー、

（一六二）近くならば何所でもよろしい、

（一六三）今日は負けです、

（一六四）今年はあなたの地位が上ります大吉、

（一六五）ソンナに怠けて居て成功とは恐れ入ります、

（一六六）辯護士などがよろしい、

（一六七）大蛇になさい、蛇頭の昇天は到底だめです。

（一六八）慾は大いに望みは高いがよろしい、さてはあまり小成に安

んじ過ぎでは居りませんか、
(一六九)　運勢よろしい、
(一七〇)　太閤さんがまだ百俵取の小侍であつたとき朋輩が城持大名になりたいと云つたら、おれは二百俵取りになりたいと云はれた、隴を得て蜀を望むことは此所のこと、成功の虎の卷です。
(一七一)　前途のことをお考へなさい、あなたのなさる柄ではありません、
(一七二)　煎餅のやうに板にくつゝいて居る職が宜い、學校の教師が會社の計手位のところでせう、そこを我慢するとよろしい
(一七三)　あなたに出來なくつて如何しませう、
(一七四)　卒業、仕官、結婚、重れ〲の御目出度、
(一七五)　あまり騷ぐと、不慮のことがおこるかも知れません、
(一七六)　今年は修行してイヽ夢をみます、
(一七七)　主婦がゾンザイだど家が丸でしまりがないやうに見えます
(一七八)　業と苦とのチャンポン、でせう
(一七九)　部領が代理します、
(一八〇)　あなたが見えないと、先きの望もうすらぎます、
(一八一)　あなたは今まであんまり粧飾をしすぎました、
(一八二)　あの人は見當ちがひなことをうたぐつて居るのです、心中を見せておやりなさい、
(一八三)　あなたの輕率は、大抵の人をいやにさしてしまいます、
(一八四)　だれへの迷路です、未だあてがきまつてないじやありませんか、
(一八五)　あなたが心から戀したら必ず遂げられます、
(一八六)　あんな方はおよしなさい、御器量が下りますよ、
(一八七)　ドウセ鮑の片思ひです、
(一八八)　そんなに氣にすると病氣になりますよ、
(一八九)　先きはあなたでなければ夜も日もあけぬそうです、
(一九〇)　誰れか取りもつ人があらば容易です、
(一九一)　さめ易いから當にはなりません、
(一九二)　叶ひそうで叶ひません、十ヶに成ては宜しくありませんよ、
(一九三)　あの人は氣が多いから當てになりません、
(一九四)　あなたは一生、苦勞のしづめです、大抵になさいよ、
(一九五)　今は家作の普請どきです、
(一九六)　名義だけならともかく、正月は室内旅行に限ります、
(一九七)　今日は負けて置くがよろし、明日は勝てます、
(一九八)　色難でひどい目にあいます、艶福者はこれがつらい、
(一九九)　精神一到何事か成らざらんやです、兎角熱心が足りないでは駄目です、
(二〇〇)　いそがはしい職業をなさい、
(二〇一)　あなたは自分で職業を撰ぶだけの心がない、他から進めらるゝ毎にぐらつくから駄目、
(二〇二)　勞働は氣が進まないから坐業をとりなさい、
(二〇三)　あなたは職業の神聖と云ふことがわからない子ー、
(二〇四)　一度やりかけたことは、必ず貫く勇氣が成功の鍵です、
(二〇五)　十分に注意をすればきつとよろしい、
(二〇六)　すぐお止めなさい、危險ですよ、
(二〇七)　學校休暇に正直に歸省する間が頼母しい學生であります、
(二〇八)　子供のある方に借家されることを家主はよろこびません、
(二〇九)　あなたの心配は自分でこしらへてるのですもの、

（二一〇）あのかた〴〵は、何時でもあなたの云ふ通りになるじやありませんか、
（二一一）お氣をつけなさい、あなたをだまそうとして來ます、
（二一二）あの人は又他をさがして居ますよ、
（二一三）今にあの人がやつて來ますよ、
（二一四）折角お待ちかねですが明日でなければ來ません、
（二一五）約束通り必ず來ます、
（二一六）病氣で來られません、
（二一七）途中で道よりをして其尻が長くなつて居るのです、
（二一八）今日は六づかしいが一兩日うちには必ず來るのです、
（二一九）一寸急には來ますまい、
（二二〇）望みが大きいだけ苦勞も多いです、
（二二一）二階家よりは平家に限ります、
（二二二）可愛い子に旅させよ、一人旅は經驗になります、
（二二三）今日は靜、
（二二四）三世相の通りです、始めよくて後惡し、
（二二五）あれだけやつゝければ澤山です、
（二二六）あなたが思つてるとは遂げられませう、
（二二七）のぞんだよりも多く、
（二二八）まづ此世からなる極樂ですかネー、
（二二九）親の位牌が手に入るかも知れません、
（二三〇）新婚旅行などゝは洒落て居ますが、實は借金ぬけの高飛びですとサー、
（二三一）住居には水が一番です、清淨ならば水道より掘井戸に限ります、

（二三二）馬鹿でないうちは心配がたへるものではありません、
（二三三）結果がわるいから苦しみますよ、
（二三四）あの人の心はみだるゝばかりです、もう苦勞させてはいけません、
（二三五）少しは苦勞もありませうが、其苦勞が却て樂みです、
（二三六）まだ苦しみやうが足りないと見えます、
（二三七）モーこれからはお樂です、隨分骨が折れましたネー、
（二三八）今日まで苦樂ともに着るしきかはりはありません、現狀維持ですと、
（二三九）孟母の三遷ですかネー、昔話しが思ひ出されます、
（二四〇）汽車よりも汽船の旅びがよろしい、
（二四一）勝負は時の運にあり、精神の堅固なるものが最後の勝利を博するのです、
（二四二）あなたは一生うまくやつていけます、
（二四三）いろ〳〵のよろこびがあります、心配はなくなつてるし、萬歳かネー、
（二四四）さうすれば總べての敵にかてます、
（二四五）こんどの旅行は御注意なさい色難のそうがあります、
（二四六）三たび轉居すると、火事に罹つた程のもの入りです、
（二四七）人のきらふ方角はマアよけなさるが宜しい、
（二四八）旦那樣の眉じりが下りすぎて居て、おかみさんの眼が狐のやうで、お三が年から年ぢう出代りしてドレモ〳〵不別嬪のうちだと、
（二四九）宜い家宅だこと、是非おもとめなさいよ、
（二五〇）今年は迚ても行かれますまい、
（二五一）あなたが競爭をはじめたら、だれも相手にはなれない、
（二五二）うれしい旅行がはづれました、

新撰大和言葉

○いろの部

△いなづまとは……はかなき事をいふ
△いさゝ水とは……庭の溜水の事
△いわまつゝじ……七夕の枕の事
△いもせとは……夫婦の事
△いな舟とは……否にはあらぬ事
△いぎたなしとは……人の寢言の事
△いざり舟とは……釣する舟の事
△いのちの水……涙の事
△いかまほしき……行たしと思ふ
△いなむしろ……田舍の事
△いもがりとは……女の許
△いもせ鳥……鶺鴒の事
△いわた帶……妊婦の帶
△らうがはしき……亂りかわしき事
△いきす玉……魂の事

熟語和訓集

書齋の人

△院本――淨瑠璃本の事なり。支那にて院は繁華なる地にある家宅をいふ、たとへば東京にて淺草奥山邊にある雜劇場のごとし、雜劇の本といふ意より出でたるものならん。

△一諾千金――楚の諺に黄金を得るも季布の一諾を得るに如かずといふ言あり、季布といふ人一度人と約して諾する時は如何なる事あるも其の約束を果さずして終りし事なし、元來人の性質は其の言舌の如く高尙なるものにあらず、前に諾したる事も後に至りて果さゞる事多し、是を以て季布の約諾を果すを多しとするの意なり。

△鹵簿――車駕法從即ち天子の行列の次第を鹵簿といふは如何なる所より出でたるやといふに、元來鹵といふは楯の事なり、昔時支那戰國時代に王侯貴人の外出ある時は必らず、行列の次第を簿冊に記るし、これを楯に大書して先導の者に持たせ公衆に示したるものなり、これよりして天子の行列を鹵簿と稱するに至れり。

△狼藉――物の亂雜なる事を形容したる語なり。狼の山中に臥する

○はの部

△花たちばな……昔を忍ぶ事

△初鶯とは……珍らしき人

△花かたみ……語らひをいふ

△春告艸……梅の花の事

△初しろ艸……正月の門松

△縹いろとは……空色なり

△埴生の小屋……いやしき家

△花のきみ……杜若

○にの部

△新まくら……初て契る事

△にほひ鳥……鶯の事

△にほてるとは……みづうみの事

○ほの部

△ほしあひとは……七夕の事

○との部

△とこなつとは……なでしこの事

△友千鳥……友達の事

や、草を藉て臥す、其跡草莱亂雜して一見直に其狼の臥たる跡なるを辨知すべし、故に亂雜なる事を形容して狼藉とはいふなり。

△狼狽――狼も狽も共に狼の屬なり。狼は前脚短かく、狽は後脚短かし此の兩獸常に相偎して行く、若し物に愕ろく時は狼と狽と相失してつまづく事多し故にうろたへ、あはてる事を狼狽といふなり。

△破瓜――婦人の天癸開く事を破瓜といふ、婦人年頃に及びて月經の始めて來り瓜の破るゝが如く紅潮を見るものをいふ。

△莫逆――親友の事をいふ、双方の心相合ふて、如何なる事あるも悖逆らふ事莫し、との意より出づ。

△跋扈――我儘一杯をして人の諫めを用ひざる樣などに用ふ。跋は跳るの意、扈は竹の籬なり、水邊の人、魚を畜はふるに籬を以てす水の缺乏せし時小魚は籬内に留まるも大魚は扈を蹈へて跳り出す事に譬へたるものなり。

△二豎――病の事をいふ。昔、晉の侯病む。醫を秦に求む、未だ至らざるに侯夢む、病化して二人の侍童となりて曰く、秦の醫は良醫なり、彼來らば我必らず、殺さるべしと依て病の事を二豎といふ。

△苞苴――賄賂の事をいふ。貨物を贈るには必らず物を以て苞裝す故に包み匿して贈る事を賄賂とはいふなり。一說に苞苴は藁苞なり

△遠山の花……戀しき事
△どよみとは……どつと笑ふ事
△とこの海とは……涙の事

○ちの部

△千ひろの海……深き海
△千ひろの底……戀に沈む事
△千とせの坂……年老ゆる事
△千早振……久しき事
△塵びち……少しの事
△ちたつむし……きり〴〵す
△ちりほひ……零落の事
△ちゝのこ金……千兩の金

○ぬるおの部

△ぬばたまとは……夢の事
△ぬれきぬとは……無き名の事
△をちこち……遠き近き事
△おにつはらとは……人の腹立つ事
△おき漕ぐ舟……泊り定めぬ事

土產物を草包みにして贈るものをいふなりと。

△方物――地方に產する物を方物といふ。土產、若しくは國產の意なり。

△蒲鞭――寛仁大度の刑罸をいふものなり。蒲はビロウドの如き柔らかなる水草なり、これを以て鞭を造り不都合の行ありしものを鞭ちこらしめるなり。つまりお手柔らかなる御仕置なり。これ荊鞭の反對なり、荊は棘のある草なり。

△辟易――俗に驚いて避ける事を辟易といふ、辟は其衝を避け、易は其所を易へる事なり、何かなし驚いて其正面を避けるの意なり。史記項羽本記に項王目を瞋らして之を叱す、赤泉侯の人馬倶に駭き辟易する事數里とあり。辟易の出典こゝにあり。

△頓挫――俗に腰の折れた事を形容していふ。頓は止まるなり、挫は折れるなり、專ら文章の轉折する所に用ふ。

△知己――互に其心中を知り合ふ人をいふ尋常の友人の間柄をいふにあらず。出典諸書にあれど煩はしければ載せず。

△綠林――强盜の事をいふ。後漢の時諸の亡命者綠林(地名)に集り行人を刧やかして物を奪ふ、これより强盜を綠林といふ。或は白波を窃盜といふに就て對向の上より斯くいひしものにや。

△思ひ艸とは……撫子の事
△おぐるまとは……巡り逢はぬ事
△おみなめしとは……人のくねる事
△おいその森……恥かしき事
△おぼろ月夜……春の夜の事
△思ひの露……涙の事
△おもせ色……紅染の事
△おしまづき……机の事
△おもぶせ……面目なき事
△おぼろ舟……朽たる舟
△おき津……海の廣き事
△思ひの玉……念珠の事
△おしてる……潮の海の事
△をばしま……欄干の事

○わの部

△わきもこ……妻の事
△わがせこ……夫の事
△わくらば……稀な事

△乙夜の覽――天子の書を讀む事をいふ。漢の舊儀に五夜あり甲夜、乙夜、丙夜より丁夜、戊夜に至る、唐の太宗は甲夜に事を視て、乙夜に書を視る、是れより天子の書を讀まるゝを乙夜の覽といふ。乙夜は今の十時より十二時の間をいふ。

△寒心――悚然として恐るゝの意にして俗に膽を冷やす、胸を冷やすといふがごとし、赤兒が朽ちたる井戸端に遊んで居る時などに使ふ。

△甘心――日頃憎くおもふ所の者を殺して意を快くしたる人の事なりしも今は只心に得心する事に用ふ。

△料理――料理とは元と政治を按排する事をいふものにて割烹の事にはあらざりしも元來厨人の食を調するや、恰も大臣の民を治むるがごとし、衆客中淡味を嗜むものあり、濃味を好むものあり、淡濃其の中を得て衆之を甘しとす、政治も又之に同じく新を好むものあり、舊を慕ふものあり、緩急其よろしきを得るぞ政治家の伎倆とす庖人の伎倆人の意志口舌を忖度して其宜しきを制するなれば、料理といふこそ適切なれ。

△留守――むかし天子都にあらざれば必らず留守に置く、今は主人不在の事を留守といふ。

△わらわやみ……瘧の事
△わさをぎ……神樂の事

○かの部

△河竹……うきふし繁き事
△かぞいろ……父母の事
△かはほり……末廣の扇
△かつらの花……月の光
△かみな月……あきはてたる事
△かりがね……聲のふみ
△鑑の枕……八封の事
△かゝみ艸とは……大根の事

○よの部

△よろこび艸……牡丹
△よはひ艸……菊
△よるべとは……賴む緣ある事
△世のしれ物……愚かなる人

○たの部

△たまの緒……命の事

△李下の冠——人の疑を恐れて成さゞる事に用ふ、李下とは李の架の下なり、李の棚は頭上にあり、故に李下に冠を正さば外より見て李を取るがごとくに見ゆ、故に疑を恐れてなさゞる事をいふ。
△大歸——女子の人に嫁するを歸といふ、婦人の離緣せられて實家に歸るを大歸といふ。
△大白——酒杯の事なり。
△泰斗——一世の英傑、大學者、大宗師を泰山北斗といふ泰山は山の崇なるもの北斗は北極七星にして人の尊崇景仰するものなり。
△遼東の豕——見聞の狹きをいふ。むかし遼東に豕あり、子を生むその子白頭なり、持主稀らしきものと思ひて之を朝廷に献せんと欲して將ち行かんとせしが途中にて數多の豕に遇ふて見れば其頭皆白かりしかば、大に我が見聞の狹きを覺りたりと。
△素封——財産家の事をいふ。史記貨殖傳に朝廷より賜はりし秩祿もなく又爵位もなくして樂みは之れを比敵するものを素封といへり。素とは虛の義なり、封とは封侯の義なり、上に仕へずして田園牧畜の收入ある人をいふ。俗に長者の事なり。
△樽俎——外交上の掛引する事をいふ、樽は酒樽なり、俎は魚切板なり、廟堂にて祖先を祭るに奉るものなり、故に國と國との間にて

△たまがしら……石の事
△たきの音……音ばかりして見へぬ事
△玉だれ……すだれの事
△たをやめ……美女の事
△玉のうてな……天子の御坐所
△玉ごろも……柳の事
△玉の池……硯の事
△たつた姫……紅葉
△手なれ姫……扇の事

○れその部

△れいならぬ……煩らふ事
△れんじ……懇切な事
△そゞろ……心ならぬ事

○つの部

△連なる枝とは……兄弟の事
△つくも髪……化物の事
△月のかつら……手に取らぬ事
△ついばむ……鳥の餌を摘む事

事を決するを樽俎折衝といふなり。

△無恙――世俗息災、無事なることをつゝがなしといふ、蓋し恙は噬む虫なり、能く人身を食ふ、古へは草居露宿すれば多く此の毒を被る、故に人々相問勞して恙なしといふと風俗通にあり、又近頃恙虫なる土虫ありて穀物の根を噬む、畢竟是れ物の毀損する形を稱したるものならん。

△寧馨兒――一寸聞くと怜悧な兒、發明な兒、神童、秀才、美男子といふやうに聞こへるけれども、實際の意味はそうでない、只例の、件の、右のといふ樣な物を指すの稱に過ぎない、寧馨兒といふ事が、ゆかしく聞こゆるのは左の如き所から來つたものである、晉書に王衍字は夷甫、嘗て山濤に至る、去る時濤之を目送して曰く何物の老嫗ぞこの寧馨兒を生むといふより來たのである。

△乃公――乃公とは自分を指していふことなり。拙者が、我輩がといふに同じ只如何にも傲慢自ら居るの語なり。

△濫觴――物の始まりを濫觴といふ、其故は、川の上流は水淺くして觴を浮べし、されど下流に至つては波あらくして大船もを覆へすに至るものなり。孔子家語に曰く泯江始めて泯山より出づ、其源は以て觴を濫ぶべし、既に巫山を過ぐるに至つては怒濤狂湧して渉る

○ねなの部

△ねざめの鳥……鷄の事
△ねぐら……鳥の寢る所
△なまめくとは……うつくしき人
△なをざりとは……ねんごろになき心
△なみのちぎり……遠きことをいふ
△なには寺とは……天王寺の事

○らの部

△らうかはしとは……みだりかはしき事
△らいばんとは……すりばちの事

○むの部

△むもれ木とは……人に知られぬ事
△むらすゝき……物さびしき事
△むらさき……ゆかりをいふ
△むつの花……雪の事
△むかしのかたみ……杜若の事
△むば玉のすぢ……髮の事
△むべ……道理

べからずとあり、即ち濫觴は物の起原をいふものなり。

△落魄——俗に零落して身そぼらしきを落魄といふ。蓋し常業を失ひて倚る處なきをいふなり。

△無稽——俗にたわいもなき事、不眞面目な事をいふ。稽は考なり前後の整はざるをいふなり。

△烏有——實際になき事をいふ、烏はいづくんぞなり。即ちいづくんぞあらんやといふ意味なり。

△觀光——光は彩なり、他國の風土、人情、文物、地理を觀察するをいふ。

△畫眉——婦人の容貌の眼目とする處は眉にあり、故に美人となるには眉を削り、更に綠黛を以て之れを彩どり以て、巧みに顏容を妍麗にす、後世畫眉を美人の形容詞、又代名詞として用ゐるに至れり。

△畫餅——俗に計畫した事の無駄になつた事を畫餅といふ。蓋し畫にかいた餅は美くしけれど喫ふ事能はず、故に事畫餅に歸すといふ、又一說には餅に彩色を施しても元々食物の事故日ならずして腐敗するに至る、故に折角骨を折つてこしらへても無駄であるといふ意味にも取れる。要するに事の失敗に歸したるをいふ。

△紈袴——貴族の若樣の事を紈袴といふ。紈袴は元と金襴、緞子の

△むろのともぎみ……………傾城の事
△むらさき艸……………………藤の花

○うの部

△うづみび……下にくゆるをいふ
△うたゝね……戀しき人を待兼たるなり
△うきぐさ……浮かれたる事をいふ
△うづらごろも……………みぢかき衣
△うつせみ……はかなき事をいふ
△うたかた…………水の泡をいふ
△うなはら……………大海の事
△うつぼ木……朽ちたる木の事
△うきぐさ…………浮かるゝ事
△うらゝか……晴れやかなる事
△うなひご……おさなき子をいふ

○のくの部

△檐の玉水……………數知れぬをいふ
△のたり草…………………菊の花
△葛の裏風とは……………恨みの事

羽織袴の如きものなり。華冑の少年只衣服容貌を修飾するも、實際何の役にも立たず、薄志、弱行にして婦女子に劣る、斯る無能者を稱して紈袴とはいふなり。

△矍鑠——年老つても達者なお爺さんを形容したる語なり。漢の馬援年六十二、武陵の蠻夷を撃たんと請ふて曰く臣尙ほ能く甲を被り馬に上ると、援鞍に據り顧眄し以て用ふべきを示す、帝の曰く矍鑠たるかな此翁やと、蓋し老て壯んなるを形容したるものなり。老人の冷水をいふにあらず、黒木大將、乃木大將の如きをいふ。

△膾炙——膾炙とは人々の常食にして口に慣るゝものをいふ、後世萬人に知れ渡りし事を人口に膾炙すといふ、蓋し膾は俗にいふ「なます」なり、炙は炙たる肉なり、支那人の食膳に膾と炙肉は常食の品にして珍膳にはあらず故にいふ。

△瓜田——前の李下と同一の意味なり、瓜田に履を結ばず、瓜の畑にて履の紐の解けたるを結べば外より見て瓜を盗むがごとく思はる、故にいふなり。

△揶揄——俗にからかふ、をだてる、ひやかす、などいふ塲合を揶揄するといふ今其出所を知らず。

△鷄肋——にはとりを料理した事のある人はよく御存じなるべし。

△呉竹とは……永久の契の事
△雲井遙かに鳴る神とは……音に聞く事
△くだかけとは……庭鳥の事
△くだり月とは……傾く月の事

○やの部

△八雲立つとは……三十一文字の歌
△山時鳥とは……訪づれを聞く事
△やからとは……妻子の事
△山彦とは……木精の事

○まの部

△まる木橋とは……踏みかへす事
△ますら男とは……強き武士の事
△窓の青柳とは……年經て逢はぬ事
△松吹く風とは……喧ましき事
△まめ男とは……眞實な男
△まだきとは……早き事
△まさなきとは……褒めた事

○けふの部

鶏のあばら骨には多少の肉が附着して居る故之れを捨るには惜しきものなれどもさりとて之を食はんと欲せば、手數のみかゝりて得る所少なし、故に鶏肋とは役には立たぬけれども、さて棄つるには惜しき心地するものをいふ。

△狹斜――花柳の巷を狹斜といふ、長安に狹斜あり、道狹くして車を容れず、蓋し狹くして斜めなりになりたる所に娼婦などの住するをいひしものなり。

△傾城――漢の李延年の歌にいふ、北方に美人あり、絶世にして獨立す一顧人の城を傾け、再顧人の國を傾く云々、傾城とは本來美人の稱なりしも我國にては移つて遂に妓の稱となれり。

△吹レ毛、求レ疵――小利を得んと欲して却て案外なる大損を招く寧ろせざるに如かじといふがごとし、俗に藪を突て蛇を出すといふがごとし。

△玄關――堂屋に入るの關門なり。佛語より出でたるものなり、即ち幽玄の門關を啓發するの意なり。

△警蹕――俗にいふ行列の先拂ひなり。

△刎頸――親友の情厚きを刎頸の交りといふ。蓋し頸を刎ねらるゝも更らに遺憾なきの意なり。

△けしうとは……怪しき事
△ふなばしらとは……中絶ゆる事
△ふゝきとは……風に交る雪
△ふりわけ髪……結ひそめぬ髪

○こ の 部

△こむらさきとは……逢初める事
△こしぢとは……古里の路
△こちたきとは……事々しき事
△こまがへるとは……若くなる事
△ことぐさとは……言葉の種
△ことぶき草とは……松の事

○ゑ の 部

△ゑにしとは……緣のはし也
△ゑじは……内裏の火焚なり
△ゑびかつらとは……葡萄の事

○て の 部

△手馴れ草とは……扇の事
△手もたゆく……手のだるき事

△物色――人相書をして人を尋ね捜がすを物色といふ。

△駙馬――支那にては皇女の夫となるものは必らず駙馬都尉に拜す、故に之を駙馬といふ、後世婿の事をいふに至れり。

△行李――唐の時官府隨從の人を行李といふ、後世旅行用の荷物をいふに至れり。

△江湖――俗に世間、又は世上などの意に用ふ、范蠡江湖に走るとあり、役人を止めて廣ろく世間に身を置くといふ意、蓋し支那富庶の地は、古へより長江の沿岸江湖相交はる地方にありて世間の廣き恰も江湖のごとし故に世間を江湖とはいふなり。

△骨董――古器物をいふ古へ獸骨を以て多く器を作る、今も猶野蠻人の生活に於て見るべし。董は知るなり、又辨識あるなり、故に此の器は年久しくして更に何の骨たるを知るなし、骨董は骨を知るなり。

△懲レ羹吹レ齏――齏は俗にいふ和え物なり。煮へたる羹を吸ふて舌を燒き、それに懲りて今度は冷たき齏をも吹いて後ちに食ふなり即ち前のに懲りて後には馬鹿々々しく用心し過ぎる事に用ふ。

△鹽梅――昔へ食物を作るには、今の如く贅澤なる加味物はなく、只酸味と鹹味とを程よく調合して味をつけたるものなり。故に鹹甘

○あの部

△秋津島……日本の事
△あさがほとは……夕を待たぬ心
△あかねさす……日の出づる事
△淺みどり……柳の事
△阿漕とは……度重なる事
△青柳の糸……亂れ易き事
△有明の月……つれなき事
△あづさ弓……心を引く事
△あきの田……穗に出づる思
△あだちが原……恐ろしき事
△葦分の舟……心ぐるしき事
△あはびとは……片思の事
△あさゐとは……朝寝の事
△あだひととは……確かならぬ人
△天ぎるとは……雲の切れたる事
△あびきとは……網引く人なり

○さの部

の上加減なるを鹽梅とはいふなり。

△纏頭——藝人などに與ふる花、祝儀の事をいふ、むかし唐の天子歌舞の者を集めて舞はしむ、伎畢つて賜ふに錦を以てす、伎人之を頭に纏ふて退く故にいふ。

△尤物——俗に美人群に絶するを尤物といふ。然れども尤物とは容貌の美なるのみならず、性行の善良なるをも又尤物といふなり。

△猶豫——猶も豫も同じく獸なり、性多疑にして決斷なし、されば凡そ人事に臨み遲疑決せざる時の喩へとなす。

△油斷——佛說なり、昔し壓制なる王あり其臣に命じて一の油鉢を持ち行かしむ、途中若し傾覆して溢さば汝の頭を斷つべしと、油斷の字はこれより出づ、後世怠慢の事に用ふ。

△名刺——むかし天子に奉つる書を刺といふ、名刺の字義之より出づ。

△細君——古へ支那の國君妾を入れて大君と稱す、其臣下己れの妻を謙遜して細君といへるより起る。

△洒落——洒は洗淨の貌、落は俠活の貌、俗にさつぱりした事をいふ。又風流滑稽の意にも用ふ。

△逆鱗——昔へより天子を龍に比ふ、龍の怒るや喉下數尺の所、鱗

△さゝがにとは……蜘蛛の事
△さゝれいし……小石の事
△さがなき……惡しき事
△さかしら立つ人……賢人だてする人
△さゝめ言……さゝやく事
△さやけさとは……月の朝の事
△さばかりとは……是れほどといふ意

○きゆめみの部

△きぬ〴〵とは……あかつきの分れの事
△きゞすとは……雉の事
△弓張月とは……七八日頃の月
△夕告鳥とは……鷄の事
△峯の白雪……よそに見へ過ぐる意
△身を知る雨……涙の事
△見果てぬ夢……殘り多き事

○しの部

△しづの緒田卷……操り返す事
△しめ繩とは……かけて賴まんの意

逆立て人之れに觸るれば必らず死す、即ち天子の怒の恐ろしき有樣を形容したるものなり。

△巾幗――巾幗は元と婦人の喪服なりしを、後世一般に婦人を稱して巾幗といふ、巾幗政事家、巾幗文人といふがことし。

△指南――人を敎導する事を指南といふ、今の磁石は北を指すの製作なるも昔時の磁石は南を指したるものなり、故に道を行くに南を本位として東西南北を檢したるものなるが故に敎導を指南とはいふなり、今諸藝を敎ゆるに用ふ。

△首鼠兩端――鼠の性疑ひ深く故に穴を出づる時他の害を恐れて首を出し、一前一却するをいふ、故に事に臨みて兩端を持し決せざるものをいふ。

△荏苒――草の蔓延する事なり、故に時日の遷延して事の重なるを形容したるものなり。

△蔗境――蔗は砂糖の木なり、本の方甘味多くして末の方は甘味少しこれを食ふに末の方よりすれば次第に甘味を增して來るなり、故に文の妙所に入るを指して蔗境といふ。

△秋波――美人の流し目して情を通するをいふ、秋波とは月の事なり、婦人の目美はしくして秋月の如く澄徹するが如きをいふなり。

△信田の森……恨む事
△しでの田長……ほとゝぎすの事
△しどろもどろ……亂るゝ事

○ひもせすの部

△人の日とは……正月七日の事
△ひもす鳥……鳥の事
△もみぢ鳥……鹿の事
△ものみ鳥……鷹の事
△もゝ千鳥……鶯の事
△せみの羽衣……薄き夏衣
△末摘花……紅の事
△墨染……夕暮の事
△雀の色時……暮れ方の事

いろは俗諺

○言はぬは言ふに勝さる
○論より證據

△蛇足――蛇には元來足のなきものなり故に餘計な事をして事に益なきを蛇足といふ、專ら文章に就ていふ。

△出藍――荀子に曰く紺は藍より出でゝ藍より靑し、出藍の譽とは弟子の師より勝りたるをいふ。

△木鐸――世間に率先して事を唱ふる人をいふ、木鐸は木にて造りたる鳴物にして、村々にて用事のありし時打ち鳴らして人を呼び集むる爲めのものなり、即ち村々にて何か成すべき事ありし時打ちて衆人に告げ、世人を警醒するの用に供す。それよりして遂に社會人心を教導覺醒するの語に用ふるに至れり。

△噬臍――悔ひて及はざるの意に用ふ、後悔しても仕方がない、といふ義なり、これは麝香といふ獸に臍あり、奇香を放つ、獵夫の麝を狙ふは臍囊を採らんが爲めなり、されど麝は其の香囊を人に捕らるゝを惜みて自から臍を噬み悉く之を敗りて後死す、若し事急なれば臍を噬むの暇なし故に悔を遺すをいふ。說は聊か牽强附會に似たれども暫くこの說を存し置く。

△食言――僞言を吐く事に用ふ、されど食言とはタトエば物を食ふが如く其形を沒するなり一旦言ひたる事を行はず其形をなくするなり。

○坊主惡くければ袈裟まで
○人を見て法を説け
○譽るは譏るの基
○辯舌水の流るゝごとし
○鳥なき里の蝙蝠
○塵積りて山となる
○綸言汗のごとし
○盗人に鍮
○類を以て集まる
○驕る者久しからず
○笑ふ門に福來る
○壁に耳あり
○用愼は臆病にせよ
○立つ鳥は跡を濁さず
○良藥口に苦し
○孫は笛を吹く
○角を矯めて牛を殺す
○念力岩をも通す

△皮相——物の上部を見るのみにて能く内部を見る能はざるをいふ。

△赤繩——夫妻の縁を赤繩といふ、幽冥に天下の婚を司どる神あり、赤繩を以て夫妻の足を繋ぐといふ、俗説より出でたる語なり。

△雪隱——むかし雪竇禪師靈隱寺の廁を掃除するを司どる、之より後人廁を雪隱といふと或書に見へたり、蓋し附會の説ならんか。

△靑衿——學生の事なり、むかし支那の儒生靑き衿の衣を着たるより一般儒生を靑衿といふ、恰も蝦茶が女學生の代稱するがごとし。

△數奇——數は運命なり、奇は隻にして偶のなきをいふ、俗に不仕合を數奇といふ、即ち偶數は尋常の意にして奇數は不過の意なり。

△誰何——世の中物騒なる時交番所の前にて巡査に咎めらるゝをいふ、即ち其方は誰人であるか、何所へ行のかと吟味に遭ふをいふ。(完)

○長居は恐れあり
○落花枝に歸らず
○馬の耳に風
○うつれば變はる
○能ある鷹は爪をかくす
○唇亡びて齒さむし
○柳の枝に雪折なし
○蒔かぬ種は生へぬ

○毛を吹て疵を求む
○故きを温て新しきを知る
○辭多ければ品少し
○枝を鳴らさぬ御代
○藍より出でゝ藍より靑し
○去る者日々に疎し
○麒麟も老れば駑馬に如ず
○油斷大敵

○盲蛇におぢず
○水淸ければ魚住まず
○朱に交はれば赤くなる
○笑の中に劍あり
○卑き處に水溜まる
○燒ゆる火に薪
○善惡は友を見よ
○過たるは猶及ざるが如し

處世金言百五十種

○危難は人を富まさゞれども賢こくす
○尤も美なる果實は熟すること最も遅し
○乞はるゝまでは助言を與ふること勿れ
○赤面は有徳の色なり
○波靜かなる海にては誰れも水先になる事を得
○猫去りて鼠あらず
○仁惠は家内より始まる
○小兒と癡人は實を語る
○登らざる人は落つることなし
○勉强は幸運の母なり
○耳を廣くし舌を短くせよ
○女の顔は女の運命なり

家政門

家道繁榮法

困窮と貧賤　觀世翁

困窮は決して憂ふべき事にあらず、困窮は英傑賢才を生むの根元なり、古へより大名を成し、大事業を企てし者多くは其始め困窮の家に生れ、或は困窮の地位にありて忍耐、不屈の勇氣を奮ひし者なり、其例證は古今東西に求めて頗る類多し、故に困窮貧賤に生るゝ人は富貴滿足に生長せし人に比して寧ろ幸福なりと言はざるべからず、蓋し貧賤にして困窮なれば、日常の事萬般不自由を極めて世事意の如くならず、故に心は常に事物に向つて要求せんと欲するの念極めて切なり、故に勤苦、煩勞を厭ふ事なく忍耐以て事に當るが故に事業も成就し、隨て大名を成すに至るがごとし、之に反して富貴の家に生るゝ時は人間萬事心のまゝなれば何人も生れながらにして然る物なりと心得、曾て世途の辛酸を知らず、氣驕り志滿ち、我儘勝手に振舞ふが故に忍耐乏しく學問を修むるの苦に堪へず、事業を成就するの面倒に耐へず、身體は自然贏弱にして志氣又

○美顏は醜心を掩ふ
○火と水とはよき從僕なれども惡しき主人なり
○癡人は賢人が七年もかんがへずば答ふる事能はざる事を半時の內に問ひ得
○賢人に助言し得るものは癡人のみ
○早寢早起は人を健康に、富貴に及賢明に成す
○運命の笑ふ時に利益を取れ
○好運命は少くとも一度は人を訪ふものなり
○斷じて行へは鬼神も之を避く
○立身を爲さんと欲せば苟くも無常の心を起す勿れ
○友は年上を撰べ
○信用は信用を生む
○希望なければ熱心なし

極めて薄弱、畢竟生存競爭の實力なくして、終生碌々として醉生夢死するに至る、されば世の貧賤困窮の境遇にある者は却ッて天の己れに幸福を與へしものと觀念して奮勵すべきなり。

勉強と勞作

勤苦勞作は人間萬事成功の根本なり、蓋し天の人を造るや、決して遊惰放逸にして一生を終らしめんが爲めにあらず必らずやそれ〳〵天賦天稟の能力に隨ひて刻苦勉勵し以て其の能力を發揚すべきなり、即ち手足あり以て働らくべし、即ち腦髓あり以て思考計畫すべし、故に人の此世に生るゝや須らく夙起、夜寢以て勤勞苦役すべし、これ人の天に盡すべきの職分なり、而して天は勤勞の人に酬ゆるに必らず幸福を以てし遊惰の人に與ふるに禍殃を以てす、是れ天の人に報酬ゆる恩賞と刑罰なり、西洋の諺に曰く、人に富貴なし又貧賤なし、只勉强忍耐の人富を所有し、遊惰放逸の人貧乏を占領するのみと。

節儉の時機

世に貯蓄の必要を知るものは多し、されど其目的を達する者の割合に少きは貯蓄の時機を知らざるに坐する事多し、其故如何となれば何人も

○事を先にして得る事を後にせよ
○過去に慮り、現在に働き、未來に樂しむ
○闇黒の日も翌日に至れば變ず
○大才は大忍耐なり
○人の僕と成る能はざる者は人の主となる事能はず
○馬鹿の眞似を爲し能ふ者は怜悧者なり
○敵なき者は味方もなし
○當つて碎けよ
○濫りに親しむ勿れ
○空虚なる器は大聲を發す
○忍耐は運命に勝つ
○逆境は人を玉に成す
○時を使用するに巧ならば時の缺乏を感せず
○小事に忠は大事に忠

目前に切迫したる費途を支拂ひたる後には翌日若しくは翌月には不時の失費なきにより必らず十分の貯蓄を爲し得べしと思ひ眼前の貯蓄を爲し得べき時機を忽かせにするものなり、斯の如く現在の貯蓄を爲すこと難きものいづくんぞ後日に於て貯蓄を爲し得べけんや、抑も節儉を成すべ



き時機は唯一あるのみ、即ち今月今日の眼前に在るのみ、若し貯蓄を成して後日の用に供せんと欲せば毎日少しづゝ節儉して之を保存せざるべ

○熱誠を笑ふは熱誠を失ひたるなり
○決心の乏しきは才智のなき者と同様なり
○貧する時の友人は眞の友人なり
○熱愛は冷淡となる
○學問は何時にても遲しといふ事なし
○戀には眼なし
○何事に限らず反覆して又反覆すべし
○美名は暗中に光輝を放つ
○古諺は眞理なり
○貧者には近親なし
○川に從つて行けば海に達せん
○一錢を蓄へざる者　決して多額を持つこと能はず
○舌の辷るよりは足のすべる方却てよし

からず、明日の費用少かるべきを顧みて今日の節減をゆるがせにすべからず、故に人は時に刻々に節儉して貯蓄をなさゞるべからず、而して是を爲すには第一己れの慾に克つの忍耐を要す、我が所得の幾分を割きて貯蓄するには必らず其金額に等しき目前の便利と快樂とを退けざるべからず、若し一時の私情を滿足せしめんとして己れの慾に克つこと能はざれば他日に及びても亦同一の私情に制せられて終生節儉を爲す事能はざるべし。

分限を知る

點滴集つて大海を成し、塵埃積つて山岳となる、されば人々勤苦を積み節儉を行ひて餘裕を積貯すること歳月を重ぬるに至れば遂には鉅萬の富を致し人々の尊敬を博し、人々の信用を得、又人々の德望をも集むる事をも得べし、富は是れ力なり、金は是れ權なり、人間此の地位に至れば富の力極めて有力にして人格も自から高まり、萬事意の如くならざるなし、然れども此の際に當つて大に注意すべきは富の濫用妄使なり、富貴は人の志を滿たし、氣を驕らすの媒介物なれば、若し富足に乘じて私慾を恣まゝにし、私利を圖るときは財物は却つて他人の手に歸し其身其家を失ふに至る事あり、故に此際に當つて尤も注意要愼こそ肝要なれ、

○多く言ふ者は少く成す

○一度話さんと欲せば二度考ふべし

○人は井戸の乾くまでは水の價を知らず

○人の運の善惡は妻にあり

○佳妻は良夫をつくる

○頓智は心の電光なり

○謹愼なる婦人は眼と耳とを持たず

○時として言語は劔よりも多く人を傷く

○年功は書籍よりも知る事多し

○柔答は激怒を和らぐ

○己れを知れ

○出精はよき家產なり

○嫉妬は人を富さず

○珍膳も毎日食へば味甘からず

○書は筆法を踏まず達者なるをよしとす

即ち衣食を質素簡約にし、樂みを飽かしめず、足る事を知りて分に安んじ、身を謹みて危道に入らず、餘れるを施こし、恭謙にして人に讓り、不如意を以て其身を律し、時に陰德を行ひ、以て家門の長久福祉を希ふべきなり。



富貴に處するの道

人たる者若し財產の多きに至れば、志滿ち、意驕り、質素儉約の美德を蔑視し、又現在の富貴を以て昔日の勤勞艱苦の結果なりし事を忘却し

○貪欲を思はんよりは足る事を知れ
○人に善事を施すも報を思ふ勿れ
○淵に臨んで魚を羨まんよりは退て網を結ぶに如かず
○一錢を貯ふるは百圓を蓄ふるの基
○勞者は滋味に飽き怠者は貧乏に飽く
○貨逆つて入るものは又逆つて出づ
○久しき時を費やして得たる物は又久しく保つ
○金錢は猶蔬菜のごとし種を下さゞれば利を殖せず
○二兎を逐ふ者は一兎を得ず
○九分は足らず十分は溢ると知れ
○約束は守らざれば役に立たず。
○無益の事には決して財嚢の口を開くべからず

て萬事我儘勝手に振舞ふ事となるべき順序となるべし、此際に當つて尤も注意すべきは誘惑なり、富盛んなれば衣食住に華美を倘び、珍稀を逐ひ、壯麗を好むは人情の自然なり、人間の弱點として必らず是れに陷らざるなし、人間一度び此の誘惑に陷るや、其の慾望は益々增長して底止する所を知らざるに至る、而して一たび跌づくや、恰も高山の巔より圓石を轉ずるが如く、瞬時にして海岳の富も空に歸するに至る、奢侈の恐るべき其の例實に枚擧に遑あらず、富貴にして志滿つるの徒大に警戒せざるべけんや、抑も富んで志の滿つるは富旣に其の身を離るゝの時なり、富身を離れて狼狽するも最早遲し、されば人若し、其富を持續せしめんと欲せばよろしく其志を滿たしめざるべからざるなり。

家の計算表

一家の内には必らず家計の收支を明記せる計算表なかるべからず、收入は兎もあれ、支出は必らず明細に項目を記るして月々の統計表をつくる事肝要なり、此は經濟上のみならずこれを見て一家發達の歷史を想見し後年の參考となるべきものなり。

計算表は家計のメートルなり、又家道盛衰の測量器なり、月々、若し

○富百萬を重ぬるも一圓の身代の時を忘る勿れ
○節儉を守らんよりは寧ろ奢侈の心を去れ
○世界は各個人を教養する爲に存す
○慈愛の罪は自棄ほどに大ならず
○極端は何れへ走りても忌まる
○我家は我城なり
○不良の安逸は死よりも恥なり
○暗記は智識にあらず
○忍ぶは希望の術なり
○運命に乘ずるを知る者は必ず榮ゆ
○敎育ある人は將來の爲に活く
○多忙なる讀者は善讀者にあらず
○人は寡言に悔ひず多辯に悔ゆ
○暗夜の中には無神論者少し
○悔悟は人間の美德なり
○人の惡口は銅に刻まれ人の德行は

くは年々の計算表を見て我が家の家道が如何に進歩を爲し、又如何に發達し、又如何なる歷史を經過し來りたるかを知るべし。三年前の我が家の暮し方は如何なる狀況なりしか、五年前の我が家の經濟は如何なる狀況なりしか、當時の暮しと現在の活計とは如何に相違し居るか、或は以前は質素にして今日は贅澤にはなきか、又現今の物價と昔しの物價には如何なる相違あるや。家族の膨脹に伴ふて經濟向は如何に膨脹せしかなど仔細に知ることを得て將來の心得ともなるべきものなれば、船乘に羅針盤の必要なる如く、一家の家政者たる人は是非ともこの計算表を造りて經濟上の警戒を爲すべきものなり。

一家の收入は年々增殖して行くもその割合に貯金も出來ず、又別段家道の饒かになりたる徵も見へざるは何かの原因あるべし、その原因を知るべき第一の手段は計算表を見るに若くものなし。計算表の面には厘毛の詐りもなく金錢の行き所ろ一々判然して善惡是非立どころに明かなるべし。日々の賄ひに消へて行きし金、衣服身の廻りの費へとなりし金、遊樂交際上に費へし金、或は何、或は何と、些末な事柄に消へし金も月月年々に積りて見れば隨分驚ろくべき高となりて、一年の暮には吃くりするものなり。成程雜用といふものは馬鹿にならぬものと合點して始めて以後の注意を爲すに至る。これ實に計算表が敎へる敎訓にして。この

流に記さる

○艱難に遭はざれば自己を知らず

○考へ過せば事を成さず

○徐かに急げ

○誹謗は大人の伴侶なり

○世には純樂もなし又純苦もなし

○金は身體の鏡なり

○人は想像するほどに幸福なる者にあらず又不幸なる者にあらず

○己れの伎倆を隠くし得るは大なる伎倆なり

○金錢を愛する心は金錢を増すに從ていよ〳〵増す

○儉約は安靜の基にして又仁惠の根元なり

○分に安んじて福を養へ

○珠玉寳にあらず節儉寳なり

○怠惰者は呼吸すれども生活せず

表に依らざれば決して斯る教訓は得られぬものなり。

されば眞成に家を持つ人はまづ此の計算表を造り、表を見て以前の事を知り、表を見て將來の家計を案じ行くべし。

庶物整理法

桂香女史

凡そ一家内に藏する諸の調度類は、一として吾人の生活に必要ならぬはなく、又た必要あればこそ備へ置くものなれば、之が取扱方には能く注意せざるべからず。即ち取扱ひ丁寧なれば、永く保つものも、取扱ひ疎漏なれば破損腐蝕して、更に買ひ換へねばならぬ等、其の經濟上に及ぼす利害極めて大なるものあり。況んや物によりては保存を良くして古くなればなる程、却て價値を増して、珍重せらるゝものあるに於てをや。故に家庭整理の局にある者は、能く玆に心を用ゐて、一物一品も疎末に扱はず、綿密周到の注意を以て整頓、保存し、又た器具其物の性質に考へて之を處理せざる可からず。是れ實に家庭にとりて當然の事務なりと知るべし。據て左に吾人の經驗に基く調度の取扱方を述んとす。

○額に汗して食ふは人生の大義なり
○如何に廉なるも無用の物は猶高價なり
○死後の名は生前の富に如かず
○庖厨を小くすれば家産を大くす
○天は萬物を人に與へずして其働きに與ふ
○勞働を除けば天事空し
○卑賤なる地位は功名の階梯なり
○節儉の一錢は儲けたる一錢なり
○鐵の熱ますする中に打て
○我れに敵する者は我れを強くす
○行ふに速かなるべく約するに遲かるべし
○點滴も間斷なく落つる時は遂に石を穿つ
○成功の秘訣は目的の不變にあり
○時日と忍耐とは桑葉を錦となす

▲家具什器　は衣食住の用途に從つて大別し、豫め其の目錄を作り置くべし。使用後は、能く拂ひ又は拭ひて、陶器漆器なれば一々紙に包みて、取り藏むべし。不注意に取扱へば、物品の毀損速かなるのみならず、不潔にして衞生上に害あり、殊に食器の取扱は清潔にせざる可からず、



又た調度はすべて其の置場所藏ひ場所を一定して、濫多に變換すべからず。かくせば必要に應じて直ちに用に立ち、頗る便利なり。入用に迫つても其物見當らず、可惜時間を詮索に費すが如きは、愚者のする事、不

○失望は愚者の斷案なり
○勞苦なければ希望なし
○功名の道は才能の人に用ひるべし
○利を得るの多少を考ふ者は大事を成し得ず
○英才は一種の才にあらず普通の才の奮發したる者なり
○時間は資本なり
○言論を以て人に勝たんと欲せば多辯なるべからず
○書狀は成可く短かく書せ、返事は成可く早くせよ
○拙劣の交際は無沙汰なり
○愛嬌は多辯にあらず
○曾て我は時間を徒費せり今は時間我れを徒費す
○目的は手段を正當にす
○貧困と不節儉と同行す

斷の注意が大事なり、譬へば、晴衣の入りたる長櫃は甲所、不斷衣の入りたる簞笥は乙所、食器を藏めたる戸棚は丙所、客用夜具を入れ置くべき押入は丁所、雜具の置き場所は戊所といふ如く、部署し置き、且つ簞笥の第一の抽斗には外套類、第二には上衣類と云ふやうに定め置き、戸棚も上段の左側には菓子類、右側には砂糖類、下段には茶、珈琲、抽斗には小皿、小盃などゝ區分し置きて、其の秩序を亂さゞれば、火急非常の場合にも、決して狼狽混雜の虞なし、また物品を使用後藏むべき所に藏めずして其儘になし置く故に、破損紛失等の過ちを仕出來すなれば、能く〳〵注意すべし。

▲日用の道具　は眞に必要缺く可からざる物を、只、一ト通り丈備へれば足る、決して同じ道具を二個以上置くべからず、二個以上あれば整理に面倒なるのみならず、餘計にあると云ふ所から自然注意が疎略になるを免れねば、かくては物品經濟の道にも違ふと知るべし。

▲移轉　の場合に調度を取片くるのは、先づ小さき物は、能く調べて長櫃に入れ、搖れても差支なきやう確りと詰め合すか、又は籠長持に能く詰め込みて、上より敷物の類をかけ、細引縄にて括るべし。荷物はなるべく大きく作りて、紛失せぬやうに取纏めて、さて一々番號札を附して、運搬人に渡すべし。又た運送の順序は、第一に洒掃の具一式及び鍋、

○小利は克く大事を成す

○弓に二條の弦を備ふべし

○名聞を求むるよりは實力を養へよ

フランクリン 家庭金言

△今日の一日は明日の二日に價す

△汝若し自己の欲する忠僕を得んと欲せば先づ汝自ら忠實ならざるべからず

△夙に起き早く眠るは人をして富と健康と智識を得せしむる所以なり

△精勤は必らずしも希望を要せず、希望の爲めに生存する者は斷食しつゝ遂に死亡するに至らん。

△汝若し自ら良心を害せんか、遂に其の復讐を蒙るに至らん。

△懶惰なる者は緩漫に歩行し遂に貧

釜、土瓶、火鉢の類を送り、第二には大切の貴重品、第三には當期入用の物品、第四には當期不必要の物品を送るべし、是れ物馴れたる經驗家の敎ふる所なり。物品を取下す時には、能く注意して靜かに取扱はしむべし。積載す時よりも、下す時に、毀損し易きものなれば注意すべし。又た持運びの際、物に打付けて毀したり、擦り切つたりすることなきやう、注意すべし。又た火災其他の變事に備ふる爲め、調度を藏むべき土藏の無き家に在ては、大切の品は成べく手近に置き、非常の時に速かに持出さるゝやうに豫て始末し置くべし、もし不在がちの人ならば、己に代るべき家人に、貴重の品の所在を告げ置くべし、麻繩風呂敷の類は、斯る場合に必要なれば、平生心掛て用意し置くべし。

▲物品の貸與　人に物品を貸與する時は、先づ其品を一々改め、能く拂ひ又は拭ひて、損所又は數の不足等あらば、其の由を先方へ言ひて貸し遣はすべし。なほ取出す時に、器具の目錄書を引合せ、何年何月某日、誰某に貸與と覺書の附箋を施し置き、返濟されたる時に及んで、之を剝ぎ取るべし、數個の品を貸與する時は、別に目錄書を調製して、之を添へて貸與すべし、書籍を貸す場合にも、亦た此の心得を用ふべし。

▲物品の借用　人より物品を借用する場合には、先づ其の物品を能く改めて、數、損所等を持主に告げて受取るべし。使用し終らば丁寧に拭

乏神に追つかる

△勤勉は負債を償還し得るも失望は之を增加せしむるものなり

△富は之れを所持するものに屬せず寧ろ之を樂しむ者に歸着す

△己れが慾望に向つて拒絕せよ

△金錢の効用は之によりて生ずる有ゆる利益之なり。

△勤を取るもの野人にあらず、萬事を野卑ならしむる者野人なり

△今日の中に勤勞せよ蓋し汝は明日如何なる障害に接するや計り難し

△生命保險は家族の爲め準備金を設くるの最安全簡易の方法なり夥多の寡婦や孤獨は其父が生命保險に加入せし事を感謝せよ

△世には懸河の辯を持ちながら　商の道理を有せざる論士尠からず

きて、速かに返却すべし。殊に運搬に注意して、途中に於て紛失若くは破損する等の事なきやうすべし。衣類を借りたる時は、能く火熨をかけ、汚點などの附きたるや否やを檢して、速かに返却すべし。又た書籍を借りたる時は、手垢を附けざるは勿論、折目をつけず、皺をよせず、丁寧に取扱ひて、讀み終れば直ちに返却すべし、世に類無き珍書や寫本の類を借用したる場合は殊に然りとす。

▲金屬の器具　に錆の着きたるを除くには山梔子若くは菠薐草、蕎麥粉等を入れて、煮るをよしとす、總じて鑛物類に濕氣のつくときは、忽ちに錆を生ずるものなれば、能く注意して、若し濕氣のつきたりと見ば猶豫せずに拭ひ去るべし。且つ鑄物は凹みの出來たがるものなれば、取扱ひを丁寧にすべし。

▲金銀製の器　は總て質軟きものなれば使用後、乾きたる軟き布を以て能く拭ふべし。又た曇り、汚點などの出來たる時は、湯にて靜かに煮布巾若くは海綿、ナメシ革の類にて、徐かに洗ふをよしとす、麁製の磨粉などにて洗へば、疵を生ずることあれば注意すべし。

▲銅、眞鍮の器具　は綠靑を生じ易し、こは衞生上有害のものなれば注意すべし、銅眞鍮の器にて湯を沸かす時は、使用後、能く拭ひて乾かすべし、濕氣よりも綠靑を生ずることあれば、水氣を其儘になし置くべ

客間の禮法

（一）假令、かりそめの訪問なりとも、外套、または靴のまゝにてあるはよろしからす。また、暫時の訪問ならば、帽とステッキとは携へゆくべしと雖、洋傘は持たぬをよしとす。

（二）集まれる凡ての人々に、握手せんとすると勿れ。主婦主人より手を出さばこれに挨拶すべしと雖も他は辭儀にて足れり。

（三）如何なる場合と雖も決して男子より婦人に握手を與ふること勿れ。握手は常に先づ婦人よりなすべきものなり。なほ凡て年長者、または高位高官の人々には、かなたの手を伸ぶる迄は、われより決してさし出づべきものにあらず。

（四）主人婦人ならば、客の帽、ステッキ等には氣を配らすともよし。これらは男子自ら處置するを正しとすればなり。

（五）あわてゝ倚子につくはよろしからす、優美に、閑雅に普通につくべし。然れば談話にも便利の姿勢を保つことを得。

（六）額、器物、其の他何にても凝視すること勿れ。勿論對面の人をも凝視するは無禮なり

からず。

▲鐵瓶　を取扱ふには、毎朝湯を上より濺ぎかくべし。鐵色麗しくなりて、且斑點を生ずることなし、又湯垢の着きたる時は、曹達少しを入れて沸騰せしめ、一晩を經たる後、徐々と洗ふべし。土瓶も同様なり。



▲錫器　は使用後直ちに乾かすべし、然らざれば濕氣の溜りたる所より錆を生じて、腐敗する恐あり、又た錫をかけたる器も同斷なり、錫器は殊に凹み易きものなれば、取扱ひに注意を要す。

（七）婦人が室に入り來りたる時は起ちて迎ふべし。

（八）足を組みて座すること勿れ。

（九）椅子を後ろ足のみにてたゝしみるゝこと勿れ。靜肅に閑雅に座すべし。

（一〇）絶えず足をうごかし、手にて種々のものを弄すること勿れ。

下婢禁制三十二個條

1 火の用心、清潔、

2 むだ火を焚かぬ様に不必要の火はよく心得て火消壺へ入れる事

3 臺所にて湯をたぎらすべからず

4 火を熾す時には靜かに團扇を使ひあたりの食物等に塵のかゝらぬ様必らず蓋をして置くべし

5 物の置場所を定めて、出し入れにまごつかぬ樣注意すべし

▲漆器　は濕氣を忌む故、永く湯水に浸し置く時は剝げ落つるに至るべし。使用後は必ず乾きたる布片もて拭ひ、曇りを殘さぬやうになすべし。又た膳椀、重箱の類は、一つ〳〵間紙を入れ、丁寧に包みて仕舞ふべし。蒔繪類は、軟かなる布片にて包むをよしとす。漆器の臭氣を除くには、米泔水を微温めて濺ぎかくるか、又は數日米櫃の中に埋め置くべし、また豆滓にて洗ふも効あり。漆器に肉類の脂肪の着きたるを除くには、青菜の葉を以て洗ふべし。陶器も亦た同樣にしてよし。

▲陶器　を購求めたら使用前先づ沸湯中に入れて煮出すべし、其の法は釜に水を入れ、食鹽を少し加へ、弱火にてソロ〳〵と煮るなり、かくすれば其の質鈍くなりて容易に破損せざる効あり。茶碗、皿の類は一つ一つに間紙を入れ、一組毎に箱に藏めて、其上に品類と箇數とを記し置くべし、保存上宜しきのみならず出入にも便利なり。陶器に茶澁の固着したるを除くには、灰汁にて煮たる後、其の灰汁にて洗ふべし。又生灰を水に和し、菜の苔帚、布片等にて洗ふてもよし。

▲硝子器　も矢張使用に先だちて煮るをよしとす、硝子器に着きたる白黄色の垢を除くには、鹽酸を水にて薄く解きて洗ふをよしとす、乳汁を入れたるものは、少量の灰汁を水に和して洗ふをよしとす。又た陶器硝子器の破れたるをつぐには、鷄卵の白身に、生石灰を少しく混せ、

6 水瓶には蓋を忘れぬ様にすべし水道の栓を拔き放にすべからず

7 食物を納ひ置く時は嚴重に蓋を爲し置くべし、鼠につけられぬ用心肝要なり。又物を荒く扱ふ勿れ

8 御飯を取りたる釜へは、あとへ必らず水を入れ置くべし

9 汚れた茶碗などは直ぐに其場で洗ふ事、必らず物をカチ合すべからず

10 鐵瓶を空にして置く事無用

11 一度洗つた器物と雖も四五日使はなかつたものは再び洗ふて使ふ事

12 雜巾と布巾とは嚴しく區別してこれをすゝぐ盥も別にすべし

13 飯臺、箸、柄杓、杓子、土瓶の蔓などは常によく洗ひ手垢のつかぬ様注意すべし

乾酪の少量を加へて練り、糊となして、破目に塗り、繼ぎ合はす可し。

▲簞笥、本箱 の類に桐製のものを撰ぶは、濕氣を導くこと少ければなり、是等の木具は時々空氣に曝すべし。又た拭ふには乾燥せる軟かき布片を用ふべし。

▲飯櫃、盥、桶 の類は、時々天日に乾すべしと雖も、日光を強く受くる時は、乾割を生じて、用ひ難きに至る故、注意すべし。米櫃も、時々掃除して乾きたる空氣にあて、米を入れ替ふる時は、陳き米の上に新しき米を入れざるやうにし、若し一所に入るゝ時には澁紙にて、しきりすべし。又米櫃は、新しき米を入るゝ毎に、隅々に附着せる糠を能く拂ひ落して入るべし。上へ上へと入るゝ時は、陳き糠は蒸れて腐敗するに至るものなれば、是亦注意を要す。

▲竈 は炊事の本尊なれば毎朝淸潔に掃除し、使用後は火氣の殘らぬやうに注意すべし。火鉢、煙草盆の類も、毎朝能く灰を篩ひ、緣は布片にて丁寧に拭き、灰吹はたまらぬ内にあけて、水少し入れ置くべし。

▲花瓶 の水は時々取換へざるべからず。挿したる儘にて久しく打棄て置く時は、瓶中の水腐敗して、臭氣を生じ、木澁、花瓶の口に附着して、容易に除れぬやうになる故、早く新しき水を供給すべし。

▲洋燈 は毎日掃除を丁寧にし、心もよく切り去り、油壺は時々灰汁

14 一週に一度茶碗類は磨き粉を使ふて洗ふべし

15 味噌汁を鍋の儘にて翌日まで持ち越す事無用

16 香の物を切りたる儘俎板の上に晒らし置く事禁物

17 晴天にはなるべく日光を臺所へ通すやう心かくべし

右の條々臺所の見易き處ろに貼り付け每日氣をつけて見るべし

〰〰〰〰〰〰〰

1 身體を淸潔にすべし

2 何事も手早くすべし

3 掃除の時には隅の所に念を入れて掃くべし、机、其他の物は靜かに取り除けて掃除し又元のやうに置くべし

4 雜巾がけは板の木目なりに同じ所にて洗ひ、布片にて拭くべし、火室に少しにても水氣の殘る時は、點火後直ちに破裂すべければ、注意すべし。

▲傘　は在來の紙張と、洋傘とを問はず、すべて雨にぬれたる時は、能く拭いて乾かすべし。日傘は使用の都度能く塵埃を拂ふやうにすべし但し雨傘と日傘は別々になし置く方德用なり、晴雨共に用ゆる時は地質を脆弱ならしむる故、兼用すべからず。

▲靴　は使用後、能く拭ひ、靴墨を塗つてから藏むべし。拭きかたゾンザイなれば外見の惡きのみならず、其の保ち方にも損なり、足駄の汚れを掃除するには、鼻緒を拔取り置きて、洗ひ、乾かして後、更に緒をすげるべし。疊附の駒下駄は、一々鼻緒を取る譯に行かねば、緒の所を紙にくるみて、疊の面を拭き、臺のみを洗ふべし。但し疊附は日に當てると疊赤くなる故、陰干になすべし。

▲硯　は時々洗ひて使用すべし。墨の滓の溜りたるは墨色も惡く、筆の切るゝことも速かなり。筆も使用の都度能く洗ひ置くべし。

▲書籍　は各部門に分ちて、書名を目錄書に登記し置くを便とす、之を保存するには每年秋晴の候に、能く虫干して、濕氣、蟲害等を除くべし。又た書畫の軸物、額面等も書籍と同じく每年一度は土用干を行ふべし。最も大切なる品は桐の箱に藏め、樟腦を入れ置くべし。

を二度づゝふきて、丁寧になすべし、

5 毎朝ランプの掃除をすべし、ランプは丁寧に取扱ひ、ホヤは筋のつかぬ樣に拭くべし、その時石油をこぼさぬやう注意すべし

6 暇あれば洗濯物に氣をつけよ

7 鏡臺、頭の物、香水等の置き所には決して食物を置くべからず

8 髮の毛の散らぬ樣に注意すべし

9 紙屑を掃き捨つるべからず。

10 呼ばれた時には返事をすぐにハッキリと申しあぐべし

11 臺所に出入する物賣、魚屋八百屋と無駄話をすべからず

12 井戸端にて汚物を洗ふ勿れ

13 雨降の上りたる時は下駄を洗ひ傘をほすべし

▲鏡の曇りたるは婦德の汚れとも言ふ位なれば、毎朝よく拭ふべし櫛筺もまた掃除を怠るべからず、櫛の齒も丁寧に掃除して、垢の溜らぬやうになし置くべし、鼈甲の櫛は軟かき紙にてくるみ、小さき板の間に挿み、紐にて卷きて仕舞ひ置くべし、鼈甲は湯氣に蒸さるゝ時はうきの



出るものなれば、挿したるまゝにて入浴すべからず。又た珊瑚珠の汚れたるは、薄き味噌汁にて洗ふべし。鼈甲、象牙類は湯にて洗ふべからず冷水にて能く洗ふべし。

14 主人夫婦に對して何か申しあぐる時は襷をはづし座りてからにすべし

15 御客樣を取次ぐ時は丁寧に速かにすべし

16 常に言葉遣擧動をつゝしみ正直に働くべし

右の條々女中部屋の見易き處ろに貯りつけ置き毎日氣をつけて見るべし右の個條實行出來る樣になれば、家の政は一人にて取れるものなりと心得べし。

化粧の心得

身じまひは婦人の大切のつとめの一であります、身じまいの意義は身のまはりを奇麗に繕ふことを申すので、其には身體を清潔にすることが必要であるし、容姿を優美にすることも

家具の保存法

家財道具の保存に注意すれば一家の經濟上は勿論、併せて、それが家庭に於ける一つの趣味であり、來訪者などにも確に快感を與へ、自然一家の品位も、爲めに高まりゆくやうのことにもなる。彼の汁椀の内外に木地を現はしたる、飯茶碗の地色を失ひたる、膳や盆の此處彼處に浸染の群點を見るなどは、同なじ御馳走に預りながら、これ式の器具では、何となく折角の美味も、それ程でなき感じのするは普通であらう。して見ると、是等家財道具の保存は日常よく注意すべきことゝ思ふ。西洋では疾くより家財道具用の保存に供する藥劑が行れて居るのであるが、未だ我邦には、茶器の如き手間暇にも構はず手入れといふことが行はれ居る外、これぞと言ふ方法がないが、外國流に行つて見たら、よからうと思ふ、紫檀類の器具などにはタルペンチン油を麻布の片につけて拭けば光澤がよく保存さるゝ。また赤色の器具に用ゐるときは右の油にアルカチット少々を浸し、薄い桔梗色位になりたらば、これに白蠟なり、黃蠟なりの塊片を少々入れて溶し、その液を硬糊位の度となし豆粒位づゝを布巾につけて擦りつけ後、毛布の片で拭くとよろしい。それから胡桃樹製のもの、大理石製ワニスを塗りたる金屬製等のものにはタルペンチン

必要であるし、従つて白粉も塗ればならぬし、紅脂も點さればならぬし、又た衣服も粧はればならぬし、髪も飾らればならぬと申す様な譯で、いろ〳〵手數のかゝることであります、併しすべて世の中の仕事には夫々法のあるもので、身じまひも其の法にさへ従へば、存外手數が省けて、家事の忙しい中でも、容易に行へるものですから、これより其の身じまひの致し方、心得の様な事を少し許り御傳授申上げませう。

▲石鹸　身體を清潔にするには、先づ湯に這入て垢を洗ひ落すことが肝腎です、垢を落す爲の道具は、石鹸、鶏卵、糠、洗粉、垢擦、海綿、糸瓜などいろ〳〵ありますが、近年は石鹸ばかりが跋扈致し、何でも彼でも石鹸でなければならぬ様に重寶がられて居ります、成程石鹸は効能のある物に違ひありませぬが、中には随分皮膚を害する様な粗悪なものがありますから之を選ぶには餘程注意して良いのを求めねば不可ませぬ、私の經驗によると、石鹸よりか米糠の方が効能もあり、又た皮膚の爲にも宜い様

油に、白蠟か黄蠟の塊片を溶し前の如く硬糊位の度合にして用ゐること右の通りにすると光澤を放つて美しくなる。なほ液の用量は一時に多くはよろしからず必ず豆粒大位づゝ用ゐること。シテ毛布で拭いた後更に麻布の片で擦すると仕上げがよくなる。

衣服の調製

附、洗濯と汚拔き

敲玉女史

▲衣服を調製するに當りては、第一に品質の宜しきを撰び、次に染色、縞柄、模様等のふさはしきを選び、又たよく氣候と人品と年齢とに考へて、適當なる物を選ばざる可からず、かの濫りに流行を追ふが如きは最も不可なり。

▲毛布は、纖緯細くして、彈力ある故に、輕暖にして柔軟、容易に濕氣を通さず、且つ皮膚の蒸氣を發散せしめ、能く體温を保つの効あるを以て、老人小兒には之を用ふるを可とす、また防寒用としては之に優るものなしと知るべし。

▲絹布は、輕軟美麗、最も肌に適すれど、價高く、且つ洗濯に不便なれ

です。

▲白粉にも御園だとか、すみれだとか、水晶だとか、花王だとか、都の花だとか、いろいろの物があります、是等の内には煉白粉もあるし、粉白粉もあるし、又た水白粉もありますが、何れなりと御意に召したのを御用ひなつて差支ありませぬ。白粉の仕方は先づよく顔を洗ひ、生際の髪毛をかき上げて顔や首筋にかゝらぬ様にして置き、さて第一に鼻の上より塗り始めて、頬、額、顋と順序よく塗り弘めてゆき、鼻丈を特に濃くして、其餘の場所は薄く付け、一ヶ所づゝ手の掌或は指先にて能く擦り込み、眉毛や額際などの毛の中に白粉の付かぬ様に注意し、顔の生際の所は際立たぬ程にうすく塗り、首は顔よりも濃い位にして生際を判然と劃て、塗り終つた所で搾つた手拭でソツと拭いて上面に浮かぶ粉を去り、終に眉刷毛を濕して、一面にムラのない様に掃き平げ、薄い所へは粉白粉をつけて繕ひ、最後に鼻叩の刷毛で、粉白粉を鼻の上に叩きつけるのです。

ば、外出着としては兎も角、不斷着に之を用ふるは不經濟の甚しきものなり、たとへ、富貴の家といへども、常に之を用ふれば、遂に産を破るに至るべし、況んや中等以下の家庭に於てをや。

▲綿布は、重く硬く、外觀絹布の如く美ならざれど、價ひ廉にして洗濯に便利なれば、最も經濟向なり、且つ熱の不導體にして、能く體温を保ては、不斷着に適せり、されど、毛布の如き彈力を有せず、濕氣を吸收する質ある故に、數々洗濯して用ふべし。

▲麻布は、體温を洩らすこと容易にして、能く皮膚の水分及び空氣中の濕氣を吸收し、且つ之を蒸散すること最も速なるが故に、夏季の衣服としては淸涼を感じ、着心よけれども、直接に皮膚に着くるは、衞生に害あれば、注意すべし。

▲小兒の衣服は、可成く輕くして、軟かなる物を用ふべし、衞生上より言へば、唐木綿もよけれど、地織木綿最もよし、殊に直接に肌に着くる物には、地薄き綿布を選ぶべし。小兒には、常に手足の自由を利かせざる可からざるをもて、綿重く袖長き物を着せては、發育上に害あり、最も注意を要す。

▲脱ぎたる衣服は、直ちに疊む可らず。先づ暫らくは、衣桁又は衣紋竿等に掛け置き、能く空氣に曝らして、然る後疊む可し。若し脱棄ての着

▲湯化粧と申すのは入浴時に淡泊と致す化粧の事で、其の仕様は湯をつかひ糠袋で顔を丁寧に洗つて、白粉を薄くつけ、まて手拭を熱き湯で搾り、化粧した上を押さへて置くのであります、斯う致すと顔の色がホンノリと櫻色に成つて、大層奇麗に見えます。

▲糠袋の使ひ方は、顔に強くあてゝ擦つては理をわるくしますから、靜かに柔かにお使ひなさい、靜かに廻して使へば、糠汁の出が好い許でなく、理を細かにし、顔に光澤を出します、但し此の糠袋の中へ洗ひ粉を入れて、顔肌を洗ふと、垢をよく去り、色を白くし理を細かにしますから、試して御覽なさい。

▲臙脂は血色を補ひ、肉色を麗しくし、又た唇端に塗けては一點の美を添えて所謂丹花の唇をなすのですから、白粉に次いで必要な化粧品であります、臙脂の付け樣は、上下唇の外廻りを濃く鮮かに引きて、外側より次第に半分許薄く着け、ちよつと舌を出して舐めると、丁度善い鹽梅になります、紅で有名なのは京都の小町紅で、近頃は又た佛國製の

物を直ぐ樣、濕氣も去らずに垢つき汚れたる儘にて、疊み藏むる時は、品質を傷め、色澤を惡くするのみならず、體氣の發散を妨げて、爲めに疾病を釀すことあれば、心せざる可からず。

▲又た衣類を藏むる時には、襟、紋所、縫入の箇所等に白紙を挿み置くべし。然らざれば、汚水の他へ移り、また紋所黒み、縫糸の色變りなどして、見苦しくなるものなり、但し間紙には糊氣少くして、油を吸收する質の紙を用ふべし、奉書は糊多ければ用ふ可からず、また長く藏ひ置くには、必ず掛襟をはづして後、藏ふべし。

▲麻布、生絹の類は、とりわけ皺つき易し、若し皺を生じたる時は、霧を吹きて、皺を伸し、衣紋竿に掛けて、畧ぼ乾きたる時、取り下して、再び疊み、壓を置き、更に掛け乾して、十分乾上るを待つて、藏むべし。又た綿入などの皺は、火熨を當て、掛け乾にして、暫時空氣に觸れしめたる後に、疊むべし。なほ夏服にても、褪め易き色物は、霧を吹かず、火熨丈して、壓を置くべし。

▲衣服を藏むる器は、桐製の簞笥、長櫃最もよし、又背負葛籠は非常の場合に便利なり、置場所は土藏にても納戸にてもよけれど、成可く南面に置くべし、床低き所なれば、殊に其の器の下に、枕木を敷き置くべし。然らざれば濕氣の昇ること速かにして、衣類を損ず、注意すべし。

▲夜具蒲團の類を藏ふには、使用後、直ちに疊まず、暫らく空氣にあて、温氣を發散せしめ、汚塵を拂ひ去りたる後に、取り藏むべし。又た夜具の類は、時々日光に曝して、濕氣を除くべし。之を怠る時は體温に

「ホマーデ」と云ふ口紅が流行致して居ます。

▲眉のお粧り　眉も容貌に影響するものですから、出來る丈は自分で形を付けてお粧りをするが宜しう御在ます、中でも眉の薄いのは一番困りますから、斯う云ふ方は黛を塗けて濃く見せるのです、黛は賣品にもありますが、自分でお拵へなすつても宜い、其法は、青花を大きな蛤貝に二杯、油煙を中位の蛤貝に二杯、金箔を二十枚、此の三種を上等の胡麻油で、能く煉つて黒々と成た所で、錫の罐に密封し、約そ二日ばかり地下へ埋めて置くのです。

▲額と襟　額付と襟元とは全體の縹緻に大關係のあるものですから、是又た手入の必要があります、額と襟は化粧致す前に能く剃刀で剃りつけなければなりませんが、先づ額の剃り方は、雁額、富士額、丸額など人々の額の生際に隨つて形よくお剃りなさい、襟にも矢張、並及り、丸及り、三つあしなど色々のがありますから、其の形に隨つて素直にお剃りなさい、强て形を作りますと、不自然に陥

蒸されて、一種の臭氣を醸し、爲めに健康を害するに至る、注意すべし。

▲裁縫をなすに當りては、針の取扱ひに注意すべし。一本の針と雖も疎末にして紛失するやうのことあるべからず、之が爲めに小兒などの意外の怪我をなすことあれば、よく〳〵注意すべし、故に仕事に取掛らんとする時には、先づ針刺の針を勘定して、さて終る時にも一々調べ見て、取片づくべし。

▲又た布の切端、短き絲屑と雖も、疎末にすべからず、絹布の裁片は、これを綴合せて坐蒲團、小兒の袖無羽織、等とし、或は袋、臂衝などにもなるべし、又た短き糸屑も、暇を見て繋ぎ置く時は、機の緯となるべし、其他麻糸の屑、紙の裁片と雖も、取集めて紙縒となし置けば、重寶を感ずべし、すべて家政は何によらず、丹念が必要なり。

▲衣類を洗濯するには、地質や色合等によりて注意を異にすべし、又良き品と悪しき品とは別々の盥に入るべし。白き物と染色の物とは、一緒に洗ふべからず、洗ひたる後は冷水にて能く灌ぐべし、洗方よしとても、灌ぎ方ぞんざいなれば、一旦脱れたる垢も、再び附着して、其の色澤を失ふべし、但し洗濯に用ふる水は、雨水最もよく、河水之に次ぐ。鐡分鹽分石灰泥土等を混じたる水は決して用ふべからず。

▲絹布を洗ふには、石鹸を溶かしたる温湯か、又は微温湯の灰汁に浸し置きて、さて、其絹をそつと抓みて、打ちながら、擦るやうにして洗ふべし。洗ひ終れば湯にて灌ぎ、更に水にて幾度も能く灌ぐべし、然れども絹類は木綿と違ひ一度水に入れゝば、多少其の地質色合等を損ずるも

つて却て醜くなります、さて又額の化粧法は、お出額でしたら、白粉に少し青味を加へて、他の箇所よりも稍々薄目に付るのであります、又た額の廣い人は、黛で生際の所から限を取る樣にするのであります。生際の薄いのを隠すにも矢張黛を用ゐるが宜しう御在ます。

▲髪の洗ひ方　御婦人の頭髪は無性にして置くと、臭氣を生じ健康を害しますから、度々お洗ひなさい、其の洗ひ方は普通フノリと温飩の粉を熱湯に溶解いて洗ひますが、濡れ烏の様に光澤を出さうと云ふには、先づ頭を冷水に浸し、能く洗つてから、豌豆の粉を一握程髪にふりかけ、水を灌ぎながら約十分間程こすりつけ、泡立つを待つて淨水をそゝぎ、奇麗に洗ひ落し、次に地の荒い布で能く水氣を拭き取つて了ふのです、此の法を用ひますと、どんなに汚れた髪でも、見違へる程清潔に成つて、サヘ〳〵致します。

▲顔色を好くする法　色の白いは七難隠すといふ位のもので、顔の色の善悪は縹緻の上に影響を與へるものですから、觀映のお

のなれば、屢々洗濯すべからず。

▲白色の絹類を洗ふには、石鹸湯か、又は米泔水と灰汁とを混じたる微温湯中に能く浸け置きて洗ふべし、濯ぎ方は殊に丁寧になすべし、但し灰汁は速かに垢を除く効あれども、地質を損ふ虞あれば品質の弱き物には用ふ可からず。

▲衣類の油垢を落すには、熱湯に鹽一握を入れ、能く振りて、湯の少し冷めたる時に洗ふべし。又た饂飩の湯、微温灰汁等も効あり。甚しく垢の固着したる物は、熱灰汁にて洗ふをよしとすれど、地質を傷むる恐あれば、大抵の物は、冷灰汁か微温の灰汁にて洗ふべし。

▲衣服の乾燥に用ふる張板は、能く洗ひ、能く拭ひて後、張物すべし。少しにても、板に汚れある時は其の汚れ忽ちに張りたる布に移りて、折角の洗濯を臺無しにすることあり、又張板は日當りよき場所を選び、且つ布目の曲り、經緯の糸の捩れなどせざるやう丁寧に張るべし、但し良き品になれば、籭子張を用ふべきものと知るべし。

▲火熨をかくるには、其の地の縮まず、又伸び過ぎぬ程に引伸ばしながらかくべし、火熨する時に附きたる皺は、容易に伸び難きものなり。又絹布類には、紙又は金巾等を敷きて、其上より火熨すべし。然かせざる時は、薄き地質の物は忽ちに焦る恐あり、注意すべし。又た絹布類の皺を伸すには、湯熨を施すべし。

▲衣類に雨のかゝりたる時は、直ちに手拭を清き水にて絞り、濡れたる所と、乾ける所との間を擦りて、けぢめの分らざるやうにし、さて、美

出額や反齒は直されぬものとしても、詰て顏色丈は見好くしたいものであります。土臺の顏色が醜くては、いくら白粉の力を假りた所が奇麗に粧ふことは出來ません、ソンナラ何うしたら宜しいかと申すに、其の法は常に新鮮なる空氣を吸ひ、運動をよくして、體を丈夫にし、又た度々湯に這入つて毛穴を清潔にして置くこと、次に顏を洗ふ水に注意して汚れた水は決して用ひぬ樣にすることです、化粧の水としては雨水が第一等です、併し雨水が得られなかつたらたゞの水へ硼砂を一匙位入れて使ふのです、斯う致すとドンナ粗い水でも奇妙に柔かになります、それから化粧水として効能のあるのは牛乳へ張る薄皮、大燕麥、リスリンなどです中でも大燕麥は一番よい相ですが、之を使ひますには、掌で其の粉を練つて、堅糊の樣にし、それで顏をゴシ〳〵洗ふのです、なほ御注意までに申して置きますが、火の傍に近く顏を差付ける癖は、皮膚を粘くし延いて顏色をわるくします、又は花牌なぞに凝つて徹夜致し翌日寢通す樣な馬鹿な眞似を致すと、直ぐに顏色に響いて來ますから、平生の攝生が肝要であります。

濃紙を其上に置きて、ぬるき火にて火熨をかくべし。但し色の替り易き物は、乾きたる手拭にて、擦るべし。

▲衣類の襟垢を除くには、軟かき餅を少し暖めたるか、さなくば燒たて

▲麵包の軟き所にて拭ふべし。又た垢の甚しく着きたる物は、揮發油をの片に浸し、垢の上を擦りて、然る後微温湯もて濯ぐべし。

布酒のかゝりたる時は、煙草の烟を吹かくべし、奇妙に効あり、又、酒汚點の出來たる時は、豆を煮たる水に、半日許り、浸し置きて、清水にて徐かに洗ふべし。醬油のかゝりたるは、吸ひとればよし、多量にかゝりたる時は、左右より引張りて、其上より湯を濺ぎかくべし。

▲又た油ジミの出來たる時は、其の衣類に海蘿を包みて、湯にて徐々と揉みて後、清水にて濯ぐべし。又石油のかゝりたるは、火の上に翳して、徐かに揮發するを待つべし、絨氈の類なれば、熱灰を、布片に包みて、其上より敲くべし。

▲衣類に澁の着きたるは、白砂糖を擦付けて、能く洗ふべし。蠟のつきたるは、熱灰を紙に包みて、脫くる迄、其上より壓すべし、灰の熱氣さむれば、更に取換へて壓すべし。

▲煙草の脂のつきたる衣類は、生味噌を溶きたる水にて洗ふべし。黐のつきたるは、蘿蔔の搾り汁にて洗ふべし。又ペンキ類なれば、テレメン油を布片に浸して拭ふべし。

▲墨の付たるは、飯粒を揉み付て、洗ひ落すべく、洋墨の付たるは、水一合許の中に鹽酸、兩三滴をたらして洗ふべし。酢又は梅酢にてもよし。

▲顔色と食物の關係　また、顔色を好くしやうと思へば、食物に氣を付なければいけませぬ、まづ第一に茶と珈琲は皮膚の色を蒼くしますから、やめなければなりませぬ、それから酒類は何によらずいけません、蕎麥、饂飩などを多食してはいけませぬ、脂つこい物もたんと喰つてはいけず、砂糖、ジヤムも矢張左うです、酸い物は斷然召上らぬがよい、扨て又た此の反對に顔色を好くするには、果物が一番よろしい、殊に蜜柑、西洋苺、林檎、葡萄、バナヽの類は血を清めて、神經を強め、其上頬にまで美しい色を浮べるやうになります、野菜の内では菠薐草が一番顔色をよくし、肝の臓を強めて特効あるといふことです。

▲顔の脂肪を除く法　顔に脂肪があり過ぎると、嫌に光つてその癖色澤惡く、見づらひものですが、之を直すにはアルカリ性の強い石鹸で洗ふか、バラ糠でゴシ〳〵磨くのです、それから此の反對に、顔の皮がカサ〳〵してゐる樣なのは、多く消化不良から來るのですが、之には毎日橄欖油を塗るが宜しいのです。

▲汚斑を治す法　汚斑の療法の内で一番よいのは、レモンの汁一匙、リマリン一匙、硼砂粉末小匙へ一杯、此の三種を混ぜて置いて、さてそれから一日に三四回濡手拭でキツ〳〵と顔を拭いた後、十五分乃至二十分過つて乾いた所で、前の混物をこすりつけるのです。

▲曬黒　の豫防法は、日光赫灼の場所に行かうとする前以て、先づ濃厚なる乳皮若くは乳皮とワセリンの等分液を顔に塗り、十分摩擦して靜かに洗ひ去るのであります、久しく日陽に居て顔が焦げ相に覺ゆる時、苦しいからとて冷水を以て顔を洗つてはいけません、斯う云ふ場合には水の代りにワセリンか、扁桃油をお用ひなさるが宜しいです。

▲皺　の寄つたのを治すには橄欖油のクリームの冷いので擦るのが一番宜しい、其には前以て熱い湯で顔を洗つて、硬いタヲルで徐かに拭き取り、そこでクリームを少し掌へ落して其でソロ〳〵下から上へと擦るのです。

▲膩垢を去る法　頭髪の膩垢を除く良法は、樟腦水三合一勺許と硼砂二ドラムとを混和した水で一週間に二度づヽ洗ふのです、又た他の一法は微温水三合一勺許へ、酒酸加里鹽二ドラムを入れた液で能く洗ふのであります。

▲手を白くする法　手を奇麗に致しますには、レモン液とグリスリンの等分液で洗ふのが一番効目があります、其の法は先づ手を湯で能く洗ひ、扨のち之を塗つて寢に入るのです、又た硼酸一オンス半、グリスリン一オンス、アルコホール一オンスの混和液を毎朝塗るも利目があります。

▲爪を奇麗にする法　爪を白くするには先づ石鹸で以て、能く爪を洗つて置いて、稀薄めた硫酸二ドラム、アラビヤ護謨丁幾一ドラム冷水四オンス、の混和液中に指を浸すのです。

▲聲を美くする法　聲の嗄れたるには蜜柑水若くはレモン水を飲むか、或は明礬と鹽化ポタシユムの含嗽劑を服用すれば、必ず効目のあるものです、又た生卵を服用すれば聲音をよくします、殊に聲を使ふ家業の者には之が一番です、それから、もう一つは無花果を煮た牛乳の温かい所を飲んでも効能があります。

四季總菜一覽

- 八杯豆腐
- あさり汁
- わかめ汁
- 餡かけ豆腐
- とろゝ汁
- 風呂吹大根

- 燒豆腐
- 酢章魚
- かきなます
- 鹽鯖三杯酢
- ぜんまい煮〆
- 玉子燒
- がんもどき
- 筍辛子あえ
- 納豆汁

- 鯡の昆布卷
- ずいきあえ
- 柚子味噌あえ
- 鮒すゞめ燒
- 蛤なべ
- どじよう鍋
- 干瓢甘煮
- 鯉のこく漿
- くじら汁

- 馬鈴薯の甘煮
- 椎茸の煮染
- 栗きんとん
- 裂きずるめ
- 煎豆腐
- 鰯の味噌煮
- しこの酢漬
- なまこの三杯
- うどの玉子煮
- 茄子のしぎ燒
- 土筆胡麻和へ
- 小蕪のあちやら

- 京菜一夜漬
- 細根大根三杯漬
- 葉わさび三杯漬
- 茄子初夢漬
- 白瓜印籠漬
- 紫蘇の實鹽漬
- 茄子辛子漬
- 大阪漬
- 蕪千枚漬
- 大根味噌漬

- 梅ぼし
- 菜漬
- 澤庵
- らつきよう

- 煮豆
- 精進揚
- めざし鰯
- 鹽鮭
- 鹽辛

- わさび漬
- 辛子漬
- 紅生姜
- 金山寺味噌
- 紫蘇千枚漬
- 麹づけ
- 奈良漬

- 砂糖
- 味噌
- 醤油
- 鰹節

- ひじき油揚
- 嫁菜ひたし物
- 里芋煮ころばし
- 茄子田樂
- きんぴら牛蒡
- はんぺん甘煮

- 菠蓮草ひたし
- うで蠶豆
- 芋だこ甘煮
- たゝき牛蒡
- こんにやく酢みそ
- ねぎぬた
- うの花いり
- あさり殻むし
- 鱈汁

- つみ入れ汁
- しゞみ汁
- 胡瓜もみ
- さゞえ壺燒
- 芋がら旨煮
- 南瓜煮付
- 蓮根の白和
- 切乾大根
- きやら蕗

- けんちん汁
- ちくわ麩の甘煮
- 數の子醤油漬
- てりごまめ
- てり牛蒡
- 田作なます
- 飛魚の鹽燒
- 烏賊木の芽和
- 小松菜煮浸し
- さつま汁
- はせの佃煮
- 鰺のひもの

- ごもくめし
- 海苔めし
- 白魚めし
- はまぐりめし
- 筍めし
- そら豆めし
- 松茸めし
- 栗めし
- かきめし
- 油揚めし

臺所重寶記

臺所は一家營養の府なり啻に米、魚、野菜を煮炊する場所のみならず、同時に清潔、秩序、按排、整頓、經濟、便利、神聖の場所ならざるべからず、我々は如何にして健全なる臺所を造るべき資料を世の奥様達に供給すべきか、

△清潔は——衛生的なり
△秩序は——經濟的なり
△鹽梅は——美味的なり
△整頓は——便利的なり
△神聖は——和樂的なり

洋食　勝手道具の調整

現今中等社會の家庭に應用さるべき西洋料理の勝手道具はまづ十五六圓にて調へ得られるやうになつて居りますが、其の品々は、大概左の通りと心得まして其の代價を調べて見ました

一、七輪（一尺二寸四方上に木の附いたもの、普通の七輪よりも重寶で經濟的です）一圓七八十錢
二、てんぴ（西洋料理ストーブの代りに出來たもの、肉類でも西洋菓子でもよく燒けます）仝上
三、唐金鍋（直徑一尺、九、八寸の物一つ宛）八九十錢ヨリ一圓四十錢位
四、フライ鍋（大小二個）二個一圓位
五、ソース鍋（一個）一圓以下
六、シチウ鍋（一個、ソース鍋より大なる者）一圓二十錢位
七、パイ皿（一枚、菓子、鳥肉凡て燒物に用ゆ）二十錢以下
八、てつきう（一尺のもの二本、七八分巾の平たき鐵棒なり）二十錢以下
九、金串（二十本）十五六錢
十、煉瓦（二個）五錢以下
十一、ケーキ形（半ダース、西洋菓子を燒くかたなり）十八錢以下
十二、裏漉（一個尺一寸位）五十錢內外
十三、きぬごし（一個）十錢
十四、しき笊（一枚煮ざかな等のくづれぬ爲に用ゆ）三錢位
十五、砂皿（三枚煮ものをあげるに用ゐ）一枚七錢位
十六、鐵鍋（八寸位のもの一個、酢の氣あるものを煮るに用ゆ）廿五錢位

注意、琺瑯や唐金鍋にて酢を煮て用るは衛生上に大害なり。

十七、蒸籠（三升釜にあふもの二個）　一個卅錢以下
十八、薄刀（一挺）　二十五錢位
十九、さしみ庖刀（一挺）　卅五六錢位
二十、出刀庖刀（一挺）　三十錢位
廿一、泡立て（一個、玉子の白味などを泡立てる物西洋菓子を造るに用ゆ）　二十錢以下
廿二、骨抜き（一個）　十五錢位
廿三、せり形（一個、西洋菓子のかた）　三十錢以下
廿四、壽司箱（一個）　三十錢以下
廿五、玉子燒鍋　壹圓位
廿六、珈琲煎器　七十五錢位

等でありますが、これ丈のもの凡てを一時に用意することの出來ない場合には次の樣な順序で用意したらよからうと思ひます。

第一が七輪、唐金鍋、次にしき笊、砂皿、次がてつきう、金串、煉瓦、これは安くつて誰れにても直ぐ買はれます。そして燒魚の時に用ゐると重寶です、即ち七輪の上に右と左に煉瓦をのせ、その上にてつきうを渡して、魚に金串をして燒くのです。網で燒いた魚とは體裁も大違ひ味も上等です。なほ一つ二つ泡網にかけて燒いて居ては手數もかゝり火加減もむらになり、時間にも炭にも不經濟です、しき笊がなければ魚や其外の煮つけものを、鍋から出すのに時間がかゝる斗でなく、くづれやすいので大損です。次にはフライ鍋をおとりになるがよいでせうこれはよく火に耐えるやうに出來て居る鍋でありますゆゑ、あまり西洋料理をなさらぬお家でも、西洋のまがひ料理、あげもの、油類でいためるもの、肉を煮ると、その他に用ゐて大層重寶です。油ものをいれた後では、火にかけて鹽を少しいれ、箸の先きに布をつけて、掻きまわすと奇麗になります。次が蒸籠、蒸し道具がありますと、安價つて思ひつきな手のかゝらぬ料理も、時々出來ます。裏漉しに骨抜き、これも必要です。和物などでも、裏漉しをしたとしないでは、隨分味の違ふもので、魚の骨抜きも同樣です、壽司箱もありますと、重寶です、おすし斗でなしに、いろ〳〵のよせものや押しものにも用ゐられますゆゑ、庖刀のよいのもまた大切です。

日本料理に用ゐるものは、大抵以上の通りでありますが西洋料理を追々となさらうと思召す方は、まづてんぴが必要です。それからソースパンシチウ鍋。パイ皿泡立て、ケーキ形、ゼリ形など。なほ普通フライとかシチウ、ビーフステーキ、ライスカレー、ハムエッグス位ならフライ鍋と普通の鍋とでも出來ます。

料理肉の品々

近來家庭の樂しみは奥様令孃の纎手に出來上る手輕西洋料理でお庇で食品店は中々繁昌をするよし、随て西洋より種々品物が輸入されるけれ共



其種々が一般に知れ渡つてゐませんのみならず其種々が日本の何品何料理に相當するかも知られてゐませんでせう、一寸その道しるべとも存じましてこゝに

御料理の肉は大概は牛肉屋から定めてお取寄でせうシカシ又鑵詰物で異なのがあり升肉だからとて種類を分ませうならコーンド肉、ロースト肉、ボキルド肉、チップト、ドライド肉、ヲンチヤン肉、ブリスケット肉、凝た者ならブローンといふがあります只かく申した許では不可いコーンド肉是はその鹽漬にしてある、

ロースト肉となれば焼いてある、ボイルド肉と云のは茹てあります肉から見ると惡く脂濃ない味も決して失つてゐません、チップド、ライド肉、此肉は薄く切つて、乾かしてあるんで、ランチヤン肉之はチヨットの茶受になります食卓用で罐を開たらスグ食べられます、ベリスケット肉と云のは牛のヒレ肉で柔かいとは齒のない方にも咬めます又此等の肉は咬で食べなくても大した除にはなりません以上の肉其値段は左の通りです

コトンドビーフ一斤入三十三錢▲ローストビーフ同價▲ボヰルドビーフ同價▲チツトブドライドビーフ一斤入六十錢▲ランチヤンビーフ二斤入七十錢▲ブリスケツトビーフ二斤入七十五錢▲ブコーン一斤入三十五錢

食物貯藏の心得

△餅の黴を防ぐ法　始め搗く時、こね取り水に砂糖を入れて用ふれば、かびる事なし又餅を入れ置く器中へ串柿を交へ入るもよし。

△又一法　右手輕の方法は搗たる餅の堅くなりたる時桶に水を汲みて一々取粉を洗ひ去りよく乾かして後何にても入れ置けば大方は黴ざるものなり、是れ他なし黴は取粉より一番に生じて傳播するものなり、又寒水に浸し置けば餅軟くなり、數日蓄ふべしと雖も臭氣附く事あり。

△押入戸棚の置場　押入や戸棚の前後左右共に日光の當る所は食物損じ易きものなれば注意すべし、又漬物部屋は北向きの所ろに限るべし、四方いづれも日光を受くれば漬物は忽ち味を損ず、我が家ならば始めより注意して建つべし借屋ならば始めによく吟味すべし、是等の位置臺所の向方によりて年中の經濟に大なる差を生ずべし。

△野菜類　兩三日ならば流し元の水のかゝる所ろに位くべし、數日を蓄ふるには箱か桶に砂を入れて其中へ埋め置くべし、庭ある家ならば地を掘りて底に籾糠を敷く事一寸ばかり其上へ籾糠をかけ、又ならべてはかけ次第に重ねて最上に薦を覆ひ置くべし、尤も雨露のかゝらぬ屋根の下なるべし、斯くすれば來年まで替る事なし田舍にて種芋とて今年の物を來年の種とするは

大抵此の上なり。

△醤油を黴させぬ法　芥子（丸粒なれば更によし粉にても苦しからず）を小き布袋に入れて細長く巻括り、其端を糸長くして德利にても又壜にても底に届くほどに入れ、口の外に糸の端を結びつけ置くなり底に至るまで黴る事なし、然して芥子の氣は移るものにあらず

△又一法　は醤油を一度煮やして、置くもよし、されど煮れば多少減るものなれば芥子の方得策なり、又醤油の味少し變る事あり其時は味噌を少し加ふれば大體はなほるものなり。

△酢の黴を防ぐ法　炒鹽少し加へ置けばよし。

△鰹節保存法　兩端を括りて繩梯子の如くし風通しのよき場所に釣し置くべし。尤も猫などの爲め不用心ならば酒をぬり置くべし、或は不用の火鉢などの灰の中へ埋め置き入用の時に出し灰を洗ふて使ふべし。

△生魚を貯ふ法　廣き家屋にて庭、井戸あらば横にすかしある箱に皿ながら入れ上蓋して井中に宙釣とすべし、又一法は北向の椽下など横長に掘りて土穴を作り四方は木をはり、蓋板をこしらへ、犬猫等の防ぎとすべし。

△海苔　常の家にて永く貯ふには炙りて粉にし壜詰とし口にトタンをかけ置くべし。

拭き掃除心得帖

家庭衛生の上に深き關係を持ちながら、多くは輕視され、一向注意されて居ないのは、拭掃除の事です。試みに一家庭を訪ひ勝手元に至り雜巾は何處に懸られ又其穗先の如何樣になつて居るかを見、或は雜巾は如何なる色で、何處に置かれ、又たどんな風になつて居るかを調べて御覽なさい、必ずや十中の七八迄は、雜巾の先が切れ且つ黒く染り、懸られて居る處も薄暗き風當のよからぬ處で、雜巾は雨に降られた乞食の衣服の樣に色黒く臭氣あり且つ濕つぽくなつて臺所の片隅に、押込められて居ります、それから食器を布ふ拭巾は割合に注意して居る家もありますが、是等は主婦が日々厨房の事に立さはる家で、下婢任せの家庭ですと多く

は濕つて居る上に、其色は鼠色が薄黒になつて居ります、既に斯樣な風でありますから一家の衛生上に如何なる影響を與へらるゝかと云ふとは言はずして了解さるゝでありませう、そこで一二の注意を申して奥樣方の參考に供し樣と思ひます。

一、内拂子、贅澤を言へば際限ありませんが、先づ白木綿或は金巾樣のもので造り一週に一二度洗濯の出來る樣にする事

二、箒も亦た先きを常に洗ひ、且つ風透しよく、日當りのよい處に懸け置き、又た先きが切れたなら直に買ひ換ゆる事

三、雑巾、若し出來得るならば白木綿或はタオル樣の物數枚製造し代る〲使用し使用濟のものは充分に洗濯し且つ日光に晒す樣にしたいのです、それから二種か三種の雑巾を造つて置て、例へば風でも吹て砂塵の入つた折など二度三度順次拭ふ樣な工合にしたいのです、古切れや垢の附いたものを其儘雑巾にするなどは、決してよい方法ではありません

四、拭巾、これは申迄もなく充分清潔で其色は是非純白でなければなりません、そして常に乾き切つたもので、日光を充分に受けたものでなくてはならぬ、それに一度に一枚の拭巾で多數の器物を拭ふのはよろしくない、必ず數枚を備へ置き代々使用するは良き方法です

これ等の事は下婢任せ或は命令丈ではとても勵行は出來ませんから、自身でしなくとも、日々之を監督する事が大切です「病氣進入の第一路は勝手元なり」とは家庭の忘るべからざる金言です。

飯米の撰び方

我々の日常食べる飯米を搗き精らげるやうになッたのは幕府以後の事です其以前は大概玄米ばかりであッた昔しの人は胃腸が丈夫で玄米の飯を日に二回づゝ食べて活潑に働いたものであるが、人が贅澤になるにつれ、白米が常食になつて身體の消化力が玄米には不適當になつて了つた、一體米は玄米の方には多分の蛋白

質や脂肪、即ち最も大切な滋養分の多分を持つて居るが、此等の成分は多く皮にあるのだから、搗くと糠になつて落ちて了ひ、殘りの白米には僅かに百目の中に蛋白質が六匁八分と脂肪三分ほか無い、最も多いは澱粉質で百目の白米に七十二匁餘、水分が同二十匁、纖維と灰分が一匁許りである、尤も白米は玄米より消化はよい、米の澱粉は澱粉の中で一番早く消化れる、然し滋養分は右の通りであるから、是非之と一緒に肉卵豆腐、豆の類を食べて身體に必要な蛋白質と脂肪の成分を取らねばならぬ、右の如く今の日本人には玄米は消化し切れぬから仕方がないが、其の代りあまり搗き過ぎないで少しは黒味の殘つて居る方にしたらば味はよくて滋養が多い、特に注意すべきは搗く時に早く精げる様に搗砂を入れ、更に米に白粉を付ける爲めに化粧砂といふて白い火山灰などを入れる爲め、米は眞白に一寸美しく甘さうに見えるが、實際は必ず味が惡い、米を買ふ時はよく見て、少しは黒くともこの白粉氣の無い、眞珠色の光澤のあるのを選ぶが宜しい、味もよく、又、滋養分も多いのである。

改良竈と骸炭の應用

改良竈は燃燒科學の原理に合つた道具がある上に廢棄瓦斯の逃げ道があつて下に空氣の口がある燃えて生ずる瓦斯はドシ／＼逃るから其の缺を補はんとして空氣はドシ／＼入つて行く、燃えがよい、強い火力が出る、煙らない、其上に燃料が得で、目や肺を害さない、下の口と上の穴は容易に塞げる、火は消えて温みは長く續く、之に使ふ燃料は薪、木炭、骸炭、夫から煙突の付いたのには石炭も使へる、薪は普通の薪半綴木炭ならば多く土竈燒を用ふる、處で、近頃薪炭の代價が段々高くなる、人數によつては一個月一圓七八十錢もかゝるそこで、骸炭がポツ／＼用ひられて來た、骸炭は石炭を蒸燒にして出て來る水素、酸化炭素、アセチリンなど云石炭瓦斯、コールタ－其他の蒸氣を取つた遺骸であるから燃いても彼の臭い瓦斯や煙りは出す、夫に火力は强く、火持は長く、至極便利のもので

あるが、一つの缺點は燃え惡いことである、通常の竈は勿論、普通の改良竈でも中々火付きが六かしく且つ消え易い、處が近頃骸炭專用改良竈といふのがある、これは中々よく出來て居て燃えもよく一旦起きた火は構はず置いても三時間位は持ち從つて火の番も要らず且つ廉價で十人家內位の炊事で一日三錢位にしか當らぬ而も木炭のやうに灰が臺所を汚す恐もなく至極結構なものであるから皆さん奮發して御用ひなさい

砂糖の灰汁引き法

砂糖は如何なる種類を使用するも、第一に灰汁を引きて使へば、實に種類の違ふほど上等品になり、甘味も隨つて深くなるものなり、故に庖厨經濟の一としてこれを心得ざるべからず其法はまづ砂糖一貫目につき水一升の割合にて其水の中に一個の鷄卵の蛋白を箸にてよく攪き廻し混合したらば鍋に入れて火にかけ其れと同時に砂糖を入れて湯の沸へ立つを度として二三勺の水を注ぎながら水面に浮き上る白き泡を灰篩などにて掬ひ去り、火を少しく弱め加減にして又二三勺の水を注ぎ加へながら泡を掬ひ去り、斯くすること五六回にて鍋の中の水が澄みたらば鍋の上面へ美濃紙を掩ひかぶせて、鍋の兩耳を持ちながら丼に漉し入れるを一番の灰汁引き砂糖と言ふ又其漉し粕の中へ最初より掬ひ集めし泡及び紙に附着せし泡とを一にして適宜に水を加へ再び火にかけ沸騰したれば今度は是れへ布袋の中へ移して漉したるを二番の灰汁引砂糖といふ、これは前の一番砂糖と混ぜずに置くべし、一番引の砂糖を貯へ置くには乾きたる瓶などの中へ入れ置くべし。

魚類の鑑別法

△鯛　全身櫻色にて、鱗の上に銀色の斑點ありて、眼の色の黑きは新鮮なるものなり、これに反して面部に糊のごときドロ〳〵したるものが浮み出で、目玉や、鱗の白けたるものは不良品なり、併し狡猾なる魚商は紅殻などで色をつけ新鮮の魚と見するもの故氣をつけざるべからず。

△鰈　これは腹より腐敗を來すものなれば指を押して見るがよし、軟かくして黒味を帶びたる汁を出す時は最早腐敗に近きものなり。

△蝦　蝦の新らしきは凡て鰭や尾に赤味を帶びて居るものなれど腐敗に近きものは黒くなる。

△蟹　は甲の兩脇を押して軟かきものは不良なり。

△蛸　すべて蛸は死してより四度び色の變はるものなるが取り立は赤色のものなり、稍少しく經てば白と赤との斑色となる、次は眞白となり、遂に疣の黒くなるものなり、故に疣の黒くなりたるは腐敗に近し、又茹蛸は赤くして皮が立派に存し引張りてもなか〱手切れぬのは新らしき品なり、之に反して皮が剝げ又は手切れるものは最早腐敗に近きものなり、生の蛸はすべて足が縮み堅く締りて居るものならざるべからず。

△松魚　脊は靑く赤黒き色の魚ならば新らしきも脊の白けた身の軟かい皮にねばりあるものは腐敗に近し

△鯖　これも靑色を呈して身の堅きものは新鮮なり白くして軟らかきものは不良なり。

△太刀魚　全身銀色にて光澤ある物はよろしきも皮が剝げ光澤の失せたるもの、且つ腹部破れて白子を吹き出したるものは尤も不良品なり。

△鮪　鮪の切身は十に七八まで色赤く、煉羊羹のごときものを新鮮とすれども、決して然らず、實際新らしきものは切身が薄赤く時間を經るに隨ひて漸次に赤味を增し、遂に黒色に變ずるなり。

野菜の効用

一と包みの粉藥一壜の水藥も、山間僻地にては得難し、まして醫者を迎へ、診察料を包むは貧家に取りて苦痛多きなのなり、されど如何なる家にても其日々々の總菜に用ゐ居る野菜果物の中には隨分病症に對して殆んど藥劑以上の効能を持つもの多し、今其の特効ある二三を紹介せん。

△玉葱　これは睡眠劑であるのみならず又發汗劑である、若し寒氣がして風でも引いたやうな時玉葱を食べ

て寢ると直ぐ寒氣を追ひやつて發汗を來し且つ睡眠を催す、併し煑たのは生のよりも有効でない、けれど葱類にはすべて硫黄分を含んで居るから非常に血を清潔にする効がある、多量に玉葱を用ゆれば多量に硫黄を體内へ運んでそれが有毒の酸類を變化し、驚ろくべきほど血を洗滌する。

△蒜　これは下痢止めの妙藥である。腸カタルなど起して厠へ再三の御苦勞をせねばならぬ樣な時、蒜を薄くへぎて、雜炊を作り、餅の切と一緒に雜炊の中に入れよく煑て食へば下痢は忽ち止まるものである蒜は又血止藥である。

△萵苣　是又不眠を患ふる者に食はせてよし、萵苣は睡眠を與へ神經を柔らげ、休息を與へる處の阿片を多量に含んで居る萵苣の葉は又血を清める効能もあるが、葉を食べずともその柔らかな汁の多い莖をサラドか何かにて用ふるのが最もよい。

△大根と蕪菁　共に呼吸器病に有効である、器管支病や喘息氣のあるものは多くこの野菜を取るがよい。

△果物の酸　は蛔虫に適藥であるから小兒には必らず果實を與ふる事にしたい中に就て葡萄と林檎は果實の王であるが葡萄は血液を純良にするの効があるのみか又多く滋養分をも含で居るから葡萄ばかりで五日や六日は生活が出來る、又近頃では葡萄療法といつて葡萄一式て病氣を療すといふ所がある。

清冷飲料の製法

○レモナード是は尤も廣く用ゐらるゝ飲料の一なり、製法は一つのレモンを洗ひよく拭いて薄く切り鉢にそれの汁をしぼり出して、スープ匙一杯半の砂糖を混ぜ、沸え湯一合を加へて掻き廻はし、冷めたるコップに移し、レモンの薄片を浮ばせて用ふ、レモナードは冷水にても造れど沸湯を用ゐし程の香氣はなし。

○葡萄汁　すべて果實汁の飲料は渇を止め身體の活力を新たにするものなるが、就中葡萄汁は大に効能あるものなり、その製法は葡萄を取りてよく洗ひ、莖よ

りもぎ取りて粒々になし、これを琺瑯鍋に入れ之を水を満たしたる大鍋か又は釜の上に重ね、弱火にて二三時間ゆつくり煮る時は葡萄は柔らかくなりて汁が滴るやうになるなり、此時あまり厚くなき清潔なる寒冷紗の袋に入れて口を結び、吊して追々に其汁を漉し出し、滴り出でたる汁の三分の一の割合に白砂糖を加へ、再び之を暖め、沸騰點に近き温度にて一時間ほど煮、清潔なる瓶に入れて栓を堅くし薄暗き冷き所に置けば隨分保つものなり。

○ミルクレモナード　まづスープ匙一杯の砂糖に沸騰水一合五勺を注ぎレモン汁四勺を加へ砂糖の溶けるまで充分にかきまわし冷き牛乳二合を入れ牛乳の固まるまで再びかきまぜ布巾にて漉す、この飲料は小供の爲めによきものなり。

○背達水　まづ水に砂糖を溶かし奇麗に薄き糖水となるまで煮漉して後、砂糖百六十匁に十匁の割合にて酒石酸をまぜ、匙にて十分にかきまわし、大なる玉子一個の白味を入れて更によくかきまぜ、冷めるまでソツとして置き瓶につめて栓を堅くさすなり、さて用ゆる時にはスープ匙三杯ほどの大コップに入れ一合五勺の冷水を注し、葡萄汁、レモン汁其他好みによりて香氣をつけ、重曹を適宜に投じかきまぜて沸騰するうちに用ふるなり、酔冷などの時によし。

○糖水　これは一合の砂糖へ五勺の割合にて水を入れ五分間煮て漉しスープさじ二杯のワニラ、レモン、扁桃、肉桂等好みに從つて加ふるなり、但し是等の物を混ずる時は糖水は熱を生じてアルコール分を除くものなり。

○林檎水　之は熱のある病人の飲料としてよし、まづよく熟したる酸味のある林檎をよく洗ひ拭きて小さく切り並林檎一個につき一合五勺の水を入れ軟かになるまで煮、鉢に漉して砂糖を加へ、土鍋か琺瑯鍋にて再び煮、更に布にて漉して用ふ。

○苺の汁　苺に限らず、桃にても杏にても其他の果實にても充分に熟して軟かになりたるものを取り果實の量の半分ほどの水を入れ決して沸ぬ様にゆる〳〵と二

三時間煮、葡萄汁の如くにして造るなり但し杏、又はグズベリーの如き酸味の強きものは汁の分量の五分の四まで砂糖を入るゝなり、用法は冷水と等分に合せるか、又前の糖水やソーダ水に加へてもよろし、すべて果實類を煮るのは琺瑯鍋に限る。

四季の献立

四季の献立は時世につれて其調理法種々に遣ひ分ありて盡く記しがたければ今其大略を示さん

〔汁〕

○春――火とり白魚、生わかめ、つくし（麥麹味噌仕立）
○夏――あられあかえ、蠶豆、早初茸（さど味噌仕立）
○秋――雁つみ入、さゝがし牛蒡、初茸（いせ味噌仕立）
○冬――ふたつがき、火どり根芋、丸松露（田舍味噌仕立）

〔鱠〕

○春――鯛うす作り、鳥がひ、若じそ、黑くわゐ、ふくめ生姜、けん、きんかん。
○夏――鱸やへ作り、まきたひらぎ、木くらげ、紫蘇せん、わさび極せん、けん、薬防風。
○秋――鮍ほそつくり、生貝せん、水前寺のり、ふくめ生姜、けん、薬防風。
○冬――しもふり鯛、紅かぶら、富士川のり、黑くわゐせん、針わさび、けん、碇防風。

〔坪〕

○春――鳴戸だひ、篠うど、そろへ土筆、（しきみそ）
○夏――卷えび、茗荷の子甘煮、きくらげせん、（しきみそ）
○秋――こもちくしこ、丸むき胡羅蔔、しめじたけ、（あんかけ）

○冬――あか貝やはらかに、焼栗ぎんなん。

〔汁〕

○春――むしりえび、みるぶさ、(すまし)
○夏――すゞき切身、結び昆布、(すまし)
○秋――初茸、やき鮎、(すまし)
○冬――串こ、百合の根、(すまし)

〔平〕

○春――こがね鯛、かもうどん、三葉芹。
○夏――うの花だひ、玉子素麺、漬せんまい、筍うすうち、いんげん。
○秋――いけがも、最中がれい、砧ながいも、つまみ菜、はすいもせん。
○冬――まき甘だひ、かひ大身、漬まつだけ、蒸ながいも、ちくせり。

〔猪口〕

○春――あられ烏賊、金露子、柚ねりあへ。
○夏――までゞくき菜かうじあへ。
○秋――ゆり、めうが、梅あへ。
○冬――やき鶉、茗荷、大根おろし。

〔香物〕

○春――きうり味噌漬、干大根五分ぎり。
○夏――白瓜いん籠づけ、種ぬき日光唐がらし。
○秋――なごり茄子三ッわりづけ、くき菜。
○冬――小蕪はやみそづけ、同とも葉おしづけ。

〔味噌吸物〕

○春――こもちさより、松露むきおとし、すゐせんじのり、(三わりみそ)
○夏――うづら小鯛、いはたけ煮ぬき、火どりいも、青ざんせう、(白みそ)
○秋――鮎かたみおろし、まつ葉茄子、粒松露、(南部みそ)

○冬―鮟鱇、黒皮、肝とも、款冬小口きり、粉山椒（赤みそ）

〔硯蓋物〕

○春―若あゆいろ附やき、みのきせ鱚、更紗えび、のし鮑つや煮、黒慈姑きんとん、百合羹、白魚のりまき、さらし胡桃つや煮、うぎをかしらづけ。

○夏―かしは鯛、海膽やきいか、赤貝やはらが煮、小えびきみず、天門冬きぬた巻からしづけ、自然薯柚みそでんがく、こしたかかまぼこ、椎たけ長せん、新皮牛蒡。

○秋―青わたカステーラ、のし鮑てりやき、鯛皮つきかまぼこ、煮ぬき玉子さより巻、しの牛蒡うにやき、新くわゐ田樂、零餘子きんとん、さき松だけしほむし、はうれんさうしのまきづけ。

○冬―鯛の子かまぼこ、たゝみ白魚、さば百合むし、干だらふくみ煮、玉子のからむし、なたまめ粉ふき煮、ちくしこんぶつや煮、巻岩たけ、黒くわゐむきおとし。

〔刺身〕

○春―めぢかつを長手作り、さらしさめおろし大根、のびるの玉、辛子酢みそ、煮かへじやうゆ。

○夏―鯛ほそづくり、あらひ鱸、もみ茄子、根いもせん、いりさけ、わさびじやうゆ。

○秋―あらひ鯉、同じく煎り皮、色寒天川たけごくせん、眞桑瓜鹽せん、煎酒、さとうみつ。

○冬―平目黒皮作り、鯉子つき笹つくり、海鼠たゝみ、水仙寺のり、篠うど、からし酢みそ、山葵じやうゆ。

〔丼物〕

○春―若あゆ焼からし、わさびの穂、花かつを。

○夏―赤貝和煮、小田巻どうふ、さいかちのめきりあへ。

○秋―たこやはらか煮、慈姑うすかさね、青山椒。

○冬―小鮒びたし、若うど甘煮、馬鈴薯鹽煮。

〔すまし吸物〕

○春——鯛の眼、大蛤はいろ、海素麺うしほ。

○夏——手長えび、蓴菜。

○秋——串海鼠たんざく、のしうめ、葉つきわさび。

○冬——魴鮄うすぎり、みぞれ茗荷。

〔鉢物〕



○春——はも骨切、針魚蒲焼、いり卵の花、筍の穗、

〔うまに〕

○夏——すゝき蒲焼、いわし骨ぬき田楽わかにんじん、けし醤油づけ、同とも葉はろあへ、粉ふき山椒。

○秋——子持鮎煮びたし、四方焼豆腐、さきまつ茸、ふき山椒。

○冬――小鯛骨ぬき、木くらげせん、銀杏、もやしうど、玉子けんちん。

〔皿〕

○春――鯛さゝづくり、おぐし鱈、葉ばうふうやき唐がらし、薄味噌。
○夏――あますもみ鮑、さらし鰕、すゐせんじのり、山葵たんざく、生酢。
○秋――鯖うすづくり、貝の柱、餘蒔いんげん、新ばす薄重ね、三杯酢。
○冬――平目つくりみ、さゝひうすきぬ、冬ねぎ五分切り、あられ栗、唐がらしみそ。

〔中皿〕

○春――鱒ひとしほ(きりかさね)、若大根たんざく、せりのくき三はいす。
○夏――あらひ栄螺、茗荷の子、富士川のり、わさび酢。
○秋――きはだ鮪(さいのめ)、よまき胡瓜、ほんだわら、にかへし醤油。
○冬――かき鯛、このわた、若うど。

〔茶碗物〕

○春――蝦どうふ、早わらび、煮海苔。
○夏――鶉、ゐんげんせん、御膳ゆば。
○秋――小鴨しんじよ、粒初茸、つみ菜。
○冬――鍋やき鴨、太に牛蒡、摘こんにやく、粉山椒。

〔椀盛〕

○春――さらし鯨、かこひ茄子(くしがた)、もやし茗荷。
○夏――鱸かばやき、火とり長芋、かくし酢柚。
○秋――鮭味醂づけ、九月大根さゝがし、裂まつだけ。
○冬――背切鯛、揃へもづく、三ッ葉五分切。

〔焼物〕

○春——あひなめ附けやき、たゝき新牛蒡。
○夏——鰺たでやき、しのうど甘酢煮、青山椒。
○秋——鮭醤油づけ、零餘子でんがく、笠まつだけ鹽やき。
○冬——蒸がれい色附やき、唐煮みかんおろしかけ。

〔臺引物〕

○春——鯛大かまぼこ、ひばりつけやき。
○夏——かすていらたまご、鎌倉えび。
○秋——鮑貝煮、伊勢えび、うす味噌でんがく。
○冬——鹽焼さはら大切身、かすていらくづし。

重詰いろく

○花見の提重詰

▲初重七種——蒲鉾すみ流し。車えびの鬼がら焼。鱚のてり煮。長芋の丸切。わらび。つまみ麩。剝き胡桃の山吹かけ。
▲二重引肴——むつの刺身。三月大根の短冊。貝割菜の酢味噌。唐がらし。つめ合干大根。うど。嫁菜。
▲三重——唐の芋。烏賊。款冬の煮つけ。木の芽上におきて。
▲四重蒸物——小倉野。きんとん。紅梅餅。
▲割籠——焼飯
凡て見物遊山の重詰は數多きやうに詰て終日歡樂の媒とする事肝要なり。

○雛祭の重詰

▲初重九種——玉子。すみながし。あはび。花えび。蒲鉾春がすみ。章魚うすたゝみ。くず引白魚。小串魚。みるくひ。
▲二重七種——時雨薯蕷。うづまき豆腐。わらび。若いたけ。つくし。くわい。竹の子むき。うど。
▲三重芝詰——とこぶし、かひとも。小榮螺。木の葉がれい。飯章魚。あま鯛。以上殘らず芝煮。
▲四重蒸菓子——こし高。おぼろ饅頭。羊羹。ういろう。寒紅梅。柚もち。いづれも小くして。

○七夜見舞幷に病氣重詰

▲初重——薯饅頭。小倉野。ぎうひ飴。朝ちあめ。この類よし。

▲二重詰合七種——さより色付燒　しい茸。あかがひ。くわひ。あつやき玉子。かんぴやうむすびて。せんまいふし煮。

▲三重——中あちの色付燒。きす干物。うす鹽生干。

▲四重——紅花飯

七夜過ての見舞には產婦の料に別に小重につめて贈るもよしその時には毒にならぬものこゝに記す。きす。長芋。さより。かんびやう。小鰈。ゆり。にんじん。右の類を鹽にて煮てつめるべし。

洋食の作法

ひさ子

近頃は御婦人でも西洋料理を召上るやうに成り、又さうした御席へも御列なさる樣に成りましたから、御心得迄に洋食喰べ方の作法を申上て見ませう。

▲献立　西洋料理の献立は普通先づスープが出て次に魚、羊又は豚の肉、其次に牛肉、野菜、それから鳥の肉、それからサラダが出で、其の後で菓子、果實、珈琲といふ順序で運ばれるのですが、時によると最初に牡蠣や鹽漬の樣な物を喰べて、それからスープになるのもあります、併し是は申さずとも皆さん既に召上て御承知の事と存じます。

▲坐り方　洋食の卓子に向ふ時の姿勢は、反らず屈まず、體を眞直にして、餘り卓子に接近せず又た餘りに離れず、先づ胸と卓子とは約六寸位の間隔を置くのが宜しい相です、而して手は常に膝の上に行儀よく置くべきで、食事しない場合に手を卓子の上に出して居たり、頬杖を衝いて居たりするのは、不躾なものとしてあります、食事中談話を致すことは差支ありませんが、さりとて餘り大聲を發したり高笑をしたりしては宜しくありません。

▲ナプキン　西洋料理の食卓には必ずナプキンと申す

手巾やうの物が備へてあります、是はホンの口の周邊を拭く爲、男子方なれば髯の汚れを拭く位に用ゐるものですから、手巾代用と心得て之で汗を拭いたり鼻を撫でたりしてはいけません、ナプキンを用ゐるにも人によつて色々流儀があり、胸のあたりからダラリと垂らすもあるし、又た腰の邊に捲付る者も御在ますが、一番品の善い仕方はナプキンを二つに折て、横に長く膝の上に擴げて置くのでして、口を拭くにも其の儘角の中程をチヨツと持つて横様に拭ふやうにすれば、大層見よいのであります、男子方はよく襟の所へ挾んで胸一杯に擴げますが、是では何うも自分は不作法な喰べ方をするから着物の汚れるのが氣に成るといふ風に見えて甚だ賤しう御在ます故、女は尚更見つともなう御在ます、宴會の節食卓に着いたらば直ぐにナプキンを取て膝の上に置くべきで、若し其の上にパンが載つて居つたらば其を靜かに取つて小さい皿の上に載せてお置きなさい、それから食事が濟んだ後は、ナプキンを料理店などでは直ぐに洗濯屋に遣りますから、奇麗に疊んで置くには及びません、唯だ其儘ソツと卓子の上に置いて起てば宜しいのです。

▲ナイフとホーク　洋食店なぞへ行て見ますと、皿を前に置いて左の手にホークを持ち、右の手にナイフを持ち、片方で切つては片方で突刺して喰べて居りますが、彼は極く品の惡い仕方で、上流の宴會などに出た場合には愼しむべきことであります、ソンナラ何うしたら可いかと申すに、元來ホークと申す物は日本の箸に相當するものですから本統を云へば、ホークで喰べるのが正しいのですが、肉や鳥になると之を切る必要が御在ます爲め、それでナイフを用意してある譯なのですから、謂はゞホークが主で、ナイフは之を助くるに過ぎないのであります、故に出來る丈はホークで喰べるやうになさいまし、ソコデ肉が出たら先づ大抵自分の喰べやうと思ふ丈の分量をナイフで切つて置いてさて後右の手にホークを持換へて、靜かに之を取上て喰べるのであります、ホークの使ひ方は可成く裏(凹んだ方)を上にしないやうに、表(張出した方)を始終

上に出すやうにして使ふべきであります、然し豆の如き物とか或は其他の野菜類で掬はなければならない様な物は、匙の様な風に持つて裏で掬つて喰べても宜しいのです、なほ食事中ナイフとホークの置き方は双方より皿の上に置くべきで、皿の縁に刄を掛け、柄を卓子の上に置いて皿に立掛るやうにするのは宜しくありません、食事が濟みましたらばナイフとホークとを揃へて其の尖端が皿の中央に當る位にして皿の上に置くのが法であります、時々食物をナイフの尖端に載せて口の所へ持て參つたり、或は食物をナイフとホークで切り刻んで押潰して練固めて喰べる人もありますが、是等は西洋でも極く下等の人のすることで御在ますからして人様の前では然う云ふハシタない眞似はなさらぬが宜しう御在ます、肴を喰べるには右の手にホークを持つて肉を毀して喰べ、左の手にパンの片を持て搔寄せる様にして助けるのが從來の遣り方でしたが、近來は魚を喰べる爲にホークを添へて置くやうになりました、それから又た生蠣を喰べるには、極く小さいホークが皿の上に載つて居ります故、左の手に蠣の殼を押さへ、右の手に其の小さな肉叉を持つて蠣の肉を離して喰べるのであります、序に申添へて置きますが、皿の上の物を殘らず喰べて了ふには及びません、喰べ殘しては惡いとはいへ皿の上を拭取つた樣に奇麗に喰べて了つても見つともない、奇麗にさへ喰べれば少し位は寧ろ殘した方が品が善いので御在ます。

▲スプーン（食匙）には大小二通りあります、大きな方はスープを掬ふに用ゐるので、之は大抵皿の右手に置いてあります——或は皿の向に置くこともあります、匙でスープを掬ふて吸ふには可成く音をさせない様にして手前から向ふに掬ひ上げ、而して匙を橫様にして、其の頭の膨れた所から吸ふのであります、匙を縦にして尖端から吸ふのは下卑て居ります、それからスープが少くなれば少しく皿を向ふに傾けて掬ふても宜しう御在ますが、決して自分の方に傾けるものではありません、其理由は自分の方に傾けると皿の底を向の人に見せることになつて失禮だからであります、匙を手前か

ら向に使ふのも矢張り同じ理屈であります、スープも敢て一滴も殘さぬ樣に掬ひ取て吸ふにも及びません、餘り嘗め取つた樣にするのは下品であります、それから小さい方の匙は茶、珈琲等の飲物に附いて居るのですが、例へば珈琲の樣なものを飲むのでしたら、匙を取つて中をチヨツと攪拌して一口二口匙で味ふのは宜しう御在ますが、其後は直ぐに之を皿の上に置いてコツプの把柄を右の手に持つて靜かに飲むのが法であります、よく匙をコツプの中に立てながら飲む人がありますが、隨分見つともない、又た終まで匙を持つて飲んでは掬ひ、掬つては飲むのは小供のイタヅラを見たやうで是亦た甚だ見苦しいので御在ます。

▲フヰンガーボール　は西洋料理には必ず附き物であります、是は其名の示す如く、フヰンガー即ち指、ボールは鉢で、指を洗ふ鉢であります、一體此の器を出す趣意は果物を喰べる時にホークを用ゐず指で撮んで喰べる事がありますからして、其の前後に指を洗ふ爲であります、ソレデすから或は微温湯に致したり、又は其中にレモンなどを入れて香氣を附けて御在ます、故に此の鉢で鬚を洗つたり唇を濯いだり甚しきは含嗽をしたりするのは間違つた話で、ザツクバランの席では兎も角、晴れの宴席などでは大失禮であります、ソコデ此のフヰンガーボールが若し皿敷に載せて出されたら、その皿敷と共に受取つて傍にのけ、而して其の皿の上に果物を取るのであります、果物は食事最中に取るべきものではありません、フヰンガーボールの出た後給仕が傍より進むるのを待つて、取つて喰べるのが法で御在ます。

▲指の箸　日本料理と違ひ西洋料理には親讓りの五本の指で撮んで喰べる物があります、其は第一にパンで、パンは指で以て割いて喰べるのであります、決してナイフで切つてはなりません、さてパンはスープの出た後にスープを吸ひながら喰べるのです、其には先づパンを程よく小さく引裂いて置いて、バタをバタナイフで着けて左の手に撮んで喰べるのであります、併し此のバタは正式の御馳走には用ゐないのですからして、

宴會の時分に若しバタを附けてなくつても、バタを下さいなどゝ請求してはなりません、又た藥味も同樣で正式の御馳走には鹽の外は出しません、序に申しますが此のバタや鹽を取るに自分のナイフを用ゐるのは甚だ失禮でありますから、若しそこに鹽の匙が附いて居らず、或はバタのナイフが附いて居らなかつた時分には、ボーイを呼んで命ずるが宜しう御在ます、又た鹽や胡椒を振掛けたり、芥子を取つたり致すのは、或はナイフの上に鹽を載せて左の手でナイフの刄を敲いて振り掛け、又は胡椒の壜の底を敲き、或は匙で芥子を肉の上に垂らす人がありますが、是等は何れも不行儀で紳士や淑女の眞似べきことでありません、行儀よくするには鹽は小さな匙で皿の中に取り、胡椒は靜かに壜を廻して振掛け、芥子も一度皿に取つて然る後自分のナイフ又はホークで着けるのであります、ソロデ麵包は大きなのに一面バタを塗つて噛附いて喰べるのは男でも隨分不體裁、女は尙更見つともない話ですから、前申す如く成るべく割いて小さくして喰べるが宜しう御在ます、其他煎餅の樣なものや、セルリ、赤大根、橄欖の實、砂糖漬の果物、生の果物、アルチイチヨーク、莖の附いた玉蜀黍等は何れも指で喰べる物であります、扨て此のセルリを喰べますには鹽を少しテーブル掛の上にこぼして、其をセルリの上にチヨツと着けて喰べるのを上品としてあります、又たアルチイチヨークは葉の本を食するのですから、指で一枚々々に葉を剝がして其の本の白い所に液を附けて食るのです、而して一番の心はナイフで切つてホークに刺して喰べるのであります、玉蜀黍はナイフで削り落して喰べても宜しう御在ますが、又品よく其の儘手に持つて噛つても宜しう御在ます、アスパラガスは普通指で撮んで喰べますが之は近頃西洋ではホークで頭を切つて喰べるのが品がよいと成て居ります、梨や桃や蜜柑などの喰べ方はナイフで先づ四ツ位に切つて置いてから、皮を剝いて撮んで喰べるのが法であります、又たチーズは小さく切つてビスケツトの上に載せ又は麵包の上に載せて矢張撮んで喰べます、それから鳥の骨を撮んで

肉を嚙るのは自宅なら行つても宜しいが人の前では愼しむべきであります。

▲食事中の心得　食事中は可成く靜かにして居て、ナイフ、ホーク、匙の音、又は食物を嚙み或は啜る音を立てぬ樣に致すべきであります、それから食事中にナイフやホークを取落した場合には、周章狼狽しないで、若し其が主人の前で在たら物靜かにチヨツと詫をするが宜しいのです、又たナプキンを辷らしたり或は匙を落したりした時は給仕が注意して拾つて呉れるのを待つて居て宜い、若し彼等にして氣付かざれば其儘にして置いて差支ありません、食卓の上に飛出した食物をナイフで掬ひ上げ、又たは其の汚れを食卓掛で拭き取るやうな事は甚だ下品でありますから、そんなことは爲ないで、若し目立つ樣な物が落ちた場合にはナプキンを以てチヨツと摑んで取つて置く位にして置くのが宜しいのです、尙ほ食事中注意すべき事を申上れば、中坐をしないことです、けれど萬巳を得ない時は主人に丁寧に謝した後に起つのが禮であります、又た食卓に於いて食物の善惡を品評したり、或は卓上に飾つてある花に手を觸れたり、大聲で給仕を呼んだり、酒に醉つて居睡をしたり、他の卓子に居る人を批評したりする樣な事は、失禮な譯故、御愼みなさいませ。

△戀愛は感情の過敏を來すものなり。

△戀愛は人をして夜は眠らず晝は思はしめ、食事を忘れしめ、以て其の戀人の美所、善所、能所を一時に想像せしむるものなり。

△戀は其の相手の顏を正視する事能はず、然れども、其の容貌の微細の點までよく記臆するものなり。

△大なる戀愛はすべて初見に起るものなり。

△戀に陷る人は多くの時と反省と撰擇とを要するものにあらず、其必要とする所は只一時の對顏にあり、

△智慧は吾人を温むる能はず、又吾人に感情を起さしむる事能はざるものなり。


雲雀 ひばり
鶯 うぐひす
鶴 つる
燕 つばくら
雀 すゞめ
雉子 きゞす
鳩 はと
孔雀 くじやく
鷄 にはとり

四季の鳥類

▲孔雀――は鷄族の一種にして原來印度產なり、往昔希臘、羅馬に於て此鳥を養ひて珍重せり大にして色麗はしく其美觀實に人の貴重する處に負かず、養鳥者は常に一雄をして三四雌に侶なはしむ、雌の卵を生むや其地を撰ぶこと甚だしく、人造の巢窩を去り近傍なる茂樹繁草の地に到りて灌木叢中隱匿の間に卵を下す、蓋し其雄鳥卵を發見すれば即ちこれを啄破するを以てなり、さて卵はこれを採集し數多に至れば普通の鷄に托して伏すること三十日にして始めて孵す、雛の食物は麥粉を以て製したる軟食物に乾酪明礬、鷄卵の熟したるものを和して與へ成長の後は炊熟せる大麥、普通の穀物等を與ふ、此鳥は麥田、黍畝及び花圃等に虫類を窺ふて屢々損害を與ふる事あり、孔雀の舌と肝臟とは古來有名の珍味として羅馬の富豪が嗜食せし事書籍に見へたり、且つ其羽毛の美觀は實に衆鳥に卓絕する所なり。

▲鶴――涉水禽にして頸長く脚長く、大方毛は白くして羽の先に黑色を交へたり、世俗千年の壽命を保つべき鳥といふ、これを飼養するには池邊若しくは大盤に水を湛へて養ふなり、餌は籾にして鰌、鰻の類を交へ與ふなり、朝鮮に多く產す。

▲雉――鷄の族にして目赤く毛に光澤ありて尾は眞直に長く山野に住みて春の頃多く獵さる。此鳥を獵さるには種々ありまづ第一は犬を馴らして、野鷄を逐はしめ、其飛び出して一叢より他の丘陵に飛び渡る所ろ又は飛んで木の上に宿る所を射殺す法にして禽獵中の爽快なるものなり。俊成卿の詠に。

み狩せしかた野の冬やつらからん春の山路にきゝすなくなり

▲燕――一名玄鳥といふ春來りて家の檐間に巢を造り雛を育み、秋去る、爲家卿の詠に。

きさらぎのなかばになると知り顏にはやくもきけるつばくらめ哉

俊成女の詠に。

あだに散る露の枕にふしわびてうづら鳴なり床の山風



鵯 ひよどり
きびたき
文鳥 ぶんてう
烏 からす
鴨 かも
鶺鴒 せきれい
みそさゞい
鴛鴦 おしどり

四季の鳥類

▲鴨――水禽中種類尤も多きものなり、水産物の害を成すも又其種類によりて異れり、又鴨は夜間は群を成し、餌を求むる爲めに水田、地澤、沼、堀、等に來り晝間は湖海の廣濶なる所又は池沼等の幽邃なる所に來たりて浮睡游泳す、鴨の銃獵は大抵湖海の廣き所に於てす凡べて水禽は彈丸を羽翼に受くるも死に至らざるものなれば、水を潜りで容易に捕獲する能はず、故に鴨の類はつとめて頭部を狙ひて擊射すべし、鴨を銃獵せんには湖海の波上渺茫たる處なれば船を艤して鴨獵に用ふる巨銃を船尾に仕かけ、風上より鴨の群集する方へ徐々に向ひ、距離を近くし狙ひを定めて於て一發して數十羽を獲る事あり鴨のむそう網獵法は、まづ麻糸を以て一寸二分目に結びたる凡そ縱六間横二間半の網にして鴨の來りて游息する水の干潟又は砂地等に杭を打ちて之を仕掛け其邊に稗、粟、等を散布して之を秘くし置き鴨の群て啄食する所を手綱を引きて之をかぶせ、一擧に數十羽を捕獲するものなり。俊成卿の詠に。

浪の上に消へぬ雪かと見へつるはむれて遊べる鷗なりけり

▲雁――雁は廣原、平野等凡て廣濶なる地を撰て宿るものなり、雁が常に宿る圃ならば深さ二尺餘、濶さ徑二尺五六寸の穴を一二間毎に數ケ所に掘り各々草莖等を以て上を覆ひ穴を秘し置き薄暮雁の圃場に群り宿る時はるか此方に於て燎りを焚けは雁はかゞりを瞻望して漸々に後へ退歩するものなり因て燎を徐々に雁の方へ送致せば雁は漸次に燎を望みながら退歩し先きに設けたる穴に陷るなり、此時雁は翅を張るといへども、足は地に達せざるを以て飛ばんと欲するも飛ぶこと能はずはぶしを穴の左右にかけバサバサするのみ他の雁も又穴に陷り一擧に數羽を捕へ獲るものなり。

良經公の詠に。

さえもさゆる刈田の原にゐる雁のすみかむなしき冬のあけぼの


山雀 やまがら
四十雀 しじふから
雁 がり
菊戴 きくいただき
鵐 しとど
鷽 うそ
鶉 うづら
鵞鳥 がてう

四季の鳥類

▲鶉――野に住みて秋の頃あはれに鳴く鳥なり、其肉は食用となる、料理にはいろ〳〵あれど少し燒きて宜きほどに切り味噌汁に入てよし、取合せにはもやし茗荷、栗、たけなど入る又叩きて燒き、或は披きて燒くもよし、蒸し鶉といふは肉をこまかにして酒につけ。又豆腐を布につゝみ水を絞り煮て味醂、酒、醬油にて鹽梅し椎茸、木耳など細かに切り、いづれも味をつけ、鷄卵を溶きかきませ、合せて竹の皮を延ばし、鳥の肉をならべ、豆腐其他をば入れ包みて糸にてくゝり蒸釜にかけてむすなり。

鶉を獵さるにはいろ〳〵あれど、霞獵、罠獵、銃獵を普通とす、鶉は白晝叢草中に潜匿して飛揚せず、獵犬これを逐ひ出せば數十歩を飛びて忽ち淺草に遁伏し形を現はさず、故に之を銃獵するには鶉の飛び降りたる小草を直ちに狙撃すべし又罠獵の法は馬尾を以て造り、竹を長さ三尺許り幅三分ばかりに細く割り此竹を彎曲し馬尾四五本を綯ひて弦とし、又二本を撚りて弦へ四本づゝ罠を打つけそれを數百本造り囮鳥をよく豢養し温室に置き又燈火を點じ春の氣候の如くし早く鳴かしめ、新霜初めて降る頃より囮鳥を狹小なる籠に入れ數十籠を擔ひ、罠數百本を持ち鶉の棲息せる原野に至り草間を撰びて罠數十本を移し連ね囮鳥を彼所此所に置き野鶉を誘ひて之を捕ふ、斯くして捕獲多き時は一朝にして百數十羽を獵する事あり。

▲雲雀――初春の頃麥の稍く熟せんとする時多く巣を營み、晴天に乘じて雲表に高翔し、且つ登り、且つ啼き其聲清亮、遠きに達す、倦めば即ち直下して麥圃中に入る人家之を飼養して其囀聲を賞す、飼養に捕ふるは麥既に長ずる頃雲雀の高揚し直下して麥圃中に入る所を認めて其左右前後數十歩、畦を求むれば必ず巣あり、雛を捕へて以て飼養すべし、雲雀は七八月に至り羽毛を變へてより肉肥ゆ、故に十月以後捕獲して食饌に供するの良品とす。


時鳥　ほととぎす
千鳥　ちどり
白鷺　しらさぎ
鴗　かはせみ
水鶏　くひな

四季の鳥類

▲鷺――水禽にして鶴に似たれども遙かに小さし、沼中に立ちて小魚など啄み食す、此鳥料理に用ふること多く、茄子のせんなど入れて味噌汁にするもよし、又串燒にして山椒味噌をつく、白鷺或は五位鷺なども同じ

▲水鷄――形ち鷄に似て小く、夏の頃人の戸を叩くに似たる聲して鳴く、故に其鳴くをば叩くといふ。

▲千鳥――脊は鼠色にして腹白く翼黑くして鶺鴒に似たる鳥なり、冬の頃多く濱邊に群れ集ふて鳴き渡る。家隆卿の詠に。

ころも手に松風さむみ住よしのゆふなみ千鳥うらつたふなり

又紀伊の詠に。　うら風にふきあけの濱のはま千鳥浪たちくらし夜半に鳴なり

▲ほとゝぎす――郭公、子規、杜鵑等の名あり、脊薄黑く腹白くして夏の始め空を鳴きつゝ飛びわたる鳥なり、嘴の肉赤きが故に血を吐きて泣くものなりとの說を傳ふるに至れり、古來詩歌、俳諧に詠せらること多し。西行法師の詠に。

ほとゝぎす聞くをりにこそ夏山の靑葉は花におとらざりけり

▲かはせみ――嘴赤くして長く、羽毛は瑠璃色を帶びたる綠色にて極めて美しく常に水邊に飛び遊びて川魚など食ふ小鳥なり。

▲鴫――は種類多く凡そ四十八種あり形の大小嘴脚の長短羽毛の斑點、色澤各々異なり、且各地の方言數十あり、夏秋の間田澤に集まる故に之を捕ふるには田畔にカスミ網を設くるなり、尤も山鷸は冬時樹の下及び水澤に求食するものなれば銃獲する事あり、黃鷸其他の鷸類は皆西洋料理に用ひて尤も珍重するものなり、故に價も又貴とし、

草花十二ケ月

春の部　　紫素子

▲福壽草

蕗の薹に山吹の花咲かせたらんが如きものに福壽草の名を冠らせてこれを新春第一の瑞草となせり。今多く市に鬻ぐは室咲にして、二段咲き三段咲きの珍はあれども、鉢に愛でゝは單瓣こそなり。青梅の地この花に名ありて、吉野村に梅を訪へば、また此花を併せ賞すべし、さまで匂ひなけれど、瀟洒愛すべきにあらずや、名さへ福壽草の、床の間にこれなくては春も淋しき心地す。天日草、元日草はそが異名にして、むづかしくなりては報春草などゝも云ふなり。

　かくれ家や麥の二葉を福壽草　　乙由

▲雪割草

吉野山に義經に別れにし靜とや云はまし。冷たき雪を割りて萠出でゝは、雪割草の名に呼ばれて、雪其儘を花に匂はせ、菫よりも小さく、筆草よりは賑やかなり。雪をも割るの力に愛でゝ、目出度きものゝ一に推され、鉢植ゑの果報は福壽草に讓らず、桃色に咲けるもあれど、先づは白きに此花の命はあらん。

▲菫

萬葉に須美禮と誌して、今は新體詩の命となれり。紫の色濃きと、淡きは白菫の星に擬ひて、紅きは虹の一色をや借りけん、芳はしき香鼻をうつて、雪消えがての野面に、行く人の袂をとゞむ、誰にゆかりの色紫ぞ、戀を語れと人にや告げん、たま〳〵鉢に移されては歌よむ人の想ひに通ひて、戸の口はむしらずと置けすみれ草、一茎もこの花には諧謔の願を喋みたりと見ゆ、一葉草また一夜草とは此花の異名にして、單瓣と重瓣とは此の花の風情に見るべし。

▲紫雲英

水も枯田の底見えぬまで咲き盛りたる紫雲英の暖き日を宿しては、紅き、白き、とり〳〵に、犬も此處へは足を入れじとぞ。洵に絨氈を敷きたる如く、同じ背並に茂り合ひて、そよ吹く風に頷きぬる風情、さらね

百花譜（春）

椿

つばきは冬より春へかけて花さく紅白二種ありて、一重咲八重咲あり、葉は厚くして千葉密生す實はしぼりて油となす。

福壽草

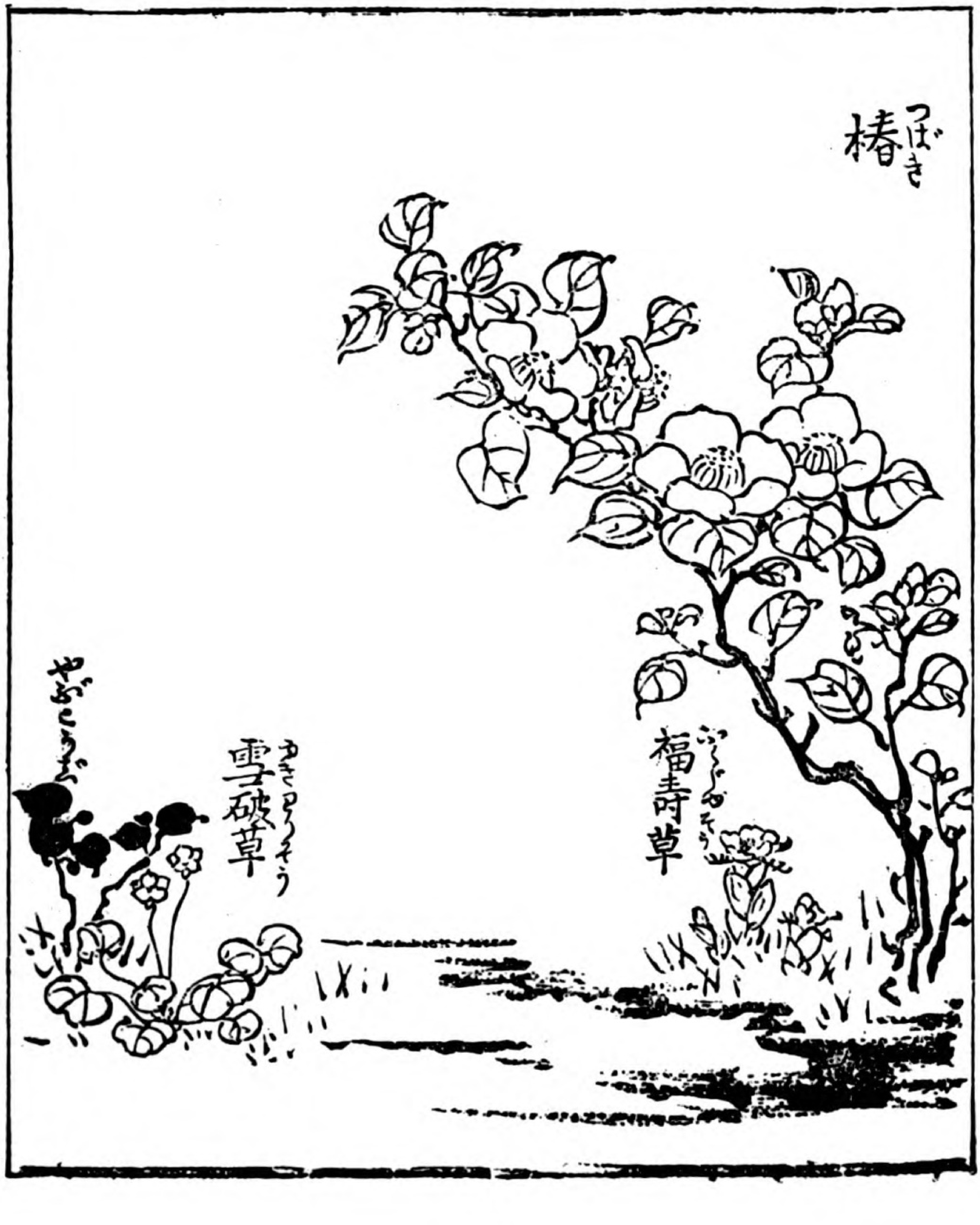
福壽草は芽出度き草なり冬至より三十五日にして花咲く其色黄にしてさながら黄金のごとし、正月の床に植ゑて佳瑞となす。

やぶかうじ

俗に萬兩草といふ、正月緣喜に用ふ幹は小にして丈數寸に充たず實は珊瑚のごとく紅ふしてうつくしきものなり

雪わりそう

三冬嚴寒の時、土くれを割て出で花咲く、細草にして丈二寸に滿たず、花は純白にしてやさしきものなり。



は近き小川の岸に、一本二本覺束なきが、流れに影を宿すにも、いみじき眺めならずとせんや。雨にも堪えじと見ゆるものから、里の童に摘みとられて、花束の暫しは榮えを誇れども、やがて塵塚に打すてられて、果敢なく窶れ行くこそ哀れ。

▲蒲公英

土には犇と根をからみて、打擴げたる葉の間より、黃金の色のゆかしくも、菜に行く蝶をこゝに呼びて、一つと見ゆる其花も、多くの花の集りては、蜻蛉の眼にも似通ひたり。堯舜の世の民を問へば、日に耕し、夜に寢るとこそ、此花また浮世の塵に染まねばや、朝は咲き出で、夕に萎みて、毛垢の如き種となりては、風のまに／＼散行くなり。姿さまでに高からぬも、春の野面に此花なくては、うたゝ淋しき想ぞすなる。

▲風信子

百合にも似たる根の圓さよ、讀んでひやひんとゝ呼ぶぞ可笑しき。靑に咲き、また紫に一つの莖の力として、幾つの花を結ばんとや。見る眼に懊惱しとも、複郁たる芳香菫菜に讓らず、床にこの花の一鉢あれば、百の香水も其の香を消しぬるとや。風信とは風に香りの色を傳へて、花の誠を告ぐるにやあらん、寒さを忌むの心を問へば、雪に匂はぬ操と答へん。

夏の部

▲櫻草

吉野初瀨を小鉢に見せて、梢の花は見ずともあれかし、同じ色なる櫻草の、草にも咲いて見するとや。燃ゆる紅、濃き紫の、野面を飾るは云はずもあれ、羽衣と云ひ、水鏡と呼び、さては光輝殿などいかめしき名に賞でられて、櫻に先だち、櫻に遲れ、長き眺めを緣にとゞむる。薰れる春の客人とパアンスも唱へけん如く、春の季より夏かけて、誇りは獨り花のみならず、葉もやさしくて、纎弱女の手に摘まるゝぞ﨟たげなり

▲三色菫菜

匂はずとても花に見よと、心可愛し、ぱんしいと人に呼ばれて、大いさは重瓣の櫻に劣るまじきが、黃に、

百花譜(春)

山吹

やまぶきは花黄にして一重あり八重あり四月下旬花咲く、

牡丹

ぼたんは花の王なり、一名ふかみ草、又二十日ぐさともいふ、五月上旬頃花咲く、花は紫色なるが多し、紅白もあり、紅を上品となす、尤も花の富貴なるものなりと古人も賞せり、一名花王、又木芍薬といふ、牡丹の根は薬に用ゆ、

藤

ふぢは五月上旬頃に花さく、色は紫と白とあり、紫は葉おそけれど花の長三四尺に及ぶ、白花は早くさきて長短かし、一名招豆藤といふ



紫に、さては白にも染分け衣の、莖にも重き花瓣なり。惜しや土鉢に植ゑられながら、莽と蕾のもたれ合ひて、露の恵に霑ひては、さらでも屈める花の趣き、憂しと誰かは名に呼ばざらん、哀れにも見ゆるものかな。

▲矢車草

矢車といかめしき名にこそ似ざれ。薊の刺を置忘れては、風にも堪えぬ莖の細さよ、花の上にも花を飾りて、紫きに映へ、白に淡く、赤きに可愛く、桃色の情けあり氣や、とりどりにうとましからぬ趣きあり、雨に重たき矢車の、淀にも通ふ風情はあるべし。

▲牡丹

牡丹切つて氣の衰へし夕哉と蕪村は云ひぬ。實にや昔より花の王と呼ばれて、深見草とも富貴草とも、二十日草とも唄はれ、此花の一度咲きては庭に雨雲の影もなしとや渤海よりの傳來と聞きしが、濃き紅の花大きく、一輪の蕾に風を厭ひて、破傘の沙汰ともなるを、冬は雪覆ひして寒を防ぎ、濕りし土を除きて培ふに吝なるなかれ、接木も草には相應はざるも、冬を枯れねば木とや云ふべき。

▲罌子

楊妃の醉て欄に凭りしが、凝つて此花に俤をとゞめけん、綺羅常住と感じて、危なき莖に身を投節の、浮きたる色も暫しありけり、虻の羽風に一瓣散らせて、やがて畑の土とも還れば、一念の恨によりて、ごそと刺こぼつ果敢なさよ、許六の老爺ならずとも、誰かは後世を弔はざるべき。

▲月見草

夕顔の花に擬ひて淺き黄の蕾よれては、いつかは月を迎ふべきかと見る程に、露の乾ぬ間を人知れぬ想に咲くとや、待宵草とさへ世に唄はれて、日には咲かじと月に誓ふか、億萬の程も知らねば、徒らに月の宮居を戀ひての事か、莖は有繋に塚を凌いで、花のみ獨り首垂かゝる、嫦娥淋しとみそなはすらん。

▲麝香連理草

珍らしきものゝ一つとや、すうゐとぴいすと名に呼

百花譜(夏)

馬蘭

ばらんは澤邊に生じて氣臭し花はあやめに似て細し色もうすし

つゝじ

初夏の頃花さく、紅、白、紫、あり、紫花は四月上旬花さく、赤つゝじは下旬に咲く、蓮花つゝじは少し遲く花大にして見事なり、霧島は花濃紅にして美なり、もちつゝじは淡紫にて五月花さく琉球つゝじは白色と紫とありて猶なそし杜鵑花は六月咲きて紅紫又は白紅まじり種種あり

菖蒲

あやめは水中に生ず、花は杜若に似て小さく葉も又細し・又菖蒲といふは別種あり。花なし、六月中旬花咲く



ばれて、花も實も似たりやそれよ、豌豆のそれよりは大きくて、蔓のまゝなる我儘は見赦し給へ、香り高く棚を零れて、白も芽出度く、紫強く、赤、黄、絞りのとり〴〵に、花束の簪ともなり、美しき人の髮に挿されて、蝦茶式部の品上りするぞ目出度き。

▲燕子花

いづれ菖蒲と引きぞ煩ふとは云ひしが、菖蒲よりも立優りて、水際三尺の空に白、紫の色を競へば、八ツ橋の人の通いも、下駄の響きを竊みて、花の露を落さじとぞ、葉は仰いで天を衝けども、花は俯向き勝ちの水に詫びぬる姿、たとへば情けある將軍の、陣中琴を彈ずるが如けんか、根元よりふつりと剪の音させて、目出度き宴に白き花をば選みたる、流し根締めの妙を見せて、金屏風の下に涼しき俤はこれにとゞめんをさすべし。

▲瞿麥

常夏は八重瞿麥の名なるべし。かれ〴〵や川の水面に、破蛇籠の詫びしけれども、此花の零れ咲きては、繪ともなり、歌にも詠まれぬべし。延びるが儘の竪横さまに仆れ伏して、小雨に咲きし瞿麥の、病める女にたとふべきか、重瓣もあり、單瓣もありて、淡紅き色は湯上りしたる薄化粧、哀れ深きものゝ一ならん。

▲勿忘草

和名を姫むらさきと云ふとかや、戀ひに惱みの人二人、愛し給へよ忘れな草の、一人は水に落入りて、還らぬ旅の置土產、だにうぶ河の岸に咲きてぞ、其名さへ世に忘られで咲きしとなり。夏ともなれば淡紫に咲き盛るを、夏を紫雲英と色こそかわれ、野を一杯の眺めにぞ、持重りせし荷物を、下して憩ふところなしとや、勿忘草のいつまでも。

▲百合

遠からん者は音にも聞けや、鐵砲百合の名にも似ざるやさしさを、近くはよつて眼にも見よかし、天益百合の聲には若かでいかめしからぬを、さるは姫百合の臈たけたる、鹿子百合の反りかへれるも、こと〴〵に一つの癖はあるものよ、紅透し、黄透し、絞透しのい

百花譜（夏）

百合

百合は品類多き草なり此花四月下旬より開く、紅、薄紅、白いろ〳〵あり。巻丹といふは七八月頃に花さく、大にして色は黄に赤を交ゆ、五六尺も立ちのびて花多くさき、葉の間に黒き實を生ず。又山丹は五月の始め花さき小さくして赤白あり、いづれもうるはしき花なり

槿

むくげは芙蓉の花に似て小さし、薄紅、白あり、八重一重あり八月中旬花さく

罌粟

けしは眉目容すぐれ髪ながく常は西施の鏡を愛して粧臺に眠り後世なんどの事は露ばかり心にかけぬ身の一念のうらみによりてこそと剃りこぼちて尼となりたるこそ肝つぶるゝわざなれ（許六）



ろいろも、いかでか白き山百合の、品高きに似らんや、蕾重たく見えながら、咲けば女神の立ちけん姿、輕き畑の上にも匂へり。一本百合に小雨の夕詩の書ども友としなば、淸き想の胸に湧て塵の浮世もよそに過さん。

▲ちきたりす

狐手套花と書く、輪鐙に似たる花いくつか莖を柄形に鈴と下りて、土を抜くこと三尺ばかり、紫きの色濃くもあれ、黄金の色の薄きも佳けれ、花の内輪に斑紋をとゞめて、神女よ振れとの神の戯れ、よしなき名こそ恨みならずや。

▲夏菊

夏菊やつはものどもの夢の跡、秋に魁けて夏菊の名にこそ呼ばるれ、同じは菊の兄弟にして、培の法によりて、かくは早咲の褒れを得しとや。眞個に其葉其花も秋の菊に異らず、只冷麥を啜りて賞するの鉢を飾るに過ぎずと知るべし。そもや花の冥利にや叶ひけん、咸陽宮に二月瓜を薦むるの類、此所ぞ此の花の命なりける。

秋の部

▲牽牛花

平咲に瑠璃の色濃く、亂獅子の狂咲きは紅きに貴し、孔雀咲、桔梗咲、さては六瓣咲、風鈴咲の贅は云はじな、何かなしに貰ひし種を、三坪に餘る四目垣の下に蒔きて、嫩より土を養ひ、やがて咲き出づる頃ともなりて、一日は瑠璃を、一日は紅を數ふるも可笑しからずや、朝顏に釣瓶とられて貰水の風流も、實は其花を惜むの慾にして、鉢植の出窓に朝日を厭ふも、偏に一日の眺めを貪るに過ぎず、さはれ此花の咲出でゝぞ、常は朝寐の主人を誡め、庭下駄に露を蹈ませて、懐手の無性を矯むべし。床の投挿に蕾を樂み、水入の一輪挿に、墨の香を含ませ、大なる葉を掌に鐵砲の響きも聞かせて、泣く兒をだます便もあるべし、秋に目出度きは此花ならずや。

▲蓮

賤しき勤めせる女の、節操正しきを泥中の蓮に比へ

百花譜（秋）

鳳仙花

花に紅白あり八月頃さく一名金鳳花ともいふ花に紅、紫、碧あり

秋海棠

秋の始めに花さく。葉は葵に似て淡く花は海棠に擬ひてうろはし

蓮花

夏のなかば、池泥中に咲く花大にして淡紅、清浄なる花なり、はすはうつくしき所すくなし。たとへば上手の畫にかける天人の顔にひとしどこやら佛めきて心ちおかるれ（許六）



り。實にや古草鞋投げ込まれて、むさきもの浮ける池にも、この花の清く咲き出で、紅に、白に、氣高くも岸の小草を拔けるを見ては、誰か清淨の氣に醉はざるべき、葉に轉ぶ露の白銀、花に誘ふ雨の靜けさ、極樂に咲くとはこれか、人なき池に獨り咲くなる蓮の花瓣、そも紫の雲を呼びて、奇瑞をこゝに示さんとや、東に不忍の池あれば、西に大津の池ありて、大和に菅田、劔の池、こゝ住吉の池に其名を知られ、嵩高の氣に富みて、濃艶の情に乏しきも、君子獨坐の侶となりて、茂叔は花の上品に押したり。

▲睡蓮

其名をにんばあと呼ぶは、水中の女神と云へる心なりとや、葉は蓴菜に似通ひて、花に蓮の俤、其花瓣の稍細きぞ恨めし、卷葉浮葉の水を拔かず、花は三四寸の高さにありて、濃き紫、淡き紫、濃き紅、淡き紅、白きもあり、黄なるもあれど、いづれ眺めはとりどりならずや。鉢に淋しく見えながら、淸きは蓮にも劣らじと、涼しき色を夢に湛て、歌詠む人の袂をとゞめん。

▲水葵

淡紫の花いくつか、水にやさしき姿を宿して、丸き葉裏に螢もかばゝん。水盆に愛でられては、貴き席に侍るの幸はあれ、慈姑田に生ひ生でゝは、鎌の刄尖にかゝるも痛まし、さるにいつしか水葵の、白きはこれが珍とせられて、未だ見ぬ人の多しとか、涼しきものゝ一なりける。

▲鴨跖草

月の照る夜を咲けとなん、月草と名にこそ呼ばるれ。露の置く夜を愛でよとや、露草と人に呼ばるゝ。塵塚の陰、小溝の縁にも可愛き色の一つは見せて、匍ひては節に根を下しつゝ、いづくまでもとのたり行くなる、莖はさまでに愛たからねど、花の風情にゆかしさ餘りて、螢のこれに宿かるとや、螢草とは名にこそ負へれ。

▲桔梗

桔梗は人にたとへて、恨みある若き女の、物思ひに沈める形か、淡紫の淋しくも野分に殘るはすれ物、萩にこぼるゝ雨を借りて、こゝにやさしき色を見せしか、

百花譜（秋）

桔梗

きゝようは其色に目をとられたり、野草の中におもひがけす咲出たるは田家の草の戸によき娘見たる心地である（許六）

芙蓉

ふようは水に生ずるを水芙蓉といふ、荷花なり、木芙蓉といふきはちすともいふ八九月頃花ひらく

女郎花

女郎花はいにしへより女にたとへ我落ちにきと法師の破戒によめるは女郎の二字になづめるならんか、初秋の風によろめきたてるも菊にさきをかけられむは手柄やすくならんかと思へる物すきこそやさしけれ（許六）

鳥頭

とりかぶとは花桔梗いろにして形ち鳥の頭の如し



花は咲くとも咲かじとも、蕾ながらに憂ひを含めり。葦の腕木に身を凭せて、とんと拗ねたる風情には秋の哀れもこれよりぞ知られぬべし。世には七草の一に數へられて、紫苑にうきを語るもつらし。

▲葒草

雲を凌ぐか大蓼の軒を越して、花のみ窓の戸を叩くか、歌に穗蓼と詠みけんやう、花紅にほろ〳〵と、宿借る客の笠に零れ、稻の垂穗を其儘なり。されば飯事の筵の上、摘みとられては赤飯の名に呼ばれて、隣りづからの贈り物、丈の高く、莖の太きに似もやらぬは、有繋に此花の德ならずや、薄にまぢる葒草の、同じ穗ながら、色いと紅し。

▲花泊芙蘭

莖は韮に似て、葉もまた然なり。淡紅き花に水仙の風情をとゞめて、鉢に一輪を愛づるも、風雅の嗜みならずや。小草まぢりに咲きし花の、人にはかくとも知られであらん、礫中に玉を覓めなば、この花あるを忘れざれ、花泊芙蘭の名にこそ愛でゝよ。

▲女郎花

秋風によろめき立ちて、誘ふ水あらばの趣き、戀に破れし若法師の姿ありとは、許六も有繋好奇ならずや。淋しき莖に黄を溶せて、いさゝ小川の岸に立ちけん、移して鉢の眺めとすれば、丈のみ高く、面窶れして、椽に鴨居の煩ひあるべし。松を男の頼みたりとて、縋り知らぬ身にしあればか、徒らに振すてられて、坦に操を售りしぞ哀れ、女郎花とは誰が戯れの名なるらん、簪に似たる花の重たさ。

▲虎杖

紅虎杖の紅きは云はず、根は藥草の五淋を治して、人に解熱の功ありとや。嫩にめでゝ放下したるに、執念くも土に縋り、雨滴落ちに履を逃れて、咲き出し花哀れなり。

冬の部

▲菊

淵明がこれを東籬に養ふてより、此の花の幽逸世に

百花譜（秋）

萩

はぎはやさしき花なりさして手に取りて愛すべき花にはあられど名目にて人の心を動かしはべる（許六）

鷄頭花

雞頭は葉莧に似て少し長く莖赤し、花は黄赤又は交りあり八月下旬花さき霜後迄あり花は鷄冠に似たり

菊

菊の隱逸なるは和漢ともに名に立たる花なればあらためては言がたし風流物好目立たる事を嫌へるはよき女の夫などに後れて閑かなる片田舍に立しのび、よはいもいまだ三十になるやならずの盛なればさすがに髮などおろすべくもあらずたゞ一人ある幼き者にひかれて心ならず世の中に住侘たるを恥かしと思へる人には似たり（許六）



知られけん、今は市松の油障子の露を凌ぎて、おほけなき御園の眺めとなりし。嵐雪と云へる男、此の花を見て、黄菊白菊其ほかの名は入らじと云ひしが、まことに白と黄あるによりて貴しとぞ。さるを禿菊のいぢらしさ、何の罪あると云ふ事もなくて、人形の袖ともなり、十日の菊の哀れをとゞめて、廻舞臺に歌舞伎の似顔を愛でらるゝ運めとやなりし。一本に千輪、これを大御代と銘して、大宮人に愛でらるゝ果報に比べては、雲か泥かの差別なり。秋の末より冬にかけて、此の花獨り世にときめけば、人も紅葉の瓢を下して、塵をこれにや拂ふべきぞ、小春日和を菊日和の、雲なき空に匂ひ高くも。

▲こすもす

繊細ければ腕木を頼みて、六尺豐かに亂れ咲くなるこすもすの、白きに菊の香をとめて淡紫の色あざやかに、我を見よとの誇あるべき、照日の影を命として、淋しき庭を裝へるは、花に殿りの譽れを得んとや、思出多き姿にこそ。

▲寒菊

禿菊の時を忘れて、咲き出しや此の花の、葉さへいさゝか霜に燒かせて、梅の根締の投挿しに、春まで色を保つと云へり。世に拗ね者の我を忘れて、深山に閑を樂しむ景色、花に淋しき世に愛でられて、梅の冥加を占めんの沙汰か、さりとてはまた心憎し。

▲水仙

奈良に春日の宮居古りて、錆びし樂殿そのまへに、舞ふや乙女の簪の花、落ちて咲きしが此花なるべし。柔順に延びし葉の影より、白きは花の精なりとぞ、捨つる灰にもうるますして、清くも咲きしものなりけるよ。支那水仙の葉の屈みて、花の黄なるは下品なり、水盤に白き根のまゝ、上にも白く、下にも白く、かくてぞ冬は寒く覺ゆるも、玉の肌の濕かければ、影を障子の外には見まじ、同じは床に据え置きの、水注す袖も觸れじとぞ。

▲ぷりむら

挿木根分に自由を見せて、櫻草に似通へども、それ

百花譜（冬）

寒菊

寒菊の霜をいたゞき雪をかつける中に忽然と精骨をつくしたるは天地造花の行はれざる所なしと感ぜり

（許六）

水仙

花は冬の初よりひらき初春まで花あり、形ち酒盃のごとく黄なるものあり、花びらは白しよつて金盞銀臺といふ、葉は石蒜に似たり

南天

なんてんは六七月の頃小さき白き花さき實のり、霜月末より紅になる、其色めでうるはしくさながら珊瑚をつゞれるがごとし、此木俗間にありていろ／＼の縁喜を持つ、惡しき夢を見し時、此木を見れば夢消ゆるといふ事多きゆゑ手水鉢の向ふに植ゑ置くなり



よりは花大きく、赤に、白に、黄にも咲くとぞ。寒き時節に咲きながら、寒さを厭ひて、火桶に近く贅をやりたる、いづれは此の花の冥利なるべし。さるにても、ぶりむらとは賤しき名なり、寒石竹の綽名欲しけれ。

婦人と洋装

私は玆に洋服着用の事を申ませうと云つて別段ハイカラがる譯ではありませぬ。只だ、是からは御婦人と雖も隨分洋服を召さればならぬ場合が出來て參らうし、それに御自身に召さぬまでも、お子さん方や旦那樣に御着せ申す必要があるのに、全で洋服の事を御存知なく、夜會服は何んなもの、フロクコートは何んなものと云ふ事位さへも御承知ないやうでは甚だ困つた譯と存じ、斯う云ふ方の御心得までに、洋服の話を提出した次第であります。先づ婦人の

▲大禮服から申上ると、之には種々の形ちあり、色も極つては居りませぬが、黒色丈は老女の外は用ひないことに成つて居ります。是は普通の衣裳と違ひ、胸の部を廣く開けて肌をあらはし、且つ袖も短く着け、僅かに肩の所にかゝる位に仕立るのであります。而して後の方は腰のあたりより、ツレンと申して長い裳に似たものを懸けるのです。大禮服に限り胸を開けるのは、上古草昧の遺風だと申す說も御在ます。尤も胸肌を直接にあらはすを厭ふ場合は、薄きレースやうの物にて肌を覆ふても宜しい相であります。また大禮服を着る時には上に外套に似た服をはをり、頭に頭巾を冠るのです。それから大禮服の飾りには、大抵造花とか帛紐とか云ふものを、種々の形に結んで着けることになつてをります。それから、

▲デコルテー、マンシユ、クールと申す服は、矢張胸を廣く開け、裾を長く曳いたもので、晩餐や夜會の折に着用する禮服であります、又た、アンキヨールと申します服は、胸のところが少しばかり開いて、袖が短く裾の長い着物で、晩餐にも夜會にも着用致します、又た、ロープドモンタンと申すのは、大禮服に似て、ツレンを懸けないので、食事の時の禮服としてあります。

▲訪問の服　晝間訪問の場合などに用ひます服は、胸の閉ぢた、裾の短いもので、物は大抵絹を用ひます。此の服裝なればどんな高貴の御方へも參れるのであります。

▲婚禮服　結婚式の時に用ひます禮服は、白色を選び、上に白い薄衣を被ることに成つてをります。

▲喪服には、黒色無紋で、光澤のないものを用ひます。凶禮の場合には啻に服ばかりでなく、手袋も襪下も帽も靴も黒を用ひ、顏掛も黒の生縮緬類を用ひます。

▲外套　一番上品な外套は引廻し形の縁に、飾りを着けたものであります。其の次は袖のあるものです、冬季の寒い時分は綿或は羽毛を入れ、裏に毛皮を着けたのを用ひます、夏季は袷の外套を着ます、それから塵防け雨除け專用の長外套は、室内に這入る時分には脫ぐことに成て居ります。

草花の栽培

草花の種子には、春蒔にて良きものと、秋蒔にしても善きものと、又春秋何れの時に蒔きても差支なきものとあり、然しいづれかと云はゞ、春は萬物皆發動の期にある故、外界亦漸く順境に向ふの時にて、作業其他に於て、秋期の次第に沈靜の時に迫らんとするの時に比べて見れば、其の難易と云ひ、結果の善悪と云ひ、決して同日の論にあらず、然し吾人は、此の困難にして、奏功の難き、秋蒔の方法を採らねばならぬ事あり。是吾人心情の上よりも、又供給の上よりも、避くべからざるものにて又全然草花その者の性に反する方法にあらじ、否其の性を利用する妙法にて、非常の願望が其の間に含まれあるものにて、成功の曉に於ける吾人の心情は決して餘人の想像し能ふ所のものにあらじ。秋蒔は適期を知るが一番必要なり、餘り早きも遲きも共に奏功宜しからず、即ち早過ぎる時には、自然苗の滋長する傾向を免れず、殊に節間の長きは、冬寒に堪ゆる力が弱く、又餘り遲過ぎる時には、發芽するや否や、寒氣の襲來に由て、忽ち萎縮枯凋して、共に健全なる苗を望むことが出來ず、先づ東京附近の彼岸後十日過を以て、最も適當なる期節とす、彼岸前後二三週間は播種の適期と見て宜し。床地は温暖なる南向の地を撰むべきで殊に北方の家屋、又は樹林墻壁等に依て、遮ぎられゐる所は、尚更妙なり、且つ巾及び長さは共に餘り大ならざるは、管理手入等にも萬般都合の好きものにて、排水の上からは平地よりも三四寸高きを貴ぶ、耕耡は、可成丁寧にして、土塊瓦礫の取り去るべきは勿論、上部には、四五寸の厚さに有機物の腐朽して化成したる所謂腐植土を篩にて透し置き、板の様なものにて輕く均して平にし此に種子を下す。種子若し小にして、播種に不便なる時は、砂を混じてまく、其の際には別に土を被ふの必要はなきも、普通は更に覆土をなすべし、通例細土を篩ひ下す其の厚さは種子の大小に依りて差異あれども要は種子の隠るゝ程度を以て最上とす。次は藁淳又は水苔等を以て上部を覆ひ種子の動揺を防ぎ、種子の發芽を補助する一手段なり、故に發芽後は直に取り去るべし、成可節間を短く太く健強に育つとは最も望まし、若し貴重の種子にして、必ず發芽し生育せんことを思ふものは、床蒔よりは鉢蒔を安全とす、是れ床地よりも、一層簡約なる方法にて栽培者の理想通りに作業し得るもの、給濕灌水等自在になす事の出來る唯一の便法なり。

秋のいろ

(丸山晩霞筆)



柿
満月
鹿鳴
秋の七草

盆栽の趣味

松の門

室內裝飾の一つとして又士人貴女の愛翫すべき遊技の一つとして盆栽、盆景などは極めて高尚優雅なるものなり、而して盆栽、盆石より盆景、盆華に至るまでそれ〲相互の關係ありて又それ〲に特種の趣味を持つものなるが、今其の種類と其の作り方の大體法則とを區別して言へば大凡左のごとし。

▲盆石

盆石には單に盆の上に飾りて見るものと是れを水盤に容れて時々水を灑ぎ其滋潤の色を愛するものとの二樣あり、古書に、石にて見る時は盆石といひ、盆にて見る時は盆山と云へりとあり、されば盆石と盆山は同一なるが如くにして其實は異なれり。

盆石は元より磊々たる石塊の平凡なる形狀を見るにあらずして、天工造化の奇巧を弄したる山に似たるもの、峯に似たるもの山谷、溪澗自然の趣きを現じたるものを採りて愛翫するなり、されば其形狀のいよ〱奇にして其姿態の益々雅致あるものは價も又いよ〱貴とし、古來名石と唱へて折紙をつけ千金を以て賣買したる事ありしが、近年又大いに奇石の流行を來たし各愛石家は競ふて奇石を蒐め其價も又百金貳百金は愚か一塊の石を以て千圓以上の價を有するに至れり。現に近頃岩崎家にて買入れし名石赤壁の如きは確か二千圓なりしといふ。

盆石の產地は多く京都に在り、叡山、鞍馬等の產は盆石中の冠たるものなり、之れに次ぐは豐後の臼杵產とす。

盆石中、鞍馬石、糸卷石といふあり、鞍馬石は自然に鐵の銹を露出して掬すべき風致あり、糸卷石といふは黑石に白き糸の卷附たるが如く、見ゆるを以て此名あり。

さて石の賞翫すべき所は、いふまでもなく自然石にして、山より谷に轉び出し數千年若しくは數百年の間急流に晒され、絕へず岩角などに打れて、いつとなく

角々も磨滅し屈曲を生じ、古色蒼然とし如何にも雅致あるものなり、斯る石を得んと欲せば、自から其境に足踏み入れて種々の危険を冒せし上ならでは、容易に得難きものなれば、之を我物として詠むるは一層の趣味を增すものなり。

人工を加へたる石は前の自然石とは雲泥の相違にして如何に珍奇なるものにても幽妙の趣を存するは少きものなり。

石の特色は遣水しても直ちに乾燥せざる所にあり、盆石の世に貴ばるゝ所は即ちこの點にして水がよく石を潤はし、石其物の色が水に反射し大に雅致を增すものなり。さて石に此の特色を有するは專ら京都の產、臼杵の產に限るがごとし。

盆石は盆栽と異なり、別に培養手入をするの要なく唯石に水の乾かざる樣にすればよし、それも時には一兩日間一滴の水をも與へずともさのみ古色を損ずるものにあらず、要は只苔の凋死せざる樣に注意すればよろしきなり。

すべて石の高低或は模樣によりて其石を入るゝ鉢に差違あり、石の高き時には鉢の深さもこれに準じ、低き石は、淺き鉢を用ふべし、色の配合も又之れに等しく眞黑の石に黑鉢を用ふれば配合おもしろからず、黑き石には是非とも白き鉢を用ふべし、又陳列の方法も考ふべき事なり、すべて大石の傍らには小石を配し、いづれも大小の緣を離れぬ樣にすべし。

▲盆山

盆山は盆石を湊合して一種の景趣を作りたるものなれば盆石のやゝ錯綜したるものなり、即ち一個の奇石を中心として盆畫に用ふる彩砂を用ひて多く海濱の風光を模するものにして古へより尤も盛に行はれたるものなり。

盆山の砂の打樣は秘傳のあるものにてその日〱の天氣によりて波の立て樣に工風あるべきよし古書に見へたり、其の砂は古來諸國の名物を用ひたる由、又寒水石を碎きてふるひて用ふるものなりと即ち風の荒き

時は大浪を立て、盆山の裾に打かけ、風の静かなる日は細浪の様に打つなり。

▲盆景

盆景といへるは山水の景色又は田野の風光などを一小盆上に寫し出す即ち一幅の活畫にして山峩へ、水流れ、牛馬歩み農夫耕やし、船浮び犬走り漁父釣する等の景狀を最も自然に最も雅致ある様に作り出せるものなり、蓋し盆景は箱庭の進化にして一小盆函の中に天地自然の趣を模し、春は春風駘蕩、花咲き鳥歌ふの風色を示し秋は金風粛殺、萬物悲傷の光景を活現し、江山を寸幅の間に収め天地を壺中に容るの妙あるものなり。



前述の如く盆景は繪畫に揮毫する如く手先を以て種々の風景、山岳等を寫し出すものなれば

鉢に造ると紙に描くとの相違だけにて美術としては繪畫に對しても遜色なきものなり。

盆景には樹木の配列が肝要なり、樹木は始めの物より漸次に小樹を用ひ、奥深く見ゆる樣植ゑつくべし又河川にて山川の時は元より船等のあるべき筈はなく、如何にも深山より流れ出づるが如くに砂或は小砂利にて作るべし。又野川なれば裝飾にて遠近を作り、海なれば片帆にて三分か五分も離して前なるは大帆後なるは小帆を以て配合すべし盆景を造るには材料として重に化土、砂、苔、の三種を用ふ、其の費用は數寄を盡さざれば至て小額にて出來得れども、樹木、鉢裝飾品に數寄を凝せば中々費用のかゝる者なり、故に成可く裝飾品等を除き僅か一品か二品にて輕便になすがよし。

鉢の選び方にも又大に注意を要す鉢の作りによりて樹木を損する恐れあり、僅か數日間の眺めに供するなれば鉢の底に水拔の穴なくとも保てども、永く眺めんと欲せば穴の明きたるを選ぶべし。

▲盆畫

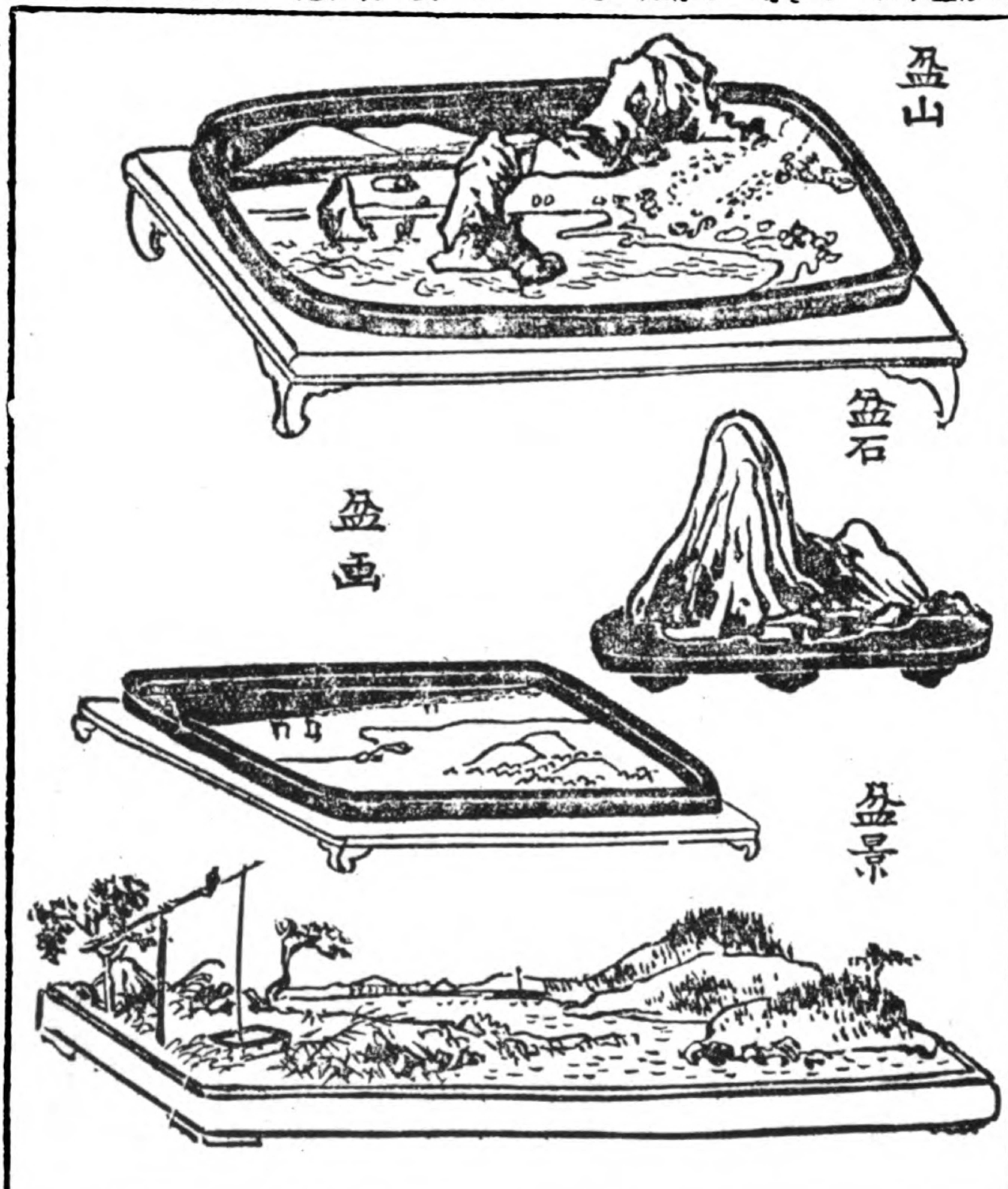
盆畫は砂畫の高雅なるものなり、山水風景、花鳥の圖模樣抔彩砂もて盆石上に描き出し据ゑ置きて見るものあり、又其の彩砂を糊などにて固着せしめ楣間壁上に掲けて賞翫する樣にしたるものなり盆畫は元より平面圖のみにして繪畫の部類に屬するものたるべし、彼の繪畫若しくは、彩色せる絹糸もて縫い出されたる刺繡の如く彩色せる砂を以て描き出せる一幅の盆畫と見て可なり。

△盆栽

盆栽は以上各種の中尤も普通に行はれ、其の賞翫の範圍も又頗る廣く且つ其の種類の多きに至つては實に千百種にして止まらざるべし。所謂植木道樂と稱する緣日のお客樣より一鉢に數千圓の價を惜まざる斯道の愛翫者に至るまで江湖に其趣味を有する人極て多し。

抑も盆栽は諸種の灌木又は草花の類を小盆の中に移

植するものにして一芽千金の幽蘭も縁日の夜に曝さるる福壽草も等しく盆栽なり又幹の朽ち殆ど生命のなきが如き梅樹、一尺ばかりの木に拳大の實の五六個も着きたる橙、是又盆栽として好事家の賞翫に價する者なり、されど元來盆栽の貴ば



るゝは盆石のそれと同じく膚寸の稚樹が幾千年の星霜を閲したる大木の面影を存じ、其姿態と言ひ枝振りといひ全く山野自然の風趣を存じて亭々鬱鬱たる樣、眞に抱圍の老樹と思はしむる處が盆栽の價値の存する處なり、樅、欅、松、杉、檜の

如き喬木をして僅か方數寸の鉢に植ゑしめて而して其大木たる特質を現はさしむるに至つては全く是れ美術の極致にして世の盆栽家の愛翫して措かざるも尤也。盆栽中には又大いに流行を逐ふものあり、萬年青の如き其の一なり、葉に趣きのあるもの、斑のおもしろきもの、時として一鉢一株數百斤に價するものあり然かも一度び流行に背く時は路傍の雑草と選ぶ所なきに至る是等は愚の至りといふべし。

男子と洋服

▲脊廣 は一名ビジ子ス、コート即ち事務服とも申しまして、官吏や會社員が事務を執る時の服です。是は又た輕便な所から して遊歩旅行に出掛たりなにかする時にも用ひます、つまり脊廣は日本の着流しと見て差支ないので御在ます。

▲モーニングコート は朝の禮服であります、色は黒でチヨツキも對にし、たゞズボン丈を縞に致します、此の服は全體朝人に會ふ時の禮服なのですが、今では英米佛とも日中は大抵此服を着用して差支ないことに成つて居ります。

▲フロツク、コート 是は午後人を訪問し又は人に會ふ時に着用する衣服であります。殊に日本では此のフロクコートが一番流行しまして、役人は申すに及ばず、普通の人でも少し禮式がゝつた時には、朝からフロツクコートを着用して、夕暮後燕尾服を着なければならない塲合までも、構はず是で押通して居ります。

フロツクコートの地には昔は總體同じ色を用ひましたが、近來はズボンだけは縞を着るのが普通であります。

▲燕尾服 も夜の禮服で、西洋では午後六時過になると、人に會ふ時でも、宴會に參る時でも、必ず此の服を着ることに成つてなります。日本では之を小禮服と申しまして大禮服に及ばぬ塲合、並に無位無官の人の禮服に成て居ります。燕尾服の地は黒羅紗にて、ヅボンも同様に致します。帽子はシルク、ハツトを用ひます。

▲大禮服 は文武官によつて區別があります、故に之を調製着用するには、一々公の定めによらなければなりませぬ、但し子クタイは白き麻布地の紐を蝶形に結ぶのでして、靴は黒ゴム、手袋は白のなめし革と極つて居ります。

▲トキシード と申すのは丁度燕尾服の尾を切つた様なもので、是はまだ日本には行はれませぬが、心易い人の晩餐會などへ招れて行く時分には至極重寶な服装で、西洋では燕尾服までに及ばない塲合には之を着用して行くことに成てなります。

▲喪服 凶禮に着用する洋服は一切黒です、但し脊廣やモーニングコートのズボンを黒にすることは出來ませぬが、其他のものは皆黒色を用ひます、手袋も黒の皮を用ひ、釦も黒、襟飾も黒、總て黒づくめであります、尤も葬式の塲合には極く近い親戚を除くの外は、普通のモーニング、コート又はフロツクコートで會葬して宜しう御在ます。帽子又は腕に喪章を捲きまするが、あれは近親の人に限るので、其他の人々は眞似るに及びませぬ。

我家の衛生

衛生は一刻も缺くべからざる我が身の義務にして又我が家の責任なり、然らば如何にしてこれを守るべきか、曰く

朝に起き、晝に働らき、夜に眠る、これ衛生の極意なり、千萬言の衛生說この外に出でず、暴飲、暴食は身を破るの基、怠惰、不規律は疾病の始めと知るべし。

西哲に金言あり曰く

△適度の飲食は――健康
△適度の睡眠は――無病　　長壽
△適度の勞作は――愉快

朝夕の心得

▲人間衛生の根本は水と空氣とにあり、如何に滋養を食し、如何に美服を身にまとふも是の二物におろそかなれば眞成の健康は得がたきものなり、新鮮なる空氣と、清淨なる水とは百種の珍味、千種の滋養物にも増して珍たきものと知るべし。

▲新鮮なる空氣と、清淨なる日光は單に濕氣を除去し得るのみならず、又種々の病毒を撲滅するの力あるものなり。三日の雨天も一日の晴天に氣色清々とし、十時間焚火して物をあぶるよりも、一時間日光に照らすの効能は大なるものと知るべし。

▲されば成可く物は日光に燥かすをよしとす、肌に着けたるものは常に日に晒らして其の濕氣を去るべし。

▲朝起き出づるや直ちに床を擧ぐるは宜しからず、夜中身體に觸接せる部分は多分の濕氣及び皮膚よりの排泄物を含み居るものなれば、雨天にあらざる限り毎朝必らず日光に曝し、日の未だ高き間に取り入れ暫時冷まして後疊むべし、若し忘れて日沒後まで戶外に出し置く時は再び濕氣を呼び返して甚だ害あるものなり。且つ蒲團には必らず被布を用ゐ、成可く一週間毎に洗ふべし。

▲蒲團の皮は絹よりは木綿こそ勝るべし。但し中の綿は彈力あるをよしとす。蒲團は冬期殊に溫かきを要す

れども決して重かるべからず、成可くは毛布の方衞生上に叶へど、さりとて俄に改め難ければ輕きものを重ねて用ふべし。

▲冬期は兎角に床の温きを欲して炬燵など入るゝ習慣あるものなるが、老人は知らず壯健の者は斷じて宜しからず、尤も平素運動不足の人、又は專ら腦髓を働かす人々は充血の爲め足部冷却して眠ること能はざる時あるべし、この際には湯たんぽを用ふべし。斯くすれば腦の血ひき下りて快く眠らるゝものなり。

▲衞生の根本が水と空氣にある如く、人體攝生の眼目は運動と睡眠とにあり、人間は男女に限らず、一日に一度は必らず汗をかくべきものなり、然らざれば人體組織の上に必要なる新陳代謝の用をなさゝるなり、運動の法は種々あれども尤も簡單にして尤も効用あるは歩行に若くものなし、朝夕の食前若しくは食後一時間の歩行は極めて適當なる運動法なるべし。

▲十分の運動せざれば十分の睡眠は得がたし、快き睡眠は錦の褥に勝さるといふ諺のある通り、如何に綾錦の蒲團に寢るも快き眠なければ、石の床に居るよりも不快なるべし。

▲運動は一時に過激なる事をなすべからず、新鮮なる空氣中に出で〻徐ろに行ふをよしとす、食事後の運動はよろしけれど、箸を擲つと直ぐにするはわるし、大概は散歩がよし、婦人は家にありて家事を務むるはよき運動なり、激烈なる動作、並びに一時非常なる遠足、又重量の物を擧ぐるなどよろしからず、又十分運動の後、休息の際には感冒に罹り易きものなれば、注意すべし。

▲睡眠は腦髓を安んずる唯一の武器にして運動が新陳代謝に必要なるが如く、神經の疲勞を快復せしむるには睡眠を措いて他にあるべからず。睡眠時間は常人にありては八時間を適度とすれど、幼兒は多量の眠を要し、且つ學生の如き腦の働を主とするものは勞働者よりも猶多量の眠を取らざるべからず。

▲何人も睡眠の前には困難する勉強を避くべし、又神經を刺激するやうなる事に凝るべからず、斯る時には

翌日眼覺めたる折身體に疲勞を覺ゆ、即ち熟眠せざりし證據にして過度に神經を勞したるが故なり、猶睡眠に就ての格言あり、曰く夜を更すべからず。夜は十時以前に眠る事攝生の要訣と知るべし。

夏の衛生

夏は別して衛生に注意しなければなりません、凡て病氣と申すものは身體の弱みにつけ込むものですから日頃身體さへ丈夫にして置けば、如何なる惡病でもさう容易く犯す事は出來ません。

夏は消化器が弱くなるから食物には消化し易い淡白なものが宜しい、油濃い揚物類、氷水などは無論惡い、



冷たい氷水を二杯も續けて飲むと舌の先がしびれて、感覺が無くなる程ですから、之を無暗に胃の中に入れては胃の働きの惡くなるのは云ふ迄もありません、從つて消化液の分泌が充分でなくなる（此消化液と云ふのは鹽酸の混つて居る食物を消化する間の防腐藥である）さうすると食物が永い間胃の中に滯つて居るのと消化液の少ない爲とて終に腐りかける、從つて惡い黴菌なども發生して下痢を起したり、吐いたり遂には恐ろしい病を引き起す樣なことになります。

然し又一方から云ふと、氷水の一杯や二杯飲で、直

に弱る様な腸胃では何とも仕方がない、餘り要愼々々と云つて夏中冷水一杯も飲まない様にして居ると、今度は腸胃が其方にばかり慣れてしまつて、自分から弱つて來る、從つて偶々客に行つて氷水を飲まされると直に障ると云ふ様な譯になる、其故要愼は誠に必要だがあまりに要愼過てもよくないから、少しづゝ腸胃を慣らして置く様にする事が亦必要であります。

夫から寢冷しない事ですが之も赤痢や其他下痢病の間接の原因となる事が多いから、子供ばかりでなく、私共も寢る時には腹部だけは決して冷さない様に、布團を踏ぬいても安心な様に、腹卷をして寢ます、疊の上に直に寢ると疊は大變に身體を冷やすものですから、御注意なさい。

又暑い時にはよく便秘をする事が有勝だが世間の人は大抵下痢する方ばかりを恐れて、秘結する方は餘り氣に掛けないが、此便通の不順も亦消化器に病を起す原因となるもので、已に便通が順當に行かないと云ふのは腸胃に異狀のあるからで、身體を大切とおもつたら醫者に薬を貰ふのが最安全で、薬屋の下劑や無暗な丸藥などを用ゐては却つて害になります。

今では市内の各地一面に水道が引かれ大に便利になつたが此水道の水とても決して悉く安全とは云はれない、水道から蛭が出たなぞと云へば皆驚くけれども決して夫ばかりでない、此水道を導く大きな管は皆鐵で出來て居るから宜いが、夫から家々に引く所は鉛の管を用ふるので、尤之は危險のない様にしては有るが、全く鉛が水の中に溶解しないとは限らない、特に絶へず流れて居る時は宜いけれども一夜中水を出さないでつまり其間だけ鉛管の中に同じ水がたまつて居ると、其間は何しても鉛の溶解する分量が多い譯であるから、朝初めて水道を使ふ時には手桶に一二杯は飲水にしない方が宜い

鉛はたとへ少量でも一度體中に入つたら決して再び體外に出ないもので、之が次第に度重なるにつれて多くなり、終に鉛の中毒を起す様になる、白粉を常に厚くつけた爲に白粉の中に鉛の中毒で白粉燒けになつた

り、又は鉛が腹中にだん〳〵溜ると、終には激烈な腹痛を起して、之は只モルヒネの注射で一時を凌ぐより外に手段はなく、永久不治の病となり回復の付かぬことになりますから、常々注意が肝要です。

冬の衣食住

冬季の身體の温度は平均攝氏の三十四度でそれを外界の温度の爲めに上下せしめられるのは甚だよくない、從つて衣服も長く空氣を含蓄し、而かも熱度の不善導體であるところの綿、毛、羽類などを最とも良いものとする、又同じ綿を入れた布團でも押し潰して空氣を含蓄する量の少いものは冷やかであるが、日光に晒されて膨らんだのは著るしく暖かい綿入などは空氣を含蓄するものであるが、木綿に比べると毛織は一層暖かく、恐らく衣服として毛織物に越したものはあるまい、勿論毛織は冬ばかりでなく夏でも頗る衛生に適して居る、彼の麻の如きものは涼しい丈けで寒を防ぐ力がなく、絹布も又防寒の効力は非常に少くない、それから攝氏零度以下となると毛皮の必要が生ずる何故に毛ばかりでいかず、皮が必要になるかといふのに空氣の流通を防ぎ必要があるからである縱へば幾ら暖い部屋に居つても寒風が肌に通れば寒いのは身體と同温度に暖めたものを風に奪はれて外界の空氣が之に接近するからである、此場合に於ては毛織物も寒を防ぐ効用がない、唯必用なのは毛皮である、

衣服に次で必要なのは家屋である、家屋は衣服の一種である、唯身に直接につけない丈の差があるのみで其の効用は衣服と同様である。而して其の効用は獨り身體を暖めて空氣の放散を防ぐばかりでなく、身體から放散する温熱を反射さすると今一つの効用は風を防ぐのにある、それは石造木造又は天幕の如きものでもよいが場合によつては雪や氷の如きものでもよい。即ち北極地方の住民は多く氷室、雪屋を以て防寒をして居るのである。

防寒の第三は食物である、如何に暖かに着、如何に

風雪を防ぐに十分の家屋ありとも、寒中に食物を取る事が薄かつたならば忽ち寒を感ずる。で寒い時は何でも大食に限る、而して其の食物はなるべく温熱を多量に發すべき物質を澤山に食ふがよろしい、熱を多く發する食物とは脂肪、蛋白質、澱粉、即ち炭素に富むものを用ふるのである。中にも脂肪は同じ分量でも他物に比して遙かに熱を發する事が多量である。寒國の住民の主食物が重に脂肪質であるのも全く防寒上の必要である。

衣食住の三者を程よくしたならば、其の次は身體の運動である、如何に脂肪質を多食し如何に衣服を暖かにしたところで、身體を動かさずに居たならば、矢張り寒氣を感ぜずには居れない。健康な人間は一日一度は必らず身に汗をする程の勞働すべきものであるといふ事は經驗ある大醫の説である。如何に美食しても身體を樂にばかりして居ては折角の食物も滋養にならずして空しく排泄されて仕舞ふ。汗をするほど働らくから粗食も養になるのである。殊に人間の身體は鍛へれば鍛へるほど強くなるもので、如何なる寒さに遭ふても不斷耐へてる身體には少しも寒さを感じない。之に反して不斷あまり身を厭ふ人は一朝の冱寒に逢ふて忽ち寒冒にかゝるのである。それ故不斷運動を爲して、自然外氣に慣らし如何なる寒さに逢ふも少しも厭ふ所なきまでに身體を鍛へて置かねばならぬ。

運動に次いで必要なるは皮膚の強壯である。之れは尤も肝要なる防寒の方法である世間風を引く者の多くは、まづ皮膚の薄弱なるものに多い。

一體皮膚の伸縮するのは專ら血管の作用であるが、血管が收縮して細くさへなつて居れば滅多に風を引く事はない、で血管收縮の方法は冷水浴が一番である、冷水浴にも摩擦と水浴と兩方あるが、一番効能のあるのは頭から冷水を被るのがよい、これは一面に風を引かぬと同時に又精神を壯快にするものである。

日常の食物

我々の日常の食物は蛋白質、脂肪、抱水炭素の三つから成立つて居る、これを滋養素と名づけて、これ等の物をいろ〳〵の比例で含有してゐるものが、即ち滋養品である、故に滋養品を取り合せて、金錢上および經濟上適當に配合して食品を造らねばならぬとは、言ふまでもないが、その外に水分、鹽類の適當なものが甚だ必要である、それから又た嗜好素といふものがある、これは食物を旨く食すもので、滋養品を調理して食品を拵へる時に、滋養素から自然



に出來ることもある、例へば肴を燒くと表皮が焦げていゝ香氣のあるものが出來、肉を羹にすると汁の中に矢張香氣と美味のあるものが出來、又た豆類を炒ると矢張これを食易からしめる香味のあるものが出來るのである、それから又た、嗜好素の集成したもので、已にその目的に出來てゐるものがあつて、これを嗜好品と名づける、酢、醬油、食鹽、山椒胡椒、辛子、唐辛子、茶、珈琲等の如きものは即ちそれである、又た滋養品たると同時に嗜好品として取らねばならぬものがある、それは、味噌、砂糖の如きものである、この嗜好品を適當に用ゐて、何でも食

物を旨く食べるやうにせねばならぬことは、食慾が如何に大切なものであるかといふことを知ッた人々は今更説明するまでもないが、但、胡椒、辛子等の如き香料を過度に取ると、肝臓硬變だの、腎臓、心臓、腦等の疾病を醸すことがある、それからこゝに肉食と菜食とに就て言はんに牛肉、鷄肉、魚肉、卵類等動物性の食品の主成分は、蛋白質で、中には又た脂肪を含んでゐる、豚肉や鰻は脂肪に富んだものだが、鷄卵の卵黄にも脂肪を含んでゐる尤も少量は鹽類をも含んでゐるがカルシユーム鹽類は少ないのである、ところがこのカルシユーム鹽類は骨の形成に甚だ必要なものである、又た動物性の食物は、抱水炭素を全く含んでゐなかつたり、縦し含んでゐるとしても甚だこれに乏しいのである、動物性の食物は可いとは言ものゝ、この様に滋養素の含まれ方が、一方に偏してゐるから人間がこれのみで生活を續けてゆけぬといふことは、實驗上明白な事實である、所が牛乳、羊乳、人乳等は、各種の滋養素が相應な比例で含れてゐるから、これだけは動物性食品中でも人體を永く養ふことが出來るのであるが、この牛乳が日本では甚だ不廉なのは殘念といはねばならぬ、獨逸などでは、物價は大抵の物が日本の五倍乃至十倍であるのに、牛乳だけは日本よりも廉いのである、だから下女などは、日本で茶漬に澤庵といふところを、麵麭と牛乳でその日を送つているといふ有様、これは實に羨ましいことで、日本でも需用が廣くなつて來た牛乳の如きものは、勉めて廉價に且得易いやうにしたいものであるのを、今日の様に贅澤物視されて、牛乳を少し許り飲でゐると、大變に滋養物を取つてゐるやうに思ふのは、寧ろ笑ふべきことである、さて肉食のみで生活の出來るものは、肉食動物のみであつて、如何なる肉食論者でも、肉類のみを取れと唱へる者はあるべき筈がなく、只成べく多く肉類を食せよ、植物性食品のみではいかぬと言ふまでゞある、凡て過度の時代には、考が一方に走り過ぎて、日本人には肉類の食用が少ないといふと、體重の標準にも頓着なく、無暗に肉類を取ればいゝやうに速斷して、

患者の内には、私は養生は十分してゐる、肉食などは過度な位にやつてゐるけれども體質がよくならぬ、或醫師の奬めによると寧ろ澱粉質を多く食した方が、身體が肥るといふ事であるが、これは實に誤解のいゝ例證である、何故かといふと、急に肉食を餘計にするとその蛋白質が體內に附着するか何うかといふと、突飛に增した場合には、この餘分の蛋白は、體內で分解せられて尿中より體外に排泄されるので、畢竟標準なしに突飛に增したゞけの肉類は無駄となつてしまふのである、單にそれ許りではなく、この無益の分解の起る時には、同時に抱水炭素や脂肪までも誘うて分解するから、隨分不利益なものである、さりとて又た急に澱粉食に變るといふのも悪いので、屢々胃腸の變化を起すことがあつて、小兒などは過敏な胃腸をもつてゐるから、人乳や牛乳の代りに、おも湯や、葛湯の薄いのや、以前摺り粉と稱へたもので代用しやうとすると、吐瀉を起したり、營養不良になつたりすることは決して稀な事ではないのである。



日本の夜具

我々の生涯を區別して見ると三分の一は夜具の中で

暮して仕舞ふのである、而かも其夜具は晝の活動したる身體を休むる安樂國で、苦勞も心配も、慾望も虚榮心もこの國の在る間は忘れて仕舞ふ、賢愚全く不差別、貴賤平等である、この平和なる睡眠を保ち得らるゝは夜具であるから、人々は晝間一杯働らかした身體を慰める爲めに及ぶだけ身に適した夜具を造つて休めてやらねばならない。そこで我國の夜具は敷布團と掛布團とであるが西洋のはこれに臺があり、今日では隨分この洋風の寢臺を用ふる家もあるやうだが世間一般は猶日本風の夜具を用ひて居る、それで夜具は晝の衣服に備ぶべき保溫、透氣、吸水の諸性を一層に具備して居らねばならぬもので、人の睡眠時には腦内の血液が外圍に注いで腦の安靜を保つ爲めに眠ることが出來るのである、この腦内の血液を外圍に注がせるやうにするには輕く溫かい布團を着て皮膚に冷を覺えぬやうにせねばならぬ。

それで日本の夜具の缺點とする所は第一重すぎるで身體はその重量に堪へず翌朝は少からぬ疲勞を覺ゆる、殊に小兒は身體の發育が大人程充分でないから夜具の注意をしてやらねばいけない、

又天鵞絨の襟は垢がつき易く洗濯がしにくい白木綿を用ひて度々洗濯した方がよろしい、夫に夜具は寢ばとりといふのがあつて臭氣のつくものであるから屢々日光に乾燥し空氣にあてゝ内部に透氣をよくするやうにしなければならない。

人と睡眠

睡眠は元氣回復の一要件である。否動物の生活上是非なくつてはならぬものである。尤も動物の睡眠狀態は其の種類によつてそれ〴〵相違はあるが、如何なる動物も睡眠時期のないものはない。乃ち、爬蟲類中の蛇や、蛙、又は龜などは寒を避ける爲め冬季に入ると睡眠を始めて春暖の頃に至りて其の眠りを覺して來るのである、即ち是等は冬眠動物と稱するものであるが、是れと反對に又夏眠動物といふのがある、それは熱帶地方に多く生存する蟲類で、外氣の溫度が高くなると熱を避ける爲に冷氣が來るまで睡眠するのである。然るに人間は是等の下等動物と趣を異にして一晝夜二十四時間中或る

部分を睡眠時間として居る、殊に人間は規則正しく睡眠して精神と身體との休養を計らねばならぬ事になつて居る、若し人間が間斷なく大腦を使用して數日睡眠を缺く樣な事があれば精神は忽ち衰弱して身體の健康を保つことは出來ないのである。

然らば人間の睡眠は如何にせば尤も適當であるかといふに、……其の時間である。普通人間の睡眠時間は八時間としてある、即ち二十四時間中八時間が勞動の時間、八時間が休息時間、餘の八時間が睡眠の時間としてある、然しこの規則も人人の習慣や、生活狀態によつて必ずしもそうなくつてもよい、睡眠の方法さへよければ六時間位でも澤山であるが、方法が惡しければ十二時間睡つても足りない。要するに睡眠は熟く眠るのでなければ決して其の價値はないのである。

然らば熟眠と不熟眠との違ひはどうかと云ふに、熟眠とは大腦即ち精神機能に完全な靜止を與ふる場合の睡眠を指して云ふので、其狀を譬て見ると人の居なくなつた家屋の樣なもので、大腦を取り去つたも同樣で、丸で感覺が止んで居る、之に反し微に音響を聞くとか夢を見たりするとか云ふ場合は不熟眠で完全な睡眠とは云はれない、熟眠が繼續するものならば必ずしも八時間でなくも十分な休養になる、尤も普通睡眠の狀態を云ふと多くは不熟眠が三時間で熟眠が五時間の割合になつて居る、ナポレオンは毎日二時間づゝ眠つたと云ふが若し之が事實とすれば完全な睡眠即ち熟眠が二時間で其外に暇のあり次第不熟眠を爲して夫で補ひを附けて健康を保つて居つたものであつたかと想像される、要するに時間の多い不熟眠よりは時間の少い熟眠が健康の爲になる、完全なる熟眠はどうしても夜間でなければならぬ、それと云ふのは五官神經に刺戟な



受けぬ様にする必要があるからで、晝間はどんな閑靜な所に睡つたにしても聽官に丸きり刺戟を受けない譯には行かないから、其睡眠は不熟の狀態に經過する、熟眠を妨げる原因に內因と外因と二つある、夜具が重かつたり寢間の空氣が不潔であつたり突然音響がしたり鼻粘膜や眼の緣に蠅や蚊が止つたりするのは何れも外因である、內因と云ふのは神經衰弱とか熱病とかの類其外胃中の食物停滯、鼓腸、蓄尿や又は齒痛、回蟲などが起つた時や茶、珈琲などの飮み過ぎて眠られぬ塲合を云ふのである是等はよろしく攝生を重ずるもの丶注意すべき事である。

次に睡眠と夢との關係を述べて見やう元來夢は睡眠の未熟の塲合か又は目醒に近い時に起る一種の精神機能であるそれは勿論不完全な機能であるから夢に現はれた事柄は意思想像も及び難く、又醒めた後追懷の出來ないのが多い、追懷されるにしても順序が漠然として居る、然し夢が醒時に近ければ近い程追懷が確である、是は精神機能が次第に完全に近づいて來るからである、昔から云ふ正夢逆夢の說は信するに足らないが夢は五臟六腑の疲れから來るとの說は兎に角取りどころがある、と云ふのは夢は身體の內外にある刺戟が原因で、其爲め幻覺を現出するからである、その爲め夢は健康者に少く不健康者に多い、夫も其筈夢を多く見る人は兎角不熟眠勝で、其不熟眠勝の人は神經衰弱して居る、試に神經衰弱者を調べて見ると十人が十人迄夢見勝即ち不眠症で又不眠症の人を調べて見ると十人が十人迄神經衰弱者である、聖人夢なしと云ふが聖人は所謂心廣體胖で財產がどうの權力がどうのとそんな事には一向無頓着で、邪念が無いからゆつくり眠られ從つて夢などを見ないのである、次に不眠即ち寢付の惡い時(殊に夏季など)はとうしたらよかろうといふにこれには種々な方法を以て早眠を促がすのを必要とする第一腦に血液が集まらぬ樣にすると、睡眠が早い、血液は能く働く塲所に多く集まる、性質のもので、飮食消化の際には胃に集まり、勞働の際には手足に集まり考慮思考の際には腦に集まる、腦に血液が集まれば快よく睡眠することが出來ない、ところが夏は蒸熱いそれが腦に苦痛を與へる苦痛があれば血液が集まる、こそで眠られない、して見ると夏期に快よく睡眠しようとするには苦痛の原因たる熱を成るべく排除するのがよい、夫には空氣の流通をよくして身體を爽快にせねばならぬ即ち障子を除き泥棒の入らぬ範圍で雨戸に穴を明けて外氣を導き、ランプ、瓦斯燈など室內の溫度を高めるもの丶數を減じ成るべく寢間には燈火を用ひぬ樣にする、それから枕は堅からず高からずのものを用ひ夜具も成る丈輕いものを用ひ、且つ寢る前に靜に深呼吸をして幾分か腦の血を減ずるやうにするなどは早眠を促かすものである、又或は念佛を唱へ、一二三の數字を操りかへすなど腦の働きを單調にするのがよい又音樂や唱歌の如きものを低唱するも睡を促がす一方法である。(右は腦病專門家醫學博士狩野謙吉氏の談なり。)

學生と腦病

公私の諸學校に於て試驗の場席に學生の卒倒したる事は世人の知る處なるが這は言ふまでもなく研究思考の度を過し精神過勞の狀態に陥れる爲にして甚だしく亢する時は遂に立派な精神病者となるに至るべしこれに就て東京腦病院長後藤氏の曰く學生の卒倒するは精神の過勞に依るものなるは更ためて言ふに及ばざるところ長い間讀書研究に耽り、或は試驗準備の爲徹夜の勉強をなしながら適度の休息をなし恰好の食餌を執らざる時は疾病相踵いで至るは見易き道理なり、故に精神上の作業は平素愉快に進行するを得るやうに正しく時を定めて嚴格に之れを守るの必要ある事も亦言ふに及ばじ、左に一日の時間を適度に割つて見れば睡眠の時間は少くも七時間、休息運動食事の時間は六時間、殘る十一時間を以て學問乃至其他の業務に用ひなば決して卒倒などする事なかるべし、更に詳しく分割して示せば午前六時に起きて直ちに冷水摩擦を爲し、適度の運動をしたる後七時半に食事を濟し、八時に勉強を始め、正午より午後一時の間に中食を認め、一時半頃より又勉強し始め、五時に仕舞つて直ちに屋外運動を試み、六時半に歸りて晩餐を始め、七時より十時半頃まで夜業をなし十一時に就床すると云ふが最も正しき割方なり、然れど來訪談話等の時間も必要なれば前以て打合せの上運動時間を利用するやうにし、日曜日には遠足舟遊旅行等を試むるが可し、

此規則を嚴格に守るならば精神疲勞より發する諸種の病に罹らぬは受合と言つても差支なし猶後藤院長が治療を施せしもの七百八十五名の患者に就き發病の由來を表記せんに。

(一)過度の勉強より來れる者	百六十二人
(二)處世上の苦心及家族不和	六十二人
(三)失敗損失及び落膽の爲	十五人
(四)近親者の死去を苦にして	二十五人
(五)憤怒驚愕悔悟に因する者	十一人
(六)家政不如意の爲	三十五人
(七)異性に關する苦慮	五人
(八)業務に對しての苦心	四十一人
(九)己が疾病に失望して	二十一人
(十)其他種々なる苦心	二十一人

右の外三百九十七名は不攝生、酒及び煙草の濫用等より來れる者なるが此表を見るに就けても學生は嚴正に腦の保全法を守らざる可からず、又以上の患者を階級別にすれば多くは中流以上の男女にして下層社界の者は小數なり尚一つ警告すべきは手淫の害なり手淫と房事とより來れる者三百九十七名中四十六名の多數を示し居れば青年男女の鑑むべき所なり。

素人療法

家庭醫者

▲食傷

は飲食を愼ますして暴飲暴食したり、又は惡酒を過したり、腐つた物を食べたり、未熟の果物を口に入れたり、其他魚肉の中毒、蕈類の中毒などから起るものですが、之を癒すには、先づ差當つて腹中の食物を吐出せるのが一番早い、吐出を催すには、南天の葉か小枝を細かに刻んで、煎じて服むと効目があります、けれども度々吐出しては却て害になりますから、一度丈になさい、又た嘔吐を止めますには、ラム子の冷こいのを飲むに限ります、食傷の結果下腹が痛む時には、下劑を飲むのが宜しい、又た腹痛を癒すには按摩が一番宜しい、一二回の通利があつて食物を吐いて了へば、大抵痛みは止まるものです、痛が止つたら身心を落付けて消化易き、脂肪分の少いスープ肉汁などを召上るがよろしい。

▲下痢

を止めるには病狀を考へればならぬ、病氣によつては下痢を止めた爲めに、却て苦痛を覺え、害となるものですから、其邊の注意が肝要です、總て下痢を止めるには、腹部に温濕布を充てゝ、其上よりフランネルの樣なもので被ふべし、而して其の熱さむる時は、再び取更へてもとの如くするのであります、或は又た腹部に温濕布を施しても宜しい、鹽を燒いて之を布に包み、腹に充てるも効目がある、極く輕いのなら、水餅を食べても効目があります。又ニンニク煎飲も効あり

▲便祕

便通のないのをなほすには、輕いのならば、小豆一合許を砂糖で煮て、一度に食べるのです、かうすると屹度便通があります、又た小便の不利には按腹が一番です、けれど重いのになると小豆位では効目がありませんから、灌腸法を施すが宜しい、其の仕方は、上等の「シヤボン」を水に溶解して、其の色の白濁色となるを度とし、之を肛門より「スポイド」と申すもので注入すれば、忽ち通利がつきます、但し「シヤボン」の代りに「リスリン」を用ひても効があります。

▲寒冒

を治すには、發汗せしむるのが一番の良法である、發汗させるには、珈琲、茶、煎湯、葛湯の類を茶碗に二三杯傾け、夜具をかぶつて寢るが可い、賣藥では「妙振出し」が一番効能があるやうだ、又た卵酒を飲んで暖まつて寢るのもよい、前以て風邪を引かぬやう豫防するには、冷水摩擦が一番効目がある、けれども之は健康者に限ることで、病體の者は決して行ふべからず、それから湯に入つて風邪を引く人

があるけれど、是は畢竟常に入浴をしないで稀に這入るからで、不断怠らず入浴する者に限つて風邪を引く例は少いやうである。

▲インフルエンザ

の療法にはイロ〳〵ある、(一)發熱する者には「アンチピリン」の如き解熱劑を用ゐること(二)咳嗽の出るには水飴をなめること(三)衰脱には葡萄酒を少しづゝ飲ましむること(四)頭痛のするには氷嚢を貼ること、等で、一般の注意としては、外氣に觸れぬやう氣を付けて心身を安靜に保つこと、食物は淡泊にして滋養分ある物を用ゐ、喉の渇いた時には、果實の汁を吸ふこと等である、但し餘りに甘い物や酢いものは宜しくありません。

▲咳嗽

を止めるには(一)咽喉部を温湯に浸して晒布をまき、少しも外氣に觸れぬやうにすること(二)煙草の類を禁ずること(三)常に上等の飴を少しづゝ口中に含むこと(四)吸入器を用ゆること、等の手當を致せば効あり、吸入器は藥店で賣つて居ります、價は一圓五十錢位。

▲しやつくり

を直すには、鹽水の極く鹹い奴を茶碗に一杯頓服すると、奇妙に止るものです、背中を強く打つのも一法であるけれど、是ばかりでは一時は直つても、再び起る族があります。

▲乳の分泌の悪い

のには病的作用によるのと、生理的作用から來るのと兩方ある、病的作用のものは無論醫者に診て貰はねばなりませぬが、生理的作用から起つたものなら、糯米で炊いた飯、即ち俗に申すおはぎを喰へれば、直になほつて乳の分泌をよく致します、又た乳房に芥子泥を貼つても宜しい相です。

▲小兒の夜泣

を止めますには、日中成るべく眠かさぬやうにし、又た喧噪の場所に置かぬ様にして、靜かに看護するに限ります、かゝへるにも腹部に少し手をあてるやうにしてお抱きなさい、窮屈を感ずる様な狹い衣を着せてはいけません、而して常に温かにして置くが宜しい。

▲百日咳

は冬から春にかけて小兒の罹る病です、是は其の名の示す如く、病氣の經過長く、容易になほらぬものです、最初非常に熱が出て、四十度以上に昇り、為めに人事不省に陥ることもあります、又たヒドク咳入る時は、顔が眞赤になり、癇出で、ひどいのになると眼から血のにじみ出ることさへありまして、見て居られぬ程に苦しみます、此の治療法は、

なるべく體を温かくし、時々灌腸して大便の通利をよくしてやり、小兒丸にても服ませ、氣永く養生するのであります。

▲しらくも

に罹つた時は、上等シャボンで丁寧に患部を洗ひ、毎日刷毛でそこを拂拭し、且つ微温湯を以て温め、痂皮を軟かにし、毛髪は短かく剪んで了つた方が宜い、外用藥としては、稀薄なる石炭酸水の中にリスリンを加へたものを用ひて、之を患部に塗れば、効目があります。

▲凍瘡の豫防

冬季は兎角凍瘡にかゝりたがるものですが一ぺん之を患ふると容易に治りません、別して頑是なき小兒杯のこれに罹るは見るもいぢらしく、氣の毒でなりません、小兒のこれに罹り易きは全く皮膚軟かで、外氣の寒熱に對する抵抗力の弱い故ですから、勉めて外氣の激變に逢ふことなきやう保護すると同時に、毎夜就寢前入湯させるか、或は手足を湯にて温ためてやるのが宜い、けれど不幸にして之に罹つたときは、甚くならない内に次の治療法を施しなさい。即ち左記處方により調劑したものを湯上り後、又は就寢前、局部へ塗りつけ置けば、翌朝までには大抵腫が引くもので、毎日怠らず塗けてやれば、遂には治ります。

薄荷腦五グラム、オレフ油九グラマ、ザロール九グラム、テノリン十八グラム

▲やけどの妙藥

子供が炬燵に足を落したとか爐に轉り込んだとか火箸の燒けてるのを摑んだとか乃至鐵瓶の湯氣に吹かれたとか沸湯を浴びたとかいふ過ちにはよくあることで、直ぐに醫者の手當が受けられぬ時や處では隨分大騷ぎをする、かやうな折の用意として左に實驗上効果の著しいと思ふ二種の治療法を紹介する、唯の冷水や味噌や醤油よりは必ず効がある。

洗濯曹達の溶液　大抵の家には此藥の用意はあらう、これを溶して其中へ火傷の局部を浸させる、熱つて堪へ難いのも此中へ入れば冷りとして忘れたやうになる、浸して置くこと數十分、輕いのは其まゝ全癒する、重いのは其中に醫者が來る、大抵重いのでも其後に痛みは僅かで、輕いのは殆ど痛みなしに治る、傷所は大切にして剝かぬやうにせねばならぬ、此藥を溶した液は濃い程よい、溶け易い藥だが水で溶すよりは湯で溶す方が遙かに早い、湯で溶しても溶液は直ぐに冷えるから少しも差支へない又一法は

石油揮發油　であるこの中へ傷所を浸すのも至極妙法である、矢張痛みは無くなり若くは輕くなり、そして輕いのならば洗濯曹達同樣跡が傷痕にならぬ、揮發油の方が利きもよく後は直ぐ揮發して臭氣が殘らぬから遙かによいが、揮發油はさう家毎に何時でもあるもので無い、が。

石油なら必ずあるから其利用法を知つて居るのは便益でせう。

▲燒傷

なした時は早くソコを水に冷し、其の際に石灰に熱湯を灌ぎて、その上澄の水を取り、水油又は胡麻油を入れてかきまぜ、濃い液汁と成たものを傷所へ塗り、繃帶して置くべし、若し痛が甚い時は、水に冷せば痛が去るものです、もし又た水泡が出來た時は、針でつぶしてから藥をお塗りなさい、冬は一日に一回、夏は二回水で以て洗ひ度々藥をとりかへれば、二三日にてなほります。

▲鼻血

は上衝性のものに多い、月經異常、白血病、心臟病、チブス等には、尤も大關係がある、急性に出血するものには、頭部をはげしく拳を以て打つが宜しい、斬うすると不思議に止まつて了ひます、(一)眼と鼻の間を氷で冷すも効あり(二)仰臥いて兩手を頭上に揚ぐるもよし(三)酢を鼻の中に吹込むも効あり(四)足の蹠に芥子泥を貼るもよし(五)明礬水を新しき綿に浸して之を鼻孔に入れてもなほる(六)婦人なれば乳房、男子なれば陰囊を冷布にて包むも効能あり、試して御覽なさい。

▲月經閉止

を治するには、芥子湯(盥の中に芥子末二茶匙を入れる)を作りて腰浴を致せば効あり、又た蘆薈丸を一度に十五粒づゝ二回用するをよしとす、但し姙娠の疑あるものには、禁物です。

▲月經過度

の場合には安靜に平臥して置き、下腹部に氷囊を貼り、膣中に冷水を注入致せば直ぐ様利目があります、但し氷囊の代りに温石を用ゐてもよし。

▲子宮病

の療法には(一)會陰部に水蛭を貼つて血を吸はしむ(二)膣中に温水を注入するもよし(三)腹部に温罨法を施すも効あり(四)坐浴をつかはせるもよし(五)痙攣の際は芥子泥を下腹部に貼るべし、其他電氣療法も効がある、

▲リウマチス

の痛みは之を病んだ人でなければ知ることが出來ないが、骨々節々だるく、重く、熱するやうでもあり、冷える樣でもあり、外部より撫でたからとて、なほるものでなく、隨分難澁の病であります、之を治療するには、患部を冷氣に觸れしめぬやうフラネル若くは木綿の切で能く包み、ソーダ或はポツタースを水に溶解して服み、且つ患部をさつ

く麻痺するのです、又はヨウユムチンキを患部に塗るも多少の効能があります。

▲脚氣

には轉地が最良の療法である、藥用には下剤を用ゐるのであるが、殊に舎利鹽（一合の水に三小匙を溶解して二日に服用す、但し一日三回）を服用するのが一番きく様です、呼吸急迫脈膊頻多には葡萄酒の中に少量の樟腦を入れて服用するが可い、但しその酒量は小さき盃一杯に水三杯を加へて之を二回に分服するを度とす、又た赤小豆の煮たもの、麦飯なども通利をつける効があります故、服用して差支ありません。

▲アルコールの中毒

を治すには、酔つた人の頭に氷嚢をのせて、足蹠に芥子泥を塗ると宜しい、氷の代りに冷水を灌いでも可い、又た上等の茶を煎じて服ませてもよい、忽ちにして吐き出して了ふこと請合である。

▲河豚の中毒

には、南天の葉若くは枝を細かに切り、煎じて服ませると、即効あり、

▲蜂に刺された時

のにはアンモニア水を塗ると効目がある、糠味噌を塗つても宜い。

▲毒蛇に咬まれた時

の手當は、例へば足の指先を咬まれたとすれば、そこの足首を細い紐又は襷できつく縛り、其の毒の入つたらしき所を剃刀を以て切り開いて、血を出して了ふのです、かくて後醫者に見てお貰ひなさい、蛇の毒は急激のものですから、直ぐに行はねといけません、切開せないまでも、足首をしばつて置くことだけは、是非おやりなさい。

▲耳垢

を除るには、先づグリスリンを點滴して置き、十分を經た後、耳掻を以て靜かに除くのが、最も安全の法です。

▲耳鳴

を止めるには、上等の酒又はアルコホールの二三滴を點すべし、立ろに奇効あります。

新奇 肺病治療法

S・R・M・

肺病は不治の病であるとは通俗一般の唱ふる所でも

るが、併し其の手當の方法如何によつては必らずしも不治ではない、肺病に罹つて五年十年は愚かな事、十年二十年の長年月を無事に持ちこたへて居るもののあるのみならず、隨分其病氣中に學問を研究する人もあれば、事業の經營をする人もあり、子を生む人もあれば、名を揚げる人もある、その中には無病息災で居た時は平々凡々寧ろ穀つぶしといふ方であつたものが、一朝此の病に犯されてからは一種の克己心と節制心とを生じて修養も積めば、德望をも得る樣になつたものさいある、そこで近來西洋各國ではこの病氣に對して種々新規の治療法が發見され爲めに不治と思つた者が隨分長命延壽の仲間入する樣になつたのである。そこで今其の最新治療法といふものゝ大略を記せば、



第一　空氣療法

元來平素我々の呼吸する空氣の内（都會の空氣は殊更に惡し）には一寸立方の中に幾個といふ種々なる眼に見へない細菌があつて、呼吸する毎に其細菌が肺臟内に入る、萬一肺臟內に創傷の場所があると忽そこを侵すのである。タトエ又創傷の部分がなくとも、不斷肺臟の薄弱なる質を持る人はいづしか、細菌の繁殖を促して肺病の素地を作事になるので

ある。又獨細菌のみならず、人煙多き都會の空氣中には種々なる有毒瓦斯、塵芥、惡臭等か混じて人體を害する事が多い、こんな處に少でも肺病の下地のある者が永く生活して居たならば、次第に食慾減少し、次第に身體減耗して遂に、不治の症に陷る、これ即ち有毒瓦斯や其の臭氣の人體に及ぼす影響である、されば苟くも結核患者となつた以上は、人間萬事を擲つてまづ空氣療法を行はねばならぬ。東京近界では大磯とか、熱海とか、いろ〳〵あるが、一層の事小笠原島、八丈島の如き大洋中の孤島へ乘り出して十二分に清潔な空氣に浴し、十二分に海氣を呼吸するのがよい、海邊と同じく山の空氣もよい金に不足のない人ならば海秡三千尺以上の輕井澤の如き、又、草津の如き那須の如き、高山の半腹に居を構へて永住的の生活を營むがよろしい、併しそれは殊別な注文としてまづこゝには普通空氣療法の一般方法を述べん。

(一)病室の注意——病室は廣くして空氣の流通を充分にし、又室は南に面して日光の射入を強くし、以て日光の殺菌的作用を營ましむ、又室内には塵埃を生ずべき敷物を用ふべからず、窓は時々開放して換氣を計るべし、夜中と雖も密閉すべからず。

(二)海濱轉地——凡そ海上の空氣は最も清潔なるものにして、殊に夏冬晝夜の温度に激變なきは最も患者轉地に適するものとす、兼て場所によりては爽快なる眺望を占むるを得べし。

(三)山間轉地——空氣の爽涼にして地局の閑靜なるを以て專ら夏季の轉地に適すべし、但し森林はオゾンの關係等より多少の効力ありと雖も日光の射入を遮蔽するを以てよろしからず。故に山間療養は高原地の如き處ろをよしとす。

(四)航海療法——泰西諸國にては近時航海の肺病に偉大の効あるを唱導するものあるに至りしは、海氣の非常に清潔にして、有機物の混入なきに基くといへども只一つ缺點とするは、船體の動搖と無聊の起居にあり、但し不斷身體强壯にして且つ病勢の輕き患者には航海療法も又一法ならん。

（五）郊外の逍遙――これも又近頃歐米にて専ら稱用する所ろにして、春暖の日晴天にして風少き時などは終日戸外にありて適宜の運動をなすにあり、此法によりて好結果を得たるは往々聞く處ろにしていづれの土地に於ても爲し得べき良法たるべし、勿論雨中及び風荒き處にあらざれば夜間までも繼續するをよしとす。

▲食物療法

以上は空氣療法の大要であるが空氣療法を行ふと同時に又大いに食物療法を行はねばならぬ。元來肺病は贅澤病、又文明病ともいふべきほどのもので、適意閑散なるが上に美食を専らにせねばならぬ、肺病患者にして一朝美味（滋養品食物）に缺乏したならば到底治療の見込がないといつてもよい位なものである。肺病は空氣の清潔で治すると同時に又食物の嗜味で治するのである。或る達觀した醫師の言には貧乏人に肺病がついたら治りはせぬと。冷酷な言であるけれども實際は其の通りである。如何に空氣療法、精神療法を完全にしても一朝食物が粗惡であッたら肺病患者は次第に衰弱を來す事は免かれない。故に肺病は文明病又贅澤病である、肺病患者として若し贅澤も出來ず文明的の療養もむづかしいとあれば、萬事を擲ッて無人島にでも行きそこで天然的療養をすればまだよろしい。貧なる患者にしてなまじいに都會に戀々するは命を保つの道ではない。

▲精神療法

身體の安靜と精神の安靜とは何病氣に取ッても必要條件である。凡身に病あッて、心忙がしきは治療の本旨に脊くのみならず、益々病勢を募らすばかりである身に病あッて世帶の事に苦しむ樣では到底治する目的はないのであるから、苟くも病氣に罹つたらば、當分は仙人にでもなッた氣に成り、俗累萬事を放擲して無垢の小兒に立返る事肝要である併し肺病の通弊は多く精神過勞の結果より來た程のものであるから、一朝にして無邪氣の小兒に成れとは無理な注文であるけれどもまづそれを適當に指導して成可く安靜にするのは療法の眼目である。兎に角これは醫者とか看護者とか又

は親族とかゝ大いに誠意と才力とを以て指導すべきもので、患者に對して不斷此の心掛がなくてはならぬ。故に肺病の妙藥は金と己れの俗事を托するに足るべき義俠な精神上の幇助者が第一である。患者精神の過敏な者と、鬱憂性のものとはそれ〴〵の方法を以て慰藉を加へねばならぬ。試みに其二三を示せば。

(一)讀書——極めて輕快なる旅行記の如きもの、又歷史上の物語、通俗動物學天然科學のものなどよし。俳諧、和歌等の玩賞又よし。

(二)書畫骨董——古器物の愛翫に次いで郵便切手古錢の蒐集など極めてよし。

(三)盆栽と園藝——花卉の栽培、植木の手入等格別體力を勞せざる向の觀賞よし。

(四)適當なる職業——勞力輕易にして精神の無聊を慰するに足るの職業は之れを取るも不可なし、只娛樂的なるを要するのみ。

(五)寫眞——若し體力が許せば簡單なる寫眞術の如きもの可なり。

(六)動物愛翫——小禽、或は簡易なる養魚、養兎等の如きものよし。

◆強　壯　法

空氣養法、食物療法、いづれも肺病に對しては消極的療法に過ぎないけれども、強壯法に至つては寧ろ積極的といつてよろしい、これは元來身體を鍛錬して病氣の抵抗に堪へしむるのである。強壯法は專ら冷浴、冷水摩擦、深呼吸等である。是等は皮膚の抵抗力を強くして組織の新陳代謝を高め、爲めに食慾を增加し、殊に感冒に罹るのを防ぐのである、故に肺病患者は此法を習熟するは大なる利益とする處である、但しこれを行ひ始めて永久に持續せねば効がないのみならず、間斷があるのは却てよろしくない、そしてこれを始むるには溫暖の季節からするがよい。

(一)冷水浴——每朝密閉せる室內に於てすべく攝氏二十度位の冷水を用ふべし、先づ迅速に身體の上半部を拭ひ着衣の後下半部に及び稍靜座若くは少時間臥床に入るもよし。

(二)冷水浴——同上の冷水を一徑位項部以下一時に注ぎ、或は水槽内に一瞬間入浴して直ちに乾燥せる手拭を以て拭き取り着衣すべし。

(三)摩擦法——全身の皮膚を乾きたる手拭又は看護人の手の掌を以て摩擦するも可なり、前二者と異り、此法は重患者に用ひ得るの利益あり、按摩の如きも又之れに同じ。

(四)呼吸操法——過激の深呼吸は利なくして却て害あり只病氣の輕きものは徐々に平等に稍深き呼吸を營むは精神を爽快ならしめ、又食慾を進むるものなり。



▲結核に侵され易き場合

前諸項は専ら療養に就ての事柄を述べたものなるがこゝには病菌に罹り易き場合を申さんまづ肺の弱き人又は肺病を恐ろしく思ふ人は平生大いに攝生といふ事に注意せねばならぬ。又不幸にして既に疾患に罹つたものは一層注意をせねばならぬ大概な肺病は醫者よりも藥劑よりも攝生が第一である、さて人體の結核に犯され易い場合は

(一)肺炎、肋膜炎に罹りたる時。

(二)流行性感冒に罹りたる時。

(三)氣管支カタル、咽喉カタル百日咳等に罹りし時。

(四)塵埃多き屋内に久しく在りたる時。
(五)刺激性の瓦斯又は粉末等を永く吸入したる時。

以上の如き場合は局部の抵抗力が極めて弱くなッて居るから自然病菌に犯され易いのである。又局部のみならず、全身に異状を起して其の爲め榮養不良を呈し細胞の抵抗力の薄弱を招く場合は左の如し。

(一)腸チフス、赤痢、マラリヤ熱を始め其他の重患の病後。(二)産褥に在る時。
(三)房事の度を過ごしたる時。
(四)全身貧血を起したる時。(五)安眠不足の時。
(六)體力と精神を過勞せし時、大酒せし時其他種々なる不攝生をなせし時。

右の外先天的の素因といふのがある、これは俗に癆症蔓といふて古來先天的に肺病を遺傳したものゝ如くいつたものであるが、これは決して黴菌の遺傳などのあるわけの物ではなく、唯其の弱々しい體質を遺傳したのみで、別に病氣を遺傳したものではない、それ故自分で攝生を心掛てさい居れば肺病持の家に生れた子だからといつて乾度病氣になるといふ譯はない。唯斯る體質を傳へた者は他の普通人よりは感染が早いのは爭ふべからざる實事である。

一體肺結核といふのは、恰も木の葉の如き形をした海綿狀の肺の臟に細菌が附着してそこに病竈といふものを作り、人身の貴重なる蛋白質を吸ひ取ッてそれで自れの生命を保ち、日の經つに隨ッて段々と繁殖して行くのである。

そこで肺病の初期は此の病竈が肺臟の一局部に出來た時である、其の刺激によッて肺部に炎症を起し、その炎汁が分泌されて輕き咳嗽が起る、全身が次第に疲勞を感じて手足に倦怠の氣味が起る、食氣が減じる、顏の色が次第に靑白くなる、すると筋肉が瘦せて來る又呼吸の工合が困難になつて來る、胸の鼓動が激しくなる午後になると、寒氣がする、熱が出る、發汗が容易になッて時々盜汗が出る、是れがまづ一般肺病患者の容體である。

斯樣な譯であるから結核の初期に十分攝生をして病毒の蔓延を防ぐ事を講じなければならないのである。

細君十二時

鉦國主人

人の妻となりてはよく家を齊へて、良人の名をけがさじ、舅姑の心をそこなはじ、子等の教も等閑にはせじ、公の事にもたづさはりて世の爲め人の爲めにもならばやと心掛くること願はまほしけれ、今茲に人の妻は斯くてこそと思ふがまゝの事を書いつられて細君十二時とは名つけつ。

▲午前五時　牛乳を配る車ならん大路の方を走りてハタと其音止める時、新聞配達の鈴の音あはたゞしう門々を通り、ザワ／＼と紙の音さするは今しわが門邊にかけたる函に新聞紙押入るゝなるべし。犬一しきり吠えて水道栓より水の迸る聲爽し、遠く何處にてか戸を繰るさまなり。新嫁につらしと噂立ちたる米屋の姑のするわざにやとはゝ笑まる。二人の婢のいぎたなく熟睡して、自らとてはさうなく起きも出でざるけはひなり年は若く教も淺く、嗜みとてもおろそかなる女の常なれば、そをば咎むべきかは。と靜に身を起して良人や子等の夢醒さんも心無き業とし思へば、跫音を偸みて彼方なる部屋に至りて見るに、二人ながら太き腕あらはに、枕横さまに突きほうらかし、大の字なりしてのけざまに寢亂れたるは故郷の夢をや見つらんか。肩の邊に手をかけて揺り動かし名を呼ぶこと幾度、漸くにして一人の婢起き直り兩手もて身の周圍をかいさぐるさまたゞならず、強く背を押して何をすなるやと問ふに、お嬢様の簪の花の失せたればと答ふ。餘りに可笑ければクヽと笑ふ聲に、彼方も始めて夢心地より醒めけん、眼こすりつゝ、兩腕さすりつゝお早うこそなど謹するを、さぞ眠からんが、早や五時も過ぎぬ次の日曜には日たくるまでも寢せてんなど假の言の葉にも打ち慰めて、朝食の仕度は前宵にもいひしらせしがごと、斯く／＼してよと吩咐け、扨て良人や子等の着換ゆべき着物、帶など整へ、新聞、牛乳など常の處に備へ、歎き髮梳りて待つに、朝日は窓の紙障に美しう映ろひ初め、大路の方には群動やうやく喧すし、近く人の今朝の霜は……など潤み聲して語らふも聞こゆ。

▲午前七時　良人の書齋を掃き淨めて、火桶に火をうつし、床の花のみにくううつろひたれば籬の白梅一枝折りてさしかへ、茶器程よき處になならして椽に出づれば、ホウとおぼつなき鶯の初音もうれし。

客間に入り婢の掃除したるさまを見、座蒲團の斜なるを正し、雪舟の筆とかいへる掛軸の少し浮きたるを直しなどせる處へ八歳になれる姉と五歳の弟と先を爭ひ來て、朝の挨拶する顔に健やかなる色宿りて、見るからに心嬉れしく打笑まるゝなり。姉も弟も人手を待たで衣物を着け帶締むるをを習慣とすなれば、顔洗ふことだに今は他人を煩はすを耻ぢてよろづ甲斐々々しうものすめり。父様はお目ざめにやと問ふに、緣端の椅子に倚りて新聞をば讀み居給ふといふ。されば牛乳を其方達にもまゐらせんに此方へ來よと打連れて常の間に入る。

▲午前九時　姉娘は學校に弟は程近く住める祖父様の方へと遊びに行きて、今し良人も務めに出で行き給ひ、暖き日影の窓に椽を照らして庭の芝生に飼犬のひとり戯むるゝも長閑なり。其日の覺帳に用事のかど／＼を書き記して、一人の婢をば呼びて、今日の洗物はこれ、掃除すべき箇所は此所、炭屋の小僧の來らば櫻炭二俵、八百屋の來らば蔬菜の價を問ひ置きてよなど、一々言ひしらせさて吾がすべき事はあれよこれよとさだめて、其日の内にすべき事を翌日に譲る事は必ずすまじきことゝせるものから、心無き客の長話に障げらるゝを何よりもいと恐ろしと思へり次に書簡を取りて重なる所々拾ひ讀み、書くべき手紙あらば必らず書き夫れより獨逸といへる國の宰相として、鐵血の名に呼ばれたる彼ビスマ

一タ公の要なる人が、良人の爲めに一時間毎日異なれる獻立をつくれりといへるを耳にし、人の妻たるものは斯くこそと深く思ひ入りてより、吾も其人に及ばず、富其家に及ばずとも、習ふて至らぬ事はあるまじと、其日の晩餐の菜を選みものす。

▲午前十一時　日曜休日の外は午餐に心をなやます事もあらず、そこ〳〵にしたゝめ終るを習ひとすなれば、十一時より十二時までを讀書時間と定めつ、子の家に在る時は伴ひて散歩を兼ねて買ひ物に出で行く事もあるなり。

▲正午　午砲に合せて時計の時を正し、晝餉卅分斗り過ぎての後は裁縫編物などにかゝるを常とはなしぬ。着類の外何品にてもこれを藏むるには必ず其場所を定め、如何なる急ぎの時にても、亦は夜の手探にても直ちに求め得べきやうになし置くものぞと母より聞きたるが儘之れを守りて一家の益となれる事多かり。特に良人の身に附ける品は一入心を用うべき事ぞ。在るべき品を見出し得ず、更に同じ品を買ひ整ふるが如き事も世には多くある習ならずや。

▲午後一時　西洋洗濯屋の男來れりと婢の端手拭きつゝ告ぐ、豫れてつくり置ける紙札に名を記しつけて、ホワイトシャツ、カフー、カフス、ソホン下など日を限りて持たせ遣る婦人會より臨時會の通知來る。

▲午後二時　風呂場の支度をさせ、炭屋の粉炭もて來れるを、炭の皮のなるべくは損ぜぬやう、丈けの不揃ならぬやうに挽かせて、水をタプ〳〵と打かけさせて莚の上にならべ、日向へと乾さす、斯くするは炭の粉の物につき又は四邊に散り火の粉の飛散るを防がんが爲めなり。

▲午後三時　姉樣學校より歸り來る、弟と二人にアップルを分ち與ふ、婢には燒芋買はせておやつとす菓子など與へんよりは、受くる人にもよかるべしや。風呂場に火を焚かす。

▲午後四時　夕餐の菜に用ふべき品々を集め、煮め煮るものは煮させ、燒くべきは燒かす。されど多くは自から手を下して、婢の爲すべき仕事の妨げとならぬやうにす。舅姑のお許へ一種二種不出來なる折送りまゐらす、味よき時は御褒美賜はるべしなど、打解けて親しき言葉をも添ふるは嫁として大切なる秘事と思へり。

▲午後五時　風呂の湯の程をさぐり試みて、石鹼手拭何くれとなく用意し。食卓の用意も忙はし。車の音玄關に轍り止みて、良人の歸りませるを告ぐる車夫の聲高う聞ゆ。夫れまでも疾く出迎ひて、其日ありつる大切なる事をば着物かへさせ申す間に夫れと告げ、手紙などあらば見せまゐらす。風呂に入り給ふ間に食事の席を設け、一家團欒して餐を採る。

▲午後六時　家族の談話時間なり。舅か姑かを訪ひ、折々は彼方よりも訪ひ來給ひて、いと賑はしきまとゐをなす事も尠からず、たまさかには自から琴などかいならして興をそえ申すも樂しし。軈て良人は書齋に入り給ふ。姉樣に學校の日課を復習さす。弟は早や眠しといふ。八時頃姉樣も弟も共に眠に就く、婢に明日の朝すべき事ども知らせて、其日の小遣帳を記し、日記を書く、日記の外に住所帳ありて、家に關係あらん程のものは、其名と所とを知るがまゝに必ず記し置く。日記に留むべきは天氣、良人の出入し給へる時間、來客の事、其日新聞に在りし珍らしき話などなり。

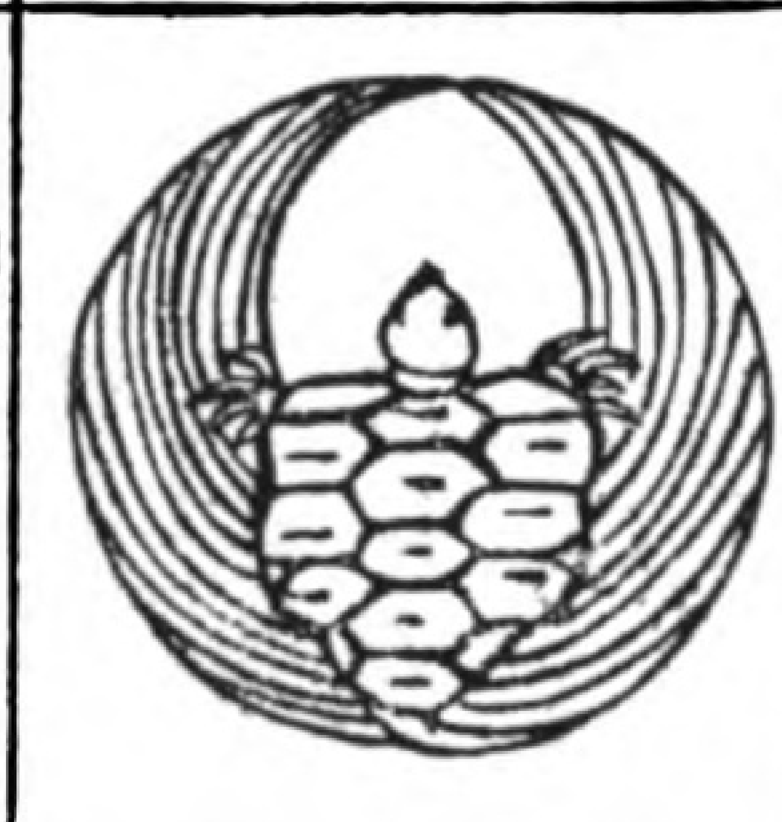
▲午後九時　良人に茶をすゝめまゐらす、家庭の事に就きて良人に謀るべき事をはかる。退きて寢床の用意す。十時ともなれば良人眠に就き給ふ戸締、風呂場、置火鉢などの火の元をしらべ、婢を寢させて、其日の無事なりしを祝きて枕に就く。

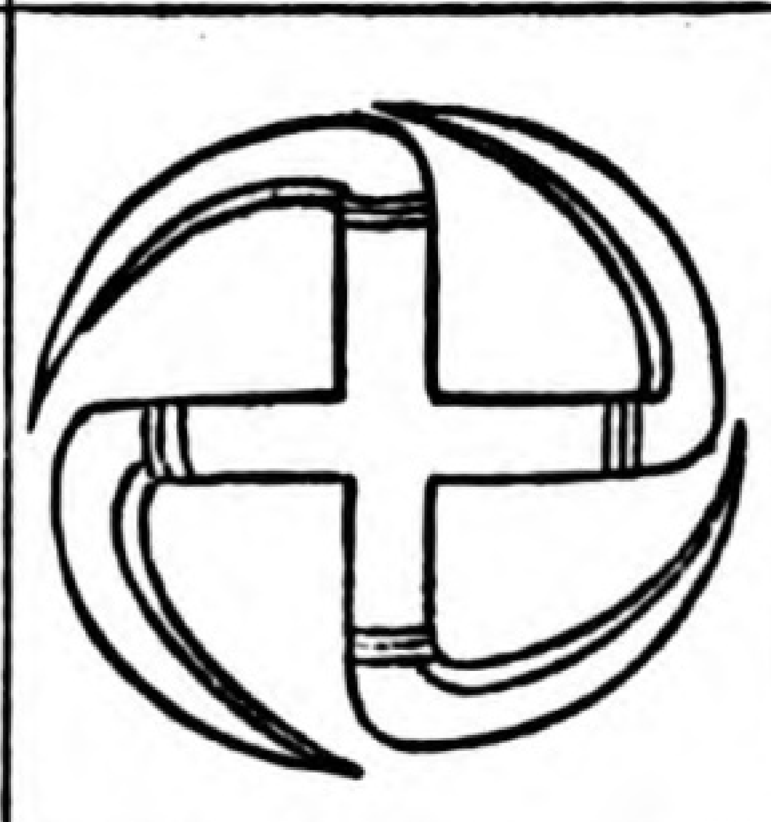
新意匠紋づくし (1)


丸に立るぎく


いねの丸


たちおもだか

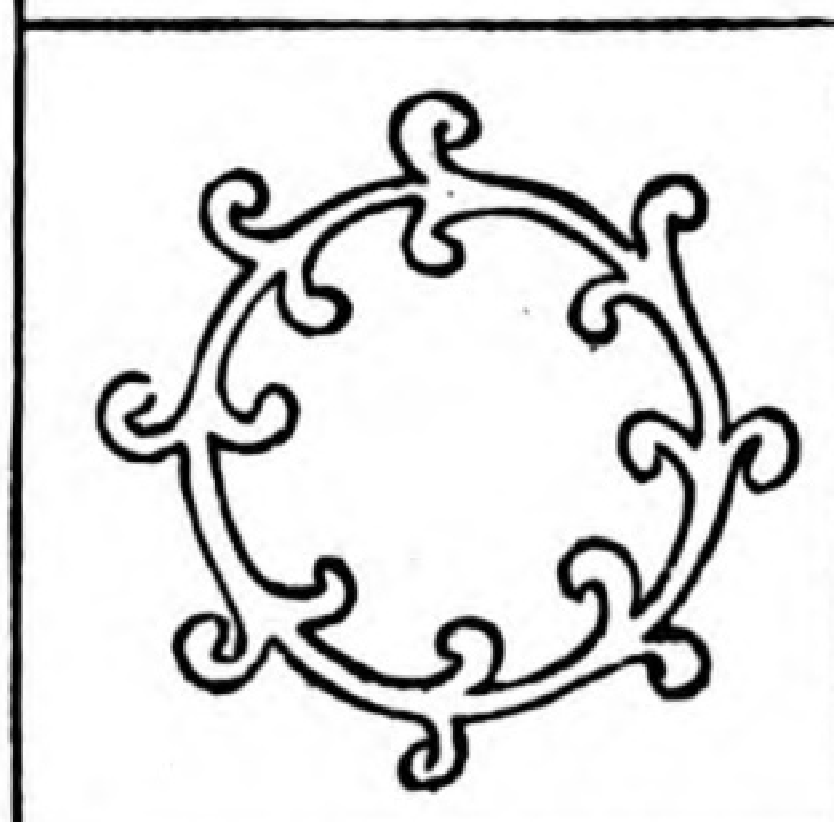

ふせんこうもん


まんじのまる


ゑびかぶと

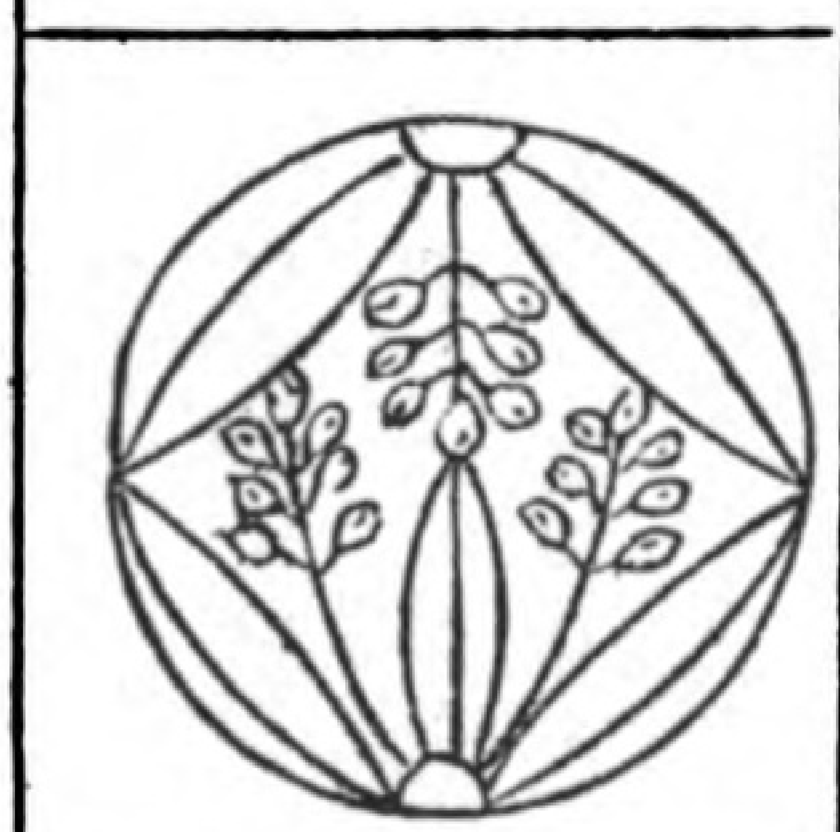

三ツかきつばた


三つかさの丸


夢ワらび

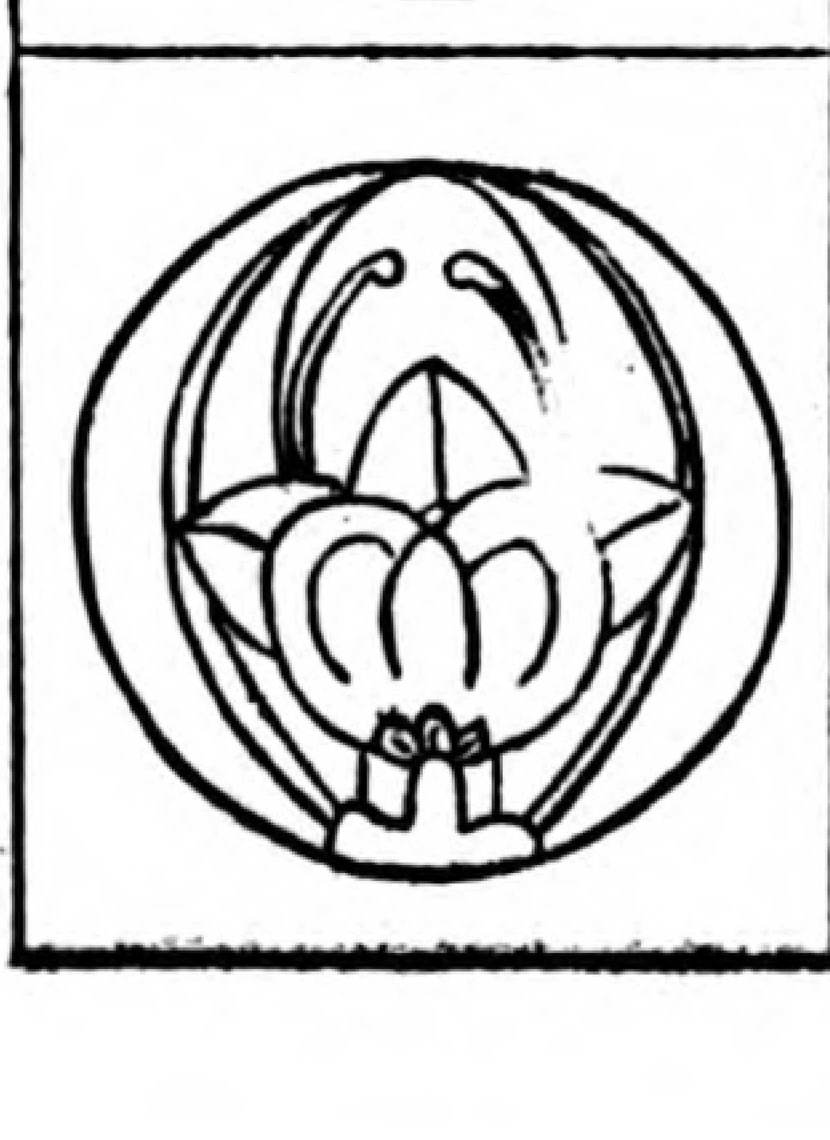

三ツつるかしを


丸に三ツはまぐり


むかふなんてん


三ツよせけね


ちきーかたのはな


ふせんなちはな

行儀作法 昔の面影

紫のゆかり

今を距ること二百年のむかし苗村丈伯の著はせる女重寶記中女のたしなみとして書のこされたるもの丶内より現代に通用すべきもの數十種を抜萃してこゝに記しぬ。又聊か當時の交際社會の有樣をも窺ふに足るべく思ひて

○不斷の行儀作法は朝早く起き出で、盥嗽手水し、髮結はぬ內人に逢ふべからず、事により逢はで叶はぬ事あり、故に早起身じまひすべし。

○客の來たる時遲く出まじきなり。

○戸障子の閉明け、あらくすべからず。戸障子の出入は跪ひて引くべし。あとも篤と閉て置くべし。

○人の手拭で汗ぬぐひ、扇、楊枝、履物使ふべからず是も時によりて苦しからぬ事あり、されど返す時の心得あるべし。楊枝は借りたりとも返すまじきものなり。

○人の書く文讀む文ともに見まじき事。

○人の密かに物語する體ならば早く其場を立退くべし座を遠ざくるがよし。

○文書く事、假名勝にいやしく書くべからず、しとやかに美くしく書くべし人の文讀むことは眞名、やつし字などにても讀み兼ねざるやうに心がけたまふべし。

○男は言ふに及ばず、女同士なりとも人の顏をじろじろとながむまじき事

○打解顏に問はず語、懺悔物語すまじき事、まして人事そしりなどみだりにせまじき事。

○貴人の前にて扇使ふまじ、汗ぬぐふまじ、痒ゆき處をもかく事あるまじ、若し堪へ難き時はそつと手をやり强くかきて二たび手をやらぬやうにすべし、又鼻かむまじき事、されど汗、鼻などの出づる時は次へ立ちてとくと整ふべし。若し立たれざる時は我慢すべし故に貴人の前に出づる時は前以て十分調へ出るべし。

○人前にて爪取り、髮なでつけ、帯仕直しなどすべからず、人前にて鼻かむ時は下座の方を向きてかむべし

○庭へ下る時は飛石のある庭は地を踏むべからず、石の上を歩むべし、築山などへむざと上るまじ、すべて

(2) 新意匠紋づくし

ふせんはなひし



菊蝶



ゆきわにちがひ杉の木



ぼたん蝶



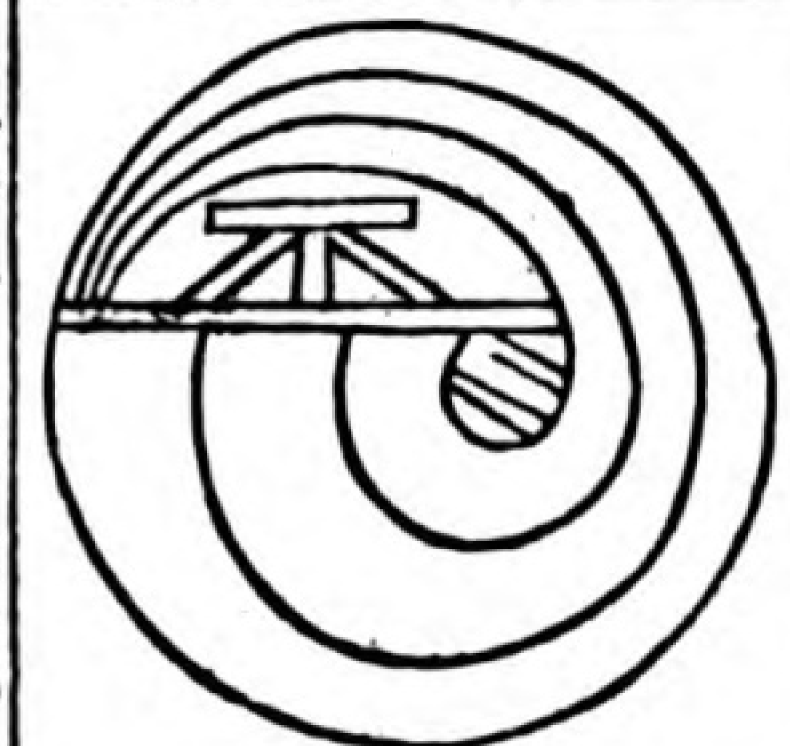
くつわぎやと



二ツ松毬ふちとりん



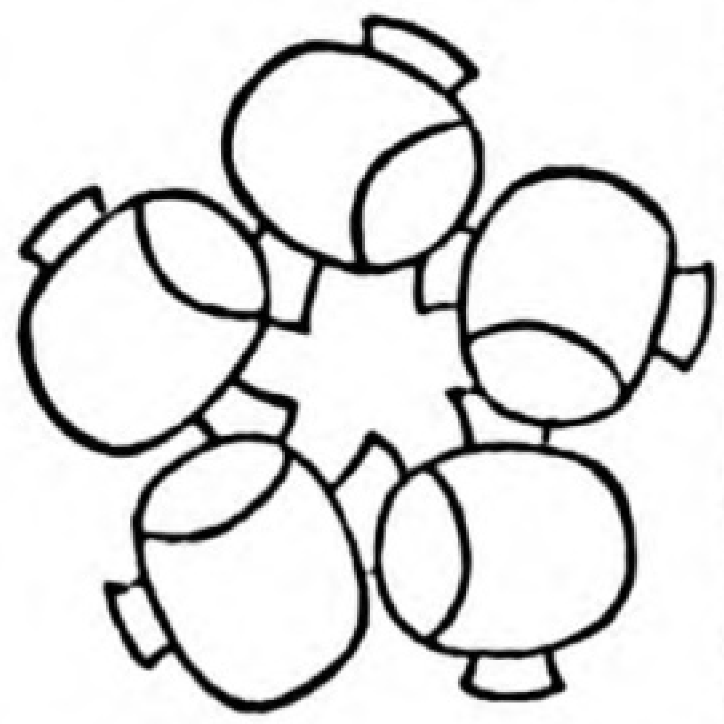
一ツ帆丸



あをさみ三つは



五ツはゝち



池田きんとう



丁子蝶々



だき山ぶき



むすび三つの雀のね



立なみにうさぎ



うつやしむ兎



木草の花うつくしきとてあまり傍へ寄見て呼吸のかゝるほどにすべからず、まして手などさわるべからず。

○掛物其外道具の類物知顔にむざと褒むべからず、只心に褒むる體、感じたる様然るべし。

○人に誘はれ行く時は、先方の衣裳より勝りて華麗に扮打べからず、凡そ振り合聞き合せ、押はかりなどして相應にすべし。

○物事作法知り顔にすべからず、何事も指圖など、自慢らしくすましたる顔付を爲すまじき事。

○身に薫物をこむる事はほのかにすべし。甚だしきはあしく、香ひ袋などもあまり高きは却つてうるさきものなり。

○座敷の最中にさし出でたるは惡し、片隅に這入りたるは初心なり、手そぼり、扇を鳴らし、茶碗を弄びなど又退屈したる顔など顯はにし人の物言ひかくるに返事うはの空なる事あるべからず。

○人の小刀、鋏、など借りては拭ひて返すべし、筆など使ひたる時は後を拭ひ毛先をよくなをし置くべし。

○人の寢むしろ布團ゆめ〳〵踏むべからず況して人の足など踏み越へなどする事我が子とてもすべからず、すべて踏む物は履物、越ゆるものは敷居の外なしと心得べし。

○人の物語の中へ出で他のはなし堅くすまじき事なり又人の物語違ひたりとて後より我知り顔に語り直すべからず。

○盃の出たるを見て座を立ち去るべからず、去かしこれも時によるべし、貴人の前にては用もなきにさいさい立つべからず。

○膳に据りて箸を取る事人より遲く取りて人より早く置くべし、されど斯く心得てあまり遲く取り早く措くは惡し少しの違ひと心得べし。

○上座して苦しからぬ人も一應は辭退してする〳〵と上るべからず、又辭退すぎてさま〴〵と人に強いらるるはあしく出過ぐるは無禮なり、其塲の見合せ肝要なり。相客の上下我身の程をはかるべし。

○膳に据る時確かと正面にするはあしく膳を少し左

(3)

新意匠紋づくし



むかひゑほし



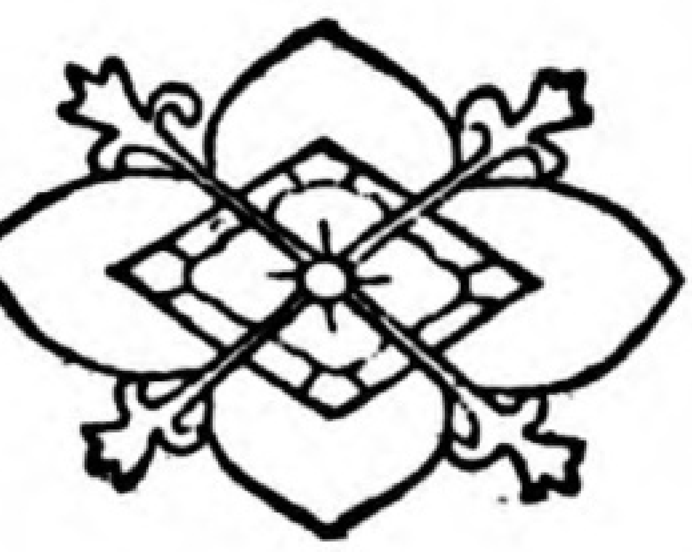
一ツすみれ



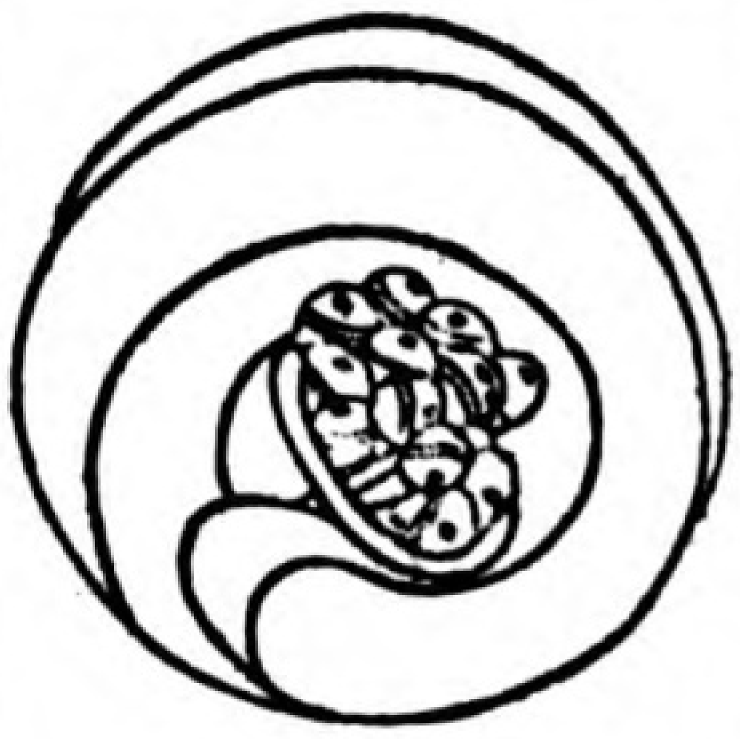
だきわかまつ



月星てふ



板くらもくこう



神楽すゞ



みやけのゆきわ



中せぎやうよう



のぼりぎくふくらすゞめ



ほやよはと



たいかうきり



つる片たくあふひ



三ツおひこゑかね



はるふぢ



ふせん花りやう

の膝の方へよせる心持にてすはり、さて右の手にて飯のおほひを取り左の手にうつし、又右にて汁の蓋を取り、飯の蓋と重ね膳の左わきに置くべし。

○いづれの菜を喰はんと見合すことは、迷ひ箸とて嫌ふなり、何にても口にあるを喰ひしまひて外の物を食ふべし。口に物ある内に食ふはこみ箸とてきらふなり

○餅は楊枝にさして食ふべし、又指につまみても食ふべし。

○麺類を食ふ事汁を置きながら一箸二箸、すくひ入て汁を取わげ食ふべし其後は汁を持ながら入て食ふべし

○吸物、初献には汁を吸ひ後實を食ふべし二献目は實を食て後、汁を吸ふべし。

○菜は左の方より食ひそむべし菜より菜を食ふ事は渡り箸とて嫌ふなり。

○飯碗の中より外所眼を遣ふべからず。

○挨拶もなく打傾きて食ふは犬喰とて卑しむものなり

○挨拶は度々いふも悪し、一時にわや〳〵といふは聞苦きものなりよきほど〳〵を見合て輕く挨拶あるべき事なり、口の中に食物ある中に挨拶言ひかけられたるは大に迷惑なるものなり、大口に食ひて含みながら物言ふは大に見苦しきものなり。

○鱠の酢をかたく吸ふべからず、同じくけんを食ふ事ゆめ〳〵あるまじ。

○二三の膳の汁を食ふ時はその膳につきたる菜を喰ふべし外の菜喰ふべからず。

○香の物は湯の菜なれども湯の中へ入て喰ふ事あるまじ、同じくは食はぬがよし。

○味噌の物、鹽辛の類、汁のたる物、箸の汚るゝもの食苦きもの挾み難きもの、齒音の高き物は斟酌すべし

○辛子、山椒、其他辛らき物、香ひあしき物食ふべからず。

○腰を屈め、俯向きなどして食ふべからず。

○給仕の人を待たせ置き汁を吸て出し、又通ひ汁を代へて持出でたるを取りて直ぐに食ふべからずこれはうけ吸ひとてせぬ事なり。

○料理の内に魚の骨などなき樣にする事、婦人客に對

(4) 新意匠紋づくし



むめつる



てがらぐるま



房楊扇丸



三つくろみ



きねやさくら



花えんどう



みたんぎう



むだきみやうが



五つまろうむ



利休たろけは



五つくも



いかりきなし



かきそめのし



仙臺ぼたん



とろ矢わげた

する馳走なり、若し骨などあるを膳に出し置き、かさなどに置くことあるまじ塵などあるとも同じ事なり、隨分器物の中にてよく見て骨なき所を食ふべし。口中より骨を撰り出すことあるべからず、すべて食ひじまひたる料理の內にて骨又は嫌ひな物あらば平壺又は汁椀など蓋のある物の中へ入て蓋をして置くべし、決して喰ひ荒したる儘にして置くべからず。

〇又燒物などにて若しむしりたる所あるとも見苦しからざる樣にあるべし。食ひしまひたる箸は鼻紙にて拭ひ置くべし、膳の內何にてもしづくの滴れざる樣注意すべし。

〇すべて膳の上に物を飜すは大の無しつけなり。常に朝夕の食事の時好みて膳の廻り奇麗に食ひつけ置くべし、晴れの座敷にて俄かに謹み行儀にせんと思へば却つて心あらたまりて、過ちの出づるものなり。

二百年前の女學世界

中古の事は知らず室町氏の末つ方より女子を敎ゆるに女禮式てふもの起り、伊勢、武田、小笠原、斯波、細川、今川、曾我等夫々門戶を張り各々其流派を立てゝ以て女子躾方のやゝ秩序ある敎授の端を啓けり而して江戸幕府の時代に入りて文敎一層盛んとなり女子に關する敎育の書續出するに至れり、今其重なるものを擧ぐれば左のごとし

▲鑑草……（中江藤樹著）正保年間
▲妻かゞみ……（釋一圓）同
▲本朝烈女傳……（黑澤弘忠著）明暦年間
▲女四書女論語……（黑澤弘忠著）同
▲本朝女鑑……（淺井了意著）寛文二年出版
▲女五經……（金澤某著）天和二年
▲婦人敎艸……（作者不詳）貞享三年
▲比賣鑑卅一卷……（中村惕齋）同四年
▲女大學……（貝原益軒）元祿年間
▲女重寶記……（苗村丈作）同
▲女中大學……（澤怡溪）同
▲女中かゞみ……（同上）
▲本朝貞女物語……（同上）
▲假名烈女鑑傳……（同上）
▲大和女訓……（井澤蟠龍）享保年間
▲女訓翁艸……（竹田春庵）寛保年間
▲女學範……（久川靱負）明和年間
▲女今川……（作者不詳）同
▲女庭訓往來……（作者不詳）寶暦年間
▲女實語敎……（作者不詳）同
▲女童子敎……（作者不詳）

國王の末路

國王と云つても列強の大君主陛下ではありませんマダガスカルの前女王は今や佛國政府保護の下に漸く生計を支へて居られるので其費用は普通の女學生よりは餘程少ないと申す事です、最初巴里へ來られた時には裏通りの或酒屋の二階に住つて一週間八十圓の收入よりありませんかつた、二度目來られた時には小さい乍らもさるホテルに御泊になりましたが監視が嚴重で食事の如きは外から運ぶ位にして、外出も自由に許されなかつた、女王は嘆じて予は同情なき乞食の如く、王位の代りて晩餐、臣民の代りて嘲笑を得たりと悲まれました。

丁度其時分にイリンナ王も英國に征服されましたが、王は一日十圓の小使錢を給與された。

ナイセリナの前王は泥小屋に住まれ乍ら尚昔時の威嚴を保たん爲か外出の時には澤山女房や從者を供奉させ、後から傘を差掛ける者腰掛を持つ者等を從へられて、威儀堂々と町を練て歩かれる、其くせ前の宮殿は英人の打球場になつて居ます。

ダホミーの前王は今は寧ろ蓆の上に轉がつて煙草を吹かすのが一日の仕事で、其傍には三人の女房共が各傘を差しかけたり、灰吐を持つたり、唾壺を持つて恭しく立つて居ます。

サモリー王は十五人の女房と十六人の小供に圍繞されて終日紙卷莨を喫して居られます、澤山あつた金銀財寶も今は佛國政府に沒收されて仕舞ひました。

布哇の前女王は今やワシントン府で愉快な生活をして居られますが、音樂に堪能で著述もされ、「布哇女王の布哇座」などは隨分評判が善かつた樣です。

大英國の三倍もあるアフガニスタン全部を領して居たラメ王の收入が一週間三十圓でアツシヤンチーの王樣が一週間五圓とは誠に悲慘な次第ではありませんか。

元祿教え艸

（家道訓俗解）

麻軒生

家道訓、大和俗訓等の著者として知られたる貝原益軒翁は、德川時代に於ける第一流の儒者である、その漢學に通じ、ひろく世道人心の敎導に努めたる點に於ても、我邦儒者中確かに第一流である、翁の著者、百餘種の內、敎訓的のものには家道訓の外、文訓、武訓、養生訓、樂訓、童子訓、初學訓、女大學、大和俗訓等がある、而も是等の著は皆な假名の通俗文を以て、婦女童幼にも容易に理解のゆくやうに書かれあれば、其の効果はかの無暗に難解の文字を並べて能とする俗儒輩の說敎に比べて、優ること萬々である、就中家道訓一篇はいろ〳〵家庭の心得を說いたもので、今日より見るも、なほ家庭の金科玉條として服膺すべき價値は十分にあると信ずるので茲に其の內の最も懇切なるもの文を拔粹して蛇足ながら俗解を試みることにした。

道義の事

○人の世にある、たかきいやしき、皆、身を修めて、家を齊ふるを以てつとめとす。家の本は、身にあり。故に家ををさむる主人は、まづ、我が身を正しくして家をとゝのふべし、身修らざれば、家とゝのひ難し、家とゝのはざれば、身を安くし難し、君子は常に身を謹しみて、後の患をおもんぱかる。こゝを以て、身やすくして家たもつべし。家の主人正しければ、家人を敎へ導くべし、主人正しからざれば、家人の則なく、善をすゝめ惡を戒め難くして、家法行はれず、故に、主人の身の行は、家人の見習へる手本となれり。つゝしむべし。

之を分りよく解いて申すと、家を治むるには主人の品行を修むるが何より大事である、家庭の根本は主人の身の行にあるのだ、譬ら奥さんがヤキモキ思っても、家の者が心配しても、主人がシッカリしないで、其の身持が放埓であつたり、道に外れて居たりしては、迚もうまくゆくものではない、故に一家の主人と成て、家を治めやうとなら、まづ自分の身を正しくせねばならん。主人の身持が修らなかつた日には、家の內は亂れて闇黑である、道歴風ではいくら家庭が休息の場所だからとて、身を安穩に置くことも出來ぬ様な始末になるであらう、それに主人の行が正しければ、家の者の手本とするものがなく、何が出來るが、正しくなければ、家の者を敎へ導く事うして善いかも分らぬ、其の結果は銘々に勝手なまねをして憚らず家法の規律のと急に拵いだ所が仲々其の通りに行くものではない、ダカラ主人の行は大事である、お氣を付けなさい、との意、修身を以て齊家の根本義と定めた所、今の世の素行の修らぬ旦那様方に敎

つては正に力ある頂上の鐵鎚ではあるまいか。

○家のさかえ衰ふるは、家法の正しくなるを盛とし、家法のすたるを衰とす、富貴なりとて、盛とすべからず、貧賤なりとて、衰とすべからず、家の盛衰は、禮儀の行はるゝと行はれざるとによれり、是古人のいへる意なり、今の世の人も亦た斯の如く心得べし。

家の盛衰は貧富によつてトすべきものではない、家法の行はるゝと行はれざると、禮儀の正しきと、亂れたるとによるのであるとは、昔の人の言つた事であるが、實に千古の格言、益軒翁の語を借るまでもなく、明治の世の人も、また斯くの如く心得て貰ひたいものである。

○家ををさむるにも、忍の字を用ふべし。忍とは、こらふるなり、堪忍するをいふ。おごりを抑へて、欲をほしいまゝにせざるも、こらふるなり。又、我が家の貧なるをこらえて、人をむさぼらざるべし。凡の人君子にあらざれば、わが心にかなはざること多し。堪忍せざれば人の交は和さず、然るに、父兄は、子弟の、己につかへやう足らずして、心にかなはざれば、子弟をせむ、子弟は、父兄のめぐみうすくして、あきたらざれば、父兄をうらむ。其の餘、夫婦親戚も亦然り、たがひに堪忍せざれば、いかりうらみ出來て、父子兄弟夫婦親戚の間むつましからず、此の故に、人の行のわが心にかなはざる事を、たがひに堪忍して、うらみいからざれば、一家の内やはらぎ親しむ。是家を齊ふる道なり。又、人の心のあしきはゆるして堪忍し、わが身には道をつくして、人に堪忍せらるゝ行をなすべからず。

是は家庭に勘忍の必要なる事を説かれたのである、勘忍なれば身に過失なく、世に紛紜無く、家庭に風波なし、克己心に乏しき人、貧乏を苦に病む人、他人の行ひが氣に喰はぬと言つて濫りに癇癪を起す人、子供の孝行の至らぬを責むる親、父母の嚴格しとて恨めしく思ふ若者、亭主の仕打に不平言ふ女房、妻の仕向惡しとて腹を立てる良人、嫁の爲る事が氣に入らぬとて口八釜しく言ふ姑達には、いづれも良き戒である、勘辨は平和の本、反省を要す。

○毎日夙に起て、手と面を洗ひ、まづ、父母の氣色をうかゞひ、飲食のこのみをとひて、とゝのへすゝめ、其の求めあるを聞きて、つとめ行ひて、父母の心にかなふべし。子弟に其の日の務むべき課程をさづけをしへ、奴婢に、其日の所作を言ひつけ、をこたりなから

しめ、外事あらば、使を命じ、人の附託あらば、滞なく整ふべし、朝は早く起き、門戸を早く開かせ、家内の塵を拂ひ、門の内外庭中を掃除して、皆、いさぎよくすべし。朝おそくおくるは、家のおとろへとなる。いましむべし、古人、家の盛衰は、朝おくることの遅速を以て試むべしと云ひし、うべなるかな。

是は主婦の爲すべき日々の務を規定したものらしい、殊に夙起を奨勵し、朝寢を戒めて、古人の言まで引かれたのは、親切な諭し方である、世俗の諺にも夙起は三文の徳あると云ふが、啻に三文や五文の金ばかりではない、夙起の習慣は物質上にも精神上にも何れ程利益があるか計り知れぬ、それに家庭の規律の如きも、夙起が本で、朝寢する家に規律も何もあつたものではない故に家庭に日課を定め規律を立てやうと思ふたなら、先づ夙起の習慣からして養はねばならない、多分益軒翁の意も茲に在ることゝ思ふ。

○人の家の禍は多く、利を求むるよりおこる。利をむさぼれば、却て、財を失ひ、わざはひ來ること多し、利を求めんよりは、只、家業を怠りなくつとめ、家財を妄に費さずして、分外の利をむさぼらざれば、禍なく財を失はず。凡、利をむさぼるは、禍の本なり。いましむべし。

禍は利慾から來るのである、利慾を貪れば却て有る財産をなくして了ひ、禍を醸すことが多い。濫に金銭を儲け様と思ふよりは、只々、家業をなまけず地道に精出して勤め、能く儉約をして、己が天分に安んじ分外の慾をかはかぬが宜い、凡そ世間の例に見ても慾が深くて利益ばかり求むるのは、一家破滅の本である、恐るべし戒しむべしとの意、是は利己心を戒めた者である、けれど人は誰しも貧を厭ひ、富を希はぬはない、利を求むるもつまり富裕を欲するからである、そこで翁は又た左の如く言はれた。

○古語に、つとむれば貧にかち、愼しめばわざわひにかかつといへり。此の語、甚だ人に益あり、家の業をよくつとむる人は、必富む、身のことをよく愼めば、必ずわざはひなし、勤愼の二字、常に守り行ふべし、自ら行ひて、家人にも行はしむべし。

此の意は、稼ぐに追付く貧乏なし、愼んで居れば禍の神も寄せては來ず、家道の要は勤と愼の二字にあるのだから、よく勤め、よく稼いで、常に愼が深ければ、家富み榮えて、禍などの降って湧くきづかいなし、と言はれたもので、家を治むる者の心得べき金言である。

○吉事をいはひ、凶事をいむは人情なり。正月五節の俗節と、元服嫁娶をいはひ、死亡を忌むこと、うべなり、然れども、愚人は、吉凶につきて、甚だかゝはり、いはひ過し、いみ過して、事に害あり。天命を知らず

して、福を求め禍をのがれんとする私心よりおこれり。是禍福の理を知らずして、おろかに迷へるなり。神佛にみだりにへつらひいのりて、さいはひを求むるも、亦同じ。

吉事を親し凶事を忌むは、人情の然らしむる所で尤の事ではあるが、さりとて餘りに之に頓着して、親ひ過し忌み過すのは、馬鹿者のする事で、甚だ宜しくない、斯う云ふ徒に限り苦しい時は、神佛に縋つて福を祈り、又た禍を避けやうとするが、トンデもない了簡違ひだと、迷信の徒を戒めた小言なり、然るに今の時節にもまた斯様のやから多し、古歌に

　　心だに誠の道にかなひなば祈らずとても神や守らん

とある意味をよく味つて貰ひたい。

○人に贈物するは、心を用ふべきことなり、すべてあしき物を贈るは、贈らざるに劣りてはづかし。魚のあざれ、肉のやぶれ、饈餌醬醢などのつくりなせる物、味變じ、色あしく、臭あしき、又、果實など、いまだ熟せざるもの〻、時ならずして人に害あるもの、皆、人に贈るべからず、贈物によりて、人の心のうすきあつきあらはる。下部にまかせては、うしろめたし。みづからえらぶべし。

贈物は能く〳〵心を用ふべきことである、腐つた物や、臭の付いた物や、味の變つた物や、人の健康を害する様な物を贈つては無禮である、蒸返し物には見分善くない物があるから、注意するが可い、をかしな物を贈る位なら、イツソ止めにした方が餘程利口である、夫から贈物によつて其人の親切と輕薄の程がよく分るものであるから、氣を付ねといけぬ、ダカラ下女なんぞに任せないで自分で善い物を見繕ふ様になさいとの御心付、世間馴れぬ若い奥さん方にとつて誠によい敎と申すべし。

婢僕の事

○凡、家人を使ふには、人の心をおしはかり、憂苦を知りて、人の苦なきやうに施すべし。奴婢は、主人を賴んで、身を養ふ者なり、心を用ゐて情あるべし。剋薄にして情なく、彼を苦しむ可からず、凡そ、人を使ふ者は、下人の憂苦をよく思ひはかりて、考へしるべし。

婢僕の待遇法を說いたもの。凡そ人を使ふには、思ひやりが必要である、下女下男の如き者は主人を賴んで身を過すものであるから、目をかけてやらればならぬ、又た人を使ふ者は同情の念に富んで居なければならぬとの意味なり、乃ち此の心を以て下人を待遇すれば彼等は手足の如く働いて、主命にそむくことなし、すべて人は使ひやうにありと知るべし。

○家ををさむるに、奴婢最もをさめ難し、これを使ふに、尤道あるべし。遠ざけて嚴しければ、うらみそむく。近づけているがせなれば、をごりをこたる。恩愛を以てなづけ、禮法を以て正すべし。此の如くすればうらみなくをごりなし。仁愛と禮法と、二の者ならび行ふべし。

下女下男を使ふには、使ひ方がある、嚴し過ぎてもいけなければ、緩かに流れてもよくない、また、なさけを用ひ過ぎてもいけなければ、窮屈にし過ぎてもいけない、要は恩威並び行はれて、愛に過ぎず威に亂れぬ所が最もよいのである、人を使ふは人に使はるゝより六ヶ敷いと言ふ位のものであるから、其のつもりで之に臨みさへすれば先づ間違はないのである。

○奴婢は、才力ありて質實なることそねがはしけれど、かゝる者は稀なり。才辯にして利口なる者は、多くはまことすくなくして、主をあざむき、かたましきことを行ふ。家主たる人、もし是をよろこびて、家事をまかせては、必、大なる禍となる。才德二ながら得難ければ、才鈍くとも、質實なるを好むべし。鈍くしてはかゆかざれども、質實なれば、主人の敎にしたがひやすく、後の禍なし。

婢僕を選ぶには、才氣が有つて、實貞なれば申分ないが、斯う二拍子揃つた者は金の草鞋捜しても滅多に見付るものでない、兎角小利口で氣轉がよくつて、口を利かしても辯才のある様な者は、輕薄で、横着で、主人を欺き、主人の目を竊むやうなことを敢てするから、油斷が出來ない、故に才と德と揃つた者が得られなかつたら、寧ろ才は少々鈍くとも、實貞なのを用ひるが宜い、鈍い者は手の口で家事をさせて掠取らぬけれど、其代り實貞でさへあれば、主人の命令にそむくことなく、又たその敎を守つて能く働くから、使つて使ひ易く、餘計な心配もせずと濟む故、何れ程とくだか知れまいと、是又た人を使ふ者の心得置くことである。

○權勢ある家の賓客を司るやつこは、必、主人の權勢にほこり、無禮にして、賓客をあなどる、主人より時時心をつけて、無禮を戒むべし。其のやつこに任せ置くべからず。やつこの無禮あるは責むるに足らず、只、其の主人をそしる。主人是をしらざる可けんや。

此の様な事は獨り封建の時代ばかりではない、隨分今でも權門富家や、其程でなくても少し社會に幅を利かして居る家などになると玄關番や取次の者が、主人の權威を笠に着て、來客に無禮を働くことが往々あるが、よくない事だ、客は之に腹を立てゝ見ても、元より取るにも足らぬヘシヽ者の事とて敢て無禮を咎めず、其の責の歸する所主人にありとして、之を罵り惡く言ふは理の當然である、故に主人たるものは不斷こゝらに氣を付け目を配つて居なければならぬ、殊に玄關は客に接する第一の場所である故、そこで禮を缺く樣

なことがあつては、主人の名譽にも關することなり、よく〳〵注意なさるがよい。

育兒の事

○子を育つるには、をごりとほしいまゝなるを夙く戒しむべし。衣服器用以下、萬の俸養、わが身の俸祿より、輕く薄くばうとくなるべし、愛を過して、物ごとにゆたかに華美なるは、是子に奢を敎ふるなり、いとけなき時よりをごれば、年長じて益々甚し、はじめゆたかにして、後におさふるはあしゝ。はじめかゝみて、後にやうやくのぶるはよし、いとけなきより戒めて、僞なくして誠を本とす。よろづの事、質朴にすべし。又、をこたり我儘なるをはやく戒めて、へりくだり讓ることを敎ふべし、子を育つるにはやくそしふると、左右の人をえらぶにありといへるは、賈誼が名言なり、此の二に心を用ふべし。はやく敎へざれば、惡にうつりやすし、附きしたがふ人あしければ、惡しき事を見聞きて、一生のわざはひとなる。幼よりあしき事を見聞しては、先入の言主となり、後に善事を見きてもうつらず、あしき癖つきては、後にならひとなつて、改りがたし。

子を育てるには、夙くより敎へ導かればならぬと云ふ理由を反覆説き示されたもので、子を持てる親に良い戒である、世の諺にも「三ッ子の魂百までも」と云ふことがある故、其の百までも續く三ッ子の根性の固らぬ時からして、敎へてかゝらねと、子供の將來を誤る樣なことになるから、幼時の家庭敎育には最も注意を要するのである、けれども親は馬鹿なもので、子の愛に引かれては、

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな、

の狀態を現ずるもの故、能く心を用ひて縱横に流れぬやうにし、且つ常識を以て子供の爲不爲を考へ、善はすゝめ、惡はこらす樣に敎育して行つたなら必ず善い人間になるに違ひない、斯うしてこそ眞に子を思ふ道にかなふものだと思ふ。

○小兒をいましめて、もろ〳〵の虫魚など、およそ、人の害にならざるいき物をころさしむべからず。又た生類をくるしましむべからず、犬猫鷄鴨などをなやますべからず、不仁にして、みだりに物の命をたつは天道にそむくことを、幼少の時より、早く敎へ戒むべし。

是も家庭敎育の心得の一で、庭に這ふ虫ケラ、池に棲む魚、または

大瀬の類といへども、いぢめてはならぬ、凡そ生物の命を取る様な不仁の所業は、幼少から戒めればならぬとの意、今世間にやかましく言ふ動物虐待防止問題の意見も、つまり是なのである。

住居の事

○人の家居は、貧富によらず、身の分より少し狹きがよし。せばければ、つひえすくなく、事少くして、住みよし。富貴なりとも、無用の屋作ひろくすべからずひろ過ぎては、通行なやみあり。掃除に家人のつとめしげく、修理もむづかしく、財の費多し。されど、又無用の用とて、常に用なき所少しあつてよし。事ある時のためなり。家居は只堅くいさぎよくして飾りなきが、心を養ひ、目を養ふによし。

すまいは身分に合せて少し手狹な位がよい、手狹の方が入費も少く用事も少くて、くらしよいとの御議論は、家を選ぶもの丶宜しく心得べき事である、かの飾りに玄關を張つて、體裁を繕つて、收入の三割も四割も家屋費にかけて了ふ様なのは、勿體ない事、其で居て内所は火の車と來ては隨分平仄の合はぬ話ではあるまいか、斯ふ云ふ方はちと翁の此の意見に耳を假したらよからう。

○常に居る處は陽に向ひ陰に背くべし、此の如くなれば、日の光明らかに、月に向ひ夏涼しく、冬暖かにして、身を養ふに宜し。又居室も常に掃除して、いさぎよくすべし。かくの如くすれば、氣を養ひ、心をいさぎよくす、暗くけがらはしければ、心氣の養とならず又居る所暗ければ元氣をふさぐ。甚だ明らか過ぐれば精神をやぶる。居る所飾を好めば、慾を生ず。

すまひは南向に限る、南向の家は日當りがよく、月もよく射して、風の入も申分ない、ソレニ夏涼しく、冬暖かいのは何よりである、又た部屋は能く掃除して清潔にして置くがよい、室内が暗かつたり、うす穢かつたりするのは、居心も惡し第一健康を害する本である、左うかと云つて餘り明る過ぎても、衛生上よくない、夫から室内裝飾も何や角や凝り過ぎると、其から其と慾が出て、際限がないから宜い加減にして置くがよいとの事、全く其に違ひありません。

○園に草木をうゑて愛するも亦、心を養ふ一助なり、いとまあるとき、少し心を用ひて、あるにまかせて求め易き物を植うべし。得がたき物を強て得んとし、みだりに人に乞ひ求め、あたひ多く費し、其の品の多きと、花のすぐれたるに誇り、花のよきを爭ひたゝかはしむるは、事多くなり、心のわづらひとなり、心術をそこなふ、是樂にはあらず、苦をもとむるなり。

庭いぢり、植木道楽も心の保養と成て結構な事であるから、過度に心を労さぬ範囲で、気楽に行つて居るは甚だよい訳である、けれども此の道に凝り出すと、得て珍品を手に入れたくなり、或ひは他人の庭の木を強請つたり、或は高價の草花をドッサリ買込んで、自慢し、果ては他と競争する様になるものだが、用ばかり多く成つて、心持も卑しくなるから、面白くない。是では娯楽でなくて、トンダ苦労を求むる譯であるから善い加減が宜いとの御説、すべて道楽は何によらず、程度のあるもので、度を越すとよくないものと知る可し

○古語に、一物有れば一累を添ふといへり。草木鳥獣器物など、何にても一向にこのみ過せば、必、其の物に心をうばゝれ、心に一のわづらひをそふるなり。其上事を好めば、ひまと財とをつひやし、下人をなやます、このまざれば事少くしてよし。君につかへていとまなき人、父の家にあつて孝行にひまなき人、官職をあづかる人、藝術の家業ある人、此の四等の人は、心を清くし事を省くを宗として、さし當りたる職分をつとむべし。事を好み、物を玩ぶべからず、事を好みて隙を費せば、我が身に差當りたる職分のつとめには、必、うとくなる。

何によらず、道楽に身を入れ過ぎると、其が為めに心を奪はれて、余計な苦労をせねばならぬ事になるものだ、おまけに其にかまけると、時間を潰し、無駄な銭を費し、人手を煩しても間に合はぬ様な事になるから、何れ程経済上に損が立つか知れない、故に職務に暇なき人は、成可く時間つぶしの事はしないで、差當つた役目を専一に勤めたがよい、事を好み物を玩べば肝腎の職掌がおろそかになるものだとの意、道理至極の旨といふべし、事好めば用多しとか、余計な仕事に手を出す余裕があつたら、そのひまで家の中の片付物でもした方が余程気が利いて居るワイ。

貸借の事

○後の事遠慮なき人は、當時身のやしなひにをごり、酒食をゆたかにし、家居をよくし、衣服をかざり、欲をほしいまゝにして、費を惜まず、財つきぬれば、人にかることををそれず、財をかす人だにあれば、幸にして多く借ることを好む、是、眼前を快くして、後の災を顧みず。然るに、只今さへ、我が財なくして、人に借り求むる程なるに、借れる財に、年々利息加はりゆけば、いよ／＼財つきて、借れる物をつぐのふべき力なくて、必ず、家をやぶる。初に早く後の事をおもんばかり、後の憂なき計をなすべし。

不斷贅澤をして居つて、金がなくなると、人に金を借り、而して金を貸す者さへあれば、善い氣に成つて少しでも多分に借りたがる樣な人間は、將來の利害なぞは思はず、只々現在さへよければ快いと思ふのだから怪しからん譯である、ソレデ無心を言ふ時はイロ〳〵口實を設けて、都合が出來次第早速返へすなどゝ巧いことを言ふけれど、今日に困つて人から借金する程なのに、借りた金に年々利息が付いて行ては、益々苦しくなる許り、借りた金を返す所か、利息も拂へなくなり、終には身代限をするより外はないのだ、故にさうなるが厭なら、處帶を持つた最初に能く氣を付けて、借金なぞは拵へずに、ちやんと後々の計を立て、心配のない樣に固くして置くが宜いとの說、道理千萬の意見である、借金を質に置いても芝居や寄席を見たがる婦人や、高利貸に高い利息を食られる紳士方は、耳を揃つて能く聽いておいでなさるが宜い。

○親戚朋友に、已む事を得ずして、物をかさば、初より與ふると心得てかすべし。借れる時は喜べども、時過ぎぬれば、めぐみを忘れて返さず。其の時かねて與へたると心得ぬれば、うらみなし。貸せる物を、必ず得んと思ひて、せめはたれどもかへさゞれば、いかりて中絶ゆるは、世に多きならひなり。かねて其の心得ありて、貸したる物を、必ず、得んと思ふ可からず、かせる物を、必ず、得んと思ふは、人情を知らざるなり。借りて返さゞるは、世俗のならひなりと心得べしいかるべからず。

親しい身内の中、朋友の間柄でも、金品は可成く貸さぬことにしたが宜い、若し眞巳むを得ずして貸す場合には、最初から與て與るものと思つて貸すがよい、人と云ふ者は借りる時は地藏顏して平身低頭審ぶけれど、程經つと其の恩義を忘れて、容易に返さぬものだ、其を催促して無理に取らうとすると、先では腹を立てゝ、其が爲めに絕交する樣なことになるのは世間によくある例だ、故に貸す時は與てやつたものと、諦めを付けてさへ居れば、元々與つた錢だから返して貰はうとも思はず、從つて後に怨の殘るきづかひなし、もし先が義理を思つて返せばよし、たとへ返さぬからとて怒つてはならぬとなり、成程斯うさへ思つて居れば間違ない、其が思ひ切れず金に未練が殘る位なら、テンデ斷つて貸さぬがよい、一旦貸した以上は返らぬものと思へとは、如何にも聖人の意見方である、けれども俗人間の交際に左う〳〵他人の都合許察して居ては、お人善の旦那樣扱ひにされて、トンダ馬鹿を見ることがないとは云へない、其を思へば寧ろ貸さぬ事、貸さぬ事。

經濟の事

○大に富める人も、財を用ふる道を知らざれば、後は必ず、貧窮に苦しむ。薄祿の家も、財を用ふるに道あれば貧苦なし。賢き人は、國天下をだによくたもつ。

況や、小なる家をたもつこと成りがたき害なし。然れば、家をもてる人は、財を治めて、家をよくたもつ計をむねとして、心にかくべし、今の人、多くは家を保つ計を知らず、貧困にいたりぬれば、世のならはしと我が不幸をとがめて、我が過をかへりみず。世をとがめて、我が身をゆるす人は、此の道は行ひがたし。家の困窮するは、ひとへに我がとがぞと心得て、みづからかへりみ、財を治むべし。

家を保つの道は、經濟の法を知るにあり、大金持も經濟法を誤れば瓦解し、薄給の腰世帶も其の法を得れば長く家を保ちて貧苦に惱むことなし。昔の賢人は國家天下の大をさへ保つたものを、高が小ぽけな家、何ぞ保てぬと云ふ理由があらうか、保てぬと云ふは畢竟經濟が下手で意久地がないからである、然るに世間の者は、自分の貧乏する種の意久地なさを棚に上げて他人の富裕を嫉み、こちとらは眞ら稼いでも、運がないのだから駄目だ、思へば面白くもない世の中だなぞと、泣言をこぼすけれど是は以ての外の心得違であるとの意思ふにこは家庭を經營する青年男女が轉ばぬ先の金剛杖、おろそかに思つてはならぬ教訓である。

○財を用ふるに、心を用ふると用ひざるとによりて、財の費の多少甚しきことなり、よく心を用ひて、無用の費をはぶき、つゝしみて約なるべし。おろそかにして多く用ふべからず。たとへば、養生の道は、物ごとにすくなくするをよしとす。酒食をすくなくし、色欲をすくなくし、言と怒をすくなくするの類なり。財を用ふるも、亦、此の如くなるべし。物ごとに多く用ひ過すべからず。然れども、費を惜しむこと、あまり緊密にすぐれば、我が心を苦しめ人に害あり。緊密なる内にゆるやかなるがよし。人を使ふも、亦、かくの如し。日々少しのいとまなきやうにつかへば、人苦しみて、其の所を得がたし。少しいとまあるやうに、人をつかふべし。

是も家事經濟の心得を說かれたもので、金を使ふには心を用ひて可成く少く用ひる樣にし、多く使ひ過ぎてはいかん、さりとて餘り細か過ぎてもいけぬから、斟酌を用ゆべし、人を使ふのも、同じ理屈であるとの意味、其の言ふ所は平々凡々ながら、玩味すると千萬斤の重味を覺えるのである。

○儉約を行ひて家を保つこと、必ず、早くおもんばかりて行ふべし。行きつまりては、せんかたなし。たとへば、若き時より中年まで養生せず、口腹好色の慾をほしいまゝにして、晩年にいたりて、漸く養生をつゝし

んまんとするが如し。つゝしまざるにまされども、おとろへてのちは、益すくなきがごとし。

儉約は行詰らぬ内にせよ、行詰りてからの儉約は何もならず、たとへて申せば、若い内に散々不養生をした揚句、年老つてから漸と氣が付いて、衛生の養生のと騒いだ所が、間に合はない、其でもまだ愼まぬよりはマシであるけれども老衰して片足を棺桶に突込むやうに成つてからの養生は身體を益すること少しとの意味である、儉約も若い内から行はねばいけない、頭腦に及んでソコニ氣が付いた所が始らない、何に付ても青年時代の心掛が肝要である。

○つひえを省き、をごりを抑へて、私慾をこらふるには、つとめて力を用ひざれば、なしがたし。心よわくしては、欲にひかれて行はれず。又世俗のそしりを恐れては、儉約は行ひがたし。力を用ひて、行ひとぐべし。欲にひかれ、そしりを恐るゝは、力量なし。欲に勝つには剛を以てす。恐れざるは勇者のわざなり。

私慾をこらへるにも、儉約を行ふにも、氣力がなくては駄目である斯くせでは家の爲めにならぬと思つても、堪忍の心が弱くつては、仲仲其の通りに行へるものでない、又たみえ外聞を厭ひ世間の惡口を恐るゝ樣では、儉約は行へない。儉約を實行しやうと決心したなら奮發して力一杯に、遣り遂ぐるが可い、欲にひかされ、外聞にかまけるといふのは、つまり意久地がないからである、勇氣がないからである。故に心を強く持つて欲に打勝ち、當面の貪身いふ事なぞには頓着するに及ばぬとの意、家事經濟を削る者の最も心すべき點ではあるまいか。

○をごりてほしいまゝなる人は、三年に用ふる財を一年につひやしつくす。たとへば、無養生なる人、慾をほしいまゝにすれば、百年の元氣を一時にへらして、身を失ふが如し。

世間には茲に言つてある樣に、向ふ見ずに金を使ひ果して了ふものが多い、宵越の錢は使はぬなど云ふのが是で、不了簡の極である、斯樣の心掛では生涯稼いでもうだつ上らず、又た身上ある者も、其を磨り果して了ふこと、火を睹るより明かである。

○およそ、人家になくてかなはざる物の外、無用の物を求めたくはへざれば、心のわづらひなく、財のつひえなし。

家庭の道具類は必要缺くべからざる物丈を備へて、其外の入らぬ物は買はぬが可い、又た畜はへて置かぬが可い、泛濫つて必要もない物を買ひ込んだり、或は無用の廢物を仕舞込んで置くが如きは、非常に不經濟であるとの意味、語簡にして意味最も長し。以上の事はいづれも家政當局者の服膺すべき金言であるゆゑ。茲に解説を試みて之が實行を望む次第である。

冬のけしき（丸山晩霞筆）

寒林

雪

山茶花

水仙



二月分記事豫告（二月五日發行）

▲事物整理の心得……細川男爵
▲歐米風俗の比較……元良博士
▲女子と美育……リギヨル博士
▲歐人の日本婦女觀……菊池雪子
▲佛國中流の家庭……ミセス、フラワーズ
▲商人としての女子……土屋長吉
▲清國女子教育の衰滅……△△△△
▲隣の先生……藤のや女史
▲女の智慧……武田鑑涯
▲鐵血宰相夫人……百島冷葉
▲懷舊談……吉田子爵夫人
▲英國宴會の風……廣田星橋
▲理想の青年……村井知至
▲春の天然……河西璞
▲模範家庭……中村鈴子
▲をり〳〵草……田中夕風
▲千壽曲……雲野通路

毎月五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）……	金二十錢
四册（三ヶ月分）……	前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……	前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……	前金二圓八十錢
内（定刊數……十二册 増刊四回…一、四、七、十月價格同一）	
郵税	一册 二錢

廣告料

	二十四字詰一行	半頁（行二十行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	割引 四十圓
一等	五十四錢	十七圓二十八錢	割引 三十三圓
二等	四十四錢	十四圓〇八錢	割引 二十七圓
三等	三十七錢	十一圓八十四錢	割引 二十三圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文規署

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵劵代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢劵相添申込あれ

明治卅九年一月十五日發行　第六卷第貳號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番　千十八番
本局　二千六百二十番　三千二百二十九番

本誌の廣告に就て滿天下の愛讀諸君に告ぐ

諸君　雜誌の廣告に於ける關係は猶其本文に於ける關係と同じく、仲々等閑に附すべきものでありませぬ、之を新裝の佳人に譬へんか、其位置から謂ふも其性質から云ふも、第一の表面を飾るべき表紙は羽織又は外衣たるべく、口繪は上衣に當り、廣告は其下着又は襦袢にして、而して本文は其實體であります、諸君如何に體質麗なりとも襤褸を纏ふて居るならば、顧みる者がありませうか、又例令羽織やコートが立派でも垢染みた襦袢や不釣合の粗末なる下着ならば其人品の影響如何でありませうか、廣告の忽に出來ぬ事は多く言ふを要しません、矧んや此廣告紙面の内には種々諸君を益する幾多寶珠の纏まり居るをやです、或場合には廣告は反つて本文よりも貴重です、必らず輕々に看過せられざる樣希望します。

本館雜誌に掲ぐる他店廣告は凡て正確健全のものと斷言する能はざるも、其多くは同種類中の優勢にして生氣の充ち居るものです、蓋し充分に廣告して世間へ名の通る樣になるには仲々容易の事ではありませぬ、小資本の商家にては廣告を致し度くも其資力が續きません、資力があるとも廣告をせぬものは時勢後れの商家と謂はねばなりません、されば其商品の如きも時節後れのものではありますまいか、廣告は商品販賣の唯一の方法です、而も本館雜誌の如き料金の非常に高まるものに廣告さるゝ商品は決して劣等のものではありますまい、今二三の實例を擧げて見ますれば、諸君御存知の三越呉服店を初め、山崎愛國堂のゼム、津村順天堂の中將湯、堀内氏の淺田飴、山田氏の胃活の如き、實に鐵中の錚々たるもの、同種類の内優に一頭地を抽んずるもの、讀者諸君は安心して御需用あつて然るべきものです、其他擧げて見ますれば數へ切れぬ程ですが、又追々に申上ぐる事に致しませう。

數多き廣告中に就いて、或は文藝倶樂部の廣告の中などには、隨分如何はしきものもないではありませぬ、けれども江河の水は二三渾濁の細流を意とすべきにあらずです、讀者其心して判斷を下されば、大概御分りになる事と信じます。

我邦も日露戰役を終へし結果、世界強國の仲間入りをしました、就いては何時迄も幼稚の思想では叶いませんから、向後は年と共に改めて、此廣告と云ふ事には、大に意を用ひて諸君の御便利を計り、本誌の廣告に依る御註文には、出來得る丈け行違等のなき樣盡力する積りですから、萬一他店廣告の御註文品にして、不達又は誤着等の不都合もあらば、場合によつては、當方より督促又は照會の勞も取りませうから、諸君此廣告欄を以て諸君の御註文の案內所として、將た社會風潮の指針として、充分に御精讀を願ひます。

本館初刊の雜誌には大概本館發行に係る圖書雜誌の割引券を添へて置きましたから御註文の際は御利用あり度希望致します。

博文館廣告部

主筆　竹貫登代多君

數學世界

菊判洋裝毎月一回一日發行　第拾號　一月一日發行　正價一冊拾錢郵稅各一錢宛

算術

掛ヶ算及割り算に就きて……松村定次郎君

順列と配合……飯田與三君

算術講義

●一第壹講…比●二第貳講…比例●三同…問題解義●四第參講…時計の問題(七)

三角講義

●一第壹講…直角三角形の解き方●二同…問題解義

雜錄

△自問自答△問題質疑△質問解義●一諸學校入學試驗問題解義●二第七號懸賞撰披露△懸賞問題△溫古知新

代數學

文部省教員檢定試驗問題（三十七年）に就て……竹中秀雄君

……上野清君

代數學講義

●一第壹講…二ツの未知數(上)●二第貳講…二ツノ未知數(下)●三同…問題解義●四復習問題●五同問題解義

雜錄

△自問自答△問題質疑△質問解義△諸學校入學試驗問題解義△第七號懸賞選披露△懸賞問題△溫古知新

幾何學

文部省教員檢定試驗問題……竹中春治君

支那の幾何學一定理……三上義夫君

幾何學講義

●一第壹講…內接形と外接形●二同…問題解義●三複習問題●四同…問題解義

雜錄

△自問自答△問題質疑△質問解義△諸學校△諸學校入學試驗問題解義

第七號懸賞撰披露△懸賞問題△溫古知新

各科定價　壹冊正價金拾錢▲三冊金貳拾九錢　六冊金五拾六錢▲十二冊金壹圓拾錢

外要郵稅　毎月一回發行

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

(該付の二)

東京帝國大學文科大學長 文學博士、文學士、理學士 坪井九馬三先生題詞
文科大學教授 文學博士 星野恒先生題詞
故文科大學教授文學博士 栗田寛先生遺詠
文科大學教授 文學博士 三上參次先生題詠

文科大學及諸大學教授諸先生題辭序跋
文學博士 文學士 原秀四郎先生著述

中等國史地圖

國史地圖纂

全一冊大判着色二十四面細圖壹百四拾有餘挿入 明治三十九年貳月發行

全二冊四六二倍版着色百餘幅細圖千四百有餘挿入 明治三十九年六月發行

國史地圖纂は著者が大學院在學中の研究成績を纂輯せるものにして、實に今回大學院卒業に際して、卒業主論文に副へて提出し、因つて以て榮譽ある學位を得られたる、三種副論文中の隨一なりとす。其結構の大體は、**第一部 地理分叙門 第二部 歷代地理門 第三部附錄**より成り **第一部 參拾餘幅四百有餘圖**を以て本邦所在の山岳、丘陵、谿谷、原野、沼澤、河流、海岸、島嶼より岩石、土壤、氣象、物産、人種、人口、田圃、境域、村落、都會、及び水陸の道路、港灣の設備に至るまで、皆例を擧げて、其性質、其影響及び其變遷の由來を解明し、**第二部 五拾餘幅**を以て、國史歷代の地方制度、若しくは割據爭奪の變態、及び外交の局面、生産の狀況を記述し、且つ**八百有餘**の細圖を添附して、京師、邊鎭、郡鄕、藩封より、邊土の拓殖民族の盛衰若しくは城寨の攻守、戰陣の進退に關する史蹟の舊態、又は現狀を詳叙し、**第三部 十幅壹百有餘圖**を以て、製圖の沿革、實地調査の方法より、神社寺院の地理的分布、及び其變遷、和歌、紀行文等の文學上の地理名稱、及び其遺蹟に關する圖畫を揭げ、頗る斯學の趣味を喚起しむるものとす、之を通計すれば**壹百餘幅壹千四百有餘の地圖**と**其略解**とを收錄し、國史古今の遺蹟を網羅して殆んど餘蘊なしと云ふべきものなり。

中等國史地圖は、國史地圖纂の諸圖幅中に就きて、其要を摘み粹を抜きて、稍其圖面を節約し、專ら中等程度の讀史社會に參考書又は教科書を供するの目的を以て述作せるものにして**二十四面壹百四拾有餘の地圖**と簡易なる解說とを收錄せり。

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

女(後付の三)

女(後付の四)

鷹野勇雄君編 ●六編 新撰國文問答

大田才次郎君編 ●七編 新撰漢文問答

竹貫登代多君編 ●八編 新撰算術問答

竹貫登代多君編 ●九編 新撰代數問答

竹貫登代多君編 ●一〇編 新撰幾何問答

武田櫻桃君編 ●一一編 新撰化學問答

上村貞子君編 ●一二編 新撰物理學問答

寺崎留吉君編 ●一三編 新撰動植物學問答

木村定次郎君編 ●一四編 新撰地文天文問答

中村重造君編 ●一五編 新撰法制經濟問答

小野拓君編 ●一六編 新撰文官普通及裁判所書記試驗問答

永廻藤一郎君編 ●一七編 新撰倫理教育問答

寺崎留吉君編 ●一八編 新撰鑛物地質問答

相澤新八君編 ●二三編 明治三十六年文官高等試驗答案集

濱田四郎君編 ●二四編 新撰商業要項問答

藤井憲君編 ●二五編 新撰獨逸文典問答

加野友次郎君編 ●二六、七編 新撰工業要項問答（上下二册）

西村眞次君編 ●二八編 新撰作文問答

首藤環君編 ●二九編 新撰衛生生理問答

近藤正一君編 ●三〇編 新撰家事問答

法學士辻宏吉君編 ●三一編 新撰憲法行政法問答

太田法學士編 ●三二編 新撰商法問答

土屋法學士編 ●三三編 新撰國際公法私法問答

石原法學士編 ●三四編 新撰刑法問答

淸水法學士編 ●三五編 新撰民刑訴訟法問答

宮川大壽君編 ●三六編 新撰民法問答

女（後付の五）

女（後付の六）

女(八後付の七)

近刊豫告

岐阜縣師範學校教諭 藤田宗次君著　中等教育**新撰物理學階梯**　四六判合表紙背クロース橫組 紙數三百餘頁

東京美術學校教授 白井雨山君著　**應用家庭美術**　洋裝四六判美本

米國海軍大佐マハン氏原著 海軍省教育本部 大島貞益君譯　英國水師提督**子ルソン傳**　全一冊洋裝 紙數四百餘頁

中村士德君 大久保千濤君著　**本邦地理詳說**　全一冊中判並製 紙數約六百頁

第二高等學校教授 文學士 杉谷泰山君述　**處世哲學**　全一冊洋裝大判 帝國百科百四十三編

法學士 南弘君述　**國家學**　全一冊洋裝大判 帝國百科百四十四編

法學士 南弘君述　**政治學**　全一冊洋裝大判 帝國百科百四十五編

法學士 辻宏吉君著　新式**英語作文書取法**　全一冊四六判端緻本 紙數約三百頁

農學博士 稻垣乙丙君著　農家節用**農業辭典**　洋裝上製菊判 紙數七百二十頁

文學士 長連恒君著　散文韻文**美文辭典**　洋裝上製三六判 總クロース金文字入 紙數壹千餘頁

中島義式君著　**新撰日用女禮式**　菊判並製本

竹貫佳水君著　**少年算術遊戲**　菊半截紙皮金字入 紙數約二百五十頁

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

女學世界定期增刊 女重寶記
（毎月一回五日發行）
明治三十九年一月十五日發行　第六卷第二號　明治卅參年拾貳月廿五日第參種郵便物認可



（定價金貳拾錢）
（博文館印刷所印刷）

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界 明治期復刻版㊶
明治39年1月(第6巻第1号、第6巻第2号)

2008年7月10日　第1刷発行　定価(本体20,000円+税)

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14(〒113-0021)
電話　03-3947-8251[営業] 03-3947-8254[編集]
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3380-2　C3321